
俺，ツインテールになります。16
水沢夢 [イラスト]春日歩
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。16

水沢　夢

イラスト　春日　歩


俺、ツインテールになります。16
水沢夢
[イラスト]春日歩

CONTENTS

プロローグ　とある異世界(せかい)の少女。 012

第一章　To Refrain. 016

第二章　To Regret. 052

第三章　To Revenge. 118

第四章　A TRUE. 154

第五章　To Rising. 198

第六章　To Rebirth. 248

エピローグ　Two Revolution. 318

デザイン／新井隼也＋ベイブリッジ・スタジオ


観束未春
トゥアール
桜川 尊
メガネドン
観束総二
イースナ
津辺愛香
テイルレッド
神堂慧理那


数え切れない空想を重ねていました。
もし、私がツインテールだったら――

目次

プロローグ　とある異世界せかいの少女。

第一章　Ｔｏ　Ｒｅｆｒａｉｎ．

第二章　Ｔｏ　Ｒｅｇｒｅｔ．

第三章　Ｔｏ　Ｒｅｖｅｎｇｅ．

第四章　Ａ　ＴＲＵＥ．

第五章　Ｔｏ　Ｒｉｓｉｎｇ．

第六章　Ｔｏ　Ｒｅｂｉｒｔｈ．

エピローグ　Ｔｗｏ　Ｒｅｖｏｌｕｔｉｏｎ．

あとツインテールがき

俺、ツインテールになります。16

水沢夢 [イラスト]春日歩

人物紹介

観束総二（みつかそうじ）

主人公。
ツインテールを世界一愛する高校一年生。
テイルレッドに変身しエレメリアンと戦う。

津辺愛香（つべあいか）

総二の幼馴染。テイルブルーに変身する。
貧乳を気にしており、
ネタにされると激しく怒る。

トゥアール

異世界からやってきた美少女科学者。
総二たちにテイルギアを託す。
痴女。

神堂慧理那（しんどうえりな）

総二たちの通う高校の生徒会長。
テイルイエローに変身。
ドMで総二をご主人様と慕う。

イースナ

善沙闇子（いいすなあんこ）の名で活動するアイドル。
テイルブラックに変身。
普段はストーカーで引きこもり。

桜川 尊（さくらがわ みこと）

慧理那の専属メイド兼ボディガード。
婚期を焦っており、
必死に婚姻届を配っている。

観束未春（みつかみはる）

総二の母親で、自宅で喫茶店を経営する。
現役中二病患者で、
常連客に慕われている。

俺、ツインテールになります。

15巻までのあらすじ

人間の趣味嗜好などが結晶化した精神エネルギー・属性力を狙う異世界の組織・アルティメギル。その組織に属する怪人・エレメリアンたちから世界の平和を守るべく、ツインテールへの愛・ツインテール属性を核に作られた空想装甲「テイルギア」をまとって戦う観束総二たち、ツインテイルズの戦いは続く。

テイルギアをまとったエレメリアン、イビルツインテイルズが襲来。女神ソーラの助力もあり、死闘の果てに勝利する総二たちだが、邪悪な科学者マーメイドギルディはそのデータを元に進化。さらに、トゥアールの生命が残り僅かだと明かしてきた……。

アルティメギル組織図

各異世界の侵攻部隊



ドラグギルディ部隊

隊長：ドラグギルディ

隊員：スワンギルディ、スパロウギルディなど

総二たちの世界に初めて侵攻してきた部隊。

- **リヴァイアギルディ部隊** 隊長：リヴァイアギルディ
- **クラーケギルディ部隊** 隊長：クラーケギルディ
- **タイガギルディ部隊** 隊長：タイガギルディ

ドラグギルディが倒されたことで侵攻部隊に増援された各部隊。
いずれも現在までに隊長がツインテイルズに倒されている。

■その他（引退戦士など）：ケルベロスギルディ



反逆者 フェニックスギルディ
ペガサスギルディ

組織に反旗を翻すなどしたエレメリアンたち。



アルティメギル首領

全エレメリアンの頂点に立つ絶対の存在。



離反

首領直属戦士 ダークグラスパー

四頂軍や各侵攻軍の統率者。
後に離反し、
テイルブラックとなる。

アルティメギル四頂軍（しちょうぐん）

神の一剣（ゴー・ディア・ソード）



隊長：エンジェルギルディ
元隊長：アポロギルディ など
戦女神：ヴァルキリアギルディ

ツインテイルズと激闘を重ねてきたアルティメギル最強部隊だが、マーメイドギルディが己の野望のために乗っ取っていたことが明かされた。

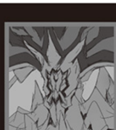
死の二菱（ダー・イノ・ランヴァス）



隊長：ティラノギルディ
右牙（ライトファング）の副将：プテラギルディ
左牙（レフトファング）の副将：トリケラトップギルディ

一般兵に至るまで強力な処刑部隊。隊長のティラノギルディはツインテイルズを壊滅寸前まで追い込む強敵だったが、覚醒したレッドに敗北した。

貴の三葉（ノー・ブル・クラブ）



隊長：ユグドラシルギルディ
副隊長：ラフレシアギルディ
マンドラゴラギルディ

総二たちが訪れた異世界で総力戦を繰り広げた部隊。結束力が強い。

美の四心（ビー・ティフル・ハート）



隊長：ビートルギルディ
副隊長：アラクネギルディ
隊長補佐：スタッグギルディ

ダークグラスパーと共に参戦した部隊。永い死闘の末、完全敗北した。

プロローグ　とある異世界せかいの少女。

　私の名前は、トゥアール。

　名字フアーストネームはありません。私の故郷では、私が生まれるずっと前に廃止されましたから。

　観み束つかトゥアール。

　そう名乗った時、甘い幸福感が身体からだ中じゆうに広がったのを覚えています。

　私の大好きな人。この世界にやって来て、一目で恋に落ちた男の子。

　観束総そう二じ様───。

　彼と同じその名字は、たとえ偽名でも……全てを失った私にとっては、大切な宝物です。

　名字だけではありません。私の故郷──総二様たちにとって異世界であるそこは、科学が発展し、効率化の名の下に様々な制度習慣が廃止されてきました。

　私はツインテールという髪型が大好きでしたが、それも遠い昔に廃すたれた、時代遅れのものでした。

　──あの日、怪人に出で逢あうまでは。

「どうか、怖がらずに私の話を聞いて欲しい」

　神話の世界の白馬が人間になったようなその怪人は、あまりにも崇高な佇たたずまいで……怖いと思うよりも先に、「すごい」と感じてしまいました。

「今から三〇日後、私と同じような容姿の怪人たち──エレメリアンが徒党を組んだ組織・アルティメギルが、この世界へと攻め入ってくる。人間の心の輝きを奪うためにね」

　当然の疑問が湧きます。どうして私にそんなことを教えるのか。

　あなたもその組織に属しているなら、組織の不利益になることをしていますよね──と。

「そうだな。私のことは、組織の裏切り者とでも思ってくれたまえ」

　裏切り者？　と聞き返す私に、その怪物は言いました。

「我われ々われが君たち人間に技術提供する時は、様々な建前を用意するんでね……おっと、それはどうでもいいことだった。私は、君に戦う力を託しに来たんだ」

　この怪人は、人間の味方をしようとしている。それだけは漠然と理解できました。

「人間とエレメリアンが互いに切せつ磋さ琢たく磨ましあえば、属性力エレメーラも私たちも、そして人間も──次の領域にシフトできる。今はまだ夢物語に過ぎないが、私はそう信じている」

　これから訪れるという世界の侵略者たちの同類でありながら、その白馬の怪人が語る夢は、途方もなく清すが々すがしかった。この世界の人たちが忘れた、純粋な心の輝きを持っていた。

　だから私は、疑いを持たなかったのだろう。

「これは属性玉エレメーラオーブといって、属性力エレメーラの結晶……我われ々われの生命いのちだ」

　そう言って怪人は、菱ひし形がたをした青い宝石を渡してきました。

「君はこの世界でもっとも強いツインテール属性だけではなく、類たぐい希まれなる頭脳を持っている……。ツインテールを科学できるんだ。私が君に出で逢あったのは、運命だと感じているよ」

　わけがわかりませんでした。

　怪人の存在も知りました。人間の心を食らうというのもひとまず信じます。

　けれどそれに対抗できるのが何な故ぜ、ツインテールなんですか。

　ツインテールなんて、とうの昔に廃すたれた髪型です。そんな力、あるはずがない。

「だが君は、そんなツインテールを誰だれよりも愛している。だから君なんだ」

　何より私に、そんな力……あるはずないのに。

「君はいずれ、ツインテールに革命を起こす。そしてそれは、多くの人間の心を救うだろう。だからどんな過酷な運命に翻ほん弄ろうされようと、決して絶望してはいけない──」

　それが、その白馬の怪人との最初で最後の邂かい逅こうでした。

　私は託された技術を独自に発展させ、世界を守る英雄となった。怪人たちと戦い続けた。

　廃れた髪型であるツインテールが、私の大好きなツインテールが、世界に広まっていくのが嬉うれしかった。誇らしかった──。

　だけど、革命なんて起こせなかった。あるのは、過酷な運命とやらだけだった。

　全力で挑んでも勝てない相手にぶち当たって初めて、私は気づいたんです。

　何もかも、仕組まれていた。怪人たちは私がツインテールを愛する心を利用して、この世界を滅ぼそうとしていたのだと。

　心の輝きが消えた故郷を見たあの日。

　私は、アルティメギルの殲せん滅めつに人生を捧げると心に決めました。

　世界をわたる復ふく讐しゆう者となって、一体でも多くエレメリアンを駆逐すると誓いました。

　そのためなら、自分の生命なんてどうでもいいと思っていました。

けれど……いざ本当に生命の火が消えるとなると、途端に怖くなってきました。

残された時間で、私にできることは何？

一人の女として生き、何が何でも初恋を成就させることか。

それとも──最期の瞬間まで、復讐に邁まい進しんし続けるか。

結末がどうなろうと……どうか、忘れないで。

私の名前は、トゥアール。

世界をわたる復讐者。そして……とある世界で、誰よりもツインテールを愛した者です。

第一章　Ｔｏ　Ｒｅｆｒａｉｎ．

「――あなたはもうすぐ死ぬのよ、トゥアールちゃん」

　無慈悲な宣告が、天高く木霊こだました。

　声の主は、アルティメギルの最高科学者――マーメイドギルディ。

　奴やつは戦いの果てに最凶最悪の最終闘体へと進化し、自らをエンジェルギルディと名乗った。

　そして俺たちツインテイルズとの戦いを継続せず、速すみやかに退却したのだ。

　自分の言葉でトゥアールが絶望する様を見て、歓喜の笑みを浮かべながら……。

「私が……死ぬ……？」

　そう言ったきり、膝ひざから地面に崩れ落ちたまま動かないトゥアール。

　折りしも強さを増してきた雨が、容よう赦しゃ無くそのか細い肩を叩たたき続ける。

「……トゥアール。ひとまず、基地に帰ろう」

　俺は努めて穏やかにそう諭さとす。

「…………」

　トゥアールの唇くちびるは引き結ばれたまま。雨に濡ぬれて張り付いた前髪が目め許もとを隠し、表情は窺うかがえない。

「大丈夫……立てる？　トゥアール」

　ブルーが肩を貸し、トゥアールをそっと立ち上がらせる。見えない糸に引かれるように、ふらふらとよろめきながら歩き出すトゥ

アール。俺たちも無言でその後に続く。

　転送ゲートを通って基地に戻って来ても、痛いほどの沈黙は変わらない。

　廊下の壁から温風が吹き出し、トゥアールの濡れた身体からだを乾かす。

　俺と愛あい香か、慧え理り那なは、変身を解除すれば濡れた身体も元通りだが……まるで服が水を吸ったように感じるほど、全身が重い。

　少し遅れて、ブラックとメガ・ネも基地へと戻ってくる。

「倒れたスワンギルディを介抱してきたのじゃ。何とか自力で帰ったが……ひどく意識虚うつろじゃった」

　ブラックは遅れた理由を話すと、変身を解除した。

「身体の傷より心の傷の方が大きいだろうな、スワンギルディ……」

　俺は何ともいえない気持ちになった。スワンギルディの無念な表情が忘れられない。

　アルティメギルが俺たちツインテイルズに対するとっておきの作戦として繰り出してきた、〝ツインテイルズ真ま似ねっこ大作戦〟。

　その総決算として、テイルギアをまとったエレメリアン・イビルツインテイルズが現れた。データを元に俺たちの力を完かん璧ぺきにコピーした、恐るべき強敵だ。

〝ツインテールの女神〟ソーラの力添えもあり、激闘の果てにイビルツインテイルズを撃破した俺たちは、今度こそ主犯のマーメイドギルディを倒そうとした。

　だがその時、残存部隊の隊長になったスワンギルディが、マーメイドギルディを助けようと俺たちの前に立ちはだかってきたのだ。彼女の邪悪を認めた上で、改心することを信じて。

　そんなスワンギルディの思いさえ、マーメイドギルディは時間稼ぎに利用した。挙げ句、自身が進化を遂げた後は用済みだとばかりに、あいつに衝撃波を見舞ったのだ……。

「スワンギルディのことは後回しよ。あたしたちは、それどころじゃないんだから」

　愛あい香かの意見はドライだが、確かに今の俺たちには敵を気遣っている余裕は無い。

　心の傷は……今のトゥアールの方が、ずっとずっと深刻だろうからな。

「トゥアールさん……」

　先頭を歩くトゥアールの背中を、不安げに見つめる慧え理り那な。

　トゥアールの足取りはしっかりしてきたが、俺は彼女がいつまた倒れてしまわないかと、気が気ではない。

　やがてコンソールルームに到着すると、母さんが心配そうな表情で出迎えた。

　トゥアールに続き俺と愛香、慧理那、イースナとメガ・ネ。そして母さん。全員が中央テーブルに着席する。

　また長い沈黙を覚悟したが──

「──さーて、どうやってあのイキリ陰キャを倒すか。早速会議しましょう!!」

　何事もなかったような明るい口調で宣言し、拳こぶしを握るトゥアール。

　俺たちは全員、面食らった。

　そんな周囲の反応を余よ所そに、トゥアールはメインモニターに先ほどの戦闘映像を表示する。

「戦闘力が皆無だったマーメイドギルディが、最終闘体と化したことでどのくらい武闘派になったのかが問題ですが──」

「いやいやいや、エンジェルギルディのことも後回しでいいから!!」

　たまらず立ち上がり、トゥアールの言葉を遮さえぎる愛香。

「トゥアールさんのお身体からだの方が心配ですわ……！　まずは検査をいたしませんと!!」

「うん……私も手伝うから……」

　慧え理り那なが語気を強め、イースナもそれに頷うなずいた。

「トゥアールはん……こんな時ぐらい、戦いより自分のことを優先せな」

　一人の少女の保護者であるメガ・ネの言葉は、一ひと際きわ重く感じられる。

　だがトゥアールはひらひらと手を振り、皆の心配を気楽に躱かわす。

「もー、あんな三流科学者の言うことなんて間に受けなくていいですよ！　大方、自分が逃げる隙すきを作るために嘘うそ八百並べただけですってー!!」

　そしてまた、深い静寂が訪れた。

　母さんも、いつになく真ま面じ目めな面おも持もちでトゥアールを見つめている。

　これだけ口達者が揃そろってこの雰囲気は、初めてのことではないだろうか。

「トゥアール……頼む。俺たちの前では無理をしないでくれ」

　俺はやりきれなくなり、真剣な声こわ音ねで語りかける。

「………………ふう……」

　トゥアールは、観念したように嘆息した。

「さすがに演技くさすぎましたね……ごめんなさい、皆さん」

　そして悲しげな苦笑とともに、モニターの映像をＯＦＦにする。

「全く動揺していないと言えば、嘘になります。もうすぐ死ぬなんて、いきなり知らされたんですから……」

　自分の胸にそっと手を触れるトゥアール。

　まるで、心臓の鼓動を……生命いのちを確かめるかのように。

「ですが何も、今日明日死ぬというわけじゃないんです。むしろ、あの女め狐ぎつねがマウント取ろうとしてわざわざ教えてくれたおかげで、対策が取れるってものじゃないですか」

　トゥアールは──現状を認識した上で、心を強く持とうとしているんだ。

　それなのに俺たちが心配ばかりしていても、かえって恐怖を煽あおってしまう。

「……確かにそうだな。俺たちも最近トゥアールの調子が悪いと思っていたけど、その原因がわからず不安だった。けど、今はそれがはっきりしているんだ。対策のしようはある」

　だったら俺も腹を据すえなきゃな。今トゥアールに必要なのは、周囲の支ささえだ。

「だけど、生命に関わることなのよ⁉」

　愛あい香かは、まだ納得がいかないようだ。

「俺たちがどんな試練を乗り越えて、今ここにいるか……思い出してみろよ、愛香」

「試練……？」

　困惑する愛香に向かい、俺はしっかりと頷く。

「メガ・ネは一度、完全に破壊されてしまった。イースナは、反逆者として処刑人に執しつ拗ように狙ねらわれた。慧理那は、宇宙まで飛んでいって帰って来れなくなるところだった。愛香に至っては、時間を超えて過去まで飛ばされたよな──」

　思い出を手た繰ぐるように一人一人の顔を見ていく。

　この数か月の間に、目まぐるしいほどの試練があったよな。

「俺も……ツインテール属性を奪われたダメージが大きすぎて、生命いのちを落とすところだった。俺たちはみんな、過酷な運命を乗り越えて今ここにいるんだ」

　俺はトゥアールの瞳ひとみを真まっ直すぐに見み据すえ、言った。

「俺たち全員がついてる。トゥアールの生命のことも、みんなで力を合わせれば必ず乗り越えられるさ!!」

「……はい、総そう二じ様!!」

　ようやく自然体なトゥアールの笑顔が見られて、俺もほっとする。

「かっこいい……かっこいいわよ総ちゃん！　自慢の息子過ぎてお母さんの生命がヤバいわ……！　今の場面動画に編集して、全世界に公開したい!!」

「やめろよ!?」

　極めてシンプルに拒否るが、母さんはその勢いのまま立ち上がり、注目を集めるように手を打った。

「そうと決まれば、気分転換にここでみんなの誕生パーティーしましょう!!」

　母さんの提案を聞いて、俺は時間を確認した。

「ああ……確かに、まだ昼前だもんな」

　今日は二月二日。俺の誕生日だが、連日ツインテイルズの偽物が出没する厄介な作戦が続いたことを鑑かんがみて、事前にパー

ティーっぽいことは済ませていた。

　誕生日当日の今日、朝っぱらからイビルツインテイルズと激戦を繰り広げる羽目になったので、その判断は正しかったということになる。

　俺だけならまた誕生パーティーをやる必要はないが──故郷に誕生日の習慣がないトゥアールやイースナ、さらに言うと女神ソーラやテイルレッドも二月二日を誕生日ということにしたため、今日は都つ合ごう五人分の誕生日が重なった特別な日なのだ。

「エレメリアンが一日に何度も出ることは滅多にないでしょ？　せっかく戦いが昼前に終わったんじゃない。パーティーは何度やったっていいわ!!」

「未み春はるおばさんの言うとおり！　エンジェルギルディに水を差されたけど、戦いはあたしたちの大勝利だもん！　イビルツインテイルズ撃破の祝勝会もかねて、パーッと騒ごうよ!!」

　愛あい香かも気持ちを切り替えたようで、気分転換のパーティーは歓迎のようだ。

「よし！　そんじゃ誕生パーティーと祝勝会、まとめてやるか！」

　俺が宣言すると、場がわっと湧いた。この明るい雰囲気は今、とても大事だよな。

「ほなら、みんなで飾り付けしよか！　総二くんとトゥアールはんとイースナちゃんは主役なんやから、座っててな」

　早速張り切って準備を始めるメガ・ネ。お腹の異次元収納箱から取り出したパーティーグッズで、手際よくコンソールルーム内を飾り付けていく。

　そこへ、慧え理り那なの連絡を受けた桜さくら川がわ先生も合流してきた。

「お嬢様、遅くなって申し訳ありません」

「丁ちよう度どいいところに来てくれましたわ。尊みこと、メガ・ネさんを手伝って差し上げてください！」

「かしこまりました。では私はこの婚こん姻いん届とどけを編あんで作った飾り輪を……」

　駆けつけ一番で恐ろしいデコレーションを始める桜川先生。

　飾り付けだけでなく、料理やケーキも手早く用意されていく。

　二人の家事のプロの共同作業で、あっという間にパーティーの準備が整った。

「それではあらためまして……観み束つか君、トゥアールさん、イースナさん、お誕生日おめでとうございます‼」

　学生組の年長者である慧理那が音頭を取り、誕生パーティーが開始される。

　グラスを鳴らし合い、ケーキに五つ立った大きなキャンドルの火を、俺とトゥアールとイースナで吹き消して──クラッカーの音が響きわたった。

　先ほどの激闘が嘘うそのような、明るく楽しい時間が過ぎていく。

　自分の誕生日をこんな大人数で迎えるなんて、去年は夢にも思わなかったな。

「そ、総そう二じさん……これ……。誕生日だから、お揃そろいにしよ……」

　ジャージのポケットから黒くろ縁ぶち眼鏡めがねを取り出し、俺に渡してくるイースナ。

　愛あい香かたちはよくイースナの勧めなどで伊だ達て眼鏡をかけたりしていたけど、俺がみんなの前で眼鏡をかけるのは初めてだったかもな。

「こんな感じか？」

　俺が新鮮な気持ちで眼鏡をかけた途端、みんなが目を血走らせて寄ってきた。



「あ゛―――――――――――――――――――――――――そーじ眼鏡めっちゃ似合う――――――――――――――!!」

「なんで愛香さんが真っ先に発情してるんですか！　いきなり奇声を発するのはトゥアールちゃんの十八番でしょうが！　やばいです総二様、下腹部に直ちよくで来ます！」

「そそ総二さん、ち、ち、超かっこいい……抱いて……」

「本当、イメージがガラッと変わりますわね、観束君！　よくお似合いです!!」

　どうしたんだみんな……実はあまり似合ってないから、テンション上げて勢いで褒ほめてきてるのか!?

「観束は童顔だから、眼鏡をかけると少し大人っぽく見えるな。よし、週明けに役所に行って籍を入れよう」

「イースナちゃん、一緒に写真撮ってもらってアルバムに仕舞っておこうな～」

「お父さんの遺影持ってこなくちゃ……!!」

　そして保護者組も口々に絶賛してくる。

　そこまで気を使われると、かえって恥ずかしいんだけど!?

「むふ～、総そう二じさん、むふ～……」

　イースナが俺の背中にしがみつき、鼻息を荒らくしている。

「総二様から離れなさい、妖よう怪かいおんぶ眼鏡めがね！　あなたは眼鏡を見れば欲情して……総二様、私は前から腰に抱きつきますね！　総二様の総二様がうっかり私の胸に挟まっちゃうかm……」

「妖怪はあんたでしょうが万年発情女────ッ!!」

「ひいいいいいいぬりかべが壁に押し込んでくるうううううううううううううううう!!」

　誕生日だというのに、愛あい香かの手で物理的に壁に塗り込められていくトゥアール。

「……眼鏡、か……」

　俺は眼鏡に指で触れながら、未いまだに息を荒らげている背中のイースナを振り返った。

　トゥアールの生命いのちを救う方法……俺たちにできることを、おぼろげに頭に描きながら。

◇

　アルティメギル基地の居住区。それは、変態戦士たちの心安らぐプライベート空間。

　廊下をチラッと見るだけでも、勝手気ままなデコレーションが施ほどこされている。

　テイルレッドのポスターやタペストリーは序の口。無骨な壁に掛け棚を設置し、テイルレッドのフィギュアが並べられるなど、とにかくテイルレッドのグッズで溢あふれている。

　廊下でこれなら、況いわんや彼らの私室をやだ。

　そんなファンシーな空間を、雨と泥で汚れた身体からだを引きずり歩く戦士がいた。

「……エンジェル、ギルディ、め……!!」

　戦場から帰投した、スワンギルディだ。

　棚に並ぶテイルレッドのフィギュアを一いち瞥べつし、合わせる顔が無いとばかりに目を逸そらす。

「……私は……なんというピエロなのだ……！」

　その顔に生気はない。総そう二じが想像していたとおり、エンジェルギルディの衝撃波による身体のダメージより、心の傷の方が大きかった。

　彼が助けたマーメイドギルディは改心するどころか、最凶最悪の進化を遂げた。この先ツインテイルズのみならず、アルティメギルにも今以上の厄やく災さいをもたらすだろう。

「スワンギルディ？」

　廊下の前方で声を上げたのは、部隊の参謀スパロウギルディだった。

　スワンギルディを見るや、慌あわてて走り寄ってくる。

「突然基地を飛び出して行ったと思ったら、ひどい有様ではないか……何があった」

「スパロウギルディ殿……。私は、自分の未熟さが情けない……!!」

　スワンギルディは、悔くやしさに肩を震ふるわせた。

　いったい誰だれがどんな気の迷いで置いたのか、廊下の棚の中に一体だけぽつんと置いてあるテイルブルーのフィギュアを、スワンギルディはむんずと掴つかんだ。

「かくなる上は、テイルブルーのフィギュアに頬ほお擦ずりをして……!!」

「よさぬか！　平らすぎる、痛かろう!!」

　罪の意識に耐えかねた若者の自傷を止めるべく、老兵は声を荒らげる。

「とにかく、全てを話すのだ。何があった？」

　エンジェルギルディが暴走し始めた今、自分の他に真実を知る者がいない方が危険だ。

　スワンギルディは観念し、スパロウギルディに全てを打ち明けた。

「…………。スパロウギルディ殿。実は──」

　マーメイドギルディの悪行の数々と、自分はそれを知りながらもこの基地の戦士が人質になっているも同然のため、誰にも相談できなかったということを。

「……なるほど、お前にいらぬ心労をかけていたようだな。堅物のお前にはマーメイドギルディちゃんのようにじゃじゃ馬なぐらいが合うと思い、恋仲も祝福していたのだが……じゃじゃ馬どころか暴走列車のようなものであったか」

　さして動揺を見せないスパロウギルディに、スワンギルディの方が驚いた。

　だがスパロウギルディは、多重属性実験の被験者となって四色の髪の属性をその身に宿したカメレオギルディが、徐々に衰弱していく様を見ている。

　マーメイドギルディの実験が被験者を省かえりみぬ危険なものだとは、薄々気づいていた。

「しかしな。マーメイドギルディちゃんは私たちを実験台と見ているのかもしれないが、彼女の助力で部隊の戦力が増したのは、紛まぎれもない事実。実験台で終わるのは、我われらの力が足りなかったというだけよ」

　スワンギルディは、何も言い返せなかった。

　ピエロとして踊らされるのは力が無い故ゆえだと、自分でも気づいているからだ。

「よいかスワンギルディ。彼女の邪悪な一面に触れたからといって、自身も同じ悪に堕してはならぬぞ」

　スパロウギルディは、若き神童の心を慮おもんぱかるように、そっと肩を叩たたいた。

「いちいち部下や同僚のやんちゃに振り回されていては、一部隊の隊長は務まらん。ドラグギルディ部隊も、初めは跳ねっ返りが多

かったが……ドラグギルディ様はそれら全てを力で制圧し、そして否定するだけではなく個性を認め伸ばしてやることで、信頼を勝ち得ていった」

「ドラグギルディ様が……」

「そうだ。お前がマーメイドギルディちゃんを改心させようと奔ほん走そうしたのは、間違いではない。我らが大将と同じことを、お前はしたのだ」

　智ち仁じん勇ゆうを併あわせ持つ憧あこがれの戦士の勇姿が、スワンギルディの脳裏にまざまざと浮かぶ。

「ドラグギルディ様が皆に慕われていたのは、厳しさと優しさを兼ね備えていたゆえよ。お前も彼かの方の高みを目指すならば、同じように獅し子し身しん中ちゆうの虫を飼い慣らす度量を持て」

「私も……あの高みへ……！」

　スワンギルディは決然と目を見開く。

　手にしたままだったテイルブルーのフィギュアを棚に置くと、隣に山ほどあるテイルレッドのフィギュアの一つを力強く掴つかんだ。そして、一心不乱に頬ほお擦ずりを始めた。

　その目に、もう迷いは無い。

「……そうだ、それでいい」

　あまりそれでよくない気もするが、スパロウギルディは満足げに頷うなずいていた。

◇

「だから何で処女のままなんですか私はあああああああああああああああああああ!!」

「だから朝っぱらからうるさいって言ってんでしょうがああああああ

ああああああああ!!」

　またもコケコッコーの代わりに何やら叫び声が聞こえ、俺は目を覚ました。

　あれから誕生パーティーは夜まで続き、ケーキや食事も満まん遍べんなくなくなったので（半分以上愛あい香か一人の胃袋に消えた）、コンソールルームに布ふ団とんを敷いてみんなで寝たのだ。

「昨夜ゆうべは絶好のシチュエーションだったのに！　『私、怖いです……でもあなたの温ぬくもりがあれば……』と渾こん身しんの演技力を爆発させて振り返ったら総そう二じ様じゃなく愛香さんの顔が目の前にあった時の私の気持ちがわかりますか!?」

「それを言われたあたしがどれだけ反応に困ったかもわかんないでしょうねえ!!」

　パジャマ姿の愛あい香かとトゥアールが起きがけにじゃれ合っている。いつもの光景だ。

　周りを確認すると、慧え理り那なはとっくに起きていた。今日は日曜だから、ヒーロー番組を見るんだろう。そしてイースナも、メガ・ネと一緒に仕事に行く準備をしていたのだが――。

『エレメリアン出現、エレメリアン出現』

　二頭身トゥアールの電子妖精・とぅあるんが起動。折り悪くエレメリアンの出現を告げる。

　勘弁してくれよ、二日連続で朝っぱらから来やがった。

「出現した奴やつは雑魚ざこっぽいですね……愛香さん一人で瞬殺してきてくださいよぉ」

　目を擦こすりながら、メインモニター下の端末で分析を開始するトゥアール。

「わかった、あたしとそーじの二人だけで行くわ。会長は観たいテ

レビあるし、イースナは昼前に仕事あるんでしょ？　今日はあたしたち二人に任せておいて！」

　愛香はトゥアールの要望をガン無視して俺との出撃を提案する。俺もそれで問題なかったが、慧理那とイースナは何な故ぜか強く出撃を希望してきた。

「い、いいえ！　わたくしはヒーロー番組のリアルタイム視聴よりも、ヒーローとしてエレメリアンと戦うことを優先しますわ！」

「メ、メガ・ネ……先に行って、とりあえずトークで繋つないでおいて……!!」

「ええけど、その方法使いすぎやで。ウチのトークとかどこにも需要ないやろ……」

　メガ・ネは謙けん遜そんしているが、メガネドンの筆談トークはものすごい人気あるぞ。

「じゃあ、みんなで出撃ね。ただし、瞬殺は駄目よ。エレメリアンにお話があるから」

　意外に冷静だな、愛香。今回はいつもと違って、本当に話し合いで済むかもしれない。

◇

　現場は、国内有数のスキー場。シーズン中なこともあり、ゲレンデはエレメリアン出現に慌あわてふためく人たちで溢あふれていた。

『学校のスキー教室で来ている学生が多いようですね。スキー板を履いたままでは避難に手間取るかも知れません……ご注意を！』

「わかった！　まずはエレメリアンの注意を引きつけることに専念する！」

　俺はトゥアールの通信に応答しつつ、周囲を見渡す。

　程なくエレメリアンを視認したが、雑魚っぽいという分析とは印象が違った。

　シュッとした痩身に巨大な尻しつ尾ぽ。手足には鋭利な爪つめを備え、同じぐらい眼光も鋭い。

　孤高の狩人、狼おおかみのような見た目だ。こいつは手て強ごわそうだぞ。

　だがそんな印象を持った直後、俺たちに気づいたエレメリアンは小物っぽく身を震ふるわせた。

「ツインテイルズ!?　ち、近寄らないでくれ。俺は孤独属性ソリチユードのウルフギルディ……ぼっちな子が好きだし、俺もぼっちでいることが好きなんだ。基本的に基地でもぼっちだ」

「じゃあ何のためにこんな人の多い場所に来たんだよお前!?」

　俺はトゥアールの分析の正確さを再認識しつつ、きっちりとツッコんだ。

「スキー教室とか、こういう学校行事の方がぼっちウォッチには狙ねらい目なのだ。慣れ親しんだ学校という空間と違ってうまく身を潜められず、ぼっちが浮き彫りになるからな！」

　最悪だこいつ……。

　とにかく、俺たちに注意を向けるのには成功したか。

「昼休みにトイレの個室でご飯食べてるような子を探してるのだが……。テイルブルー、お前友達いなさそうだが、どうだ？」

「友達ならたくさんいるわよ。お昼だって教室とか部室で食べてるし。ね、みんな」

「はい！　お話をしながらする食事はとても楽しいですわ！」

「……うむ。そうじゃな」

　イエローがうんうんと頷うなずく。ブラックは少しタイムラグがあったが、それでも一回首を縦に振った。

　俺も昼休みは、友達と飯食ってる。けど、それは愛あい香かたち女の子だけで、男の友達は一人もいないんだよな……。あらためて実感するとちょっと凹へこむ。

「ちっ……リア充め。俺と貴様らは決して交わらぬ存在のようだ」

　露骨に舌打ちし、俺たちを無視して避難中の人間を物色し始めるウルフギルディ。

『困った属性ですね、あいつに目をつけられた子はぼっちだってバレちゃいますよ』

　トゥアールの通信で、俺たちははっとする。指を差して「お前ぼっちだな」とか言われたら、その子がいたたまれないぞ……。

　ブルーは食い下がるようにウルフギルディに近づき、話を切り出した。

「あのさぁ。あたし、エンジェルギルディに会いたいんだけど」

「えっ……誰だれ？」

　ブルーの要求に、素すのテンションで聞き返すウルフギルディ。

「じゃあ、元のマーメイドギルディって呼ぶわ。あいつ呼んで、用があるから」

「ああ、マーメイドギルディちゃんのことか。貴様ら、彼女を知っているのか？」

「ちゃ～ん～!?　何あいつ、仲間にちゃん付けで呼ばせてんの!?」

　嫌悪感たっぷりに顔をしかめるブルー。

「っかー、おるおる！　実際は大して人気もないくせに、幹部の立場と男所帯の中で希少な女という状況を利用して周りに姫扱いさせる強突く張りな奴やつ！　そんな上司を持った下したっ端ぱたちが憐あわれでならぬわ!!」

　妙に説得力を帯おびた批難とともに、ブラックも続く。

「もしや彼らは、エンジェルギルディの本性を知らないので

は……？」

　イエローの発言を機に、ブルーとブラックと三人で話し合いを始めてしまった。

　その隙すきに、ウルフギルディはその痩身からは想像できないほど力強い足運びでゆっくり後退し始めた。体幹がしっかりしているな。

「取り込み中のようなので、俺は失礼する！」

　安全圏まで離れたと判断したのか、シュタッと右手を挙げて反転。即座に逃げを打つウルフギルディ。

　さすが腐っても狼おおかみ、雪上を走る姿には強者の風格がある。

「あーちょぉっと待って、どーこ行こうとしてんのぉ？」

　軽く巻き舌の入ったブルーが一足飛びで追い抜き、強者の疾走を阻んだ。

　舞い上がった雪を頭に浴び、呆ぼう然ぜんと立ち尽くすウルフギルディ。

　げに非情なるは自然界。狩人といえどさらなる強大な捕食者に回り込まれれば、もはや身を縮めて震ふるえるしか術すべがない。

「マーメイドギルディ〝ちゃん〟のこと、まだ聞いてないんだけど……？」

　ブルーはにこにこ笑顔だ。これまで何度か一般兵に対して同じように幹部を呼び出させようと脅して失敗しているので、今日は穏便に対話しようと努力しているのが窺うかがえる。

　慣れないことをしているせいか、逆にドスの利いた言い回しになっているが。

「ひいっ！　何だこのタチの悪いチンピラは!?　薄汚れた路地裏に帰ってくれ!!」

　イエローとブラックも無自覚に凄すごみを利かせて後ろから近づ

き、包囲を狭めていく。

「元マーメイドギルディを出すのじゃ」

「わたくしたちは彼女に話があるのです……！」

　包囲の中心で怯おびえて震える狼さん。

　俺は見るに見かね、ウルフギルディを庇かばうようにブルーたちの前に回り込んだ。

「みんな落ち着け。普段の幹部ならともかく、マーメイドギルディを下手に煽あおるのは危険だ。それにこいつら末端兵を脅したって、何にもならないだろ」

「うう～テイルレッドよ、怖かったぞ～」

　しゃがれ声のおっさんが、媚こび媚びで俺に縋すがり付いてくる。

「うわっ、引っ付いてくんな！　一人が好きじゃなかったのかよお前!?」

「ぼっちは非常にチョロいのだ……優しくされるとすぐ依存してしまうぞ」

　トゥアールがイースナを評する時に、これと同じようなことを言ってた覚えが……。

　ウルフギルディは仕舞いに、俺の腰のあたりに頬ほお擦ずりを始めた。

「何やってんのよこのクソド変態が――――――――――っ!!」

　俺が振り払うよりも早く、ブルーが大砲のような前蹴げりを放ってウルフギルディを吹き飛ばした。

「怖かったから！　お前が怖かったからつい！　悪いのはお前だ!!」

　最悪な言い訳を躊ちゅう躇ちょなくかますウルフギルディ。やっぱ助けなきゃよかったかな……。

「見み損そこないましたわ！　エレメリアンは、そういった直接的な〝せくはら〟はあまりしないと思っていましたのに!!」

　イエローが俺を背に庇かばいながら敵の悪行を糾きゅう弾だんする。その一方で、背中の装そう甲こうだけ俺に見せつけるようにポロポロ脱げていくんですが、それはせくはらではないのでしょうか……。

　イエローから糾弾を受け、しゅんとするウルフギルディ。

「し、しかし神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士の皆様は、『テイルレッドには積極的にスキンシップを図っていこう』と仰おつしやっていたのだ……」

「はぁ!?　そんな薄汚い啓けい蒙もうしてんのあいつら!?」

　いよいよ語気に怒色を隠せなくなってきたブルーに、トゥアールも同意する。

『そのままいくと連中の要求はエスカレートする一方です！　レッドの優しさにつけ込んでエロいことしようとする輩やからには容よう赦しゃ無用！　跡形もなく消滅させるべきですよ!!』

「了解したわ。その任務、今ここでと、基地に帰ってから遂行するから」

『えっ……何でそんな予告するんですか、基地にそんな輩はいませんよ……!?』

　遠回しな処刑宣言に、通信越しに声を震ふるわせるトゥアール。

　仲間がそんなことをしているうちに、ウルフギルディがしげしげと俺を凝視していた。

「おや、意外だなテイルレッド……お前からはぼっちの匂いがするぞ」

「何っ！　俺が!?」

「俺は孤独を匂いとして感じ取る能力がある……間違いない。お前は人気者だが、全てを手に入れた者ほど実は孤独だというしな」

現実の狼おおかみも嗅きゆう覚かくが非常に優れていると聞くが……こいつはエレメリアン特有の目当ての属性を探知する能力を、さらに鋭敏にした感じか。

「いや待てよ？　これはお前と長い時間一緒に過ごしている誰だれかの残り香かもしれんぞ、テイルレッド」

「孤独の、残り香だと」

俺が考え込んでいる隙すきに、ウルフギルディはまたもや腰のあたりに鼻先を近づけていた。

「もふー、寂しそうな香りだ……とても愛いとしい……」

「うわああっ！　近づくなっ!!」

アンダースーツ越しでも生温かい鼻息を感じ、俺の背中に怖おぞ気けが走る。

「だからセクハラすんなって言ってんでしょ！　もうマーメイドギルディは呼ばなくていいから、基地に案内しなさいよ！　あたしの方から会いに行ってやるわ!!」

「取り込み中だ、胸が孤独な者は引っ込んでいろ！　……あ、これ以上引っ込みようがないかワハハハハ上う手まいこと言ってしまったなぶあああああああああああああああ!!」

無言でブッ放パされたエグゼキュートウェイブが直撃し、ウルフギルディは爆散する。

ぼっちにしてはウイットに富んだジョークだったが、それが遺言になってしまった。

「孤独が好きなんでしょ？　永遠の孤独が手に入ってよかったわね──」

よほどの悪役でも手に余すような凶悪な台詞せりふを、気軽に使いこなすよなブルーは。

「ええーいこのお馬ば鹿か！　せっかくわらわが仕事ブッチしてまでついてきたのに、エンジェルギルディの情報を何も引き出せずに言い出しっぺの貴様が瞬殺してしまいおって!!」

「手が勝手に動いたのよ！　また次に来た奴やつを締め上げればいいでしょーが!!」

　ブルーとブラックが口論を始め、それをイエローが諌いさめている。

　その時、すでに避難が完了しているはずのゲレンデで子供たちの声が聞こえてきた。

　気になったので、今いる中級者コースを後にして声のする方へと向かう。

　辿たどり着いた「お子さまコース」で、俺は意外なエレメリアンの姿を目にした。

「──アポロギルディ!?」

　見た目は子供ながら、超絶の戦闘力を誇る神の一剣ゴー・デイア・ソードの元隊長──アポロギルディだ。

「お～、バトルは終わったのかー、テイルレッド！」

　幼稚園児ぐらいの女の子たち数人に囲まれ、ソリで二人乗りをしたりして遊んでいる。

「ているれっどだー！」

　子供に声援を送られ、俺は笑顔で手を振り返す。アポロギルディになついているようだ。

「この子たち、親とはぐれたみたいだからさー、僕が一緒に遊んであげてたんだー！」

「えっ……そうなのか。ありがとう」

　俺は思わず、素直に礼を言ってしまった。

「……じゃなくて！　本当の目的を言え！　その子供たちの属性力エレメーラを奪うつもりか!?」

　いや……聞かなくてもわかっている。こいつに属性力エレメーラを奪う気はない。

トゥアールの発明でエレメリアンを探知できるのは、人間を襲おそおうとして属性力エレメーラを活性化させた時だけ……こいつを発見できたのは、ただの偶然だ。

「そんな気負うなってー！　今日は見つかっちったけどさ、僕はもう何回か、こうやって幼女がたくさんいるところに出没してたんだぞ～？」

考え込む俺を見かねたのか、アポロギルディは苦笑しながら打ち明けた。

「――何だと」

唐突な不審者宣言に絶句する。

「僕の属性の一つは、幼女属性リトルガールだぞ！　幼女を愛めでるのは当たり前じゃん!!」

こいつ、幼女好きの属性だったのか。こんな、小さな女の子じみた容姿で。

属性と見た目の特徴が一致してるなんて、珍しいなんてものじゃないぞ。

それに今こいつが言ったこと、何かが引っかかると思ったら……「属性の一つ」という言い回しが、ハデスギルディと同じなんだ。

あれはやっぱり俺の聞き間違いじゃなくて、こいつらに共通する特別なものなのか？

「でも、変なんだよな～。テイルレッドって確かに可か愛わいいとは思うけど、いまいち僕のセンサーに引っかからないや～」

俺は動揺をポーカーフェイスで隠す。百合属性ガールズラブのティラノギルディなんかが最たる例だが、エレメリアンは持っている属性によっては正体が男である俺に違和感を持つんだよな。

「俺だって意外だよ。子供好きって……そんなの、お前らにとってデフォだと思ってたぜ」

普段からやたらエレメリアンから愛でられているだけに、いまいち実感が湧かない。

「そりゃそうさ。人間だってエレメリアンだって……誰だれだって持てる属性だ。だからこそ僕は──極めてみたくなったんだ」

　アポロギルディは俺に人懐っこく近づいてくると、握手を求めてきた。

「お前と戦う時は……幼女がいない静かな場所がいいな。楽しみにしてるぞ、テイルレッド」

　普通に握手をし終え、アポロギルディはあっさりと転送ゲートの中に消えていった。

　ふと右の手の平を見ると、折り畳たたんだ紙片が残されている。

　……何だこれ、数字の羅ら列れつが印字されているぞ。ハデスギルディみたいに俺を採点した……わけじゃないよな、数字以外の記号も書かれているし。

　とにかく……今後、あいつの動向には要注意だな。

　子供たちをロッジに送り届け、俺はブルーたちの元へと向かった。

◇

　アルティメギル基地大ホールは、大きな困惑に支配されていた。

　テイルブルーが戦士の誰かを連れてこいと荒ぶるのはもう慣れっこだが、今回は冷静に恫どう喝かつをしてきているのが逆に恐ろしい。彼女は一体、何ど処このマフィアのドンなのだろうか。

「何な故ぜテイルブルーは、マーメイドギルディちゃんを出せと……!?」

「マーメイドギルディちゃん！　マーメイドギルディちゃんはいずこに!?」

　狼狽うろたえる戦士たちの問いかけに、快活な女性の声が返って

きた。

「はぁ～い、呼んだ～？」

　ホールの中に入ってきたのは、電子回路のような翼を広げた女性のエレメリアンだ。しかし、どこかマーメイドギルディの面影がある。

　その変わり果てた姿に驚き、戦士たちが殺到する。

「マーメイドギルディちゃん、ですな……その姿は⁉」

「ご覧の通り、私も最終闘体に進化したの！　これからは、エンジェルギルディちゃんって呼んでね♡」

　一瞬ホールが静まり返るも、程なくぽつぽつと賛辞の声をかけていく戦士たち。

　基本的にお祭り気質の彼らでさえ、エンジェルギルディに対しては言葉にできない不気味さを見たのだろう。

　名は体を表すという言葉とは真逆に……彼女の全身から立ち昇る、悪魔的な雰囲気を。

「…………」

　スワンギルディはホールの隅に立ち、エンジェルギルディを睨にらみ付ける。

　どの面を下げて帰ってきたと言ってやりたいところだが、そこで思い出されるのは先のスパロウギルディの教えだ。この女め狐ぎつねの言動でいちいち心を乱しては、状況は何も変わらない。

　その視線に気づき、エンジェルギルディは何食わぬ顔で笑みを返した。

「ところで、テイルブルーがマーメイド……いや、エンジェルギルディちゃんを呼べといきり立っているのですが……何か、心当たりは⁉」

　若き隊長の葛かつ藤とうを知らず、戦士たちはエンジェルギルディの身を気遣う。

「うーん、もしかして……私の胸が大きいからじゃない？」

　エンジェルギルディはわざとらしく首を傾かしげ、その豊満な胸を手で持ち上げた。

　おおお……、と野太い感嘆がホール内に反響する。

「なるほど……普段からだいぶ鬼なテイルブルーですが、胸を馬ば鹿かにされるや手のつけられぬ悪あつ鬼き羅ら刹せつと化すのは周知の事実……。エンジェルギルディちゃんほどのスタイルならば、もはや存在そのものがテイルブルーへの小気味いい罵ば倒とうに等しいですからな!!」

　こういった言動が悪鬼羅刹を育はぐくみ、巡り巡って彼ら自身の死因と化すのだろう。

　それはともかく戦士たちは、エンジェルギルディの口から出任せをあっさり信用した。

　ようやくホール内が穏やかな雰囲気になってきたその時、さらに明るい声が木霊こだました。

「なんだよー、みんなおっぱいばっかり見ちゃってさー」

　ホールに入ってきたのは、幼い王妃のような出いで立ちの可か憐れんな戦士。アポロギルディだ。

「僕だって、おっぱい大きくしようと思えばできるんだぞー！」

　アポロギルディが、エンジェルギルディの巨乳に対抗するようにして自分の胸の周りに手の平で円を描く。それは子供ならではの将来への希望、巨乳の想像と創造だ。

　可か愛わいく背伸びをする幼子に、おっさん戦士たちはだらしなく目尻じりを下げていく。

　アポロギルディは戦士たちに愛あい嬌きようを振りまきつつ、エンジェルギルディにだけ見えるように目線をホールの出入り口へと送った。「外へ出ろ」と。

「まさか生き残るとは思わなかったぞ～。意外と悪運強いな、お前～」

　廊下に出て開口一番、アポロギルディは賛辞とも侮蔑とも取れる言葉を贈った。

　エンジェルギルディはクスリと微ほほ笑えみ、他に誰だれかがいないか廊下を見渡す。

「ハデスギルディ君は一緒じゃないの？　のんびり英気を養っているってところかしら？」

「テイルレッドたちにかなりやられたからな～。だから僕が代わりに、あいつの気にかけてるスワンギルディの様子を見に来たってわけ。また一皮剥むけたみたいで何よりだな～」

「スワンギルディ君の、ああいう〝効いてないアピール〟が純粋で可か愛わいいのよ。真っ黒に染めてあげたくなっちゃう」

　浅からぬ因縁のある二体の会話ながら、不気味なほど朗ほがらかな雰囲気だ。

　それは、エンジェルギルディが強化したがゆえの余裕が為なせる業わざなのか。

「けれどあなた、ぶりっ子がホントに板についてるわね……ちょっと妬やけちゃう♪」

「──可愛く在あることが僕の生態……属性だ。存在するだけで他者を惹ひきつけてしまうんだよ……お前如ごときと違ってな」

　一方で、薄氷の上で談笑しているような不穏さを感じさせる。

「……ま、アポロギルディちゃんにも色々思うところはあるでしょうけど……テイルレッドちゃんと心置きなく戦いたいなら、今は私を見過ごしておくのが賢明だと思うわよ」

「命乞いはもう少し殊勝にしろよ。今日、僕の機嫌がよかったことに感謝するんだな？」

　幼い容よう貌ぼうを彩いろどる、冷たい微ほほ笑えみ。

　廊下の只ただ中なかに極彩色のゲートを形成し、アポロギルディは消えていった。

「『いいよ』はもう少し穏便に言ってほしいわね。かわゆい戦士さん♡」

　エンジェルギルディは唇くちびるを妖あやしく歪ゆがめると、アポロギルディの消えた空間に投げキッスをする。そして、廊下の薄うす闇やみに溶け込むように歩き始めた。

　　◇

　ウルフギルディとの戦いから帰還した後。俺は、奴やつの言葉の意味をずっと考えていた。

　俺の周りにいる誰だれかの、孤独の残り香──思い当たる人は、一人しかいない。

　いつかトゥアールが何気なく呟つぶやいた言葉が、不意に脳裏をよぎる。

『あまり、一人でいたくないっていうか……寂しいっていうか……』

　周囲が思っている以上に、トゥアールは孤独を感じているのかもしれない。

　様子を確認するために、俺は夕食を終えた後で地下基地へと下りていった。

　コンソールルームに入ると、黙々と作業をしているトゥアールの姿が。

　俺に気づき、キーボードを操作する手を止めるトゥアール。

「まあ総そう二じ様！　最近よく一人で無防備に下りてきてくださって、嬉うれしいです♪」

　メインモニターに映っているのは、エンジェルギルディの映像だ。

　奴が奪取し、右腕に装着したテイルブレスオルターへと線が延び、ウインドウに様々な分析結果が表示されているようだ。

　エンジェルギルディは後回しでいい……とみんなであれだけ言っても、やはり無理か……。

　そのテイルブレスオルターを見たことで、俺は一つの考えに思い至った。

「トゥアール。一つ、確認しておきたい」

　紅あかいテイルブレスを右腕に可視化させ、トゥアールを見み据すえる。

「エンジェルギルディは、トゥアールがツインテール属性を自ら摘出したせいで寿命を縮めたって言ってたよな」

「……ええ」

　俺はトゥアールによく見えるように、ブレスを填はめた右腕を差し出す。

　この右腕に宿るのは、トゥアールのツインテール属性。今となっては、彼女の生命いのちそのものを託されたようなものだ。

「だけど俺がこのテイルブレスを返しても、トゥアールの身体からだにツインテール属性を戻すことはできない。それは、今でも変わらないんだな」

〝ブレスを返せば、トゥアールはツインテールに戻れるのか〟

　今まで、何度と聞いてきたことだが……それでも俺は、聞かずにはいられなかった。

「はい。それは二度と、私の身体には戻せない──間違いありません」

　俺の思いを悟ってだろう。それまで笑顔だったトゥアールも、真剣な面差しで応こたえた。

「アルティメギルがリングなどを用いて人間から属性力エレメーラを奪取する技術と違い、私の摘出技術は独学のものです。当然、何らかの副作用は覚悟していました」

　やはり……副作用を覚悟してはいたのか。

「ただ……数年で死が迫るほど寿命が縮まるのは、さすがに想定外でしたね……」

　トゥアールほどの科学者が今まで属性力エレメーラ摘出のリスクを重大視していなかったのは……俺もそうだったように、「属性力エレメーラを失うと、気力を失っていく」という副作用がある──その先入観があったからだろう。

「ですが……そのせいで生命が脅おびやかされていると知った今でも、自分の決断が間違いだったと後悔はしていません。私の託した力で総そう二じ様や皆さんがアルティメギルの侵略から世界を守ってくださっていることが、何よりの誇りなのですから」

　その言葉には、迷いは感じられない。

　間違いなく無理をしているだろうが……後悔をしたくないという思いだけは、何をおいても尊重してあげたかった。

「わかった。その思い、しっかりと胸に刻んでおく。だから……今はとりあえず、心を強く持つことに専念しよう」

「はい、総二様。……あ、今だ……『私、怖いです……でもあなたの温ぬくもりがあれば……』」

　トゥアールが棒読みで何か言いながら服を脱ぎ始めたので、俺はコンソールルームを後にした。寝間着に着替えるのか、シャワーを浴びるのかだろう。

　地上へのエレベーターの中で、俺はずっと右手首のテイルブレスを見つめていた。

「ここに……トゥアールの生命いのちがあるってのに……」

　歯がゆい。だが、それを嘆いていては、トゥアールの気丈な決意

を無にしてしまう。

　彼女はあまりにも責任感が強くて……時に、自分を省かえりみようとしない。

　故郷の世界を守れなかったという罪悪感ゆえ、自罰的なところがあるのだ。

　今回も、自分の恐怖よりもエンジェルギルディの脅きよう威いを優先しているように思える。

「生命か……誇りか──か」

　何かを失う代わりに、何かが残る。

　何かを残したいなら、何かを失う。

　世界は、そんな単純で残酷な方程式で成り立っているのかもしれない。

　けど、俺の愛する心の輝きならば、ツインテールならば、定まった式を──世界の摂理を超えられるはずだ。

　俺は二つとも失わせない。君の生命も……心も、どちらも結ぶぞ、トゥアール。

　君には二度と、悲劇を繰り返させはしない──。

キャラクター名鑑 041

エンジェルギルディ



DATA

- 身長：181㎝
- 体重：255㎏
- 属性力：ツインテール属性

首領と同じ領域の強さを求めていたマーメイドギルディがテイルギアの技術と戦闘データを取り込み、最終闘体に進化した姿。それまで代替属性として生命を繋いでいた男子愛（ボーイズラブ）属性の代わりに、本来のツインテール属性が完全に顕現している。テイルギアと同等の能力を持つ上に、無力化の奥の手まで備えている。大いなる野望を叶えるべく、因縁深きツインテイルズとの最後の戦いに臨む。

第二章　Ｔｏ　Ｒｅｇｒｅｔ．

　パーティーから二日経たち、俺たちは普段通り学校生活を送っていた。

「今日はちょっとセルフ身体検査しようと思いますので、一人で帰りますね！　全裸でずっと作業していますので、よきタイミングで覗のぞきにいらっしゃってください総そう二じ様!!」

　その日トゥアールは放課後になった途端、俺にそう言い残して有無を言わせず家に帰ってしまった。

　よほどのことがない限り、ツインテール部には毎日欠かさず顔を出していたのに……。

　授業中も、机に立てた教科書で端末を隠してずっと作業をしているようだったしな。

「裸で研究してるって言っておけば、俺は絶対に基地に近づかないってわかりきっているからな。どうしても一人で作業したいってわけか……」

「その台詞せりふが思春期の男の子に魔除けのお札代わりになるって、かなり特殊だと思うわよ」

　何な故ぜか愛あい香かに呆あきれられながら、俺はツインテール部部室へと向かった。

「そうですか、トゥアールさんはお一人で……」

　慧え理り那なと桜さくら川がわ先生も後からやって来たが、今日のツインテール部部室には俺と愛香を合わせて四人だけ。

　自分から騒ぐ面子メンツではないので、話し合いも穏やかなものだった。

「お嬢様から詳しく話を聞いたぞ、観み束つか。まさかトゥアール

が自分で気づかないうちに身体からだに負担をかけていたとはな……。それで今は、あいつを健康にする方法を探してるんだろう？」

　俺たちにお茶を淹いれてくれながら、桜川先生が心配そうに聞いてくる。

「それなんだけど……みんな、聞いてくれ。とりあえず方法はもう思いついてるんだ」

「まあ、そうでしたの⁉」

　意外そうに見てくる慧理那へと、俺はしっかり頷うなずき返す。

「トゥアールが身体に変調をきたした原因は、属性力エレメーラを失ったことにある。つまり、ティラノギルディとの戦いで属性力エレメーラを失った俺と同じ方法でいけるはずだ。あの、属性喫茶とな」

　失った属性の空白を、他の属性で補強することで心を強く持つ……俺がツインテール属性を失ったときは、属性喫茶に助けられた。今度は、俺がそれをやる番ってことだ。

「いい！　すごくいいと思うよ！　それってつまり、そーじ主導で属性喫茶をもう一度やるってことでしょ⁉　そーじが眼鏡めがねかけたり執事服着たりするってことなんでしょっ⁉」

　おお、愛香のツインテール……あんなに嬉うれしそうに跳ねているぞ。

「あたしもスク水とかバニー服とかもー何でも着るから！　一緒に頑張ろうね、そーじ‼」

　最近稀まれに見る笑顔だな、愛あい香か。気合い入ってて頼もしいが、題材はもう絞られているんだ。

「落ち着けよ愛香、俺の時は『ツインテールの他に何が合うかがわからない』から属性喫茶って形になったけど、トゥアールの場合は好きなものがもうわかってるじゃないか」

　きょとんとする愛香へ、俺は満を持して宣言した。

「トゥアールを元気にするための催し。名付けて──幼女喫茶だ!!」

「なに名付けちゃってんのアウトよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

　愛香が俺の肩を掴つかみ、ガックンガックン揺さぶってくる。

　ネーミングは属性喫茶からの継承なのだが、イマイチだっただろうか……？

「確かに、小さな女の子では喫茶店の営業許可は下りませんものね……」

「会長もズレてるからね!?」

　よろめきながら椅い子すに座り込んだ愛香は、頭を抱かかえて突っ伏してしまった。

「ふむ……トゥアールが好む幼い容姿が必要だとなると、私はどうすればいいのだ。子供っぽい格好をすれば私でもギリギリいけるかもしれんが、どう思う、観み束つか？」

　桜さくら川がわ先生はたまに超絶答えに困る質問を突然剛速球で放ってくるから恐ろしい。

「ここは俺に任せてください、桜川先生。変身すれば……一番幼女なのは、俺です」

「そーじ!?」

　机の上でバターになっていた愛香が、おもむろに顔を上げる。

「観束君一人を戦わせはしませんわ。わたくし、自分の幼い身体からだが嫌いでしたが……初めてこの幼さで誰かのお役に立てる時が来たと思っています」

「会長!?」

　俺に慧え理り那なにと交互に視線を投げ、愛香がツインテールを震ふるわせる。

「お嬢様、お気をつけて……トゥアールは遠えん慮りよを知りませ

ん。ですが、ご立派な志です」

　慧理那を頼もしげに見つめる桜川先生を見て、俺の決意も固まった。

「──よし、そろそろセルフ身体検査とやらも終わった頃ころだろう。今からみんなで地下基地に行こう。トゥアールの元へ」

　俺が拳こぶしを握り締めると、慧理那と桜川先生も眦まなじりを決して頷うなずいた。

「いや──────そーじがまたおかしな方向にかっこよくなってる─────っ!!」

「ええい暴れるな津つ辺べ、私たちは観束とお嬢様それぞれのセコンドだ、駄目だと思ったらタオルを投入するんだ!!」

「今投げる！　もう投げましたタオル──────────っ!!」

　反対する愛香を桜川先生が羽交い締めにし、俺たちはロッカーの転送ゲートを通って地下基地へと向かった。

◇

　俺たちが基地に着いた時、ちょうど仕事を終えたイースナとメガ・ネもやってきた。

　急いで来たのだろう、イースナはアイドル衣装のまま、メガ・ネはメガネドンの着ぐるみ姿のままだ。廊下を歩きながら、俺は二人にことのあらましを説明する。

「よくそんな覚悟をしたものじゃな、総そう二じ。幼女ネタでいじられるの苦手だったじゃろ」

　うん、まあ……苦手も何も、可か愛わいい幼女ですねって言われて受け容いれる男子高校生なんてそうはいないと思うんだよな。

　覚悟を決めた俺たちは横一列に並び、コンソールルームへと入っ

て行く。

　心なしか、まるで自分の歩みがスローモーションのように感じられた。

　きょとんとしながら出迎えるトゥアール。

「えっ……と、どうなさいました、皆さん？　そんなに深刻な顔で……あと愛あい香かさんはいつもどおり深刻な胸で……」

「セコンドがタオル使って相手選手倒すのってアリかな？」

　格闘技スポーツの常識を覆くつがえす暴言を放つ愛香。

　駆け引きは無用だ。俺は装飾のない言葉を投げかける。

「トゥアールってさ、幼女好きだろ？」

「ほえええええええええええええ総二様とは思えないド直球!?」

　俺は多くの人と出会いの中で、テイルレッドが幼い少女の姿なのは様々な要素が積み重なった奇跡の産物だと知った。

　しかし今でも、製作者のトゥアールの思いも強く作用していると信じている。

　今こそ変身した俺の幼さで、トゥアールに恩返しをする時だ。

「テイルオン」

　俺はテイルレッドに変身し、自分の手足をじっくりと観察した。

　よし、幼いぜ。

「今日は俺のこの姿で、トゥアールの願いを叶かなえる。何でも言ってくれ！」

　幼女喫茶という命名は諸般の事情で没になったが、やることは変わらない。

「マジですかこの可愛いランプの精霊!?　何な故ぜそんな大サービスを……死ぬんですか私!?」

明るく冗談を言う分にはいいことだが、サービスなんてつもりはないぜ。

「トゥアール、ソーラが『病は気から。心を強く持て』って言ってたの、覚えてるか？」

「そう言えばソーラちゃん、私にそんなことを……」

学校でふらついたトゥアールを見て、ソーラが言った言葉。今なら、その意味がわかる。

それにその後ソーラは、精神世界で俺に──

『あと一人、ツインテールで悲しんでいる女の子を、笑顔にしてあげて』

そんな言葉を託した。彼女はわかっていたんだ。トゥアールがこれから、過酷な運命に翻ほん弄ろうされるであろうことを。

「俺たちにとって、心を強く持つって行為はプラシーボなんかじゃない。最強の力だからな」

戸惑い交じりだったトゥアールも、俺たちの意図を把は握あくしてくれたようだ。

「じゃ、じゃあお着替えのリクエストとかしちゃっていいんですか!?」

「おう！　さあイースナ、正月の時みたいにいっちょコスプレ頼むぜ！」

イースナは、ギアの力を維持したまま別の衣装に着替えさせることができる。その能力で、俺も正月にテイルレッドに変身したまま晴れ着にしてもらったんだ。

「本当によいのか総そう二じ。トゥアールじゃぞ!?　マジモンさんじゃぞ!?　初しよっ端ぱなから完全に透明な服を着ろとか容よう赦しゃ無いリクエストをしてくるやもしれんぞ!?」

「黙りなさイースナ！　そんな風ふ情ぜいのないことをしますか、時間はたっぷりあるのですから着衣の面積は徐々に減らしていく方が楽しめるでしょう!!」

　時間はたっぷりある──という言葉をトゥアールの口から聞けて、ほっとした。

　トゥアールが楽しんでくれるほど、喜んでくれるほど、心によい方に作用するはずだ。

　そのためなら、仮に俺の着衣の面積が徐々に減っていくとしても……我慢だ!!

「ま、ま、まずはお着替えの前にですね……うへへ……『トゥアールお姉ちゃん』って言いながら私に駆け寄ってください」

　両腕をクワガタムシの角つののように曲げて構え、初っ端から難易度の高いオーダーをしてくるトゥアール。

「トゥアールお姉ちゃ～……」

　俺は走り寄った後どうなるか考えないようにして、トゥアールに言われたとおりにする。

　だが、早くもセコンドに背後から頭をわっしと掴つかまれた。

「駄目よそーじ！　今、甘え方が堂に入ってた！　そのまま進んだら帰って来れなくなっちゃうわ!!」

　真剣な顔でそんなこと言われると、こっから先テイルレッドの姿で子供っぽく振る舞うのがすげーきついぞ。

　いや──いかんいかん、今の俺は幼女だ！　幼女になりきってみせる!!

　大事なのは自己暗示だ。仲間のために幼女になるという気合いが、俺を強くする。

　精神を集中しろ。記憶の扉を開け。

　エレメリアンたちが俺に、どんなことを求めてきたのかを思い出すんだ。

『まだ身体からだを拭き終わっていないのですから、湯冷めをして

しまいますよ』

『お前のおもらしを是非今ここで見せてくれ、テイルレッド!!』

『この命果てるまで、ずっと君の尻しりを見ていたい』

「ぐああああああああああああああああっ……!!」

　俺はツインテールを抱かかえて身み悶もだえた。

　どの引き出しを開けても、変態怪人が嬉うれしそうにこっち見てくる!!

「やばいぞ、気持ち悪メモリーがフラッシュバックしてしまったのじゃ!!」

「お、俺のことは気にするな、続けてくれイースナ……!!」

「よく言った！　わらわのとっておきのお洒しゃ落れを受け取れ総そう二じ……いやレッドたん!!」

　ずっと困惑していたイースナだったが、俺の決意を感じ取ってくれたようだ。

　イースナの神眼鏡ゴツドめがねから放たれた光に、全身が包まれる。

　一体どんな可か愛わいらしい衣装だろうと身構えていたら、俺が着せられたのはジャージだった。

　ザ・部屋着という感じのシンプルなジャージは、確かにテイルレッドが着る分には新鮮だけど……これ、イースナ以外にはお洒落になるか!?

　……と、思ったのだが──

「はぁあああああん野暮ったいジャージでも可愛いですねえレッドたん！」

　トゥアール的には、テイルレッドが着替えるなら何でもＯＫらしい。

「このかわゆいお尻しりに、この前エレメリアンがしがみつきそう

になって大変でしたね……私が浄化します！　こふ――――――――――――うっ!!」

「わっ……ちょっとトゥアール、息が……っ!!」

　床を這はいずって俺に後ろからしがみつくトゥアール。ジャージの尻のあたりに顔を埋め、思い切り深呼吸し始めた。

　あ、足に胸が当たる……変身中は感覚が鋭敏になるのに！

　相当テンションが上がるのも覚悟していたとはいえ、ここまでなるのはもっと後だと思っていたんだが……！

「イースナ～。次は陽よう月げつ学園高等部の制服をお願いしますね～！」

「はいはい、もう何でも来いなのじゃ」

　半ばやけっぱちな口調で、神眼鏡ゴツドめがねのブリッジを持ち上げるイースナ。

　アイドルでありながら、スタイリストの仕事をこなすとは……。

　俺の身体からだが光に包まれ、愛あい香かたちと同じ女子制服のブレザー姿になる。

「ソーラの姿では着たことあるけど、レッドでは初めてなんだよなー」

　園児服のように小さな陽月の制服は、不思議な感じがする。

「まあ、とっても可愛いですわ!!」

　慧え理り那なは身長が小さいので制服のサイズも特注だと聞いたことがあるが、そんな自分よりさらに小さな制服を着たテイルレッドを見て、お姉さん気質が刺激されたようだ。

「やっほ――――い部屋に飾か――――ざろっと!!」

　俺の腋わきの下に手を差し入れ、高い高いをし始めるトゥアール。そのままの体勢でぐるぐる回るので、俺のツインテールもぐるぐる回る。

「津つ辺べさん、血が！　お口から血が垂れてきていますわ!!」

「あはは、気にしないで会長。ちょっと奥歯を強く噛かみ噛みしすぎちゃったのかな」

　回転する風景で断続的に見える愛あい香かは、白目を剥むいたまま口角を吊つり上げていた。

「観み束つか君！　わたくしもお手伝いいたします、よろしくお願いしますわ、イースナさん!!」

　慧え理り那なも並々ならぬ幼さを漲みなぎらせ、トゥアールの間合いへと足を踏み入れる。

「ではイースナ。尊みことさんのメイド服をそっくりそのままトレースして、慧理那さんにお着替えさせてください！　前々から似合うと思っていたんです！」

「何！　お嬢様にメイド服だと!?　そんな無礼な真ま似ねは許さんぞ!!」

　今まで傍観していた桜さくら川がわ先生も、この要求にはやはり待ったをかけた。

「いいえ尊、わたくしはむしろ嬉うれしいですわ。一度着てみたかったんですの！」

　それは建前ではなく本心だろう。主人とメイドの関係とはいえ、慧理那と桜川先生は姉妹のように仲がいい。ずっと見ていたメイド服への憧あこがれも、少なからずあったはずだ。

　トゥアールのリクエストどおりメイド姿になった慧理那が、自信なさげにはにかむ。

「ど、どうでしょう……」

「ほう……確かに似合うのう！　わらわとユニットを組んで欲しいぐらいじゃ!!」

　イースナは満足げに頷うなずき、プロの目線で評価した。

「ほあああああああああああああ私があなたをペロペロお掃除しちゃ

いますよおおおおおお!!」

　俺を片手に持ち直し、着替えた慧理那へと突進するトゥアール。

　さりげに腕力あるよな。今さらだが……。

「あはは……」

　笑うしかないよな、慧理那。思った以上に修羅の道だぞ、これ。

　しかし、その笑顔に魅せられた者がトゥアール以外にいた。

「お嬢様……！　おじょ、お嬢様……!!」

　桜川先生も職務上、主人に「メイド服が似合っている」と言うのは憚はばかられるのだろう。複雑な表情で慧理那を見ていたが、どこからか取り出した一眼レフカメラでシャッターを連射しているのが、千の言葉よりも雄弁に彼女の感想を物語っていた。

「ですが、ちょっと胸元がすーすーしますわ……」

　フリルを指で摘つまみながら、慧理那が不安げに胸元を覗のぞき込む。

　確かに、神しん堂どう家のメイド服は胸元がかなり開いているからな。

「あらあら、面白そうなことしてるわね～」

　コンソールルームのドアが開き、母さんが入ってきた。様子を見に来たようだ。

「あああ未み春はるおばさん！　見てください、そーじが幼女に変身してトゥアールがロリコンで……！　どっちもいつどおりなんですけど、あたしどうすれば……！」

　かつてないほどに遣やり場の無い感情に振り回されていたように見えた愛あい香かは、もはや他に頼る者がいないとばかり、母さんに駆け寄った。

　事情を聞いた母さんが、トゥアールに抱き締められる俺と慧え理り那なを見て、ふむ、と腰に手を当てた。

「いっそ、愛香ちゃんも協力してあげれば？　総そうちゃんと慧理那ちゃんみたいに、トゥアールちゃんのリクエストに応こたえてあげればいいのよ」

「でもおばさん、あたしは」

「胸以外」

「幼くないんですよ!?」

　言葉の途中にトゥアールに茶々を挟まれた愛香は、こちらを一いち瞥べつもせずに丸めたタオルを投げてきた。

「んふーむ!!」

　鳩尾みぞおちにタオルが命中したトゥアールは、抱かかえた俺と慧理那もろとも宙を舞う。

　タオルの質量で、人間三人って飛ぶのか。

　地球の物理学って意外とアテにならねえな……。

「それなら大丈夫よ──ねえトゥアールちゃん。確か前に、アイカオサナクスールっていう発明品を造ったでしょう？　その研究って今も継続してるかしら？」

　台詞せりふの途中で完かん璧ぺきに悪の女幹部の顔つきになるのすげえよな、母さん。

「ぐ、ふ……もちろんです未み春はる将軍……私のライフワークの一つですから」

　愛香の方へ向き直り、トゥアールは双そう眸ぼうをギラッと発光させるのだった。

◇

　薄暗いアルティメギル基地の廊下に、一点の仄ほのかな光が灯ともっていた。

　エンジェルギルディが壁にもたれかかり、手持ちサイズの端末を操作しているのだ。

　端末の画面には、「ＬＥＶＥＬ　Ｄ」と大きく表示されている。

　それを見て、意味ありげな笑みをこぼすエンジェルギルディ。

　表示される情報が別のものに切り替わっては、時たま満足げに微ほほ笑えむ──何度かそんなことを繰り返した折。エンジェルギルディの顔の横へ勢いよく伸びてきた手が、壁に突かれた。

「ヘ～イ、随分大胆なイメチェンしたじゃねーの。隊長サン」

　エンジェルギルディは声の、そして腕の主へと視線を向けた。

　例によって神の一剣ゴー・デイア・ソードの正装である白ローブをまとった戦士だが、フードの奥から聞こえてくる声は、ひどくチャラついている。

「挨あい拶さつ代わりに壁ドンなんて……あなたらしいわね。でも私、一応カレシ持ちなのよ？　絶賛喧けん嘩か中だけど」

　余裕の表情で、壁に突いた腕を下ろさせるエンジェルギルディ。

「ふん、そう言われるとすぐ興味なくなるのが俺なんだよね」

　白ローブの戦士は、言葉通りあっさりとエンジェルギルディから離れた。

「張り合いないわね。他人のものを奪ってみようと思わないの？」

「コスパ悪いっしょ。俺がモノにすんのは初う心ぶな子だけ。これ、常識だから」

　とてもエレメリアン同士とは思えない、リア充じみた会話が応酬

される。

　ホールで騒いでいる非モテ変態戦士たちが聞けば、脂汗を流して逃げ出すだろう。

「それで、何の用？　まさかあなたも私をいじめに来たの？」

「あんたのことはもうどーでもいいっつーの。アッちゃんとハッちゃんが手こずってる相手がいるって聞けば、俺も来たくなるのは当然じゃん？」

「ハデスギルディ君はともかく、アポロギルディちゃんはまだ様子見してるみたいだけど」

　このチャラい戦士がフレンドリーに呼んでいるのは、どうやらアポロギルディとハデスギルディのことのようだ。必然、この戦士の立場と力量が窺うかがえる。

「それよりも、あなたまでこの世界にやって来たっていうことは──」

「来てるよ～ゼッちゃんも。俺ら四体が一つの世界に揃そろうなんて、前代未聞だぜ？　ツインテイルズってのも年貢の納め時じゃねーの」

　ごく当然のように白ローブの戦士が発した言葉。しかしこの世界の人類にとってそれは、避けえぬ滅びを告げる神託も同然だった。

「余裕ぶってると、あなたも他の戦士みたいに骨抜きにされちゃうわよ？　あの首領様でさえ大注目のツインテール。テイルレッドちゃんにね」

「ハッ、誰だれに言ってんの。究極のツインテールだか何だか知らねーけど、逆に俺が虜にしてやんよ」

　ついに戦士はフードを下ろし、その精せい悍かんな容よう貌ぼうを白日の下に晒さらす。

　生命いのちの源たる水の完全なる支配者──伝説の海神さながらに、烈はげしくも凜りり々りしい顔立ち。

　三みつ叉またの槍やりの穂先を思わせる頭部の装飾を逆光に輝か

せ、戦士は不敵に笑みを形作った。

「俺はアルティメギルーのイケメン━ポセイドンギルディだぜ？」

◇

　順調に進んでいた幼女喫茶ならぬ幼女基地は、母さんの提案で新たな局面を迎えた。

　俺は一旦テイルレッドの変身を解除し、みんなと一緒に愛あい香かの動向を見守る。

「では、本邦初公開！　ＡＡＳアンチアイカシステム兼ＬＡＰロリアイカプロジエクト評価型二号！　アンチアイカシステム十六号・アイカオサナクミエールです!!」

　トゥアールが白衣のポケットからにゅるんと取り出したのは、地球儀のような見た目の機械だった。

　案の定、愛あい香かは猛烈な拒否反応を示した。

「ぜ━━━━━━ったいに嫌よ！　身体からだが幼くなるなんて、どんな副作用があるかわかったもんじゃないでしょ！」

　そのどんな副作用があるかわからないらしきことを、俺は何百回も経験してるんだが……。

「愛香さんを完全に幼女化させる発明はまだまだ開発途上ですが、これには副作用はありませんから、安心してください！」

　そういえば一号がオサナクスールで今回がオサナクミエールだから、語感だけで判断するとやや安全になってるな。

「試作型の構想では細胞とかテロメアとかを操作して貧乳の身体を無理矢理幼く作り替えるとか息巻いておったが……結局うまくいかなかったのじゃな、トゥアール」

　冷やかすように、にまにまと笑うイースナ。

「データは完かん璧ぺきだったんです！　ただ、身体操作はテイルギアの技術に組み込まないとやっぱり難しいようで……段階を踏むことにしただけです!!」

　トゥアールでさえ、人間の年齢を操作する発明品を作るのは困難なのか。

　装着者を当たり前のように大きくしたり小さくしたりしてるけど、あらためてテイルギアってすげえんだな。

「アイカオサナクミエールは、愛香さん自身の身体には何の変化もありません。ただ、私たちの脳が意図的にプログラムされた錯誤を起こし、愛香さんを幼女と認識するだけです」

「じゃあ勝手に使えばいいでしょ！　あんたがあたしをどう見ようが知らないわよ!!」

「いいえ、私は誓いが欲しいんです！　私は今から幼女になりますと！　愛香さん自身の覚悟がなければ、クオリティの低いコスプレに過ぎません!!」

　自分が幼く見えることは許すと言っているのだからそこで妥協してもいいのに、トゥアールはあえて愛香を追いつめるような条件を課した。こだわってるなあ……。

「つき合ってられないわ、その装置貸しなさい。悪用される前にシュレッダーにかけるから。素手の」

　愛香ってたまに、聞き流しかねない当然さでとんでもないこと言うよな。

「ッ……！　うぅう……胸が……大き、いえ、痛い……！」

　トゥアールは突然アイカオサナクミエールを抱かかえたまま胸を押さえ、床に蹲うずくまった。

「苦しい、私の生命いのちが燃え尽きていくのを感じます……！　しくしく……幼い愛香さんを見れば元気になれるのに……」

　めっちゃ愛香の方をチラッチラ見てる……。

「ウワーシッカリスルノジャートゥアールー（超棒読み）」

「トゥアールさん、もう少しの辛抱ですわ！」

　イースナも慧え理り那なも、申し合わせたかのようにトゥアールを援護する。

　ここは俺も乗っかっておくか。

「俺も久しぶりに見てみたいな、子供の頃ころの愛あい香か」

「えっ……!?　そ、そーじがそう言うなら……幼くなってみようかな……」

　愛香はツインテールの毛先をくるくると指で巻き取りながら、俺の方をしきりに見てきた。

「うんうん……総そうちゃんが望んだらどんなディープなプレイでも応おうじてしまいそうな愛香ちゃんのチョロ……もとい素直さが、おばさんとっても愛いとしいわ」

　母さんは目め許もとに湛たたえた涙を指で拭ぬぐう仕草をする。

　愛香もスルーしてるけど、トゥアールを焚たき付けたのは母さんだぞ……。

　かなりヤケクソ気味とはいえ、愛香の同意も得た。

「ああ、愛香さんに壊されずに真価を発揮できる発明品なんて、いつぶりでしょう……！」

　トゥアールは万感極まってかアイカオサナクミエールに口付けをするふりまでしながら、床にセットして起動準備を始めた。

「それではみなさん、今から数秒間光が照射されますので、目を瞑つむらないでくださいね！」

　アイカオサナクミエールから激しい光が照射される。まるでプラネタリウムだ。

　事前に注意されていなければ、条件反射で目を瞑ってしまっていただろう。

　徐々に光が弱まっていくと、俺は目の前にいたはずの愛香がいつ

の間にか姿を消していることに気づいた。

　もちろん消えたわけではなく、視線を下げればちゃんとそこにいたのだ。

　くりっとした瞳ひとみ、小さな身体からだ、そして現在より少し短いツインテール。

　トゥアールの待ち望んだ、幼い愛香が。

「っひょおおおおおおおおおおおおおおお大成功です!!」

　俺とトゥアール、慧理那、イースナ、母さんとで、幼くなった愛香を取り囲む。皆、生まれたばかりの赤ちゃんに接するように顔が綻ほころんでしまっている。

「まぁ――――ホントだわ、七歳ぐらいの頃の愛香ちゃんそのまんま!!」

　ガッツポーズをとるトゥアール。母さんのお墨付きをもらい、鼻高々の様子だ。

　確かにこのツインテールは、七歳の頃の愛香だな。

　となると、野生の狼おおかみなら秒で倒せる頃か。

「ちょっと何これ、あたしまであたしが幼く見えるんだけど!?」

　自分の手足をしきりに確認しながら、愛香自身もかなり動揺している。

　そりゃ愛香も光を見たんだから、装置の効果を受けることになるわな。

「まあ、声までいつもより幼く聞こえますわ！　視覚だけではなく聴覚にまで作用しているのですわね、トゥアールさんはすごいですわ!!」

　両手を合わせて優雅に微ほほ笑えむ慧え理り那な。

　だけど光を直視しただけで耳まで錯覚を起こしているって、何気に恐ろしいよね。

「あああぁ……愛あい香かさんが、幼い……!!」

　とろけた声を上げ、身体からだをくねらせるトゥアール。

　俺も幼くなった愛香を見て、心の中のアルバムを捲めくるような温かい気持ちになった。

　なんて新鮮なんだ。

　あの日、あの頃ころの愛香のツインテールを、幾年の時を経てまた見ることができるなんて。

　脳が映像を錯覚しているというだけあって、ホログラフ映像などとは比較にならないリアルさだ。実際に愛香が幼くなっているようにしか見えない。

　発展途上と謙けん遜そんしていたが、これは会心の発明品じゃないのか、トゥアール。

「ど、どう？　そーじ……昔を思い出した？」

　俺にツインテールを見られていることに気づいたのか、愛香が照れくさそうにはにかんだ。



「は――――い思い出しましたよ――――幼馴染おさななじみの愛香ちゃん!!」

「あんたとは幼く馴染んでないってぇ――――の!!」

　さすが愛香だ、トゥアールが一ひと際きわ元気になってきたぞ。

「痛っ……。あれ、なんか頭が……」

　突然、俺のこめかみに鈍痛が走った。

　頭を押さえながら、トゥアールに尋ねる。

「愛あい香かを見ると頭痛が起きるみたいなんだけど、この装置のせいなのか？」

　俺以外には、そういった症状の人はいないようだ。男だけに起こる副作用とか？

　トゥアールはしばらく思案した後、あくまで推論ですが、と前置きして見解を述べた。

「総そう二じ様は五感を超えた感覚でツインテールを視ることができますよね？　視覚を誤認させた幼い愛香さんのツインテールと、超感覚で捉えている愛香さん本来のツインテールが一致しないため、脳が拒絶反応を起こしているのかもしれません」

　俺の中にあるツインテール受容体のようなものが、ツインテールの錯誤を認めずに脳のエラーを引き起こしているということか……ままならないものだな。

「ですので総二様は、あまり幼い愛香さんを直視しない方がいいですね」

「そうするよ……」

「そうしないでよ!?」

　トゥアールに見せるのが目的なのだからギャラリーから俺一人が減ったぐらいどうってことはないと思うのだが、愛香はやたらと残念そうだった。

「見れば見るほど可か愛わいいですねー愛香さん！　私の発明で幼くなったんですから、私のものですね！　名前書いておきましょーっと」

　愛香に抱きつくばかりか、頬ほお擦ずりまで始めるトゥアール。

　名前を書こうとした油性ペンこそはたき落としたものの、愛香はじっと我慢して抱き締められるがままになっている。

　俺たちは今、歴史的瞬間を目撃しているのだろうが……愛香が幼く見えているので、普通に微ほほ笑えましいやりとりに見えてしまう。

「これはそーじこれはそーじこれはそーじこれはそーじこれはそーじこれはそーじこれはそ」

　早くも白目を剥むきながら、愛香は壊れたレコードのように何かを呟つぶやいていた。

「ひ、貧乳……なんという健けな気げな自己暗示じゃ……」

「ねえねえ愛香ちゃ～ん」

「あ゛!?」

　ドスの利いた声で威い嚇かくする愛香だが、トゥアールは全く気にしていない。

　声が幼いしな……。

「トゥアールお姉ちゃんだーいすき、って言って？」

「絶対嫌よ！　そんなこと言うぐらいなら地球滅ぼした方がマシだわ!!」

　全く条件が釣つり合っていない……。

　最近よく、何もしていないのに理不尽に滅ぼされかける地球さんが可か哀わい想そうだ。

「うっ……ぐっ……胸が……!?」

　僅わずか数分前のリプレイ再生のように、トゥアールは胸を押さえて苦しみ始めた。

「あ、あ……生命いのちが……私の生命が、燃え尽き始めているのを感じます……しくしく……元気になれる言葉があるのに……」

　このテンション芸、すっかりモノにしたみたいだな。

「……ぐ、ぐぐ……」

　露骨な演技だが、それを言われて拒こばめるほど愛あい香かはドライではなかった。

　トゥアールの前に立ち、深呼吸して見つめると、

「……トゥアール……お姉ちゃん…………………………………………………………大好き」

　最後の一言だけ想像を絶する躊ちゆう躇ちよがあったようだが、愛香は観念して言い捨てた。

「はぁ～～～～～ん私も大好きですよ～～～～～～～～ロリ香さん!!」

「だ————もう、離れなさいっ!!」

　抱きついてくるトゥアールに回し蹴げりを放ち、側頭部に命中させる愛香。

　しかしトゥアールは地中深く根を張った巨木のごとく微み塵じんも揺らがず、再び愛香ににじり寄っていく。愛香はムキになって攻撃を続けた。

　実際そこにいる愛香はいつもと手足の長さが変わらないのだから当然だが、俺たちから見ると、小さな愛香がまるで瞬間移動のように間合いを詰めてトゥアールに攻撃を命中させているように見える。おそらく脳が大雑把に視覚情報を補完しているんだろう。

　そして俺の頭痛は、揺れるツインテールを見て一層激しくなる。視線を逸そらそう……。

「このー！」

「はははははははは！　たとえ威力は普段と同じだろうと、それを放つのが小ちっちゃい子ならば私には通用しません！　むしろ、悦んで受け容いれます!!」

　トゥアールは謎なぞのスーパーアーマーを発揮し続け、愛香の連撃にもビクともしない。

「無敵じゃなトゥアール」

「津つ辺べさんの攻撃を受けるごとにむしろ快復しているようで、何よりですわ！」

　慧え理り那なとイースナも嬉うれしそうに二人を見守る。

　こうして見ると、トゥアールの身体からだが弱っているようにはとても見えないんだけどな……。

　ともあれ、俺たちの覚悟は無駄ではなかったようだ。

「よし、それじゃ俺もテイルレッドに変身し直して──」

「だから駄目よそーじ！」

　俺の提案は、即座に遮さえぎられる。

「男の姿でも、テイルレッドの姿でも、今のトゥアールには近づいちゃ駄目！　あたしがなんのためにこうして自分の身を犠牲にしてると思ってるの!?」

　愛香は俺へと手を伸ばし悲痛な訴えをしてくるが、トゥアールはお構いなしにより深く抱き締める。愛香の頭を抱かかえ、自分の豊満な胸へと導いていく。

「あれ、おかしいですね……こんなにちっちゃいロリ香ちゃんの頭なのに、私のおっぱいにうまく挟まりません……えいえい」

「当たり前でしょ実際は今のあたしの頭なんだから！　つーかそれ

以上その忌いま忌いましい駄肉押しつけたら千ち切ぎり取るわよ!!」

　その攻防はさながら、サメに呑のみ込まれまいと抵抗する海水浴客を彷ほう彿ふつとさせた。

「駄目っ……やっぱり一人じゃこいつの血迷った欲望を受け止めきれない！　会長助けて!!」

　とうとうギブアップする愛あい香か。しかし、俺ではなく慧え理り那なへと助けを求めた。

「は、はい……わたくしにできることでしたら……」

　コーディネート役だけでは物足りなくなったのか、ここでイースナが名乗りを上げた。

「よしトゥアール！　わらわも幼くなってやるぞ、アイカオサナクミエールをわらわに使うがよい!!」

「残念ですが、アイカオサナクミエールは愛香さん以外の人間に効果はありません！　よしんば効果を持たせられるとしても、あなたには使いませんよイースナ!!」

「何でこんな応用範囲広そうな発明を貧乳専用にカスタマイズしとるんじゃ！　どんだけ貧乳のことが好きなんじゃ貴様ー!!」

　イースナの抗議ももっともだ。わだかまりはとっくに解けているはずなのに、トゥアールは肝心なところでイースナへ照れ隠しのような態度を取るんだよなあ。

「なんじゃ、幼い頃ころのわらわにはぞっこんだったじゃろうが……ふん」

　すっかりヘソを曲げてしまったイースナを、俺はさりげなくフォローしておく。

「照れてるだけだって。トゥアールもイースナの心遣いは嬉うれしいと思ってるよ」

「……ふーんだ、トゥアールのばーか！　勝手に百ゆ合り百合しておれ！　わらわは今カレの総そう二じといちゃいちゃしてやるから

のう!!」

　俺の腕に自分の腕を絡め、トゥアールにあっかんべーをするイースナ。強がってはいるけど、やっぱり寂しいんだろうな。

　トゥアールも、そろそろイースナに素直になればいいのに。

　懐かしさのせいもあるのだろう、無意識に幼い愛香のツインテールを見つめていた俺は、またも頭痛に襲おそわれて視線を逸そらす。

　ちょうど視線を逸らした先で、壁にある小型のサブモニターが点灯した。

　画面に計測完了、と表示され、デッサン人形のようなＣＧモデルの隣に無数の文字が羅ら列れつされていく。ＣＧモデルは、白衣を着ているようなシルエットをしている。

　これって、今日トゥアールが先に帰ってやると言ってたセルフ身体検査とやらの結果か？

『ＬＥＶＥＬ　　　　　　　　　　Ｄ』

　辛かろうじて読み取れたのは、総合判定のように大きく書かれたその文字だけだった。

「っ、と……」

　表示に気づいたトゥアールが慌あわてて端末を操作し、再びモニターは真っ暗になる。

　そしてすぐに愛あい香かとのじゃれ合いに戻ったので、俺も何も見なかったふうを装った。

　──レベル、Ｄ……？　あれは、トゥアールの症状の進行度を表す数値なのか。

　だとすると、どっちだろう。アルファベット分けじゃ、Ａに近づくほどいい場合も悪い場合もある。大したことがない、の意味でのＤであって欲しいが……。

　いや、そうに決まってる！　こういう時余計なことを考えすぎるのが、俺の悪いところだ。

　素人しろうと考えを膨ふくらませて不安になるよりも、今は俺たちにできることをしよう──。

　　　◇

　ところが、その幼女合戦（？）から二日、三日と過ぎるにつれ──トゥアールは一人で行動する時間が明らかに増えていった。

　別に俺たちを避けているわけじゃない。学校にもちゃんと来ている。

　ただ、今日もそうだが……こうして放課後になると、脇わき目めも振らず家に帰ってしまうのだ。

「慧え理り那なは生徒会の会議で、イースナたちは仕事。今日のツインテール部は休みだな、愛香」

「あたし二人っきりで部活やりたい……」

　何か呟つぶやいた気がしたので振り向くも、愛香は誤ご魔ま化かすように両手を振った。

　そういうわけで俺と愛香は、部室棟に立ち寄らず真まっ直すぐに昇降口へと向かうことに。

　廊下でＤＩＹ研究会の人たちを見かけた。愛香がトゥアールで校舎の壁を破壊すると、それが使命だと言わんばかりに修しゆう繕ぜんしてくれる人たちだ。

「どうしよう……ここのところ、セメントが全然減らないぞ……」

　悩みを口にし、悲しそうに肩を落としている。

　愛香とトゥアールのじゃれ合いは、学校でもすっかり名物になっていた。

　一日ぐらいならともかく、何日も静かな日が続けば皆不審に思うのだろう。

　当事者の一人である愛香は、彼らが悩む様を見てリアクションに困っている。

「この際、どこでもいいから埋めておくか。洗面所の排水口とか」

　互いの顔を見やって頷うなずき合い、ＤＩＹ研究会の人たちは去って行った。

　使命感が行き場を失って、ただ予算を使いきるためだけの公共事業じみたことに手を出そうとしているようだが……大丈夫だろうか。

　昇降口の下駄箱に向かう途中で、今度は校内の見回りをしていた慧理那に会った。

「先ほど生徒会で議題に挙がったのですが、最近津つ辺べさんとトゥアールさんが校舎を壊さないのは天変地異の前触れではないかと、かなりの数の生徒が怯おびえているようでして……」

「そんなこと議題に挙がっても一いつ蹴しゆうしてよ！　会長は会長なのよ⁉」

　哲学じみた抗議をする愛香。

　本人はたまったものではないだろうが、俺はちょっと嬉うれしかった。何だかんだいって、学校のみんなはトゥアールのことを気にかけてくれているんだな。

「愛あい香か。今からお前の家に行きたいんだけど、大丈夫か？」

「うん、大丈夫だけど────────ぇえ⁉　何で急に⁉」

　あっさり返事をしたあと、廊下の壁に背中をぶつけるほど飛び退のく愛香。

「大した用事じゃないんだ、すぐ終わるからさ」

「あ、そう……」

　愛香は居住まいを直し、深く溜め息をついた。

「大した用事じゃなくて落ち込んでる愛香可か愛わいい……」

「むしろ大した用事にしちゃえばいいんだよ！　ファイト！」

　通りがかったクラスの女子たちが何か愛香に話しかけているようだったが、特に用があるわけではないらしいので、俺はそのまま愛香と下校した。

　慧え理り那なとイースナには、今日の部活は休みにするとメールで連絡しておく。

「た、大した用事じゃなく……する……」

　その後愛香は小声で何かを呟つぶやきながら、妙にぎこちない足取りで通学路を歩いていた。

　しきりにツインテールを手て櫛ぐしで整えているのが印象的だった。

　何気ない下校中でもツインテールへの気配りを忘れない……さすがだな、愛香。

「たダいマ」

　アクセントがおかしな挨あい拶さつとともに、玄関のドアを開ける愛香。

「あら総そうくん、また来てくれたの？」

　リビングの方から恋れん香かさんが顔を見せ、俺たちを出迎える。

「こんにちは恋香さん、お邪魔します」

　恋香さんはコミカルなスキップで愛香に忍び寄り、耳元で何かを囁ささやいた。

「そろそろ決着をつけないと……お姉ちゃんが取っちゃうぞ♪　マジで……」

「もう、お姉ちゃんったら冗談ばっかりっ！」

　今、恋香さんの目が鋭い光を帯びたように見えたが……気のせいだろうか。

　後ろ手に組み、リビングに戻っていく恋香さん。

　愛香は俺の背中を押して階段を上がらせ、自室へと案内するのだった。

　愛香の部屋のドアを開けると、何とも言えない甘い匂いがふわっと漂ってくる。

「どうぞ、何にもない部屋だけど」

「そんなこと言ったら、俺の部屋だって遊ぶもんなんてほとんどないぞ」

　部屋の主あるじが知らないうちに、エロゲーとかは増えてくけど……。

「や、やっぱり落ち着かないね、そーじがこの部屋にいるの」

　苦笑して制服のブレザーを脱ぎ始める愛香。しかしそれを壁のハンガーに掛けようとする寸前、慌あわてて袖そでを通し直してしまった。

　部屋は床暖房が効いているが、それでも寒かったのだろうか？　自分の身体からだを抱き締めるようにしているし。

　俺の方をやたらチラ見しているようだし、どうも今日の愛あい香かはテンションがおかしいな。

「その辺の雑誌、読ませてもらっていいか？」

　俺は本棚を指差して尋ねた。ファッション誌が豊富に並んでいるのが見える。

「え、いきなり本……？　まあ、いいけど……。あぁえーっと、そのピンクのクッション、普段あたしが座ってるやつだから……使って！」

　そう言うと、愛香はベッドに腰を下ろした。

　お言葉に甘えて何冊か雑誌を取り、パラパラとめくり始める。

　俺が無言でファッション誌を見ているだけなので手持ち無沙汰になったのか、そのうち愛香は隣に座って肩を寄せてきた。

　そして、俺の見ているページに目を留とめる。ティーンのモデルが、流行の服を紹介しているページだ。

　最近はこういうファッション誌でも、ツインテールのモデルが増えたのが嬉うれしい。

「あ、これ可か愛わいいよね。あたし普段青系の服ばっかりだけど、たまには赤とかもいいかな～って思うかも」

「いいんじゃないか？　きっと似合うぞ」

　むしろ、愛香ほどのツインテールなら似合わない服を探す方が難しいだろう。

「さっきから熱心に見てるけど……その中であたしに着て欲しい服……何かある？」

「ん？　愛香には手間をかけさせないから、安心してくれ」

「え……？　じゃあ、何のために女子向けのファッション誌なんて見てるの？」

　俺は当然のように、自分の顔を指差した。

「俺が着ようと思って」

　愛香は白目になって仰のけ反ぞると、

「そーじそーじそーじそーじそーじそーじそーじそーじそーじそーじそーじそーじそーじ」

「あっ！　違うぞ、俺っていうかテイルレッドな!!」

　俺の肩を掴つかみ、前後にガックンガックン揺さぶってきた。

「女の子のお洒しゃ落れをそーじが覚える必要はないでしょ!?　言ってくれればあたしたちでレッドのコーディネートするわよ！　ぶっちゃけそれもどうかと思うけど!!」

　愛香ははっとして、俺が持ったままの雑誌に指を突きつけた。

「もしかしてそーじ、ただファッション誌とか読みにあたしの部屋に来たの!?」

「ああ。気軽にこういう本借りに行けるの、愛あい香かの家しかないから」

「……はぁ……。そーじがこの部屋に気軽に来るようになるのはいいんだけどね……」

　ようやく落ち着いた愛香は、再び俺の隣に腰を下ろした。

「あのね、そーじがトゥアールのためにめっちゃ頑張ってるのはわかるけど……正直、幼女にばっかりこだわるのもどうかと思うよ」

「やっぱり愛香は、小さな女の子好きの属性には思うところあるのか？」

「そうじゃなくて。トゥアールはテイルレッドになってあれこれするより、そーじの姿のままで何かしてくれる方が……本当は嬉うれしいと思う。あいつ、そこはちゃんと女の子だもん」

　そう語る愛香は、どこか嬉しそうに見えた。

　でもトゥアールは、テイルレッドの姿の方が喜ぶと思うんだけどなあ……。

「俺だって、他に方法がないか考えながら幼女してるけど……まだ見つからないからさ」

「ツインテールだけじゃなくて幼女まで動詞になり始めてるから、気をつけてね」

「とにかく何かをしてないと落ち着かないんだ。トゥアールが籠こもりきりになるのは、本当にヤバい時だけだから……」

　これまで何度かあった危機でも、今回の件ほど俺たちと別れて行動する時間が長い時はなかった。それだけで、深刻さが伝わってくる。

「幼女以外の方法……あたしも思いついてないんだよね。エンジェルギルディをぶちのめしてテイルブレスオルターを取り返したって、状況は好転しないんでしょ？」

「トゥアールの不調が目に見えて表れ始めたのは、ここ一か月そこそこだ。マーメイドギルディの暗躍と、ブレスの強奪がトゥアールの精神に大きな負荷をかけたのは間違いないと思う。……ただ、そうなんだよ、エンジェルギルディを倒しても何も変わらないんだ……」

　エンジェルギルディの底意地悪さに、あいつが全ての元凶だと押しつけたくなるのは山々だが……そうではない。戦いでトゥアールを救うことができないのが、歯は痒がゆくてたまらない。

「じゃあやっぱり、もうちょっとだけ幼女で頑張ってみよっか……」

「ああ。そうしようぜ」

　愛香は抱かかえた膝ひざに頬ほおを載せ、物憂げな表情で俺を見つめてきた。

「なんかこうやって二人で話してると、ツインテイルズの活動を始めた頃ころに戻ったみたい。トゥアールが引き籠って発明してさ、その間にそーじとあたしで色々話し合って」

　そう言って微ほほ笑えむ愛香に、思わず目を奪われる。

　……愛香って、こんなに大人っぽかったっけ。

　俺は無意識のうちに、愛香のツインテールに触れようとしている自分に気づき……その手の軌道を強引に変える。手を伸ばした先に

本棚があったのが幸いだった。

　一番下段に厚めのアルバムを見つけ、わざとらしく声を上げる。

「ア、アルバムかー、へえ～……」

　雑誌の延長ぐらいに気軽に考え、愛あい香かの同意も得ずにアルバムを本棚から抜き取った。

　小さい頃ころの愛香の写真を見てみたくなったのだ。

　ところが愛香は、ツインテールが逆立つほどの勢いで飛び上がった。

「それは駄目！　昔のだけじゃないから!!」

　よほど見られたくないものだったようだ。言葉で制止するだけではなく、身体からだごとぶつかるようにして俺からアルバムを取り返そうとしてきた。

「ぐほっ……！」

　鳩尾みぞおちにいい頭突きが入り、俺は床に倒れ込む。

　勢い余った愛香が、そのまま俺に覆おおい被かぶさってきた。

「…………」

「…………」

　ツインテールが、俺の顔にしな垂れかかる。

　互いの呼吸音がやけに大きく聞こえ……愛香の体温が、首から下に満まん遍べんなく伝わってきた。

「ごめん、そーじ……」

「俺の方こそ」

　そこで俺たちは、同時にはっとした。

　気配を感じて出入り口のドアを振り返ると、開いている。

お盆にグラスを二つ載せた恋れん香かさんが立っていた。飲み物を持ってきてくれたらしい。

「あらあらあらあらあらあらあらあらあらごめんなさい、お邪魔だったみたいね」

リズミカルにあらあらを連呼し、嬉うれしそうに俺たちを見つめてくる恋香さん。

「ほっ……あ、ぽっ……!!」

不可解な言葉を発しながら、愛香は宙返り。ベッドの上に、着地そのままに正座した。

「そーじの家！　そーじの家行こ!!」

恋香さんの前では基地と言えないのだろうが、多分基地に行こうという意味だろう。

「それじゃ恋香さん、お邪魔しました」

申し訳ないので持ってきてくれたジュースだけいただき、愛香の部屋を後にする。

ちなみに愛香も、なみなみと注がれたジュースを一口で嚥えん下かしてしまった。

「ああん、移動しなくていいのよ!?　ここで続きを──」

恋香さんが残念そうな顔で見送ってきたのだが、愛香をよく見ると同じような表情をしていた。やっぱり姉妹だなあ。

◇

愛香の家を後にした俺たちは、そのまま地下基地へ。

コンソールルームを訪れるも、トゥアールの姿はなかった。自分の研究室に籠こもっているようだ。その代わり、珍しくイースナが一人でテーブルに座っている。

「あたしってもう……あれでめっちゃ幸せになれるんだから、ほんと安い……」

「ひ、貧乳さん……顔、真まっ赤か……。エロゲーの、ヒロインのＣＧ……くらい、わかりやすく真っ赤……」

「他に喩たとえ方ないのあんた!?　でもあながち間違いじゃ……じゃなくて!!」

　イースナに顔を覗のぞき込まれ、愛あい香かが何やら抗議している。

　続いて、慧え理り那なも一人で基地にやって来た。

「すみません。ツインテール部がないと聞いても、やっぱりじっとしていられなくて……」

「いや、助かるよ。今は作業に集中しているみたいだけど、こっちが賑やかになればそのうちトゥアールも顔を見せてくれるだろうし」

　いわゆる天岩戸の故事を連想した。

「またトゥアールさんのために頑張りましょう、観み束つか君!!」

　慧理那はやる気だが、今のままでは頭打ちだ。もっとトゥアールを刺激するようなアイディアはないものか……。

「衣装についてはあたしたちがなんとかするから……そーじがもう少し何かしたいって言うなら、女の子らしい仕草とかにこだわってみればいいんじゃない？」

　さっきは多少拒否反応が出ていたように見えた愛香だが、今は落ち着いているようだ。

「仕草……動きか。それって、どうやって研究すればいいんだ……？」

　愛香は眉まゆを八の字にして考え込むと、

「……女の子の動画を見て、参考にしてみる……とか」

　自信なさげに提案してきた。まあ、それが一番わかりやすいか。

　しかしよく考えるとそれって、ネットで幼女の動画を探し回るってことじゃ……。

「ちょうどいいですわ！　わたくし動画サイトで特撮おもちゃのレビュー動画をよく観るのですが、昨夜ゆうべとっても可か愛わいい配信者さんを見つけましたの！」

　慧理那は学生鞄かばんの中からトゥアルフォンを取り出し、嬉き々きとして操作し始める。

　表示したのは……ＹＯＵヨウ ＴＵＩＥチユーイっていう、大手の動画配信サイトだ。

「小学生ぐらいの女の子がおもちゃのレビューをしているのですが、その仕草がとっても愛らしくて……きっと観束君の参考になると思いますわ！」

　そこまでベタ褒ぼめされると、参考にするとか関係なく観てみたくなるな。

　それに女の子が玩具で遊ぶ動画なら、とても健全だ。

　その動画のページを開こうとした慧理那だったが、やがて不思議そうに首を傾かしげた。

「変ですわね……動画が無くなっていますわ」

「子供が配信してたんだろ？　親が見つけて削除申請しちゃったとか……？」

　子供が自分で撮影した動画をアップするのは、個人での動画配信がブームの昨今では珍しくない。そしてそれが親に見つかって怒られることも、よくあることらしい。

「だとすれば、ブックマークしたページに『この動画は削除されました』と出るはずですわ。まるで、初めからそんな動画はなかったように、影も形もなくなるなんて……」

　諦あきらめきれないのか、トゥアルフォンを操作する慧え理り那な。

　ページを移動したりリロードしたり色々試したようだが、結局見つけられなかったようだ。

「出てくるものは、いつもどおりテイルレッド関連の動画ばかりですわ……」

　それがいつもどおりだと、俺としてはすげー怖いんだけど。

「普段は『おもちゃ　レビュー』の検索ワードでも、あまり関係がないテイルレッドの動画がずらっと並ぶので……もちろんそれも嬉うれしいのですが、だからこそ昨日は新鮮な発見があってとても嬉しかったのですわ……」

　システム回り改修した方いいんじゃないか、その動画サイト……世界で最大手らしいが。

「つーか、みんなテイルレッド題材にして何をそんなたくさん動画作ってんだ……？」

　気になった俺は、新着動画としてトップページに掲載されている動画の一つを慧理那にタップしてもらう。

　おそらく撮影場所は自室だろう。大学生ぐらいの男性が、テイルレッドのフィギュアを置いたテーブルの前に座っている。すぐにトークが始まったが──

『はいどうも、今日はえーと僕の思う「テイルレッドたんの可か愛わいいところ」を、ランキングですね、そういう形式で発表～！していきたいと思いま──』

　俺は画面を指で突き破る勢いでタップし、再生を停止した。

　クッソ動どう悸きがやばい。なんだこの感覚。

　恥ずかしいが二割、死にそうが七割、世界平和への祈りが一割。

　動画をわずか数秒観ただけで、どうしてこんなにも瞳孔が開くのか。

「条件反射で指が動いちまったが、内容はまさに俺が求めてるものだったんだ、参考にしないと……!!」

「無理しないでそーじ……」

　他人から見たレッドのいいところを知れば、今後の幼女としての俺に活いかせるはずなんだ。

　あれ。何か俺、おかしなこと言ってないか……？　まあいいか。

「あ。新着に、エレメリアンが投稿した動画が、あります……。総そう二じさん、観てみたらどうですか……？」

　イースナに言われて画面を見ると、確かにサムネイルにエレメリアンがデカデカと映っていた。何というか、豚みたいにでっぷりとした見た目だ。

「はぁ～、エレメリアンなら戦闘中にレッドの品評会が開かれるなんて日常茶飯事だし、まだマシか…………って、なんでエレメリアンの動画が⁉」

　これまでに戦ったことない奴やつだし、一般人が隠し撮りしたものではないと思う。

「こいつ、何のために動画投稿なんて……動画好きの属性とかあるのか？」

「こういうこと、しようとする……エレメリアンは、昔からけっこう、います……。ブラキオギルディも……ゲーム実況とか、してた……でしょ？」

　死の二菱ダー・イノ・ランヴアスのブラキオギルディか。訛なまり声でのゲーム実況が好評だとか言ってたな、確か。

　でもあいつは、動画の中で自分がエレメリアンだとは明かしてなかったよな。

　トゥアルフォンの小さな画面に、四人分の視線が一斉に注がれる。

　意を決してその動画を再生しようとした、その時。

「……楽しそうですね、皆さん……」

　本当に天岩戸作戦になったようで、トゥアールが研究室から出て

コンソールルームへと姿を現した。見るからにどんよりとした空気をまとっている。

「みんなでレッドちゃん動画に見入ってどうしたんです？　まさか総そう二じ様……レッドちゃんの姿でＹＯＵヨウ ＴＵＩＥＲチユーイヤデビューするんですか!?」

「させるわけないでしょこれ以上世の中にレッドの映像増やしてどーすんのよ!!」

　確か、ＹＯＵヨウ ＴＵＩＥチユーイに動画配信する人のことをＹＯＵ ＴＵＩＥＲと言うんだっけ。

　二人の議論に待ったをかけるかのように、テーブルの上にとぅあるんが浮き上がった。

「むむ、エレメリアン出現ですね。……一般兵クラスのようです」

　トゥアールは落ち着いて分析している。

　出撃準備する俺たちに、慧え理り那なが申し訳なさそうに言ってきた。

「強敵でないようでしたら、わたくしはこのまま基地に残ってよろしいでしょうか？」

　どんな時でも出撃を希望してきた慧理那が、自分から残ると言うのは珍しいな。

　俺が不思議そうにしているからか、慧理那はこっそり耳打ちをしてきた。

（……わたくしたちが戦っている間、トゥアールさんが基地で寂しい思いをしていないか……様子をお窺うかがいしようと思いますの）

　なるほど、そういうことか。確かにそれは大事だな。

「ああ、もちろん。最近エレメリアンの出現頻ひん度ども増えてきたし、できる時はローテーションで休もうぜ」

　俺は愛あい香かたちに聞こえるようにそう言い、慧理那をフォ

ローした。

　すると、今日はメガ・ネもいないし……珍しく、俺とブルーとブラックの三人で出撃だな。

◇

　駅前の大広場に出現したエレメリアンは、多くのギャラリー……特に、小さな子供たちに向かって話しかけている。

　恰かつ幅ぷくのいい丸っこい体に、短い手足……豚のような見た目のエレメリアンだ。

「全く……狼おおかみの次は子豚か！　童話シリーズに統一しておるのではあるまいな!?」

　相変わらず、ブラックの着眼点にはたまに感心させられるな。

　だけどこいつ、動画のサムネイルで見かけた奴やつじゃねーか。偶然じゃなさそうだぞ。

『レッド！　そちらの映像が、今ＹＯＵヨウ ＴＵＩＥチユーイで配信されていますわ!!』

　基地に残っている慧え理り那なが、通信でとんでもない事実を伝えてくる。

　やっぱりこいつ、こうやって頻ひん繁ぱんに動画配信してやがったのか……！

「む、ツインテイルズか！　俺は偶像属性アイドルのピッグギルディ。ちょっと街ゆく子供たちに動画配信の楽しさを教えている最中だ。邪魔をしないでもらおう!!」

　子供が狙ねらいか。しかも勝手に動画配信されているとあっては、親御さんたちもたまったもんじゃないだろう。

　しかしブラックは、別の憤りを感じているようだった。

「馬ば鹿かか貴様あああああああああああああ！　アイドルの属性などというわらわに因縁のありそうな戦士のくせに、見るからに下したっ端ぱではないか！　幹部級に鍛きたえて出直してこんか!!」

「フッ……因縁などないわ、テイルブラック！　俺はお前のように現実リアルでスポットライトを浴びるだけのクラシックなアイドルに興味はない。電脳世界──ネットで堅実に活躍するアイドルたちにこそ、大いなる光を見み出いだすのだ!!」

　いわゆるネットアイドルが好きってことか。

「さあさあ子供たちよ。ツインテールに結び、自ら動画を発信する魅力に目覚めるのだ。そして、すくすくと偶像属性アイドルを育はぐくむのだぞ!!」

　それで子供にちょっかい出してたのか……まるでプロデューサー気取りだな。

「アイドル好きを自称するなら、マナーを守ったらどうだ。俺の動画を勝手にネットにアップしやがって、行儀が悪いにも程があるぜ!!」

「おお、よく言ったレッド！　そのとおりじゃ！　この世から出禁にするぞ子豚!!」

　現役トップアイドルが、マナーを破ったペナルティについて厳しく言及する。

「ああ、ＹＯＵ　ＴＵＩＥに投稿した動画か……別に問題あるまい！　人間どもが投稿した動画の深刻な素材不足を見るに見かねてな、我われらのアーカイブの一部を分け与えてやっているだけよ！　人間にはめっちゃ喜ばれておるぞ!!」

「────最悪だこいつ……」

『自分のコレクションを誰だれかと共有したい気持ちが「自慢したい」に変わって、そのために手段を選ばなくなってくる……ダメなパターンのアイドルファンですね』

　通信越しにトゥアールもげんなりしている。

「特に人気だったのは、『レッドちゃんのおっぱい』動画だな！

我らの基地では一時期みんなこぞってこれをやっていたぞ!!」

　胸を突き出して、ぴょーんと飛び跳ねるポーズをするピッグギルディ。

「な……やめろ！　俺の一時の気の迷いをブームにすんな!!」

　何を隠そうこのポーズは、昨年こいつらエレメリアンの気を引きつけるためにやらかした、俺の人生ベスト３に入る過あやまちなのだ。

「わっはっは、照れるな照れるな。その映像は我われらアルティメギルのアカウントで投稿した動画の中でも特に人気だからな！　投稿初日にあっさり二〇〇〇万再生を突破してしまって、ちょっとした小遣いになったわ!!」

「俺の盗撮動画で広告収入得てんじゃねええええええええええええええええええええ!!」

　ソシャゲだの動画サイトだの、以前にはイラストサイトにも投稿してるって言ってたし……どんだけ人間文化に溶け込んでんだよこいつら!?

　俺の、俺の気の迷いが……過ちが、取り返しがつかないほど世界に拡散してゆく。

　ネット怖こえぇよ……!!

『ご心配なく総そう二じ様、あいつらの動画は後でハッキングして消しておきます！　それに「レッドちゃんのおっぱい」動画なら、私が投稿したやつの方が再生数上回っています！　動画再生数でも悪の怪人には負けないという、人間の強き意志を見せつけてやりましょう!!』

　不安を解消してくれた直後に、新たな不安要素を提示してくるトゥアール。

　敵どころか仲間まで俺の盗撮動画を動画サイトにアップしているようなんだけど、著作権侵害の当事者として運営に連絡した方がいいんだろうか。

「テイルレッドよ。あの動画が嫌なら、ここで新たな素材を提供し

てくれぬか。世界中が見たいであろう題材……『テイルレッドはどのようにツインテールを結ぶのか』をな!!」

　ピッグギルディはそう宣言すると、妙に作った変顔を戦闘員アルテイロイドに撮影させていた。

　投稿する動画のサムネイルに使うのかもしれない。

「お断りだ！　誰だれがお前らの前でツインテールを解ほどくか！」

　一度解いて、じっくり結び直せってことだろう。そんなことしたら、変身解除しちまう。

「いいではないか……お前がツインテールを結ぶ動画を見て、もっともっと世界にツインテールを愛する人が増えるはずだぞ。エンジェルギルディちゃんもそう言っていた」

　子供へのちょっかいといい、やたらとツインテール推しだと思っていたが……エンジェルギルディの指示か。今はあいつが先頭に立って、ツインテールの拡散を進めているのか？

「最近のこいつらの図々しさは目に余るわね……その辺にしておきなさいよ、ブタ」

　苛いら立だちながらも話を聞いていたブルーだが、とうとう耐えきれずに直球で凄すごみ始めた。

「待てブルー、ここは俺に任せてくれ!!」

　こいつは今、リアルタイムで動画配信をしている厄介な奴やつだ。ここでまたストンピング大会が開催されたら、目も当てられない。

「なあピッグギルディ。ちょっと、俺と二人だけで話をしないか」

　俺は顔が引きつるのを押さえて笑顔を作り、ピッグギルディに提案した。

　今日は子供も大勢見てるんだ、こいつから情報を引き出す間だけでも穏便にしないと。

「ぶひっ!?　お、俺が……テイルレッドに逆ナンされただとぉ!?」

　髪の毛があるわけでもないのに、手て櫛ぐしでオールバックにキメるような仕草をするピッグギルディ。

「戦闘員アルテイロイドよ！　しっかり撮影し、そして配信するのだ、俺のモテ期をな！　ぬはははは、基地の連中が歯は噛がみする姿が目に浮かぶわ!!」

「モケモケー」

「モテモテー」

　戦闘員アルテイロイドも囃はやし立てるような声を上げる。

「いやだから俺の話を……」

「よし、立ち話もなんだ！　とりあえずそこのルターバックスで、今後のデートプランを練ろうではないか!!」

「立ち話で十分なんだよ!!」

　知らないとはいえ、喫茶店の息子を珈琲コーヒーのチェーン店に気安く誘いやがって!!

「アタシ　ソイツ　ハヤク　ナグリタイ」

　乾いたカタコトが聞こえて振り返ると、ブルーのツインテールが怒りに満ちみちていた。

「えっとな。お前らなら、お世辞とかなしに忌き憚たんのない意見を言うだろうと思ったんだ」

　もたもたしてブルーの『エレメリアンを血祭りにしてみた』動画がライブ配信される前に、俺はピッグギルディへと手短に用件を伝える。

「──教えてくれ……！　見るだけで元気になるような、可か愛わいい女の子って……どんな感じにすればいい!?」

　瞬間、ピッグギルディだけではなく、周囲のギャラリーたちの喧けん騒そうもピタリと止やんだ。

「大切な人のために、可愛くなりたいんだ。どんな意見でもいいから頼む!!」

「………………」

　ピッグギルディはだんまりを決め込んでいる。ちょっと引いたか？

「………………ほ」

「ほ？」

「本部、応答をおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！　かつてなき緊急事態だ！　テイルレッドが可愛い!!」

　ようやく口を開いたかと思えば、奴やつらの基地へと血迷った報告をしている。

「な、何言ってんだお前──」

「助けてくれ！　俺一人では、この可愛さを受け止めきれぬ！　光栄だが……名誉だが、俺の手には余りすぎる！　何な故ぜ今日という日に！　俺が出撃してきてしまったのだっ!!」

　先ほどは基地の連中をさんざん煽あおっていたのに、今度はそいつらに助けを求め始めた。

「しししばし待てテイルレッド。今、基地に残る数百の戦士全てが出撃してくるであろう!!」

　飛び跳ねるピンボールの如ごとく目を泳がせ、とんでもない宣言をするピッグギルディ。

「唐突に総力戦を開始するんじゃねえええええええええええええええええ!!」

　そして、ピッグギルディを押しのけるようにしてギャラリーたちが俺に殺到してきた。

「水くせーぜレッドたん！」

「エレメリアンの前に、まずわしらを頼ってくれんかのう……」

「そうよ、てきかくにアドバイシュするわ！」

　老若男女問わずに集結するアドバイザーたち。

　仕舞いには、おませな幼女がめっちゃドヤ顔でツインテールを触ってくる！

「レッドちゃんは今のままですでに可か愛わいいわよ！　ねえ、モケー!!」

「モーケスネー」

　一般人と戦闘員アルティロイドが雑談に興じているように見えるが、相当疲れているんだろうな俺。

「散れい人間ども！　テイルレッドは俺を頼ったのだ、俺がアドバイスする！　えーと、えーと……思い浮かばん！　とりあえず向こうにあるオメガ珈琲コーヒーに入って話をしよう!!」

　テンパりすぎてとにかく行動しようと、俺の腕を掴つかもうとするピッグギルディ。

「むふふ、これだからアイドルファンはやめられん……想い続ければ、いつかはファンとアイドルは付き合えるものなのだ！　今日の動画は伸びるぞ―――っ!!」

　その時、ピッグギルディのでっぷりとした身体からだに黒い鞭むちが巻き付いた。

　ブラックの武器、ダークネスウィップだ。

「うおぉ!?」

「見果てぬ夢を懐いだくアイドルファンよ、現実を見よ！　そんな特例は……レッドほどの超一流アイドルには、世界が滅びようと適応されん!!」

　非情な現実を、現役アイドルが突きつける。

「そんな……嘘うそだ！　テイルレッドはさっき、俺だけに微ほほ笑えんでくれた!!」

　お前の記憶は、動画編集ソフトみたいにいじくれるのか……!?

　ブラックは独こ楽ま回しの要領でピッグギルディを空中に飛ばし、ダークネスグレイブを完全解放ブレイクレリーズさせる。宙を舞う標的目掛け、必殺の矢を引き絞った。

「ダークネスバニッシャ────────────ッ!!」

「勝負にはならなかったが、俺はテイルレッドに逆ナンされるという歴史に残る偉業を成し遂げた！　基地に銅像を飾ってくれ同胞たちよ────────────っ!!」

　ひどく嬉うれしそうな断だん末まつ魔まの声を上げ、ピッグギルディは爆散した。

「だからナンパじゃねーっての!!」

　俺は戦いが終わった後もギャラリーに次々とアドバイスをされ、ブルーに引きずられる形でようやく囲みを脱した。

『──ツインテールの結び方講座……やってくれないのぉ？　楽しみにしてたのに』

　聞き覚えのありすぎる人を食ったような声に、俺とブルー、ブラックは一斉に振り返る。

　突とつ如じよとして出現した転送ゲートの中から姿を現したのは──

「はぁい、ツインテイルズのみんな。残業よろしく♪」

　覚かく醒せいしたての堕だ天てん使し。エンジェルギルディだった。

　どういうことだ……直接戦闘を避けて暗躍に徹し、俺たちの前にさえ常に作戦の最終局面でしか姿を見せないほどリスクを嫌ってきたこいつが、こんなに堂々と人前に現れるなんて。

「おい見ろよ、女の子のエレメリアンだ！」

「すげー、ごっつい男だけじゃなかったのか！」

　ギャラリーたちは、エンジェルギルディを見て沸きに沸いている。当然だろう。

　この世界の人間にとって、ほぼ初めて目まの当たりにする女性エレメリアンなのだ。

　ブルーとブラックも、そんな一般人を気にして動きが取れずにいる。

　こんな時、真っ先に指示を出してくれるトゥアールの通信が、全く聞こえない。

　やはり、エンジェルギルディに対しては相当な苦手意識があるのだろう。

　後手に回る俺たちを見て、エンジェルギルディは挑発的な笑みを浮かべた。

「──テイルレッドちゃんがやってくれないなら……私が配信しようかしら？」

　髪の毛のパーツを手で掬すくい、金属のような留とめ具で結び始めるエンジェルギルディ。

　俺は思わず目を見開く。

　エンジェルギルディは、あっという間に──ツインテールになってしまった。

「どう？　ツインテールの専門家さんから見て……私のツインテールは」

　口には出さないが……完かん璧ぺきだ。たとえ敵に対しても、ツインテールへの評価で自分の心は偽いつわれない。

　ツインテール属性を持つエレメリアンだけあって、それが生まれ持った器官であるかのような自然さで左右の髪が結ばれている。

　属性力エレメーラで形成した光のツインテールではなく、自分の身体からだの一部である髪の毛をツインテールに結んだ、初めてのエレメリアン。

それがよりによって、このエンジェルギルディだなんて──。

「うふふ。そんなに熱い眼まな差ざしで見つめられたら、答えは聞くまでもないわね」

俺が凝視しているのに気づいて満足したのか、エンジェルギルディは戦闘員アルテイロイドたちに合図し、動画配信を停止させた。

「誰のために可愛くなりたいのか知らないけど……君も頑張ってね、テイルレッドちゃん」

先ほど俺がピッグギルディにした質問を聞いていたのだろう。明らかにその対象が誰だれであるかを悟った上で、俺を焚たき付けてくる。

エンジェルギルディは再び転送ゲートを出現させ、その中へと消えていった。

姿を消す直前、一瞬だけ空を見上げたように見えたのは……気のせいだろうか。

ブルーは逃のがしたくなかっただろうが、群衆の只ただ中なかで幹部エレメリアンと一戦やらかすわけにはいかない。忸じく怩じたる思いを滲にじませた渋面で、エンジェルギルディの退却を見送った。

あいつ、自分のツインテールを世界に披露するなんて……今度は何を企たくらんでやがる……!!

◇

アルティメギル基地は現在、怨えん嗟さの波動蠢うごめく地獄と化していた。

「ああああああああああああ羨うらやましあああああああああああ!!」

「俺が行けばよかったあああああああああああああああああ!!」

「いいいいい今から出撃したらまたテイルレッドが逆ナンしてくれるかな!?　かな!?」

　大の怪人おとなが哭なき、喚わめき、床を転がり回る。

　一般兵とはいえ数百のエレメリアンが一斉に暴れるものだから、積み重なる衝撃も半端ではない。アルティメギル基地は激震し、崩壊の危機を迎えていた。

「いかん、基地が壊れてしまう！　この基地が壊される時は、テイルブルーが乗り込んで来た時だと思っておったが……よもや我われら自身の手で滅びゆくとは!!」

　若者同士の小競り合いならこれまで幾度となくなだめてきたスパロウギルディも、ここまでの暴動を鎮圧した経験はない。

　この事態を諫いさめるべき暫ざん定てい部隊長であるスワンギルディは、どこかへ出かけてしまった。

　スパロウギルディはただただ頭を抱かかえるばかりだった。

「むしろテイルレッドが逆ナンしてきたことを、我らは悔いるべきではないのか!?」

「うむ……俺たちが奥ゆかしいあまり、テイルレッドに逆ナンさせてしまったということだからな！　ナンパ待ちの幼女に恥をかかせてしまうとは、男の名折れよ!!」

「俺にもっと勇気があれば……ぬおおおおおおお!!」

　漢たちの嘆きが頂点を迎えようとした、その時。

　巨大な衝撃がホールに響きわたり、戦士たちの地じ団だん駄だによる激震をかき消した。

　まるで空間そのものを壁ドンしたかのような大波が、小波の群れを呑のみ込んだのだ。

　ホールの入り口には、今やお馴な染じみ白ローブをまとった戦士が立っていた。

「いや～せっかく来たそばから基地が壊れたら凹へこむっしょ。よくわかんないけど、とりあえず落ち着きな、みんな？」

　フードを下ろし露あらわになっている頭部は、神代の彫刻品が如ごとく整った造ぞう詣けいをしている。

　エンジェルギルディに壁ドンをした戦士、ポセイドンギルディだ。

　新たな神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士の到来で、戦士たちに緊張が走る。

「お、お見苦しいところを……。先ほどの衝撃は、貴方あなたが？」

　スパロウギルディが恐縮するも、ポセイドンギルディは気さくに話しかけてきた。

「見た？　俺は本来の壁ドンも甘い壁ドンも両方使いこなしちゃうんだ……イケメンだからしょーがないね」

　壁ドンとは本来怒りの発露による鉄拳であったはずが、今や女性のときめく口説きのシチュエーションとしての地位も確立してしまっている。

　そしてこの戦士は、その破壊と愛、両方の壁ドンを極めたと自負しているのだ。

　少なくとも前者は空言ではあるまい。

「それより面白い話してたね～。逆ナン？　俺も交ぜて欲しいんだけど～？」

　そこで戦士たちはようやく、ポセイドンギルディに感じていた妙な感覚の正体に合が点てんがいった。

「ぬううう……声だけで思わず身構えてしまうこのチャラさ……！　さては貴方は、我われらの天敵、リア充……!!」

「えーなに天敵とか傷つくー！　もっと仲良くしよーぜ？」

　ポセイドンギルディは手近な戦士の肩に腕を回し、恐るべき馴な

れ馴れしさを発揮する。

　この強引な距離の詰め方が、リア充と陰キャが決して交わらない所以だ。

「俺は見てのとおり神の一剣ゴー・デイア・ソードだから、畏かしこまるのも仕方ないけどさ。やっぱ部隊の奴やつらとは仲良くしてーじゃん？　そこでアルティメギル一のイケメン……俺！　ポセイドンギルディが、モテ教室を開校してやっからさ、それ通してダチになるってのどーよ？」

　神の一剣ゴー・デイア・ソードだから距離を置いているのではなくチャラいのが苦手だと言っているのに、ポセイドンギルディは全く聞く耳を持たない。

「騙だまされたと思って聞いておけって。俺の指導を受けてモテなかったエレメリアンはいないぜ～？　テイルレッドとかいう子もメロメロだって！」

　それを聞いた途端、どうにかして逃げようと後あと退ずさっていた戦士たちが、プルバック式の車おもちゃのような挙動でポセイドンギルディの周りにダッシュして来た。

「それは真でございますか!?」

「是非！　ご指導ご鞭べん撻たついただきたく！」

　都心の駅前で勧誘を受ければあっさりついて行きそうな、危うい連中だった。

「よーし、みんなあっという間にモテの達人になっからなー！　目指せ、デレデレのテイルレッド、おー!!」

　ポセイドンギルディの号令に合わせ、戦士たちも一斉に手を衝つき上げる。

　たった一人の幼い女の子をナンパしようと、数百体からの怪人たちが意気込む。

　存在するだけで宇宙級の罪な空間が完成してしまった。

◇

　ピッグギルディとの戦いを終えたその日の夜、久しぶりに夢通信が繋つながった。

　俺は夢の世界を通じて、異世界の姉妹姫であるロエルとリルナに逢あうことができるのだ。

「久しぶりだな、ロエル」

「わぁい！　今日はお兄ちゃんと会えた──っ!!」

　俺が声をかけると、姉妹姫の姉・ロエルが笑顔で抱きついてくる。

　そして妹のリルナは、いつもどおり俺たちから少し離れてむすっとしていた。

　サイドポニーの結びの左右だけでなく、表情や仕草まで姉妹で対称的なのも相変わらずだ。

　幼女について探究している折、こうして二人と夢通信が繋がったのは幸運だ。

　俺は今トゥアールに起こっていることを姉妹に伝え、可愛い女の子としての在あり方を勉強させてもらえないか相談してみた。

「……はあ、なるほど。キミの世界は、次から次にとんでもない奴やつが現れるもんだな……」

　テイルギアを取り込んだエレメリアンの話をすると、リルナは呆あきれてしまった。

「お兄ちゃんとの通信がどんどん不安定になってきているのって、そのせいなのかな」

「強いエレメリアンが次々と俺たちの世界に来ているから──ってことか？」

　ロエルは肯定も否定もせず、俺に身体からだを寄せてきた。

「今までとは、何かが違うの。何かが起こってる気がするの……お兄ちゃんとロエルたちの世界だけじゃなくて、全ての世界に……」

　そういえば……ソーラも「全ての異世界に何かが起こっている」と言っていたな。そしてその原因は、アルティメギル首領が本気を出したことにあると。

　首領ってのは、そんなにも巨大な影響力を持っている奴なのか……。

　数え切れないほど多くの世界全ての存在を、不安定にしてしまうほど。

「それはともかく、可愛い女の子としてのコツとか、教えてくれないかな」

　二人が不安げな表情になってきたので、俺は明るい話題へと切り替えた。

　ロエルとリルナは、自世界の民たちに愛される戦士として戦っていた。トゥアールもこの姉妹にはめろめろだったし、彼女たちから学ぶことは多いだろう。

「えへへ～、トゥアールお姉ちゃんのためなら仕方ないね！　ロエル、女の子の身体いーっぱい見せてあげるから、好きなだけお勉強してね、お兄ちゃん！」

　言うが早いか、ロエルはドレスを脱ぎ始めてしまった。

　見た目を知りたいわけじゃないんだけど、こういう発想は子供ならではなのかな。

「あぁ～駄目だよぅ姉様、こんな奴の前ですっぽんぽんになったりしたら駄目だよぅ」

　棒立ち棒読みの極限までコストカットされた説得を試みるリルナ。

　ロエルの無邪気な善意はありがたいが、全裸になる前に止めておいた。

「……まあ、ボクも姉様と同じ気持ちだ。キミもトゥアールも、ボ

クたちの恩人だからな……困った時は協力してやるよ。何なら、世界を超えてでも助けに行ってやるさ」

「ありがとうリルナ、トゥアールもすごく喜ぶと思うよ」

　俺はリルナの髪を撫なで、礼を言った。

　実現するにはあまりにも困難なことだが……その心遣いがありがたい。

「ずっるーい、リルナちゃんいっつも抜け駆けー！　お兄ちゃん、ロエルとお勉強しよ!!」

「抜け駆けじゃないよう！　ボクは姉様の負担を軽くしようと思って……！」

　ロエルとリルナは俺の左右の腕にそれぞれ抱きつき、あれやこれやとアドバイスをくれる。

　姉妹の明るさに、自然と俺も笑顔になっていった。

　世界を超えた先にも、自分をこんなに思ってくれる人たちがいる。

　トゥアールが知れば、きっと元気になってくれるだろうな。

◇

　夜──総そう二じが夢通信で姉妹姫と語らっているのと、ちょうど同じ頃ころ。

　静まり返った地下基地のコンソールルームで、トゥアールは天井をぼんやり見つめていた。

　何度も分析と身体検査を繰り返し、導き出されたトゥアールの病状深度は──レベルＤ。

　それは属性力エレメーラ技術を用いた先進医学で、治癒不可能を表す数値。

余命一〇日以内を示し唆さする、絶望的な診断結果だった。

全ては、自分の落ち度だ。ここまで症状が進行する前に、対策をする時間は十分にあった。

テイルレッドがツインテール属性を奪われた時。生命いのちを落とすほどの苦痛に総二が耐えている姿を目まの当たりにした時……我わが身に置き換えて考えるべきだったのだ。

完成されたツインテールの戦士が属性力エレメーラを失うのが、どれだけ危険なことであるのかを。

何な故ぜエレメリアンたちは、支配した世界でツインテールの戦士からだけは属性力エレメーラを奪わずに去って行くのか。それは、ツインテールの戦士に絶望を味わわせるためではない。

人間の生命をいたずらに奪うことをよしとしない精神生命体の怪人たちにとって、それが死に直結しかねない行為だからこそ、見み逃のがさざるを得なかったのだ。

あの時……せめてあの時。総二がティラノギルディを倒した数か月前のあの頃に、もしかしたら自分も、とほんの少しでも考えていれば。

今となっては悔やんでも悔やみきれない、痛恨の誤算だった。

だがトゥアールは……この状況を穏やかに受け容いれていた。

自分が思いを託したツインテイルズは、首領直属軍をも全滅寸前にまで追い込んでいる。アルティメギルという途方も無く巨大な侵略組織に対して、壊滅的なまでの打撃を与えた。

世界をわたる復ふく讐しゆう者としての本懐は、十分に達成されたはずだ。

恐怖は感じているが、せめて胸を張って生涯を完かん遂すいしよう……そう心に決めていたのだ。

──今日、エンジェルギルディと相対する総そう二じを見るまでは。

　定期メンテナンスのために総二たちから預かった赤、青、黄のテイルブレスが、コンソールルームの中心で輝いている。

　トゥアールはテーブルの上に置かれたその三つの色彩を一いち瞥べつし、壁に向かって歩いていく。

　手を触れた瞬間、壁の一部が鏡面のように変化して即席の姿見となった。

　トゥアールはその姿見の前に立つと、躊躇ためらいを吐き出すような深い呼吸を繰り返す。

「……っ……」

　やがてその震ふるえる手で、後ろ髪を掬すくい上げる。

　しかしそこから先──まるで金縛りにでもあったかのように、腕を動かせずにいた。

　ついに諦あきらめて腕を下ろし、力無く項うな垂だれるトゥアール。

「…………結べない……」

　虚脱に掠かすれた声で、鏡に映る自分へと呟つぶやく。わかりきっていた結果だ。

「あんな……あんな悪党がツインテールにできるのに、どうして私は……!!」

　エンジェルギルディのツインテールに目を奪われたレッドを見て、たまらなく悲しい気持ちになった。

　邪悪な怪人であろうと、ツインテールでさえあれば、彼の心を動かすことができる。

　では──自分は？

　ツインテールじゃなくてもいい、自分にはこのスタイル抜群の身

体からだがあるのだから。

　何度も繰り返してきたそんな強がりは、無意味なものとわかっていたはずなのに。

　言葉でどれだけ友愛を示されようと……全異世界で最強のツインテール属性を持つ少年にとって、ツインテールでない女などいかほどの価値があるだろう。

　このまま消えてしまったら、愛する人の記憶に残ることさえできないのではないか──。

　再び椅い子すに座ると、テーブルの上の光がトゥアールの虚うつろな瞳ひとみを照らした。

　赤いテイルブレス。総二のテイルブレス。

　自分のツインテール──。

　トゥアールは赤いテイルブレスを掴つかむと、自分の右手首に押し当てる。

　もし自分の身体に戻ってしまったら、ブレスが失われてしまったら、この先世界はどうなるのか……簡単にできる想像から目を逸そらし、戻れ、戻れと何度も押しつけた。

　最後には……半ば叩たたきつけるように、手首へと振り下ろした。

　それでも自分を拒こばむブレスをテーブルの上に放り転がし、トゥアールは肩を震わせる。

「どうして、私だけ……いつもいつも、悲しい思いばかり!!」

　自分で選んだ運命だった。

　エレメリアンに一いつ矢し報むくいることができるのなら、ツインテールでなくなってもいいと。

　この先全ての幸せを犠牲にしても構わないと、その時は本気で思ったのだ。

「だって、知らなかった……。こんなに好きな人ができるなんて、知らなかった……」

　恋を知らず、戦いに青春を捧げた少女。

　やがて恋を知り、恋に救われた少女は今、その恋ゆえに苦しむ。

「こんなにツインテールを見せたい人ができるなんて、知らなかった!!」

　自分の生命いのちの灯ともし火びがあと僅わずかで消えると知った時……「生きたい」という生物の根源の願望をも凌りよう駕がして、たった一つの未練が、少女の胸を締め付けていた。

「吹っ切った、はずなのに……。もう二度と後悔しないって、誓ったのに……!!」

　誰だれもができるささやかな願いでありながら……少女にとっては、宇宙に匹敵するほどの大それた願い。

　ツインテールと決別したあの日以来、一度として口にしなかった願いを。

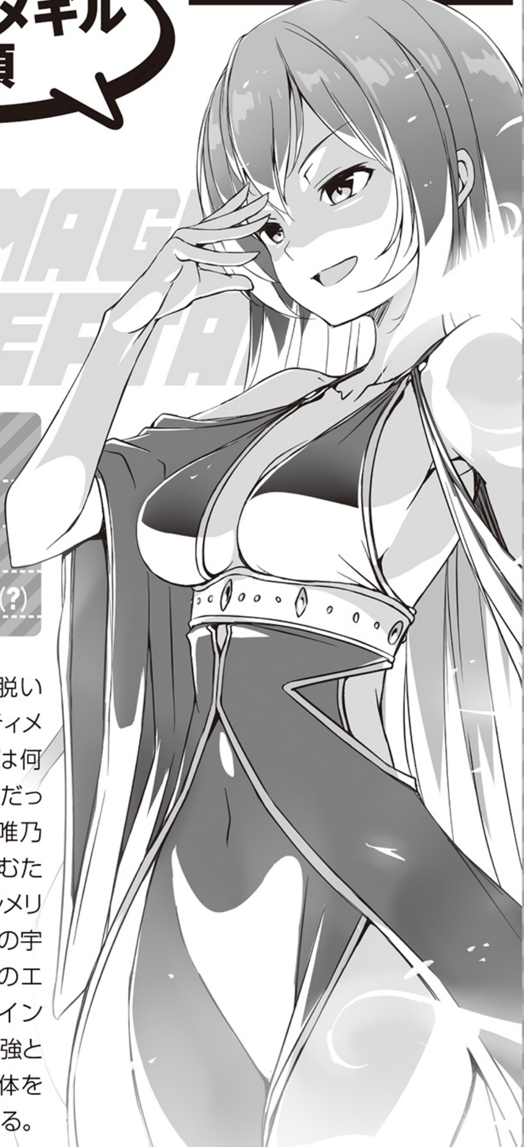
　少女は──トゥアールは、ついに口にしてしまった。

　決してしないと誓った、後悔とともに。

「────ツインテールに、なりたい……」

キャラクター名鑑 042

アルティメギル首領



DATA

身長:146㎝

体重:40㎏～可変

属性力:ツインテール属性(?)

ついに神秘のヴェールを脱いだ、異世界侵略組織アルティメギルの統率者。その素顔は何と、女神ソーラと全く同じだった。なお、この人間の姿は唯乃の逆で自分の力を抑え込むためのものらしく、さらにエレメリアン体となった際には一個の宇宙そのものを上回る超絶のエネルギーを解放する。ツインテールを捨て去ることで最強となったと口にするなど、正体を現してなお謎多き存在である。

第三章　Ｔｏ　Ｒｅｖｅｎｇｅ．

　エンジェルギルディの動画配信のインパクトは、絶大だった。

　翌日には総そう二じたちの学校でも、その話題で持ちきりになるほどだ。

「ビックリしたぜ、女の子のエレメリアンもいるんだな～！　しかもスタイルいいし」

「なんか怪人って思えねーよな……好きな声優さんそっくりのいい声してたぞ」

　放課後の教室で、エンジェルギルディのことを嬉き々きとして語りあう男子たち。

　トゥアールは複雑な表情を浮かべる。

　そのスタイル抜群の女エレメリアンこそが、かつてない危険な怪人だというのに……。

「それによう、エレメリアンもツインテールにするんだな～！　結構似合ってたしさ！」

「□□□□□□！」

　男子の何気ない言葉に反応し、勢いよく席を立ち上がるトゥアール。

　またもツインテール部には向かわずに、速すみやかに一人で帰ろうとしたが──

「トゥアール、ちょっと来て」

　今日は、愛あい香かに先手を打たれた。

「話って何ですか、愛香さん。どうせなら総二様も一緒がよかったんですけど」

愛香に誘われ屋上にやって来たトゥアールは、他に生徒の姿がないのを確認して尋ねた。

「あたしじゃなくて……あんたが色々溜まってそうだから……さ。そーじに言いづらいことも、あたしには愚ぐ痴ちる。その代わりあたしもあんたに同じことをする。そういう約束でしょ」

「…………。今は、愚痴なんてありませんよ。皆さんにはよくしていただいています」

淡泊にそう言うと、トゥアールはフェンスに背を預けて愛香から視線を逸そらした。

二月の寒空に震ふるえることもなく、じっと立ち尽くす二人。

「……あのさ。あんたが具合悪くなったの……あたしがブッ飛ばしまくったこと──」

「──が、関係あるわけないじゃないですか！　物理的ダメージの累積なんかが原因なら、ここまで苦労せずに治療できますよ!!」

悪態をつくトゥアールだが……それを聞いてほっとする愛香を見て、胸を痛めた。

日々のじゃれ合いにさえ責任を感じるほど、愛香も思い詰めているのだ。

青空を仰いで目を細めながら、トゥアールは吐と露ろした。

「自分で体験して初めてわかりますね。生命いのちの危機に直面した時……それを乗り越えることが、本当はどれほど困難なものか。奇跡を起こし続けた総二様が、どれほどすごい人なのか……」

かなり長い時間、答えに窮していたが……それでも愛あい香かは、意を決して口を開いた。

「早くよくなってよ、トゥアール。そーじだけじゃなく、あたしたちもついてるんだから」

その声こわ音ねがあまりにも優しいので、トゥアールは思わず目をしばたたかせた。

愛香は照れ隠しのように、腕組みをしてそっぽを向く。

「あんたがそんなだと、張り合いないじゃん。わかってる？　来週は、バレンタインよ？」

「――来、週……」

バレンタインデーまでの日数カウントダウンを自覚し、声を震ふるわせるトゥアール。

「去年まではほとんどあたし一人だったけど……今年はそーじにチョコあげる人、たくさんいるもんね。またすごい騒ぎになりそう。あたしも気合い入れなきゃ!!」

恋こい敵がたきが増えた不安よりも、女の子の一大イベントを友達と共有できる喜びの方が大きいのだろう。愛香はトゥアールの様子にも気づかず、溌はつ剌らつと決意を表明した。

「そういえば私……男の子にチョコあげるの、初めてです……」

そう言って柔らかに微ほほ笑えむトゥアールを見て、愛香も安あん堵どの表情を浮かべた……が。

直後、トゥアールは沈痛な貌かおつきで愛香を見み据すえた。

「愛香さん。私の身体からだばかり案じていますが……心配なのは、あなたたちも同じですよ」

「突然何よ……あたしたちも……？」

「エンジェルギルディは今や、神の一剣ゴー・デイア・ソードの隊長です。そして昨日の不可解な行動……この先、どれほど恐ろしい作戦を仕掛けてくるか。正直、想像もつきません」

交渉人グリフォギルディは、ツインテイルズがいるせいでエレメリアンが攻めてくると嘯うそぶき、民衆の憎悪を煽あおろうとした。それはあっさりと失敗に終わったが、復活戦士を操るヴァルキリアギルディといい、神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士はツインテイルズの心を砕こうとしてくる。

その長たるエンジェルギルディは、いったいどんな悪意を向けてくるのか……。

「もし、世界の全てが敵になったとしたら……あなたは戦えますか？」

　トゥアールの脅しつけるような問いに、しかし、愛香は迷いなく答えた。

「当たり前でしょ……あたしは最後の最後まで戦うわ。そーじを守るために」

　トゥアールはそれを聞き、厳おごそかに頷うなずいた。

　自らのツインテールに、永遠の想いを誓った愛香。

　この先に待つのが果てなき地獄だとしても……彼女は愛のために戦い続けるのだろう。

　総そう二じはもちろん強い、が──彼の仲間たちも、みんな強い。

　たとえ自分が消えても、彼らが世界を守り続けてくれるだろう。

　自分の復ふく讐しゆうを、成し遂げてくれるだろう──。

　トゥアールの瞳ひとみには、諦てい観かんにも似た悲壮な灯ともし火びが瞬またたいていた。

◇

　放課後、気づいたら教室に愛あい香かとトゥアールの姿はなかった。何をしようか考えていたところを慧え理り那なに誘われ、俺は転送ゲートを使って東京都心にある電気街にやって来ていた。

「桜さくら川がわ先生は一緒じゃなくてよかったのか？」

「観み束つか君が一緒ならば、と。お留守番なことに少し拗すねていましたけれど」

　いたずらっぽく笑う慧理那。善いい沙すな闇あん子このライブグッズを買いに行ったあたりから、俺と二人だけで出かけようと誘われることが増えた気がする。

「そうそう。昨日、基地でトゥアールさんの様子を窺うかがっておりましたが……ひとまずお元気でしたわ。ですが……エンジェルギルディを見た途端、かなり動揺されていたようでした」

　やはりか。トゥアールにとって、エンジェルギルディは死の宣告をしてきた死神に等しい。

　目にしただけで怯おびえるようになっていても、無理はないな……。

「ですので、本格的にエンジェルギルディの対策をするためにも、彼女が好きな〝びーえる〟のことを知っておく必要があると思ったのです」

「なるほど。だから今日は、アニメショップが多いこの街に来たんだな」

　手て強ごわいエレメリアンを前にすると、慧理那はその属性を勉強して戦いに活いかそうとする。

　ましてエンジェルギルディは、今や幹部戦士では一番長く俺たちと関わっている相手だ。あいつの属性を理解しておくことは、戦いの役に立つかもしれない。

　それにこの街なら、トゥアールの喜ぶシチュエーションも色々調べられそうだしな。

　さて、大通りは人が多いな。慧理那とはぐれないように気をつけないと。

「でも大丈夫か慧理那。生徒会の仕事だって山ほどあるだろ？」

「トゥアールさんのためですもの」

　来月に迫った卒業式の準備はもちろん、卒業生への送辞などを任される慧理那は、多忙を極めている。そんな中でも友達のことを考えて一生懸命な彼女が、とても誇らしい。

「五月になれば、生徒会選挙がありますわね。わたくし、観束君に次期生徒会長になって欲しいですわ。お母様も是非に、と仰おつしやっていますし」

　生徒会の話をしながら歩いていると、慧理那はそんなことを言い出した。

　慧理那は特例で二年間生徒会長を務めたが、それでももうすぐ交代の時期なんだ。

「慧理那や理事長の推薦だけで当選したら、生徒会の人たちに悪いよ……。何より、俺には慧理那みたいにみんなから頼られるリーダーシップがない。会長なんて絶対無理だと思うぞ」

「観束君にリーダーシップがあるのは、わたくしが誰だれよりも知っていますわ」

　一〇〇〇人からの学生をまとめる生徒会長に認められるのは光栄だけど、俺がリーダーシップとやらを発揮できるのは、ツインテールが関係する時だけさ。

「しかし、生徒会選挙か……。もうそんな時期なんだな。慧理那が生徒会を引退したら、愛香も観念して『慧理那』って呼ぶようになるかな？」

「まあ、そういえばそうですわね！　楽しみですわ……あっ！」

　横に並ぶ俺の方を向いて歩いていたせいか、慧え理り那なが歩道の段差に躓つまずいた。

　俺は咄とっ嗟さに慧理那の手を掴つかんで引き寄せる。

　ほっとしたのか、はにかんで礼を言う慧理那。

「ふふ。やっぱり観み束つか君は頼りになりますわ」

　俺が手を離そうとすると、遠えん慮りよがちに指を絡めてきた。

「……すみません。できれば、このまま手を繋つないでいていただけますか？」

　この街は人が多いからな。コミケを回った時と同じで、不安なんだろう。

「ああ、しっかり繋いでいてくれ。今は俺が慧理那の警護役だからな」

　……おや、慧理那が可か愛わいらしく俺を睨にらんでいる。警護役として頼りないんだろうか……？

「ひゅーひゅーお二人さん、道の真ん中でじっとされたら通れないよ～ん」

　背後からの聞き覚えのある声に、俺と慧理那は同時に振り返る。

　そこにいたのは、ウェイビーなツインテールを揺らしながら手を振る、モコモコのダウンコートの女性。陽よう月げつ学園高等部前生徒会長で慧理那の先輩の、牧もく須す豊と美み得えさんだった。

「まあ、牧須先輩！」

「にゅふふ～彼氏クンとは最近どう～？　って、聞くまでもないねぃ～ん」

　彼女は再生エレメリアンたちとの戦いの最中に慧理那がテイルイエローであることを知った、数少ない一般人だ。

　コミケ会場やアニメショップなど、エンタメに馴な染じみのある場所でよく鉢合わせをする。

「けっこう遠くなのに、この街にはよく来てるんですね」

「もっちろんさ彼氏クン！　好きなもののためなら、距離なんて問題にならないもんね～！」

　なるほど、そのとおりだ。俺もツインテールのためなら、太陽系の外にだって行くだろう。

「ほんで神しん堂どうさんは、今日は何の用事？」

「はい。実は、お友達を元気にして差し上げたくて……その方が喜ぶようなものがないか、探しに来たのです」

「ほっほー、相変わらず神堂さんは面倒見がいいね～。でもこの街、かなり魔界だよ？」

　三人で会話をしながら、手近なアニメショップの店内に入る。

　目に入ってくるのは、店内に所狭しと並べられた同人誌と、それ

を物色する人、人、人。

　やはり東京のアニメショップは違うな、エンジェルギルディまで本を買いに来てやがる。

　────って、エンジェルギルディだあああああああああああああ!?

　見間違いじゃない、エレメリアンが薄い本漁あさってる！　エンジェルギルディがいる!!

　昨日のようにツインテイルズとして相対したのではなく生身で、しかもアニメショップで唐突にエレメリアンと遭遇し、俺は気が動転する。

「おっ……！　お前っ──」

「観み束つか君っ！」

　慧え理り那なが慌あわてて手の平で俺の口を塞ふさいできた。

　しかし、背の低い慧理那が背伸びでそうしたせいで、俺たち二人は抱き合うように密着してしまっていた。

「はわっ……す、すみません観束君……」

「いや、俺の方こそ迂う闊かつだった……」

　男の姿で思わずエンジェルギルディに呼びかけてしまいそうになった。

　もつれ合う俺たち二人を見て、牧もく須す先輩がにやにやと笑う。

「お熱いね～。でもアニメショップの中でイチャつくと他のお客さんの目に毒だよ～？」

　確かに、周りの客たちが俺と慧理那をジト目で見ている。

「腐ふ腐ふ腐ふ……」

　しかしそんな中、エンジェルギルディは黙々と買い物を続けていた。

　ごっつい翼を背負っているというのに、棚や商品にぶつかることなく、狭い店内を悠ゆう々ゆうと進んで行く。今日は、ツインテールに結んでいないようだ……。

（あいつ、ここで何か作戦をおっ始ぱじめる気なのか!?）

（わかりませんが、基地ではまだ探知されていないようですわ。トゥアールさんに連絡して、様子を見ましょう）

　慧理那と小声で相談し合う。確かに、こんな人の多い場所では不用意に刺激できないぞ。

「おー！　あの新刊買うんだ、わかってるじゃんあの怪人！　ランキングに載るようなサークルじゃないけど、いつもいい本出すんだよね～！」

　そしてエンジェルギルディが物色した本を見て、牧須先輩が感心していた。薄い本の達人は薄い本の達人を知る、ということか。

「私普段は役者専なんだけどさ、あのサークルで人外もいけるようになっちったんだー」

　スイッチが入ったかのように、突然めっちゃ早口で説明してくる牧須先輩。

「戦隊の１号ロボが強気攻めの３号ロボの押しに負けて関係を結んじゃうんだけど、嫉しつ妬と深い２号ロボが１号を取り返そうとして乱れた交じり合いになっちゃって！　それが最終的に全部載せ合体に繋つながる構成が実に秀逸なの！　あと、武器パーツロボのショタっ子が小悪魔系でいい味出しててさー!!」

　やめろおおおおおおおおおおもう戦隊もののロボット戦を普通の目で見れなくなるうううううううううううううううううう!!

「ロボが……関係……？　乱れて、交わって……？？」



　きょとんとする慧理那。純真な特撮ファンがいらない知識を得る前に、牧須先輩にビークワイエットと釘くぎを刺すべきだろうか。

　頭を抱かかえる俺とは裏腹、店内は静かなものだ。エレメリアンに遭遇したら本来はパニックになるはずなのに、客は特に慌あわてる様子もない。

「薄い本を買う時は、互いに不可侵。それがルールだからね～」

　俺の心を読んだかのように疑問に答える牧もく須す先輩。

　人間同士ならそういう暗黙の気遣いが適応されるのは美談だけど、ここにいるのはエレメリアンだぞ!?

　その時、俺の制服の内ポケットでトゥアルフォンが震ふるえた。

『慧え理り那なさんの連絡どおりの状況ですね……総そう二じ様、こちらでもエンジェルギルディを補足しました！　慧理那さんとデートしていることについては……愛あい香かさんと違って私はとやかく言いませんが！　どこまでいったかだけ教えてください!!』

　トゥアールからの通信だ。デートじゃなくて買い物なんだけどな……。どこまで行ったかって、そっちで場所は特定しただろうし。

　それよりトゥアールは、無理して元気を出しているように聞こえたが……心配だ。

　エンジェルギルディは物色を終え、レジへと向かっていた。

　買い物かごには持ち手がたわむほど、ぎっしり同人誌が詰め込まれている。

「二番目にお待ちのお客様ーこちらのレジへどうぞー」

　奥のレジに立つ店員さんが、笑顔で案内する。

　お待ちのお客様って、エレメリアンだぞ!?

「はい、ポイントカード。溜めたままで結構よ」

　馬ば鹿かな……ポイントカードまで持っている。

　しかも、店員が「ポイントカードお持ちですか？」と聞く前に出すあたり、かなり通い慣れてやがるな……!!

『ズーム映像で確認しました！　エンジェルギルディのポイントカードには、すでに八〇万一〇〇〇ポイント蓄積されています！　確かそのアニメショップは、一〇〇〇円で五〇ポイント溜まる仕組みですから……』

　俺は指を折って計算し、ぎょっとしてエンジェルギルディを見返した。

「一千万円以上使ってるってのか!?　薄い本に!?」

　っていうか、そこまで溜まる前にポイント使おうと思わないのか!?

　本当にただ買い物しただけで満足したのか、俺たちに背を向けて立ち去っていくエンジェルギルディ。

　すぐに転送ゲートを出さないのは、他の店でも買い物があるからなのか。とにかく、店から出ていった今がチャンスだ。

「……観み束つか君」

　慧え理り那なが目配せをしてくる。

　なるほど……人ひと気けのない場所に誘導して戦闘、か。慧理那のツインテールを見れば、彼女の提案が言葉なくともわかる。

　俺も慧理那のツインテールへ、無言の応おう諾だくを送信した。

　あとは、牧もく須す先輩をどう誤ご魔ま化かすかだが──

「神しん堂どうさん……トイレ行きたいんじゃない？　トイレはお店の外に出ないとないよ～？」

　どうやらそれは杞き憂ゆうのようだった。

　バチン、と音が聞こえてきそうな程に大おお袈げ裟さなウインクを、何度も寄よ越こしてくる牧須先輩。

『なるほど……彼女は「ヒーローの正体を知っているけど知らない

ふりをしてあげる」自分に酔っているわけね！　気持ちはめっちゃわかるわ～!!』

　なんか母さんまで基地でこっちの中継映像を見ているらしく、牧須先輩にシンパシーを感じていた。

「ねえ、そういえば彼氏クンって神堂さんのやってること知っ──」

　牧須先輩に何を質問されるか予想がついたので、俺は大袈裟に声を上げた。

「あ、俺用事思い出した。ごめん慧理那、先に帰るな！　牧須先輩も、また今度!!」

　店の出口に向かってダッシュしざま、牧須先輩たちの方を窺うかがう。俺の行動に疑問は持っていないようだ。遅れて店の外へと向かう慧理那に、牧須先輩はぶんぶんと手を振って見送った。

「トイレ頑張ってねー！　神堂さーん!!」

「ありがとうございます！　でも大声でそんなこと仰おつしやらないでくださいまし!!」

　慧え理り那なが半泣きでお礼と批難を同時にする。

　……あの人が前の生徒会長だったんだよな。

　俺には会長職は〝絶対〟無理だってのは、謙けん遜そんしすぎだったか……？

『そこを曲がった路地裏でしたら現在、人の気配は一切ありません！』

　トゥアールに衛星で周囲を警戒してもらい、俺と慧理那は路地裏に駆け込む。

　身を屈かがめて見つめ合い、秘密の話をするような小声で唱となえた。

「「テイルオン」」

　電気街の路地裏に、赤と黄の光が立ち昇る。

　テイルギアを装着し、テイルレッドとテイルイエローに変身した俺たちはすかさず路地裏から飛び出す。

「そこまでですわ、エンジェルギルディ!!」

　大胆にも往来を歩くエンジェルギルディの背中に、イエローが制止を呼びかける。

　しかし電気街の只ただ中なかにいきなり俺たちが現れたせいで、道ゆく人々は慌あわてふためき始めた。

「うわあテイルレッドちゃんがこんな魔界に!!」

「違うんだレッドたん！　確かに俺は今エロゲーの入った袋を持っているが、六法全書と間違って買ってしまっただけなんだ！　っていうか君はエロゲーの存在を知ったら駄目だ!!」

　ごめん。ここにいない俺の仲間が、多分この街のどの店よりも品揃ぞろえ豊富にエロゲー持ってるから、存在知ってるどころじゃないんだ……。

「でもよう、テイルイエローの存在に比べれば俺たちが買った本なんて大したことないんじゃないか？　俺たちは許されたのか……!?」

　不名誉な称号を与えられたイエローだが、ギャラリーの言葉は耳に入っていないようだ。

　ゆっくりと振り向いたエンジェルギルディは、イエローと早くも視殺戦を繰り広げる。

「あら、奇遇ね。けれど、お買い物してただけのか弱い腐ふ女じょ子しに暴力を振るうの？」

　ふてぶてしい奴やつめ。

　先日のアポロギルディといい、こいつといい……属性力エレメーラを奪うつもりでもなく、当たり前の顔をして街を闊かつ歩ぽしていやがる。

　俺たちが知らなかっただけで、あんなにポイントが溜まるまで何度も人間界に来ていたと思うと、冷や汗が出る。

「オキニの街で戦いたくないわ。これじゃあ私が街を人質に取られたみたいなものねー」

「ふざけるな！　何が狙ねらいだ、エンジェルギルディ!!」

　俺が問い詰めても笑って躱かわし、エンジェルギルディは踵きびすを返す。滑らかなホバー走行で、その場をあっという間に立ち去ってしまう。

「追うぞ、イエロー！」

「はい!!」

　俺とイエローはエンジェルギルディを追いかけて走り、閑寂な臨海地帯まで辿たどり着いた。

　逃走ではなく、場所を変えただけか。アニメショップの多いこの街がお気に入りだというのは、本心だったようだ。

　俺たちで誘導する手間は省けたが……こいつの行動が全く読めない。

「さっきの質問だけど、別に大それた目的とか狙ねらいはないわよ？　私ががむしゃらにあれこれ作戦やってたのは、寿命が迫っていたからだけど……トゥアールちゃんやあなたたちのおかげで、それは克服できた。私はもう、急いで何かをやる理由がないの」

　それで悠ゆう々ゆうと趣味に時間を費やしてるってのか。俺たちをおちょくりやがって……！

「お前、その本……」

　後生大事に手に提げているアニメショップの紙袋を、俺が指差した途端。

「おほほ、レッドちゃんには男子愛属性ボーイズラブはまだ早いわよ～」

　エンジェルギルディは空間を湾曲させて小型のゲートを出現させると、その中に購入した同人誌を収納した。

　大事そうに戦利品を仕舞うのを見て、俺はやるせない気持ちにな

る。

　仲間をただの実験台程度にしか思っていない、非情な科学者。

　俺たちはマーメイドギルディにずっとそんなイメージを持っていた。異端で特殊な存在だと認識してきた。

　だけど……ＢＬ本を物色して目を輝かせてるあいつには、何の打算も嘘うそもなかった。

「ああ、俺には男子愛属性ボーイズラブはよくわからない……でも！　お前も胸を張って誇るにはちょっと憚はばかられる、自分だけの『大好き』を持ってる！　他のエレメリアンと同じじゃないか!!」

　それなのに……どうしてこいつは、歪ゆがんだ欲望と純粋な愛を併あわせ持っていられるんだ!?

　どうして、トゥアールを追いつめるような真ま似ねをするんだ!!

　しばしの沈黙の後。エンジェルギルディは、くっくっと肩を揺らした。

「本当に純粋なのね、レッドちゃん。可か愛わいい♡」

　エンジェルギルディの双そう眸ぼうに射い竦すくめられ、俺の背せ筋すじを怖おぞ気けが走る。

「自分だけの大好き？　そんな清い理由じゃないわ。研究のためとはいえツインテール属性を一度捨て去った私は、他の何かに縋すがらなければ生きることさえできなかった」

　生きるために縋った属性だと。そんな……それじゃあ、こいつも……！

「男子愛属性ボーイズラブはあくまで後天的に……乱暴に言えば、無理矢理に得た属性力エレメーラよ。命の恩人だから愛着はあるけれど……私にとってはただの救命具に過ぎない。それは、愛じゃないわ」

　俺の脳裏を、寂しげに微ほほ笑えむ少女がよぎる。

「──トゥアールちゃんも、私と同じよ」

　エンジェルギルディはひどく乾いた口調で、その名前を呼んだ。

「私の方が、あなたたちよりもずーっとトゥアールちゃんを理解してあげられる。やっぱりあの娘こは、私の隣にいるべきだわ」

　衛星を介して基地で映像を見ているだろうトゥアールへ呼びかけるように、空を見上げるエンジェルギルディ。昨日もああして空を見ていた理由が、ようやくわかったぞ……！

『……!!』

　トゥアールが怯おびえるように息を呑のんだのが、通信越しにわかる。

　それと同時に、エンジェルギルディの全身から禍まがゞまがしい黒い波動が立ち昇り始めた。

「まあ、いいわ。ぼちぼちこのカラダの性能を確かめたいと思っていたところだったの。またデータ収集にご協力願えるかしら、ツインテイルズのお二人さん？」

　俺たちへと一歩踏み出そうとしたエンジェルギルディの眼前を、銀色の閃せん光こうが突き抜けていく。

「二人だけではないのじゃ!!」

　戦闘機形態メガネウインガーのメガ・ネだ。ブラックが搭乗している。

　髪紐属性リボンの翼で飛ひ翔しようしてきたブルーが、その後に続く。

「レッド、イエロー！　お待たせ!!」

　何となく、ブルーが俺を問い詰めるような目なのが気になるが……買い物に行くのに声をかけなかったのを怒っているんだろうか。

「まだ戦いは始まっていないようじゃな……丁ちょう度どいい！　今度は絶対に逃がさぬぞ!!」

　ブラックが飛び降りると、メガ・ネも人型に変形して着地する。

　五人のツインテイルズに囲まれながら、エンジェルギルディは余裕を崩さない。

「逃がさないのは、私の方よ。テイルギアの技術を体内に取り込んだ私は、あなたたちツインテイルズの力の全てを知り尽くしているわ」

　エンジェルギルディは、挑発するように右手首を俺たちに見せつけてきた。そこに装着されている、トゥアールから奪ったテイルブレスオルターを。

　直後。エンジェルギルディの周囲を、電子回路のオーラが円筒形に渦うず巻く。

　やがてそれは、上向けた右手の平の上に球体状に凝縮されていった。

　攻撃に備えて身構える俺たちの前で、エンジェルギルディは突とつ如じよとして姿をかき消した。

　瞬間移動したのか……!?

　しかし、今や奴やつもツインテール属性を持つエレメリアンだ。

　空間を超越する瞬動であろうと、それがツインテールならば俺は本能で捉える。

「ブラック！　後ろだ!!」

　俺はエンジェルギルディの出現点を察知し、ブラックへと伝える。

　出現と同時に練り上げた光球を撃ち放つエンジェルギルディ。

　ブラックはダークネスグレイブの刃やいばを盾たて代わりに光球を防ぐが──それは、防御すらしてはいけない攻撃だったのだ。

「わあああああああああああああああああああっ!!」

　着弾した光球が爆はぜ、元の電子回路のオーラとなってグラスギアに付着。全身が激しくスパークし、ブラックは苦く悶もんの声を上げる。

「あうっ……！」

　変身解除してジャージ姿に戻り、地面を転がるイースナ。

　その拍子に彼女の生命いのちともいえる神眼鏡ゴッドめがねが宙を舞い、力無く落下した。

「ブラックちゃん！」

「しっかりしろ！」

　俺はメガ・ネとともに駆け寄り、イースナを抱き起こす。

「ブラック！」

「大丈夫ですか!?」

　ブルーとイエローもエンジェルギルディを警戒しつつ、イースナの安否を気遣う。

　何な故ぜ、ブラックの変身が急に解けた!?

　テイルギアと、トゥアールが改修したグラスギアは、ダメージによる変身解除への防御策が何重にも敷かれている。

　正体を隠して戦う俺たちにとって最優先の機能として、ツインテイルズの戦いを始めてかなり最初の頃ころに強化されたのだから。

　ティラノギルディ戦の俺のように変身が不完全だったわけでもないし、ましてや防御機能が作用しないレベルの致命的な破壊力の攻撃を受けたわけでもない。

　だとすると──

『そんな……強制的に変身解除させた……!?』

　トゥアールの言うとおり……変身解除させる効果のある攻撃をし

てきたとしか思えない。

「ご覧のとおりよ。今の私は、テイルギアを自由に支配できるの」

　事も無げにそう言い放つエンジェルギルディを前に、俺たちは戦せん慄りつした。

「さぁて、まずは一人。次は、誰だれのギアを剥はいであげようかしら？」

　エンジェルギルディは獲物を品定めするように、俺たちへと視線を馳はせる。

「ギアを侵食、する……ウィルスのような攻撃……！　受けたのが、私じゃなきゃ……危なかった……!!」

　イースナは息を乱しながらも手を伸ばし、飛ばされた神眼鏡ゴツドめがねを拾い上げた。

　確かに、エンジェルギルディに俺の正体を知られたら一巻の終わりだ。

　今の不意打ちで変身解除されたのが、変身前後の姿両方をアルティメギルに知られているイースナ以外だったらと考えると、ぞっとする。

　テイルギアの完全無効化──天使どころか、悪魔の力だ……!!

「これが私の秘技、〝腐滅の総攻めフ・ラガラツハ〟。あなたたちはもう、私の敵じゃないわ」

　神話においてあらゆる鎧よろいを貫くとされた能力……まさにテイルギア殺しの光だ……!!

『皆さん、撤退してください！　テイルギアの強制解除能力……エンジェルギルディはこれまで戦ったどのエレメリアンよりも危険です!!』

「あのおかしな球さえ食らわなきゃいいんでしょ。こいつをここで取り逃がす方が危険よ!!」

　トゥアールは撤退を指示してくるが……俺も、ブルーの意見に賛

成だ。

　俺とブルーは、ブレイドとランスを構えてエンジェルギルディに対たい峙じする。

「よくもブラックを……！　完全解放ブレイクレリーズ!!」

　だが、俺たちに先んじてイエローは天高く跳躍していた。

　空中で合身巨大砲ユナイトウエポンの放つ雷光をまとい、猛然と急墜する。

「ヴォルティックジャッジメント──────────ッ！」

　エンジェルギルディは自分目掛けて一直線に蹴しゆう撃げきを繰り出すイエローを前に薄笑みを崩さず、無造作に右手を突き出した。

　凄すさまじい激突音の後、二人の周囲のアスファルトが捲めくれ上がっていく。

　その中心では、エンジェルギルデイが涼やかな顔で蹴撃を止めていた。

「片手でヴォルティックジャッジメントを受け止めた……!?」

「ふっ……！」

　エンジェルギルディは完全に威力を殺しきっていない状態で強引にイエローの足首を握り掴つかみ、勢いそのままに自らの後方へと投げ飛ばす。まるで、紙屑を放るかのように。

「イエローッ!!」

　思わず叫ぶ俺の元へ、悠ゆう然ぜんと歩を進めるエンジェルギルディ。

「っ……!?」

　だがエンジェルギルディの背中から、轟ごう音おんと共に巨大な爆華が咲いた。

　よろめきながら背後を振り返るエンジェルギルディ。

「はぁ、はぁ……」

　立ち込める土煙の中から、イエローが姿を現した。

　投げ飛ばされた瞬間に上空の合身巨大砲ユナイトウエポンを呼び戻して再装着。地面に叩たたきつけられながらも、完全脱衣形態フルブラストモードの全砲撃をエンジェルギルディの背へと見舞ったのだ。

「へぇ……」

　エンジェルギルディは、土つち埃ぼこりを払う仕草をして余裕を取り戻した。イエローのフルブラストの直撃を受けながらも、ダメージを受けた様子が全くない。

「圧倒的な力の差を見せつけられても、即座に反撃してくるなんて……熱いじゃないイエローちゃん。あなたは、それほど闘争心はなさそうに見えたけど」

「あなたの情報が杜撰ずさんなだけですわ。……ね、ご主人様……はぁはぁ……」

「ああ、データを更新しとけエンジェルギルディ。イエローの根性はすごいぜ」

　全力発射で再脱衣しながら、イエローはとろんとした目で俺に微ほほ笑えみかけてくる。

　普段は俺も困惑するイエローのはぁはぁだが、今はこの上なく頼もしいぜ。

「──もちろん、俺たちもな!!」

　イエローの闘志に背中を押されるように、俺も飛び出した。〝腐滅の総攻めフ・ラガラツハ〟は、速度自体は緩慢だった。技の発動に神経を研とぎ澄ましていれば、回避するのは難しくないはずだ。

　エンジェルギルディは俺の繰り出したブレイザーブレイドを自らの腕で受け止め、弾はじいていく。こいつ……かなり動きがぎこちないな。戦闘員アルテイロイドに毛が生えた程度の体術だ。

　今まで全く前線で戦ってこなかったせいで、戦い慣れしていない

らしい。

　スペック頼みの強引な戦い方なら……付け入る隙すきは十分にある!!

「あら、いけない。うっかりしていたわ……君と戦う時は、こうしなくちゃね」

　そんな俺の心理を読んだかのように、エンジェルギルディは俺から距離を取ると……昨日のように、素早くツインテールに結んでしまった。

「な……！」

　思わず見とれ、動きを止めてしまう俺を前に、エンジェルギルディは満足げに微笑む。

　そして先ほどのように空を見上げ、大おお仰ぎように手を振り始めた。

「トゥアールちゃん、見てる～？　ツインテールにできるって、やっぱり最高ねっ！」

　それを見た瞬間。奴やつのツインテールに懐いだいていた畏敬が、こみ上げる怒りの炎に呑のみ込まれてくのを感じた。

「……この野郎ォォォ————ッッ!!」

　激情に任せ、ブレイザーブレイドを完全解放ブレイクレリーズする。

「グランドブレイザ————ッ!!」

　俺が必殺の炎えん刃じんを振り下ろすと──エンジェルギルディは、摘つまんだツインテールを盾たてにするように目の前にかざした。

「□□□□□□！」

　俺は咄とっ嗟さにグランドブレイザーを止めてしまった。炎を纏まとった刃やいばが、エンジェルギルディのツインテールの数センチ手前で微震する。

「あれぇ？　レッドちゃん、私を攻撃したくないの？」

　ツインテールの毛先を摘んで揺らし、俺を煽あおってくるエンジェルギルディ。

「仲間を馬ば鹿かにされた怒りより、目の前のツインテールへの愛を優先するのね、君は」

「違う、俺は──ぐあっ!!」

　詰め寄ろうとしたところに衝撃波をぶつけられ、俺は大きく吹き飛ばされた。

「レッド！　……あんたはこいつの話を聞いちゃ駄目……！　休んでてっ!!」

　走り抜けざまに俺を制止し、ブルーがエンジェルギルディへと突っ込んでいく。

「こんな弱い子たちに、私は今まで怯おびえていたのね……我われながら滑こつ稽けいだわ」

「はっ、あたしたちにビビってたって素直に認めちゃっていいの!?」

　ランスの連撃を素手で弾はじかれながら、ブルーが挑発を返す。

「ええ、私はあなたたちツインテイルズにこれ以上ない興味を懐いだいた。けどその一方で、脅きよう威いにも思っていた。怖かった──」

　ツインテールをたなびかせて大きく飛びすさると、ウェイブランスを旋回させ完全解放ブレイクレリーズするブルー。

「今は取り繕つくろう必要もないほど、余裕に満ち溢あふれているから……いくらでも認めてあげる」

　エンジェルギルディはそう言い切るや、残像が尾を引くほどの高速移動でブルーに急迫。

「エグゼキュート！　ウェー……!?」

　なんと、ブルーがウェイブランスを投とう擲てきする前にその穂先を掴つかんでしまった。

　ランスがまとったエネルギーが行き場を失い、波止場で砕ける波のように周囲へと噴き散る。

　しかし、イエローとの攻防を見てこの程度のことは予期していたのか、ブルーはあっさりとランスを手放した。

「属性玉エレメーラオーブ、男の娘属性ガールズボーイ!!」

　属性玉多重変換機構エレメアデイツシヨンを左腕に装着し、間かん髪はつ容いれずに次の属性を発動する。

「属性玉エレメーラオーブ──頬属性パフ！　脚属性レツグ!!」

　攻撃の軌道を操作する頬属性パフと脚力強化の脚属性レツグの同時発動で、ムチのようにしなやかな蹴けりがうなりを上げて放たれた。顔面に迫る蹴りが、急激に軌道を変える。

　狙ねらいは……エンジェルギルディの胸だ。妙に気迫がこもっているように感じる。

　まさにムチで打たれたかのような破裂音が、周囲に響きわたった。

「強いのね、ブルーちゃん……並のエレメリアンなら一発ＫＯでしょうね」

　ブルーの蹴りを受け、エンジェルギルディの胸は撞ついたゴム鞠まりのように大きくたわんでいる。しかし本人は、全く余裕の表情だ。

「でも残念。今の私は並じゃないのよねぇ」

　お返しとばかりに、ブルーの胸へと掌抵を見舞うエンジェルギルディ。

「うぐっ……！」

　ブルーは踵かかとで地面を抉えぐりながら、大きく吹き飛ばされた。

「アハハ……」

　変身解除したイースナへ。そしてイエロー、俺、ブルーへ。勿もつ体たいつけるようにゆっくりと視線を移すエンジェルギルディ。

「アハハハ……アハハハハハハハ!!」

　その邪悪な哄こう笑しようが、周囲に響きわたる。

「気持ちいぃ……。自分の力で他者をねじ伏せることが、こんなにも気持ちのいいことだったなんて……」

　陶とう酔すいした表情で天を見上げるエンジェルギルディ。

　増長しているどころじゃない。暴力の闇やみに呑のみ込まれ始めている。

「何でだ……それほど見事なツインテールにできるお前が！　何な故ぜそのツインテールを使って、悪意を振りまこうとするんだ！　ピッグギルディや仲間に、ツインテールのよさを伝えてたんだろう!?　ツインテールの素晴らしさ、面白さに目覚めたんじゃないのかよ!!」

　感情的に叫ぶ俺とは対称的に、ブルーはひどく冷めた口調で糾きゆう弾だんする。

「今でこそ珍獣扱いされて話題になってるけど、そんなんじゃあんた、すぐに化けの皮が剥はがれて人間からそっぽ向かれるわよ。この世界の人間の変態っぷり、なめんじゃないっての」

「──勘違いしないで。私、実験がしたかっただけだから」

　しかしエンジェルギルディは、さらなる冷笑をもってそれを一いつ蹴しゆうした。

「ツインテールをどんなふうに扱って、どんなふうに見せれば、世界はどう変わっていくのか……部隊のみんなにも手伝ってもらって、試してみただけ」

　あまりにも当然のように語られる真意に、俺は愕がく然ぜんとする。

「実験はまだまだこれからよ。手始めに本当にいい反応を見せてくれたわ、レッドちゃん」

　俺に視線を流しながら、エンジェルギルディはわざとらしくツインテールを掻かき上げた。

「皆さん、最強変身チエインエヴオルブを！　全火力を集中して、一気に撃破いたしましょう!!」

　イエローが絶対服従首輪アブソリュートリングを手にし、最強変身チエインエヴオルブをしようとした瞬間。

「あーっと、それはパース。今日はそこまでガチでやり合う気はないから～」

　エンジェルギルディはスキップするように後あと退ずさると、背後に転送ゲートを形成した。

「はぁ!?　何よあんた、散々イキり散らしておいて、あたしたちが強化したら勝てないから尻しつ尾ぽ巻いて逃げるわけ？　やめてよ、かっこよすぎて泣けてくるんだけど？」

　ブルーは例によって、挑発して退却を引き留とめようとする。

「うふふ。私にそんなこと言っても無駄なのは、よくご存じでしょう？　あなたたち全員が最強変身チエインエヴオルブしようが、もう私の敵じゃないわ。そこまで運動する気分じゃないってだけ」

　だが、エンジェルギルディはそれを平然と受け流した。

　そして、あくまで自分の主張だけを押しつけてくる。

「来たい時に来て、帰りたい時に帰る。これからはずーっと私の我わが侭ままに付き合ってもらうわよ、ツインテイルズのみんな？　私はいつでも、どこにでも現れる……何をするかも気分次第。覚悟しておくことね」

　そうしてエンジェルギルディは、躊ちゆう躇ちよなく転送ゲートの中へと消えていった。

　俺が知る、ツインテールをその身に宿したエレメリアンは皆──侵略者なのに敬意を懐いだくほどの気け高だかき奴やつらだった。ツ

インテールに誇りを持った、熱き強敵たちだった。

　けれどとうとう、ツインテールを道具としてしか見ていない邪悪な戦士が現れてしまった。

　本当の意味で「敵」であるツインテールと、俺はどうやって戦えばいい……。

◇

「どうして撤退しなかったんですか皆さん！　あの技は、一度受けてしまえば再変身できるまで時間がかかるようです……戦場でそうなることが、どんなに危険なことか!!」

　基地に帰った俺たちは、珍しくトゥアールに叱しつ責せきを受けた。

　確かに傍はたから見ていて、今回ほど恐ろしい相手はそうはいないだろう。

　俺も愛あい香かも、慧え理り那なもイースナもメガ・ネも……先ほどの戦いを省かえりみて、表情を険しくしていた。

「焦あせらないでください。エンジェルギルディを急いで倒したところで、私の生命いのちには何の影響もないのですから……!!」

　それは俺たち全員が気づいていて、誰だれも口にしなかったことだ。

　たとえエンジェルギルディを倒したところで、奴やつのツインテール属性をトゥアールに移植できるわけじゃない。ティラノギルディの時は、俺自身のツインテール属性を奪われた。だからこそ、属性力エレメーラが完全に俺の身体からだから離れるという明確なタイムリミットの前に、奴と戦って取り戻すことに意味があったんだ。

　そんなことをトゥアールに言わせてしまったことに、俺は言葉にできない無念を感じた。

「ごめんなさい、トゥアールさん……確かにわたくしたちは、熱くなりすぎていたかもしれません……」

　慧理那の言葉を皮切りに、俺たちは口々に謝罪の言葉を口にしていく。

　トゥアールも落ち着いたようで、小さく息を吐いた。

「皆さんが私のために一生懸命になってくださっている……それだけで、私は幸せです。だからエンジェルギルディのペースに乗せられず、いつものツインテイルズの戦いをしましょう」

　そうしていつもの微ほほ笑えみに戻るトゥアールだが……顔色がよくない。

「ああ、でも……ブルーの蹴けりは、見ててスカッとしま、し……」

　浅い呼吸を繰り返している。さすがに様子がおかしいと気づき、俺は慌あわてて立ち上がった。

「ッ……あ……」

　糸の切れた人形のように崩れ落ちるトゥアール。俺はすかさず飛び出し、彼女の身体を受け止める。

「トゥアール!?　おい、トゥアール!!」

　呼びかけるも、完全に気を失っている。

　さらに俺は、とんでもないものを見てしまった。

　白衣の袖そでの奥に覗のぞく細腕が、僅わずかに白色の粒子になってぶれていたのだ。

「……！」

　思わずトゥアールの手首を握り、愛あい香かたちに見えないように隠してしまう。

「部屋に運ぶわよ！　みんな手伝って！　……ごめんトゥアール、心配かけすぎた……!!」

愛香たちは気づいていないようで、トゥアールの部屋で看病をする準備を進めている。

再びトゥアールの腕を確認すると、先ほどの現象は収まっていた。

それでも俺は、抱きかかえたトゥアールの手首をもう一度握り締めたのだった。

◇

総そう二じや愛香たちの手で自室に運ばれ、しばらく経たった頃ころ。

ベッドの上で目を覚ましたトゥアールは……違和感のある右腕を見て、愕がく然ぜんとした。

輪郭がぶれ、粒子となって飛散し始めている。

──まるで、力尽きて静かに消え逝いくエレメリアンと同じように。

「……こん、な……」

これが、属性力エレメーラ科学の行き着く先。強引に心の輝きを捨て去った代償。

便利で、多大な恩恵をもたらす技術ほど……使い方を誤った時の反動も大きい。

この先には、人間としての死さえ許されず、完全なる消滅が待っているのだろう。

そして、刻一刻と迫る死と同等に恐ろしいのが……エンジェルギルディの存在だ。

十分に脅きよう威いを認識していたつもりだったが……その欲望は、想像を絶するものだった。

　今日の戦いでテイルレッドが見せた、悲痛な表情が忘れられない。

　このままあの悪魔と関わり続ければ、総二は……ツインテールを純粋に愛するあの優しい少年は、壊れてしまうかもしれない。

　自分がテイルギアという装備を作らなければ。

　自分が総二をテイルレッドという女神に変えなければ。

　この世界は、ここまで強いエレメリアンたちに目をつけられることはなかっただろう。

　そして何より……テイルギアがなければ、エンジェルギルディという邪悪のツインテールは誕生することなく消えていたはずなのだ。

　トゥアールは、何とか粒子化の収まった右腕を見つめる。決断の時が迫っていた。

「…………残された時間で、私にできることは……」

　恋を叶かなえたい。あと一度だけでも、ツインテールになりたい──。

　今の自分には、過ぎた願いだったのだ。

　世界をわたる復ふく讐しゆう者として生きる決意をしたその時から、もはや自分には人並みの幸せを求める資格などなかった。故郷を守れず絶望したあの日、自分はもう、死んでいた。

　この一年間、優しい夢を見続けることができただけ……幸せだったのだ。

「──私が産み出した悪魔は……私の手で決着をつけなければ」

　それは、本心を押し殺して復ふく讐しゆうに邁まい進しんし続けた少女の、精一杯の強がり。

　零こぼれることさえ許されず、目め許もとに溜まり続ける涙は──今のトゥアールそのものだった。

◇

　トゥアールが倒れてから数時間──日付が変わる頃ころ。

　すでに愛香たちは帰宅しているが、皆最後までトゥアールを心配していた。

　一人でリビングにいる俺の元へ、母さんが足音静かにやって来る。

「大丈夫だったわよ、トゥアールちゃん」

「ありがとう、母さん」

　俺は母さんに頼んで、トゥアールの部屋を見てきてもらったのだ。

　今は、ぐっすりと眠っているとのことだった。

「明日の朝、また様子を見に行くわ」

「ああ、頼むよ」

「トゥアールちゃん、だいぶ具合が悪いみたいね」

　いつもなら多少寝込むぐらいじゃそれをネタにしてからかったりする母さんの、この真剣な顔を見るに……トゥアールは本当に厳しい状態だと、気づいているんだろう。

「……そういえば総そうちゃん。唯ゆ乃のちゃんって……最近お店に来ないわね」

「あ、ああ……唯乃な。あいつ、強敵に勝つために修行してるって話だけど」

「……でも……」

　母さんは何かを言いかけ、苦笑した。

「ううん、何でもないわ。それじゃおやすみ、総ちゃん」

　常連客の唯乃としばらく会っていないからだろう、笑顔が寂しそうだった。

　母さんにぐらいは、実は療養中だってことを伝えてもよかったかな。

　確かに……唯乃がいれば、トゥアールに対して何かアドバイスをくれたかもしれない。不死身の身体からだの持ち主だからな。

　けれど今は、俺たちだけでトゥアールを救う方法を考えなくてはいけない。

　エンジェルギルディが与えるプレッシャーが、トゥアールの病状を急速に悪化させている。今日のことで、その考えは決定的なものになった。

　トゥアールはぐっすり寝ている──だったら、今しかないな。

　もう、時間がない。俺は、一つの覚悟を胸に湛たたえていた。

第四章　Ａ　ＴＲＵＥ．

　神秘の超空間、アルティメギル首領の間。

　その中心で聖布ヴエールに包まれた玉座の前に、エンジェルギルディの姿があった。

「ほう……見違えたではないか。エンジェルギルディ……そう呼べばよいのだな」

「ふふ、ありがとうございます。これから少し大がかりなことを始めようと思いますので、今日はそのご報告に参りました」

　玉座の傍かたわらに鎮座しているテイルフェニックスの墓標を尻しり目めに、報告を始める。

「実は……世界を丸々一つ用いた研究をお許しいただきたいのです」

　首領の迫力に怯おびえて立ち去った過去もどこへやら。

　現金なもので、最終闘体に進化した今、エンジェルギルディは不ふ遜そんな態度に戻っていた。

「……よかろう、許す。今のお前ならば、やりたいようにするのが一番面白かろう」

「首領様のお墨付きをいただき、光栄ですわ」

　アルティメギル首領は自分が楽しむことを何よりも優先する。

　実力を得た者の我わが侭ままであれば、見み逃のがすのは道理だ。まして、長きにわたり自分の話し相手を務めたマーメイドギルディの門出とあっては、甘くもなろう。

　打算に満ちた笑みを浮かべるエンジェルギルディの前に、光を押し固めたような透き通った座卓が出現した。

　首領の思念が半実体化した五指が卓の上に現れ、タロットカードを取り出す。

「旅立ちの餞はなむけだ。余が一いつ占せん授けるゆえ、選ぶがよい」

　積み置かれたタロットカードが、踊るようにシャッフルされていく。

「え、タ、タロット占い……ですか、極限まで手短にお願いしますね……えいっ」

　コンビニで大量に買い物をした時に限ってクジ引きサービス期間中だったため、後ろの列を気にして一気引きするほどの適当さで、エンジェルギルディは五枚のタロットカードを引き抜いた。

　女教皇、法王、隠者、愚者の四枚が正位置。ただ一枚、恋人のカードだけが逆位置だった。

「ふむ。この並び……ツインテイルズとの決戦に備えるティラノギルディめに占じた時と、ほぼ同じ結果と相成ったか」

「彼とだいたい一緒の結果なんですか、うーん……まあ属性は色々かち合いますけど」

　まんざらでもない顔でカードを覗のぞき込むエンジェルギルディ。

「唯一違うのは、愚者のカードが正位置になっていることだ。それが何を意味するのか──」

　指し示す首領の指が、愚者から恋人のカードの方へと移動する。

「この五枚のカードが、ツインテイルズを暗示しているんですか……？　ティラノギルディ君との戦いで覚かく醒せいしたテイルレッドちゃんが〝愚者〟で、今は正位置……」

　気け怠だるげな吐と息いきたっぷりに、占いの結果を自分なりに噛かみ砕くエンジェルギルディ。

「もう一枚の〝恋人〟……テイルフェニックスでしょうけれど、彼女はもう消え去ったのですから、正逆が変わらないのは当然では」

「ティラノギルディめも、恋人のカードが示す者をそう予想しておったようだ……。ではさらに詳しく占じよう。将棋盤、囲碁盤、

チェス盤の三つを大三角に配置し、その中央に五枚のタロットを並べることで──」

　話が長くなりそうな上に超絶謎なぞルールが追加されそうだったので、エンジェルギルディは両手を振って露骨に会話を打ち切った。

「占いありがたくいただいておきますわ、首領様！　的中はしないと思いますけど……」

　ヒールが金属の床を打つような硬質の音を響かせ、首領の間を後にするエンジェルギルディ。

「思考に遊びがないのは変わらぬな、エンジェルギルディよ……。すでに消えた者が、カードの暗示を受けるはずがあるまい」

　首領の光の指が、恋人のカードを宙に弾はじき上げる。

　迷うような緩やかさで回転し、正位置と逆位置を行き来しながら、カードは落下していく。

　やがて床に落ちた恋人のカードの位置を見た首領は、聖布ヴエールの奥で愉快そうに肩を震ふるわせる。

「───裏返った正位置の恋人が脅きよう威いたるのは、〝他者と手を取ることで大いなる勝利を勝ち取る〟という暗示ゆえ。くれぐれも手を取らせぬことだ、フッ……」

　全知全能たるアルティメギル首領。

　その声こわ音ねはすでに、結末を見たかのような冷徹な確信に満ちていた。

◇

　できるだけ音を立てないよう気をつけながら、俺は地下基地を訪れた。

　コンソールルームを抜け、基地の奥へ。目的地は、トゥアールの部屋だ。

　幸い部屋の出入り口のドアにロックはかかっておらず、音もなくスライドした。

　常夜灯に照らされた部屋を、忍び足で進む。

　愛あい香かの部屋とはまた違う感じの、いい匂いがする。

「はぁ……はぁ……」

　緊張で呼吸が乱れるのを、必死に押さえる。駄目だ、トゥアールが起きてしまう。

　トゥアールが寝ている間に、こっそりやるんだ。

「すぅ……すぅ……」

　トゥアールは夕方に倒れてここへ運ばれたまま、静かに寝息を立てている。

　首まですっぽり掛け布ふ団とんを被かぶっている。あまり気は進まないが、布団をそっとめくっていった。

　薄手のパジャマが、寝汗でくっついて身体からだのラインが浮き出ている。

　罪悪感に襲おそわれるが……もう後戻りはできない。

「ん……」

　──トゥアールが、目を覚ましてしまった。

　虚うつろな意識のまま彼女が指を軽く振っただけで、部屋に電気が点ついた。

　瞬まばたきを繰り返す瞳ひとみが、次第に俺を捉えていく。

「えっ……えええええっ!?　ちょっ……えええええええええＹＯＵヨ ＢＩＴＥバイ!?」

　流麗な発音でそう言われても、俺は何も噛かんだりしない

が……!?

「嘘うそ、夢!?　夢ですかこれ!?　こんな緊急事態に蛮族はどうしました!?　あの全自動トゥアールちゃん迎撃装置はっ!?」

　愛あい香かがいつの間にそんな仕事に就職していたのかは知らないが、俺がここに来ることは知らないはずだ。

「頼む、騒がないで……大人しくしていてくれ……！　すぐ終わるから!!」

　俺はトゥアールの肩を強引に掴つかみ、ごく冷静に説得を試みる。

「いやああああああああああああああオトコの目えええええええええええええええええええ!!」

　涙目になり、笑いとも驚きともいえない表情でかぶりを振るトゥアール。

「嬉うれしいですけど！　めっちゃオッケーなんですけど！　せめて明日にしてくださーい！　覚悟が……覚悟がまだああああああああああああ!?」

　オッケーなのか。少し胸のつかえが取れた。

「不安なのはわかる……俺も同じだ！　けど、今日やるって決めたんだ！　やらせてくれ!!」

　トゥアールは顔を真まっ赤かにし、身体を抱いてベッドの上を後あと退ずさっていく。

「やら……ヤらせぇぇっっ!?　待ってください汗がすご……今日はまだシャワー浴びてないんです！　シャワー浴びてないんです！　シャワシャワシャワー!!」

　よほど焦あせっているのか、語ご彙い力が崩壊している。

「これしか方法がないんだ！　たとえトゥアールの気持ちを無視することになっても──」

「無視はしてないです完全一致です、でもでもっ──」

「俺の力で、ツインテールを結んでみせる！　だから俺に、生命いのちを預けてくれないか!!」

「…………」

　おや、トゥアールが唐突に大人しくなったぞ。

「……もう全裸になって考えつく限りの卑ひ猥わいなポーズ取りまくってやりましょうか」

「突然どうした!?」

「二度も同じパターンでときめく、自分のチョロさが可か愛わいいだけです……」

　大人しくなったというか、不機嫌になったような……いや、当然か。

　俺はそういう反応をされて当然のことをしに来たんだ。

「ツインテール属性を失ったことがトゥアールの不調に繋つながっている以上、いつかはこうしなきゃいけなかった。幼女を想う気持ちを高めても、悪化する一方みたいだし……限界だと思ったんだ。ここは俺に任せてくれないか」

　ツインテールを結び、ツインテール属性を新たに芽生えさせる。

　呪のろわれた力と揶揄された究極のツインテールの特性だが、使うべき時は今だ。

「無理です。総そう二じ様まで危険に晒さらすことになります……やめてください！」

「やってみなくちゃわからないだろう……テイルオン！」

　時間をかければかけるほど、トゥアールを不安にしてしまう。

「ツインテイルオン……!!」

テイルレッドに変身してから間かん髪はつ容いれず、アルティメットチェインへと最強変身チエインエヴォルブした。

究極のツインテールの力を十全に発揮できる姿。トゥアールのツインテールを結ぶ準備は万全だ。

「どうか祈ってくれ……ツインテールになれるようにと」

トゥアールは抵抗も反論も諦あきらめたかのように、そっと目を伏せた。

俺は心の中で今一度謝りながら、小さな手を伸ばしていく。

考えてみれば、トゥアールの髪の毛にしっかり触れるのは初めてのことかも知れない。

それは俺の中で、決して侵されざる聖域のように思えていたからだ。

「いくぞ──」

持ってきたリボンを左手に持ち、右手でトゥアールの髪を掬すくった瞬間。

俺の身体からだに、異変が起こり始めた。

「ぐ、あ……」

「総二様？」

腕がピクリとも動かない。身体が重くなっていく。テイルギアが、軋きしむ。

まるで地球の重力全てが俺の周囲に集まっているかのような、とてつもない圧迫感だ!!

「っ……ああああああああああああああああああああああ!!」

両腕が肘ひじから先、丸々吹っ飛んだと錯覚するほどの激痛が走る。

それでも俺は、トゥアールの髪の毛から手を離さなかった。

「総二様っ！　手を離してください!!」

　属性力エレメーラの呪いが、ここまで強力なものだったなんて。

　ツインテールを結ぼうとするだけで、俺の身体からだがベータ崩壊しかけている……！

　ふざけるな、摂理だかなんだか知らないが、一度ぐらいルールを破らせろよ。

　この娘こが、どれだけ多くの人間を救ってきたと思ってるんだ。

　少しぐらいご褒ほう美びがあってもいいじゃないか……頼むよ、神様──。

◇

　気づくと俺は、変身解除して見知らぬ道路の真ん中に立っていた。

　シャツにジーンズ、裸足にスリッパ……トゥアールの部屋を訪れた格好のままだ。

「何だ、ここは……」

　通勤通学時間の住宅街という雰囲気で、それなりに人が行き交っている。

　ガードレールも電柱も、信号もない……奇妙な道路だな。

　トゥアールの心の中──だろうか。

　精神世界で他者と繋つながることが多くて、唐突に見覚えのない世界に来ると真っ先にその可能性を疑うようになってしまった。

　ツインテールを結ぼうとした余波で、こうなったのかもしれない。

　だが精神世界は宇宙空間のように神秘的な場所だが、ここは普通

の街並みだ。

　それに、肝心のトゥアールの姿が見えない。

　そう思って程なく、通学中の学生の中に見知った姿を見かけた。

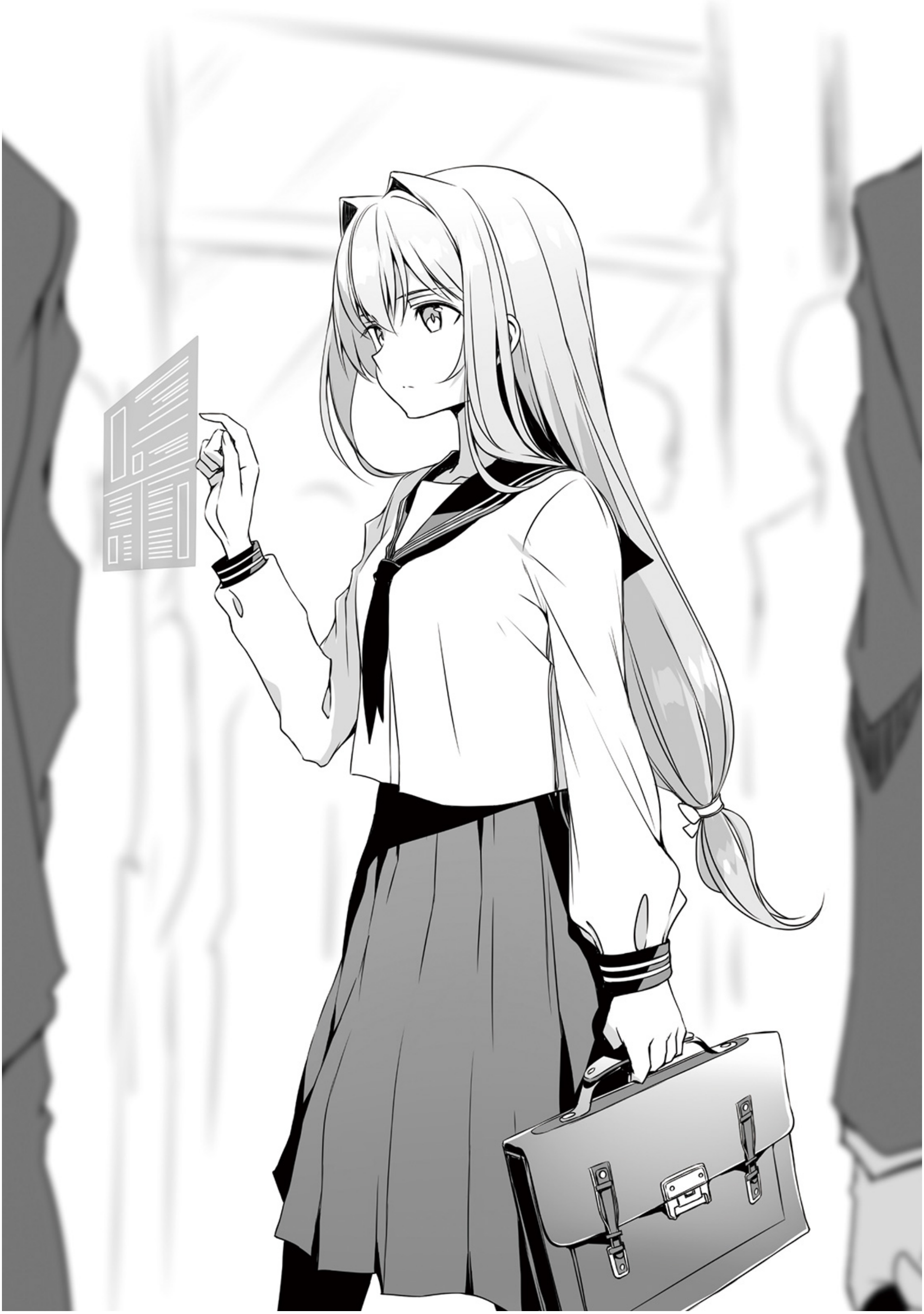
「トゥアール!?」

　セーラー服タイプの学生服に身を包んだトゥアールだ。顔立ちが今より少し幼い。

　長い後ろ髪は毛先近くでまとめられ、無造作に結ばれている。

　お洒しゃ落れというよりは、邪魔にならないためにそうしているという感じだ。

　参考書片手に……ならぬ、スクリーンを目の前に投影し、ページをめくるようにスライドさせながら歩いている。勉強しながら登校しているようだ。



「トゥアール！　おい、トゥアール!?」

　話しかけても無視される。焦あせってトゥアールの肩に手をかけようとしたが、立体映像に触れるようにして通り抜けてしまった。

　しばらく呆ぼう然ぜんと立ち尽くしていた俺は、通行人が俺の身体を通り抜けていったことでさらにぎょっと身を固くした。

　この世界に干渉できないのは……立体映像なのは、俺の方だ。俺が異邦人ストレンジヤーなんだ。

「まさか……ここは、トゥアールの過去の記憶なのか!?」

　ツインテール属性の反発で、俺の意識だけが記憶に干渉してしまったとでも言うのか。

　ここでトゥアールを見失ってしまったら、元の世界に帰る手がかりが無くなってしまう。

　仕方ないので走ってトゥアールに追いつき、後をついていくことにした。

「……これが、トゥアールの住んでいた世界か……」

　ここが日本と言われれば、納得できてしまう。そういえば、トゥアールが前に言っていた。自分の住んでいた街は、俺たちの世界の日本と同じような場所だと。

　車が空を飛んでいるなんてことはないが、どの車もエンジン音を発していなかった。それに、運転席をよく見るとハンドルを握っている人もいない。

　完全電気自動車化、完全自動運転化が完了した社会なんだ。

　トゥアールの故郷は、俺たちの世界よりもかなり科学が進んでいるのを実感した。

　それでも、普段トゥアールが作っている人じん智ちを超えた発明品の数々を見ている身としては、今より少しだけ近未来程度の印象しかないが。

　トゥアールの故郷なら、人々が転送ゲートで通勤通学をするのが当たり前のように思えてしまうのだが……それはやはり、トゥアールだけの科学力の産物なんだな。

　冷静になって歩くと、この記憶の世界が普通の時間の流れをしていないことがわかる。

　何かを見せるため……映像を再生するためだけに存在しているかのように、場面が飛び飛びなのだ。過程をまるごとスキップして、次のシーン、次の場所に唐突に切り替わっていく。

　透明で大きなドアの先に、二階まで吹き抜けになっている広大な広間。

　一見ホテルのエントランスのような場所だが……学生が多いのを見るに、ここは学校の玄関のようだ。

「トゥアール、おっはよー！」

　トゥアールの横を、数人の女の子の集団が通り過ぎていく。学校の友達だろう。

　そこでトゥアールは、初めて口を開いたのだが──

「……あ、おはよう……ございます……」

　俺たちの世界では学校一の元気者のトゥアールが……ここでは、まるでイースナのようにおどおどとした口調で級友たちと接している。

　それどころか、挨あい拶さつを交わしただけで女子たちはトゥアールと一緒に教室へ行くわけでもない。無視されるよりはましだが、さりとて友達が多いわけでもなかったのだろう。

　この世界に来てから見たどんなものよりも、そんなトゥアールの姿が衝撃的だった。

「あれが、学生の頃ころのトゥアール……」

　トゥアールは今、俺と同じ一六歳、高校一年生だから……これは中学生の頃か。

しみじみ思っていると、またすぐに場面が切り替わった。

私服に着替えたトゥアールが、おそらくは自宅だろう━洗面所で、髪を梳すいている。

そして手に取ったのは……かつて俺が託された、銀色のバレッタだ。

「……ふふっ」

トゥアールが嬉うれしそうに微ほほ笑えみ、髪の毛を束にした瞬間━彼女の顔の周りだけ、もやがかかったように見えなくなった。ツインテールを結んだからだと、はっきりと理解できた。

過去の記憶ですら、トゥアールはツインテールの姿を他者に見せることができないのか。

トゥアールは……誰だれかに見せる勇気もなく、家にいる時だけツインテールを結んでいたんだな。世界で一番の、ツインテールへの愛は……こうして密やかに育はぐくまれていたんだ。

目を逸そらしたい。

いや、すぐにでもこの空間から現実へと戻りたい。

これは……見てはいけない光景だ。彼女にとって見られたくない過去なんだ。

これ以上トゥアールを追うのをやめようと、本気で思った瞬間。場面は別のものに切り替わる。

非現実の介入。エレメリアンが現れたのだ。

下校中の通学路で、白馬のエレメリアンがトゥアールに接触した。

そうか……あれが、ペガサスギルディって奴やつなんだな。

自分と同じポニーテール属性を持つとフェニックスギルディが誇らしげに語っていた、あいつの親友。

そしてマーメイドギルディの前にアルティメギル最高科学者だっ

たという、稀き代だいの天才だ。

「ツインテールを、力に……どういうことですか……？」

　エレメリアンという怪人が目の前に現れたことにも、そのエレメリアンが語る話の内容にも……トゥアールは相当困惑していた。

　本来なら俺にもああやって、エレメリアンが最初に接触してきたはずなんだな。

　だけど、世界で一番ツインテール属性が強いのが男の俺だと最初にわかっていたら……あの変態怪人たちはどうしていただろうか……。

　さらに次の場面へと飛ぶ。

　トゥアールが、右腕に蒼あおいテイルブレスを装着していた。

「テイルオン……！」

　初々しい変身機構起動略語スタートアツプワードとともに、トゥアールの身体からだが青い光に包まれる。

　初代テイルブルーの誕生だ。

　せっかく変身したというのに、やはりトゥアールのツインテールはもやがかかっているようになっていて、見ることができない。

　あるのがわかっているのに、ツインテールを認識できない。

　可か愛わいいのがわかっているのに、ツインテールを愛めでることができない。

　ツインテール属性を失ったトゥアールは、ずっとこんな世界の中で生きてきたのか……。

「我わが名はバットギルディ。優柔不断属性インデシジョンの戦士である！　者ども、この世界のツインテールを我われらがものとするのだー!!」

　コウモリのような姿をしたエレメリアンが、戦闘員アルテイロイドを伴って街中で大声を上げていた。

　あれが、トゥアールと初めて戦ったエレメリアンか。

「や、やめなさぁぁぁ～い……！」

　初代ブルーは何とも覇は気きの無い声を上げながら、内股で走る。

　目を瞑つむり、全く腰の入っていないパンチをバットギルディに繰り出した。

「どあ────────────っ!?」

　しかしさすがはテイルギア、加えてよほど弱い怪人だったのだろう、武装を出すまでもなくその一発で爆散してしまう。

　ぽかんとして自分の手を見つめるトゥアール。

　こんなにあっさり勝ってしまっていいのだろうか、という反応だ。

　俺も、初めてテイルレッドに変身した時は戸惑いの連続だったな。

　テイルギアの強大な力に振り回されて、思うように動くことすらままならなかった。

　日が沈み、登り、また沈む。

　時計盤を回すように、空が青と黒に交互に切り替わりながら回転していく。

　俺たちの世界に比べると、かなり拡散が遅いが……このトゥアールの故郷でも、初代ブルーの活躍でツインテール属性が拡ひろがっていくのがわかる。

　そして初代ブルーはどんどん人気者になっていった。

　世界の人々はみんな、初代ブルーのことをそのまんまの「ツイン

テール」と呼んでいた。象徴的な意味合いが強いんだろう。

「ツインテールさん、かわいい！　私もツインテールになるー!!」

　幼女がこぞってトゥアールに近づき、ペタペタとツインテールを触る。

「そ、そう？　えへへ……ありがとう」

　デレデレしてる。めっちゃデレデレしてる。

　けど……トゥアールにとっては、あの純粋な応援が何よりも嬉うれしかったんだろうな。

　誰だれよりも早く初代ブルーを応援し始めたのが、あのぐらいの年とし頃ごろの女の子たちだからだ。

　こうして間近で見て、トゥアールが何であんなに小さな女の子が好きなのか、理解できたような気がした。

　また空がぐるぐる回る──一体何回転するんだ。

　戦士はこの世界に一人しかいないのに、夜が何度巡るんだよ。

　たった一人で、どれだけ長い間戦ってきたんだよ……トゥアール。

　回転が穏やかになった頃、避けえぬ運命の日が訪れてしまった。

　ドラグギルディ。

　最強の戦士が初代ブルーの前に現れ、そして──そこで場面が切り替わる。

　次の場面に転移した俺が見たのは、基地らしき場所の一室で、鬼に憑つかれたような気迫でコンピューターを操作するトゥアールの姿だった。

　怖いだろう。焦あせるだろう。今までの敵とは、強さの次元が違うのだから。

　このままでは勝てないと思って基地に引き籠こもったのは、ほんの数日だ。

その数日で……世界は終わっていた。

「────あ……」

何らかの策を得たのか、基地から飛び出したトゥアールが見たのは……属性力エレメーラを奪われ尽くした後の世界だった。

核シェルターから出て、破滅した世界を一望するような衝撃だっただろう。

普通に生きている。表情に生気はないけど、人間は生きているのに……世界が、モノクロ映像になってしまったように色彩を失ってしまった。これは、トゥアールの心象風景。

針の山も血の池もない、ごく普通の街並みだけど……それは紛まぎれもなく、地獄だった。

ただの傍観者である俺は、その地獄の只ただ中なかでトゥアールの慟どう哭こくを聞いた。

慟哭は大気に反響し、世界が歪ゆがみ──俺の意識は急速に遠のいていった。

◇

「……ぅ……」

身体からだに伝わる柔らかな温ぬくもりが、灰色の世界にいた俺を現実に引き戻す。

床に座ったトゥアールが、俺を胸にもたれかけさせ、抱き締めているようだ。

さっきまでいた世界と同じく、俺の変身は解除されている。

振り仰いだトゥアールは、いつもどおりだった。ツインテールになっていなかった──。

「……どうしていつも、無茶ばっかりするんですか……」

　どれほどの時間、こうして俺を抱き締めていたのだろう。

　俺が意識を取り戻したことに気づいたトゥアールは、か細い声で呟つぶやいた。

「あなたはもう、この世界だけじゃない！　全異世界にとっての希望なんです！　私なんかのために、生命いのちを危険に晒さらしたらいけない人なんです!!」

　俺も大概だけど……トゥアールの頑固も、筋金入りだよな。

　いつだって、最後には自分をどうでもいいように扱おうとする。

「……自分がそんな大層なものとは思えないけど……もし、仮にそうだとしても」

　俺はトゥアールから身体を離すと、少しやつれたその顔を瞬まばたきもせずに眺め入った。

「俺は……全ての異世界の平和と天てん秤びんにかけてでも、トゥアールを救う方を選ぶ」

「□□□□□□」

　トゥアールは吐と息いきを震ふるわせ、黙り込んでしまった。

「けど、確かに心配のかけ損になっちまったな……。究極のツインテールの力でも、属性力エレメーラを元に戻すことはできないのか……」

　俺は無念さのあまり、拳こぶしで床を打っていた。

「まだツインテール属性が芽生えていない人と、元は持っていたツインテール属性を失った者とでは、同じ〇ゼロのようで全く違います。究極のツインテールの特性は、無限の属性拡散……私のように失ったツインテール属性を再誕させるのとは、別種の力です」

　ようやく落ち着いてきたトゥアールが、原因を推察する。

　その説明に、納得はできる。だけど俺が属性力エレメーラを失った時は、最後までツインテールを信じたことで奇跡が起きた。何な故ぜそれを、トゥアールにはしてあげられないんだ!?

「……総そう二じ様に、見られちゃったんですね……私の全部」

　そしてトゥアールは、諦あきらめ交じりの口調で苦笑した。

　俺に過去の記憶へアクセスされたことが、体感として認識できているようだ。

「……トゥアール……」

「嬉うれしいことも、悲しいことも、裸も、初めてエロゲーを買った日も、いけない一人遊びを覚えた瞬間も……全部見られちゃいました」

「ごめん。悲しいことの先は全く見てないけど……ごめん」

　トゥアールにしてみれば、裸を見られるよりもつらい……という批難なのかもしれない。

　男女関係なく、裸よりも心の中や過去の記憶の方が、よほど秘め隠すべき大切な物であるということは理解できる。

「過去は見たけど……トゥアールのツインテールは、全然見えなかった。あんなに融通の利かないもんだったんだな、属性力エレメーラって……」

　それでも、写真や映像記録のように全て普通に下ろしただけの髪型に改かい竄ざんされているよりは、ツインテールに結んだという事実が残っているだけまだマシなのかもしれない。

　記憶は心。心は、護まもられるべき最後の一線だったということか。

「そうですよ。ツインテールは見てもらえないし……昔のトゥアールちゃんが根暗で地味な勉強オタクだって知られたのは、ダメージ大きいですねえ……」

「そんな！　今と印象が違って新鮮だったよ」

　陳腐な言葉しか返せない自分が恨めしい。

　今の明るいトゥアールからすれば、あの姿を他人に見られたのは痛恨だろう。でも、イメチェンなんて誰だれでも大なり小なりある

ことだ。

「私はテイルレッドみたいに可か愛わいくなかったから、ツインテールの戦士として活動を始めた頃ころは、世界からも不審がられていて……。けれど真っ先に私を応援してくれたのが、幼女たちだったんです。そりゃ舞い上がりますよ、人生で初めて人に応援されたんですもの」

「わかるよ。俺も、最初は戸惑ってたけど……自分を応援してくれる多くの人たちに、どれだけ救われたか」

　まして一人きりのトゥアールは、全てが手探りでのスタートだった。失敗も多かったはずだ。子供たちの純粋な声援は、何物にも勝る活力だっただろう。

「だから、私の願いどおりテイルレッドが幼女の戦士だったことは、嬉うれしかったなぁ……。私の『大好き』を、全部次世代へ託すことができたような気持ちで……」

　トゥアールは、誇らしげな眼まな差ざしを俺に送る。

　テイルギアの原理を初めて説明する時も、めちゃくちゃ熱く主張していたもんな。

『テイルギアをまとうと幼女になるのは──私の趣味ですよ！　悪いですかっ!?』

　──って。

　愛あい香かも、今ならそう言われて強く反論はしないかもな。

　俺を見つめていたトゥアールは……頬ほおへと仄ほのかな朱を差し、大きく息をついた。

「……総そう二じ様。本当に、私のことを思ってくださるのなら──一つ、お願いがあります」

「！　何だっ？」

「キス、してください」

トゥアールに頼られて舞い上がった俺だが……その願い事を聞いて、固まってしまった。

「私、女の子らしいことを何一つ経験できずに……死にたくありません」

女の子なら、誰だれもがロマンチックに紡つむぐはずのその願いは……自じ嘲ちように彩いろどられた懇願だった。

「いいでしょう？　総そう二じ様と私は、そういう遠えん慮りよをしない〝仲間〟なんですから……」

「死ぬ前に済ませておきたい、なんて理由でできるわけないだろ」

叱しかりつけるような語調になってしまい、尻しりすぼみになる。それだけ俺も混乱していた。

「じゃあ、キスしてくれたら頑張れる……って言ったら、してくれますか？」

「…………それは……。その……」

真剣に悩む俺を見て──トゥアールは、ぷっと噴き出した。

「……冗談ですよぉ！　けど夜よ這ばいに来ておいてキスぐらいで照れるなんて、こっちが困っちゃいますよ、総二様!!」

「いやだから俺はツインテールを結びに来ただけで……」

「はい、もう今日はバイバイです！　いつまでも一緒にいたら、ムラムラトゥアールちゃんが上にも下にも見境なくキスしちゃいますからね!!」

トゥアールは妙にハイテンションで俺を立ち上がらせると、出入り口へと押し始めた。

俺の背中を押して部屋から出すと、トゥアールはドアに鍵かぎをかけてしまった。

普段なら絶対にしない対応だ。よほど傷つけてしまったのかな……。

『……ありがとうございます、総二様。最後にお話しできて……幸せでした』

　俺が部屋を出て、しばらく廊下で立ち尽くしていたせいだろうか。

　部屋の中で、トゥアールが何かを呟つぶやいたのが聞こえたような気がした。

　何かが引っかかる。いや……何かを間違えている気がする。

　過去で見たトゥアールの笑顔と、今の悲しげなトゥアールの笑顔が、その何かを訴えかけるように俺の脳裏を交互に過よぎっていく。

　トゥアールのツインテールを結べなかったのは……本当に属性力エレメーラの摂理のせいなのか。

　過去の記憶が繋つながったのは、ただのアクシデントではない。

　俺のツインテールが、トゥアールの助けになる手がかりへと導いたのでは……。

◇

　総二に過去を見られることとなった、その翌日。

　トゥアールは学校から帰った後、私服に着替えて街外れにある工場跡を訪れていた。

　一人だけだ。総二たちの姿はない。

　トゥアルフォンで時間を確認しようとすると、計ったように後ろから声をかけられる。

「来てくれて嬉うれしいわ、トゥアールちゃん」

　軽やかな足取りでやって来たのは──エンジェルギルディだった。

「エレメリアンの投稿した新作動画の字幕に、属性力エレメーラ科学に精通する者だけがわかる暗号を仕込んだ……この時間、ここに来いと。私が気づかなかったらどうするつもりだったんです？」

「あなたなら気づくと思ったから、この手段を取ったのよ。このために動画投稿好きのコに出撃してもらったり、私自身も足繁く人間界に来たり……下準備に苦労したんだから♪」

　トゥアールは昨日の夜も、レッドに言ったとおり動画サイトでエレメリアンの投稿動画を消そうと巡回していた。ピッグギルディの件以来の習慣だ。

　その作業中、いくつかの動画にエンジェルギルディからの案内状が仕込まれているのに気づいたのだ。

　陰でこっそりレッドたちが見守っているわけでもない。かなりリスクの高い邂かい逅こうのはずだが……憎しみで双そう眸ぼうを彩いろどらせたトゥアールは、いささかも動揺していなかった。

　自棄を超越した必死の気迫が、全身に漲みなぎっている。

「……実は念願叶かなって、独立できることになったの。起業にあたって優秀な従業員を探してるんだけど……どう？」

「何を言いだすかと思えば……時間の無駄でしたね。お断りします」

　そのまま帰ろうとするトゥアールを引き留めるエンジェルギルディ。

「報酬は応相談──プラス、確実な延命処置をあなたにしてあげる。確実な……ね」

　テイルレッドたちではお前は救えないと──その傲ごう岸がん不ふ遜そんな目が語っていた。

「あなたたちエレメリアンの手を借りて生き存ながらえるぐらいなら、喜んで死を選びます。あっと、それ以上近づかないでください、不審者。防犯ブザー鳴らしますよ」

「しょうがないわね……じゃあ、手付金代わりよ。あなたにだけ、いいことを教えてあげる」

くだらない軽口が始まるのだろうと鼻を鳴らすトゥアール。

だが、語られたのは想像を絶する事実だった。

「──フェニックスギルディ……いいえ、結いわ翼ばね唯ゆ乃のちゃんは、死んだわ」

遠く聞こえていた飛行機の飛行音も消え去り、世界が完全な無音になる。

トゥアールは目め眩まいを覚えたようによろめいた。

「う、嘘うそです！　あのバカ強い、不死身の結翼唯乃が……死ぬなんて……!!」

エンジェルギルディを毅き然ぜんと睨にらみ付けるが、声の震ふるえに動揺がまざまざと顕あらわれていた。

「首領様と戦って、ね。確かにバカ強かったわ、首領様、初めて本気で戦ったみたいだし」

「□□□□□□!!」

首領に倒されたと言われれば、下手な言葉を並べ立てるよりよほど信しん憑ぴよう性がある。トゥアールが最後に唯乃と会った時、彼女が首領の話をしていたことがそれに拍車をかける。

「さて。私としては、この重大な事実をツインテイルズのみんなに教えてあげるべきか迷ってるのよね……どう思う？」

心臓を鷲わし掴づかみにされた気分だった。

その事実が何をもたらすのか、簡単に想像がつく。

「ブラックちゃん……なついてたんでしょ？　唯ゆ乃のちゃんに。こんなことを知ったら、いい顔で泣くんでしょうねえ……」

イースナは、昔と違って正しい努力で友達を作ろうと頑張っている。

最近は事あるごとに唯乃がいれば、唯乃も一緒に、と気にかけることが多く、彼女がどれだけ唯乃のことを大事な仲間だと思っているかが窺うかがい知れる。

「何よりテイルレッドちゃん……どんなに勇ましかろうと、あの子は幼い女の子。仲間の死という事実に耐えられるかしら？」

「ッ……う……!!」

エンジェルギルディでさえ、テイルレッドが本当は幼くはなく、まして女の子でさえないというツインテイルズ最大の秘め事は看かん破ぱできていない。

その点をひとまず安あん堵どするトゥアールだが……優しい総そう二じが仲間の死に耐えられないという点は、この女め狐ぎつねの言う通りだ。

大切な人を守りたいという強固な信念があるからこそ、総二は絶対に倒れず、無限に強くなる。

だが好敵手が自分の手の届かない場所で、守ることさえできずに生命いのち尽きたと知れば。

唯一の弱点として精神状態の影響をモロに受けるテイルギアがどれほどの弱体化を果たしてしまうかは、想像に難かたくない。

「私を脅して……どうするんです。いつ死ぬともしれない私には、ビジネスパートナーとしての価値はないはずです!!」

「いつ死ぬともしれないなら何としてでも助けようと思えるほど、あなたの科学力には価値があるのよ。アルティメギル科学班だなんて言っても、私の他は取るに足らない有う象ぞう無む象ぞうばかり。あなたの方がよほど頼りになるわ」

「……散々小馬ば鹿かにした私を今さらベタ褒ぼめしてヘッドハンティングとは……よほど人徳がないと見えますね。有象無象とは言いますが、誰だれもついて来てくれないだけでしょう？」

図星だったのか、エンジェルギルディは唇くちびるを一文字に引き結んだ。

しかしそれも一瞬のこと。すぐに薄ら笑いに戻る。

「トゥアールちゃん。この数日、死への恐怖は存分に味わったでしょ？　今なら、どれだけ蔑さげすまれようが生きるためにもがき続けた私の気持ち━━わかってくれると思うのだけれど」

「ッ……それ、は……」

「不死身の結いわ翼ばね唯乃ちゃんでさえ、死ぬのよ。ましてただの人間のあなたは、死に物狂いで生命いのちを求めなくちゃ。本当に求めるものは、手に入らないわ━━」

　トゥアールの迷いを見て取り、エンジェルギルディはニヤリと笑う。

「明日、同じ時刻にここで待つわ。時間が経たつほど仲間との別れが辛つらくなるでしょう？」

　それだけ言い残し、トゥアールの横を素通りして立ち去っていくエンジェルギルディ。

「世界をわたる復ふく讐しゆう者となった時点で、あなたは普通の女の子として生きることを放棄した。願いを叶かなえるには、まだ捨てなければいけないものがあるのよ。覚悟を決めたら？」

　極彩色の光が背後で光る。転送ゲートを通って姿を消したのだろう。

　緊張の糸が切れたトゥアールは、震ふるえる足取りで工場の外に出た。

　今にも雨が降り出しそうな曇天だった。

　結いわ翼ばね唯ゆ乃のと最後に会ったのも、こんな憂ゆう鬱うつな天気だったのを覚えている。

「……この名演技を昨夜ゆうべ、総そう二じ様の前でできたら……今いま頃ごろ女になれてたかもしれないのに」

　嘲あざけるような口調とは裏腹……彼女の瞳ひとみには、すでに悲ひ愴そうな覚悟の光が宿っていた。

◇

　地下基地のコンソールルームの奥──滅多に人が立ち入ることのない工場ファクトリースペース。その格納庫に、トゥアールはいた。

　視線の先にあるのは、ライトバンのようなボディに大きな左右の主翼が折り畳たたまれて格納されている小型戦艦メカ。

　トゥアールが幾多の異世界を巡り、そして総二たちがロロリーの世界へと旅する時に乗り込んだ異世界戦艦、スタートゥアールだった。

「これが異世界をわたる戦艦、スタートゥアールか……」

「……イースナ……いつの間に」

　振り返ったトゥアールが見たのは、音もなく背後に立っていたイースナだった。

　弁の立つ人格になりたいだけなら善いい沙すな闇あん子この姿で十分だというのに、テイルブラックに変身している。

　まるでトゥアールがどんな行動を取っても対応できるよう、用心しているかのように。

「なんであなたがスタートゥアールのことを知ってるんですか」

　日中のエンジェルギルディと同じような現れ方をされたせいか、すでにトゥアールは不満顔になっている。

「慧え理り那なに教えてもらったのじゃ。イカすメカが基地の奥にあるとな」

　ブラックは腰に手を当て、誇らしげに答えた。

「……ホント、仲良しさんになっちゃって……」

「わらわも是非、これに乗せてもらいたいものじゃな」

「はいはい、乗せてあげますよ。そのうちね」

　普段ならイースナの申し出には必ず茶々を入れるが、今日はやけに素直だ。

　それで全てを悟ったのか、ブラックは顔つきを豹ひよう変へんさせた。

「そうか……では、わらわの分の席を予約しておいてくれ。向こう一〇〇日分ほど」

「……あなた……」

「随分よく整備されておると思ってのう。──まるで、今すぐにでも発進できるほどに」

「言っておきますが、これは使いませんよ。使わせる気もありません」

　それは暗に、一つの事実を認めているも同然の言葉だった。

「出て行くつもりか。この世界から」

　機械の動作音すらしない格納庫では、沈黙が痛い。

　トゥアールはようやく、ブラックへと向き直る。

　嘘うそを許さぬ真しん摯しな瞳ひとみに見つめられ、観念したように嘆息した。

「あなたにははっきりと言っておきましょう。私の病状深度はレベルＤ……回復の見込みはありません」

「だから総そう二じが必死に方法を探しておるんじゃろうが。つーか、わらわも毎日あれこれ研究しとるんじゃぞ、春のライブツアーに向けてメチャ忙しい時期だというのに」

　ぶつぶつと文句を言ってはいるが、ブラックなりにトゥアールを助けるために陰で懸命に努力していたのだ。

　だからこそ、トゥアールは残酷な事実を伝えなければならなかった。

「究極のツインテールの力でも駄目だった……と言ったら？」

「何……もう試したのか」

　ブラックにとってもそれが最後の頼みの綱だったのだろう。

　声の深刻さから、衝撃の度合いが窺うかがえる。

「危うく総二様を死なせてしまうところでした。こうなると予想していたから、究極のツインテールの力には絶対に頼ってはいけないと自戒してきたのに……自分の生命いのちがかかった今は、拒こばみきれなかった。イースナ、私はね……こんな自分の弱さが何よりも許せないんです」

　そんな自分には助かる資格さえないと自じ嘲ちようし、話を結ぶ。

「……けれど、現在の総二様が自分の生命と引き替えにしかけてさえ、私の失われたツインテール属性を復活させることは不可能でした。もう……私が助かる方法はありません」

　誰だれかに話したことで少し胸のつかえが取れたのだろう。

　まるで運命を受け容いれているかのように、諦てい観かんに満ちた眼まな差ざしだった。

「故郷を救えなかった私に残ったのは、アルティメギルへの復ふく讐しゆうだけでした……その一念だけが、私の生きる糧かてだった。それしかなかった……」

　トゥアールは、気休めすら介在しない現実を語る。

「だからせめて総そう二じ様たちには、この世界を守り抜いて欲しいんです。ですが私がこの世界で死んでしまったら……総二様たちは、きっとテイルギアを使えなくなります」

「トゥアールお前、これだけこの世界で毎日をエンジョイしておいて、他に何もなかったはないじゃろ。泣きゲーのブームも結構昔じゃろうに、悲劇のヒロイン気取りか？」

　あえて茶化すように励ますブラックだが、トゥアールは激しい剣幕で言い返した。

「あなたに私の気持ちはわかりません！　敵の軍門に降るという、

一番安易な逃げを選んだあなたには!!」

「…………」

「ちょっと言いすぎました」

　頬ほおを染め、わざとらしく咳せき払いをするトゥアール。あまりにも早い訂正だった。

「お前、こういう時すぐ引き下がるのう……もう少し口喧嘩さバトらせんか」

「引き下がってはいません！」

「……言い訳はせぬ。たった一人で孤独に戦い続けたお前に比べれば、わらわのやり方は姑こ息そくな逃避に過ぎぬからな。……それに神の一剣ゴー・デイア・ソードが最初に来た時も、ビビって降伏まがいのことをしようとした。前科がありすぎるわ」

　憎まれ役になりきれないトゥアールの人の好さを知っているだけに、ブラックの表情は苦みを増す一方だった。

「じゃが、テイルギアのメンテナンスはどうする。サポートはどうする。この世界と総二たちを思うなら、なおのことお前は残るべきじゃ」

「私がいなくなった後、テイルギアの定期メンテナンスとサポートはあなたに任せます。特に蛮族のギアは私のお古で年季入ってますから、入念にお願いしますね」

　その言葉で、急に現実感が増して怖くなったのだろう。

「い、嫌じゃぞ。わらわは嫌じゃ！　そんなめんどくさいこと、誰だれが引き受けるか!!」

　ブラックは癇かん癪しやくを起こす子供のように声を張り上げ、トゥアールが言葉を続けるのを阻もうとする。

「お願いイースナ、真ま面じ目めに聞いて。本当は私も、すごく怖いんです……」

　ブラックはわなわなと拳こぶしを震ふるわせ、ついに感情を爆発

させた。

「ふざけるな！　ひどい……ひどすぎる！　どうしてわらわにばっかりそんな仕打ちをするんじゃ！　わらわへの罰か!?　幼女じゃなくなったから、疎うとましいのか！　みんなが幼女作戦で頑張ってる時も、わらわを交ぜてくれなかった!!」

「ちょっと、イースナ……」

「トゥアールに相応ふさわしい女になれるよう頑張ったのに！
トゥアールに認めてもらえるよう頑張ったのに！　再会してからずっと、わらわには意地悪ばかりではないか!!」

　心のダムが決壊したかのように、溜め込んでいたものを吐き出していくブラック。

　止とめ処どなく溢あふれてくる激情は、柔らかな温ぬくもりによって塞せき止められた。

「馬ば鹿かですね。そんなことをずっと気にしていたなんて……」

　トゥアールは、ブラックを抱き締めていた。

　呆ぼう然ぜんとしながら変身解除し、ジャージ姿に……イースナに戻る。

「あなたが成長したせいじゃないですよ。あなたが眩まぶしくて、見ることができなかっただけ。あなたが、私が成しえなかった平和を……理想を追って戦っていたから」

「嘘うそ……私のこと、嫌い、なんだ……!!」



抱き締めながらかぶりを振ったため、トゥアールの絹のような髪の毛がイースナの頬ほおを撫なでた。

総そう二じたちは、みんな気づいていたことだ。照れ隠しでイースナにきつく接しているだけで、トゥアールがどれだけ彼女を大切に思っているのかを。

「今まで意地悪ばかり言ってごめんね、イースナ……。本当はあなたが私を追ってこの世界に来た時……泣きたいくらい嬉うれしかった」

その言葉を、どれだけ待ち望んだことか。

しかし飾らぬ本心は、決定的な別れの言葉でもあったのだ。

「……あなたのこと、ずっと妹みたいに思ってましたよ」

温もりが離れる。それは、トゥアールとの別離を意味していた。

何も言えずに俯うつむくイースナ。

慈いつくしむような眼まな差ざしを最後に送り、トゥアールは格納庫を去って行った。

「……私、も……トゥアールさんの、こと……」

一人取り残された格納庫で、イースナはあまりにも孤独だった。

◇

トゥアールの過去と繋つながってから、実に二夜明けた日の放課後。

俺は吃きつ緊きんの問題に差し迫られ、地下基地のコンソールルームに集合をかけた。

愛あい香か、慧え理り那な、イースナ、メガ・ネ。そして母さんと桜さくら川がわ先生。

　サポートメンバーを含め全員集合しておきながら、トゥアールだけいないのには理由がある。

「みんな、これを見てくれ」

　俺は持ってきた手紙を取り出し、みんなに見えるように広げる。

「トゥアールの字……？　何々、『症状を治す目め処どがついたので、しばらくとある世界へ療養に行きます』……あいつ、一人でどっか行っちゃったの!?」

　手紙を引っ掴つかみ、何度も何度も視線を往復させる愛香。

　書いてある内容は愛香が読み上げたものでほぼ終わりの、あまりにシンプルな置き手紙。

　それが、俺の部屋の机の上に置かれていたのだ。

　部室のホワイトボードなどでよく見た、トゥアールの筆跡に間違いない。

「ですが、治療方法がわかったのなら喜ぶべきことですわ。トゥアールさんが帰って来るのを一日千秋の思いで待ちましょう！」

　これを吉報だと感じ、嬉うれしそうに笑う慧理那。

　最初は俺も慧理那のように考えたが、すぐにおかしいことに気づいた。

「違う……出ていきますなんて言えば俺たちが追いかけてくるのが目に見えているから、こんな書き方をしただけだ。本当に療養なら、黙っていなくなる必要はないからな」

「自分がいない間ツインテイルズのサポートをどうするかとか、どのくらい席を空あける予定かとか、何も書いてないもの。責任感の強いトゥアールちゃんにしては不自然よね」

　手紙を検あらためた母さんも、すぐに同様の感想に至った。

　俺たちもついていくとか、手伝うとか、そんなことを言われると困る決断をしたんだ。

「じゃあ何か。トゥアールは……治療の目処がついたというのは嘘うそで、その……」

　その先を言い淀よどむ桜川先生。

「……トゥアールさん……もう、帰って来ない、つもり。私には、お別れの言葉、言った」

　沈黙を破り言葉を続けたのは、イースナだった。しかも、衝撃の事実を。

「イースナちゃん……」

　メガ・ネが心配そうに見守る中、イースナは続ける。

「し、証拠が……ある。さっき、工場スペースを見てきたら……スタートゥアールが、まだあったの」

「え、スタートゥアールってあれでしょ、異世界旅行に使った戦艦！　それじゃあトゥアールの奴やつ、どうやって別の世界に行ったの!?」

　愛あい香かの言うとおりだ。あの戦艦以外に、トゥアールが異世界をわたる手段はないはずだ。

「トゥアールさん、様子が、おかしかった。症状がよくならなくて辛つらいから、出ていくわけじゃ……なさそうだった。何か、つらいことを……隠しているような、雰囲気、だったの……」

　いつもどおりたどたどしい口調だが、彼女らしからぬ熱を帯おびたものだった。

　俺たちは固かた唾ずを呑のんで、イースナの言葉に耳を傾ける。

「私、気になって、知り合いと、連絡を取った。そしたら、エンジェルギルディ……別の世界に、旅立った、って……。きっと、トゥアールさんも一緒」

　知り合いというのは多分アルティメギルの誰だれかだろうが……その話が本当なら、エンジェルギルディが消えたタイミングでトゥアールも姿を消したのは、確かに話ができ過ぎている。

「エンジェルギルディはずっとトゥアールに執しゆう着ちやくしていた……ついていったっていうよりは、攫さらわれたっていう方が近いんだろう」

　俺は一つの推論に辿たどり着いた。そう考えれば、この奇妙な置き手紙の辻褄が合う。

　黙っていなくなれば俺たちは躍起になってトゥアールを捜すだろう。しかし、捜されると困る。折せつ衷ちゆう案で無難な内容の手紙を残す。……脅迫を受けている人間の心理だ。

「エンジェルギルディッ……！」

　愛香が怒りに任せて椅い子すの肘ひじ掛けを握り潰つぶす。今は、俺も同じことをしたい気分だった。

「だから、みんな……手伝って。トゥアールさんを、助けに行くの」

　神眼鏡ゴツドめがねのレンズの奥に輝くイースナの瞳ひとみは、揺るぎない決意に満ちていた。

「けどイースナ。あんたエンジェルギルディがどこに行ったか、捜せる？　あたしたち、他の世界のことほとんど知らないの……」

　愛香に聞かれ、力無く首を振るイースナ。それが早速の問題だったのだろう。

　だが、俺はそれについて心当たりがあった。ズボンのポケットから紙片を取り出し、皆に見えるようにテーブルに置いた。

「この紙を見てくれ。アポロギルディが置いていったものだ」

「これは……異世界旅行をする時に目的地の情報になった数式にそっくりですわ!!」

　さすが記憶力のいい慧え理り那なだ。この数字の羅ら列れつを見て、すぐに思い出したようだ。

「そう、異世界の位置情報だ。俺、実はこの数字の羅列が何か忘れていたけど……この間ロエルたちと夢通信をした時に思い出した。きっとアポロギルディは前々からエンジェルギルディが高飛びする

予定の異世界にあたりをつけていて、それを俺にリークしたんだ」

　あいつがわざわざ、俺たちに何の関係もない世界の情報を教えるはずがないからな。

「……あたしたちに塩を送るのは、アポロギルディなりのけじめってことかしら」

　俺も愛あい香かと同じ考えだ。アポロギルディは、元は部下だったエンジェルギルディの暴走を見かねてこんな真ま似ねをしたのかもしれない。

「イースナ、さっきスタートゥアールは置かれたままだって言ってたよな。だったら──」

「うん……！　み、みんな……ついてきて、ください……！」

　俺たちは全員でイースナに続き、地下基地の最奥・工場スペースの格納庫へと向かう。

　以前来た時は童心に返ってわくわくしたものだが……今は周囲に関心を寄せている時間はない。一直線に、スタートゥアールへと走る。

　例によって俺たちが艦を出て異世界に下り立った後、その世界で艦に「お留守番」してもらう役が必要だ。俺が頼むまでもなく、母さんと桜さくら川がわ先生が名乗りを上げてくれた。

「……って、また艦長服になってるのかよ母さん!?」

「あったり前でしょ。娘のピンチですもの、今回は私もマジよ」

　確かに……コスプレしてこんなにマジな表情の母さんは、初めてかもしれない。

「誰だれかがこの世界に残るのですか？　全員でこの世界を離れれば、もしエレメリアンが侵攻して来た際に──」

　慧え理り那なはこの世界への戦力配分を提案しかけたが──

「そ、それは大丈夫だから……私に任せて。行こう……！」

　その時間も惜しいとばかりにイースナが先行。スタートゥアールのドアのロックを解除し、中へと入っていった。

　イースナが任せろと言うのだから、それを信じよう。俺は慧理那と頷うなずき合う。

　みんなでスタートゥアールの中へと入り、懐かしのコックピットへと急ぐ。

　コックピットではイースナがすでに操縦席に駆け込み、操作を始めていた。神眼鏡ゴッドめがねのレンズには文字が滝のように流れており、何らかのプログラムをしているのがわかる。

「頼むぞ、イースナ！」

「さすがに、かなりプロテクトが、かかってる……それを全部突破しないと、動かせない」

　そりゃ、エンジンキーも無しに他人の車を動かせと言っているような状態だからな。

　ガソリンの役はブレスをつけている俺たちだが、起動はイースナだけが頼りだ。

　黙々と起動作業をするイースナの邪魔にならないよう、俺たちも黙って見ていた。

「これが、これで……」

　緊張感が立ち込めるコックピットで、一〇分も経たった頃ころだろうか。

　操作を続けるイースナが、目に見えて動揺し始めた。

「どうして……うぅ……」

　キーボードの操作は素人しろうと目に見てもタイプミスしているとわかるほどぎこちなく、次の手順を考え倦あぐねて右往左往しているようだ。

　プレッシャーを感じてるな、無理もないが……。

「……動か、ない……動かせない……」

　手が震ふるえて作業もままならず、とうとうしゃくり上げるイースナ。

　今日はずっと俺たちの先頭に立って引っ張ってくれたが、ここに来てトゥアールを助けられないかもしれないという怖さに襲おそわれてしまったのだろう。

「イースナちゃ━」

　見かねて駆け寄ろうとするメガ・ネ。俺はその銀色の肩を掴つかんで制止し、振り返った彼女へと無言で首を振った。

　俺自身は、爪つめが皮膚に食い込むほど硬く拳こぶしを握り締めながら。

　愛あい香かも慧え理り那なも、母さんも桜さくら川がわ先生も、同じ気持ちで見守っているのだろう。そして━

「…………………….駄目。私が、やらなきゃ……!!」

　イースナは神眼鏡ゴツドめがねをずり上げ、頬ほおを伝いかけた涙をジャージの袖そでで強引に拭ぬぐう。

　そして決然とモニターを見み据すえ、作業を再開した。

　これまでなら、そのまま諦あきらめて泣き崩れてしまっていたかもしれない。

　しかし今イースナは初めて、誰だれに後押しされるでもなく自分自身で心を奮ふるい立たせた。

　大好きなトゥアールを助けるために。

　そんなイースナの姿を見て、俺たちも勇気が湧いてくる。

「……あと、もう……少し…………ぁ、あ……つ、繋つながった……!!」

　イースナの声に喜色が交じると同時、コックピット内のモニターやライトが次々に灯ともっていく。

　スタートゥアールはついに起動し、テイルブレスからのエネルギー供給を受けて発進準備を始めた。

「……よく頑張ったな、イースナ。みんなでトゥアールを助けに行こう!!」

「うん……うん……！」

　俺はイースナの頭を撫なで、慧理那も涙目になりながらイースナに抱きつく。

「……ほんま……偉いで、イースナちゃぷ―――ん!!」

　メガ・ネが豪快に鼻をかんでいるのが、ちょっと微ほほ笑えましかった。……かめるのか……。

　艦長コスの母さんが正面ウィンドウを指さし、待ってましたとばかりに目を輝かせる。

「スタートゥアール、発進!!」

　いつぶりかの母さんのコールと共に、スタートゥアールは異世界へと旅立つ。

　今行くぞ、トゥアール。君の造ったこの戦艦、スタートゥアールで。

　必ず助けるからな――!!

第五章　Ｔｏ　Ｒｉｓｉｎｇ．

　スタートゥアールでの、一時の航行時間。

　俺は、コックピットから見える極彩色の景色に目を馳はせていた。

　異世界への移動は、そこへどれだけ行きづらいかで航行時間が変わる。

　ロエルたちの世界へ行く時にかかった時間と比べて長いことから、エンジェルギルディがいる世界はかなり入り組んだ座標にあるようだ。

　全員、精神を集中するように無言を貫き――一時間ほど過ぎた頃ころだろうか。

　極彩色から白光へ景色が移り変わり、別世界への空間転移ドライブアウトを告げる。

「到着しましたわ！」

　慧え理り那なはイースナに協力し、着陸準備を進める。

　今回はアクシデントもなく、スタートゥアールは無事に大地へと着艦することができた。

　この世界に――トゥアールがいる。

　俺と愛あい香か、慧理那、イースナは、誰だれからともなく右手を差し出し合った。

「「「テイルオン!!」」」

「グラスオン!!」

　重なり合う変身機構起動略語スタートアップワードが、必勝の誓い。

　赤、青、黄、黒の四色がマーブルに渦うずを巻き、コックピット

を包み込む。

　変身完了した四人とメガ・ネが並び、ツインテイルズは異世界決戦の出陣の時を迎えた。

「母殿と年とし増まメイド、スタートゥアールを頼むぞ」

　ブラックに艦を託され、母さんが快こころよく頷うなずく。

「まっかせて。ピンチの時は私が操縦して駆けつけるから!!」

「あの、未み春はるさん。以前のようにノリでこの艦ごと敵に特攻しようと言い出すのは、もう勘弁してくださいね……」

　桜さくら川がわ先生は、この艦でのお留守番にプチトラウマがあるようだが……。

「よし、行こうみんな!!」

　スタートゥアールから外へ出て、俺はすぐに周囲を確認する。

「殺風景なところだな……見渡す限りの荒野だ」

　赤茶けた大地と、雲一つないのに曇り空のように淀よどんでいる空。それが目に映る全てだ。

「最近ずーーーっとフラストレーション溜まってたからありがたいわ。どんだけ暴れても周りの被害は気にしなくていいってことでしょ？」

　ブルーは早くも闘志を剥むき出しにしている。

　目的はトゥアールの救出だが、そのためには当然、エンジェルギルディとの戦いは避けられないだろう。確かにこの辺りなら、全員がフルパワーで戦っても問題なさそうだ。

　警戒しながらしばらく歩くも、岩と砂が続くだけで風景は何も変化しなかった。

「見渡す限り、どころやないでレッドちゃん」

　この世界について分析をしているのだろう。メガ・ネのツインテールパーツが点滅し、眼鏡めがね型の双そう眸ぼうにノイズのよ

うな光線が走っている。

「この世界、まるっとこんな荒野が広がっとる。……しかも、人間が全くおらへん」

「何だって⁉」

　どうやらメガ・ネは、分析の過程で恐ろしい事実を発見したらしい。

「平行世界は様々な違いがあると聞いていましたが……まさか、人間がいない地球もあるなんて……」

　イエローが、現実感がなさげに地平へ視線を広げる。

　確かにな。ここは地球の平行世界じゃなくて、火星や金星のような別の星だって言われた方がしっくりくるぐらいだ。

「え、ちょっと待ってよ、人間の反応が一つもないって……それじゃあトゥアールは？」

　俺がブルーと同じ疑問を持った、ちょうどその時。

『あらあらまあまあ……来るかもとは思ったけど、まさかこんなに早くに？　愛されてるわねえ～トゥアールちゃん』

　心底嬉うれしそうな声が辺り一面に木霊こだまし、俺たちは足を止めた。

　空を見上げると、そこには巨大な立体映像が浮かんでいた。俺は思わず叫ぶ。

「エンジェルギルディ！　それに──」

　エンジェルギルディの隣にある、楕円型の透明なカプセル。

　その中には、真っ白な仮面をつけたトゥアールの……仮面ツインテールの姿があった。

　これまでになく飾り気のない白い仮面はまるで、全てを失った〝無〟を象徴するかのようだ。

『…………』

　無言で俯うつむいたまま。仮面越しで表情さえ窺うかがえないが……トゥアールは、無事だ。

『ご覧のとおり、トゥアールちゃんはここにいるわ。トゥアールちゃんは……ね』

　含みのある言い回しが気になるが……トゥアールがそこにいるなら、それで十分だ。反応が探知できなかったのは、居場所を悟られまいとジャミングか何かを施ほどこしているんだろう。

「囚われたトゥアールが裸に剥かれて巨大な試験管の中に漬けられてたらどうしようかと思ったが、ひとまず服は着ておるようじゃな」

「なんでそんなことする必要があるのよ」

　訝いぶかしむブルーに、ブラックはドヤ顔で答えた。

「理由はどうでもよいのじゃ、様式美じゃからな。そんで先端がカップになったチューブを何な故ぜか両乳首とお股につけてじゃな……」

「ブラックちゃん、えっちいゲームの話しとる場合やあらへんよ」

　よくわからないブラックの話を、メガ・ネがやんわりと遮さえぎる。

『あなたたちは、ここが初めから人間のいない平行世界だと思っているかもしれないけど……それは大きな間違いよ』

　俺たちがこの世界に懐いだく感想は予測済みとばかりに、エンジェルギルディは説明を始めた。

『ここはかつて人間の住んでいた地球……れっきとした文明世界よ』

「「「「!!」」」」

　俺たちは全員で一斉に息を呑のんだ。

『数百年前、アルティメギルが最初に侵略した世界がここなの。元々小国程度の人口しかなかったせいもあるけど……それでもたった数百年で、知的生命体が絶滅したのよ』

　俺は思わず空を、大地を凝視した。

『天変地異が起こったわけでも、天敵が繁栄したわけでもない。ただ、エレメリアンに属性力エレメーラを奪われ尽くしたというだけでね。怖いでしょ？』

　こいつ今、世間話程度の気軽さでとんでもなく恐ろしいことを語っているんじゃないのか。

　属性力エレメーラを奪われ尽くした人類が、数百年で種ごと消え去っただと!?

『もっとも、そんなことになったのはまだこの世界ぐらいのようだけれど……非常に興味深いケースだわ。進化した私が研究所を構えるに相応ふさわしい地だと思わない？』

　ブルーは話半ばにウェイブランスを投とう擲てきし、エンジェルギルディの眉み間けんに命中させた。当然、立体映像が一瞬ぶれてすり抜けるだけだったが。

「やっぱ意味ないか……。この世界総ざらいしてでもあんたを見つけ出して、今度は生身にその槍やりをブチ込んでやるわ」

『アハハハ、話は最後まで聞いてよ。手当たり次第に捜す必要はないわ、目印はちゃあんとあるから』

　話の腰を折られたエンジェルギルディだが、気にしたふうもなく続ける。

『この世界が……この星そのものが、私の研究所──私の創つくった、一個の要よう塞さいなのだから』

　その時だった。巨大な地揺れが起こり、大地が波打っていく。

「なんだっ!?」

　すかさず周囲を警戒する俺を嘲あざ笑わらうかのように、周囲そのものが激変を始めた。

「これ、は――」

　俺は一瞬、自分の目を疑った。

　星が、変形していく。

　世界そのものが脱皮をするかのように、岩と砂の地面が崩れ落ち、代わりに巨大な鋼鉄の大地がせり上がってくる。

　一個の乗り物、一戸の建物程度の規模ではない。本当に地の果てまで、いたる所で鋼鉄の増殖が広がっている。床ができあがり、空に届くほどの外壁壁が積み上がっていく。

　ほんの数十秒の間で、俺たちは転移したと錯覚するほどの別世界に立っていた。

『その名も、ビエルプラネット。お気に召していただけた？』

　そう、要よう塞さいだ。もはやこの星全てが、鋼鉄に支配された要塞なのだ。

「猿が自らお山を建てたところで大将にはなれぬぞ、エンジェルギルディ。ついてくる子分が一匹もおらんのではな」

　ブラックは周囲を一いち瞥べつもしようとせず、浮かんだままのエンジェルギルディの立体映像を睥へい睨げいする。

『お山の大将から子分の猿に成り下がったあなたに言われたくはないわね、ブラックちゃん』

「仲間と子分の区別もつかぬお前にならば、いくらでも言うてやるぞ。ん？」

　エンジェルギルディが挑発し返しても、ブラックは動じない。プレッシャーや恐怖を撥はね除のけて、吹っ切れたみたいだな。

　エンジェルギルディはふふん、と鼻を鳴らし、

『今は戦艦を使って世界を移動しているけど……いずれ、世界で世

界に移動することも可能になるかもしれない。ノートの隣り合ったページ同士を合わせるようにね。これもそういう偉大な実験の一部。試運転もまだのβベータ製品だから、テスターがこんなに来てくれて助かるわ♪』

　いつものごとく、聞いてもいないのに用途まで丁寧に語って聞かせてくる。

　エンジェルギルディの多弁は、自分が周囲に評価されない悔くやしさの裏返しなのだろう。

『この要塞の中央ブロック、ビエルセントラルで待つわ。あなたたちが苦しみもがく姿を、トゥアールちゃんと一緒に特等席で観賞しながら……ね』

　自信たっぷりに言うと、エンジェルギルディの立体映像は輪郭がぶれていった。

「待て、エンジェルギルディ!!」

　俺は消えゆくエンジェルギルディに走り寄る。ブルーたちも後に続いた。

　しかし、そうやって俺たちの視線を上に誘導したのは作戦だったようだ。

　唐突に落下感に襲おそわれ、慌あわてて足元を見る。俺たちは、浅黒い沼に腰まで沈んでいた。

　床の一部が、立体映像で擬装されていたのだ。

「いきなりトラップがお出迎えか！」

『たーくさんお出迎えするわよー？　そこは一度足を踏み入れたら決して脱出することのできない魔の泥、「ＢＬ沼」……存分に浸かりきって、そして腐り果てなさい』

　俺たちに挑戦状を叩たたきつけ、エンジェルギルディの立体映像は完全に消え去った。

「ＢＬの在あり方を形にしたってわけか！　けど、俺だってツインテールという名の大海にどっぷわっ！」

　言い返している間に、俺は口くち許もとまで沼に沈んでいた。

「レッドは小さいから、沈むのも速いですわ!!」

　いや、身長のせいだけじゃない。コールタールのような粘度で絡みついてくるのに、真水のようにするっと落ちていく、奇妙な感覚だ。これがＢＬ沼の特性──。

　これほどの速度で沈み、そして沈んだが最後浮き上がれないというのか、ＢＬ……！

「わっ、うっ、けほっ……」

　俺はＢＬ水を飲み込みかけ、思わず咳せき込んだ。

「レッド、あたしに掴つかまって！」

「いいえ、ここはわたくしが!!」

　イエローがおもむろに胸パーツを脱衣パージし、俺を抱き締めてくる。顔に胸が……！

　しかも、ブッ飛んだ胸パーツがＢＬ沼の底に落っこちてったぞ!!

「レッドをわたくしに搭載しましたわ、早く脱出しましょう！
……はぁはぁ」

　俺はもう抵抗する気力も失うせ、なすがままイエローの胸に搭載されていた。

　しかしそのせいで、俺がしがみつく力もなくなったと誤解されたようだ。

「念のために、レッドの頭をアンダースーツの中に固定しま……」

　アンダースーツの胸の部分に、指を引っかけて持ち上げようとするイエロー。

「そこまでしなくていい！　やめ──」

「属性玉エレメーラオーブ──学校水着属性スクールスイム!!」

　俺が固辞するより先に、ブルーが学校水着属性スクールスイムを

発動。真水以外の地面でも水中のように泳げる特性を活いかし、ＢＬ沼を華麗に泳いでいく。

　地引き網の要領で、俺とイエロー、ブラックを抱えた。

「メガ・ネ、回収お願い！」

「りょーかいや！」

　足と背中のブースター機能を全開にして沼を飛び上がったメガ・ネがブルーの手首を掴み、俺たち全員を引き上げることに成功した。

　沼ゾーンを越えて地面に足をつけてそうそう、ブルーは俺に抗議してきた。

「あたしの方が先に手を伸ばしたのに、どうしてイエローの方に掴まったのよ！」

　早かったのはブルーだが、近かったのがイエローだから掴まったんだが……納得していないようだった。

「そりゃ船が沈没していく時、目の前にしょぼい板きれと浮き輪があったら浮き輪の方に掴まるじゃろ……にゃあああああああああああああ!?」

「あんたはここで沈めていくわ……そんなとこばっかりトゥアールに似て……!!」

　ブラックの首根っこを掴つかみ、ＢＬ沼へ落とそうと運んでいくブルー。

　敵は一個の要よう塞さいだというのに……こんな序盤でチームワークを乱すのは、命取りだ!!

「待て待て、次は俺、ブルーに掴まるから！」

「絶対よ？」

　ブルーはいつも変なところでムキになるなあ。自分が頼られてないと思ったのか？

　早くもトラップに引っかかったというのに、次を警戒することもなくブルーはずんずんと前に進んで行く。そんなペースでは、当然──

「……あれ、何か踏んだ」

　地面に違和感を覚えたらしく、足を止めるブルー。

　直後、外壁のあちこちから、長方形型の砲塔がせり出してきた。

　クレー射撃の的のように平たい弾丸が、次々に撃ち出されてくる。

「同人誌ですわ!!」

　射出されたものが何か、真っ先に気づいたのはイエローだった。

　エンジェルギルディがアニメショップで買っていたようなＢＬ本が、唸うなりを上げて飛来。手裏剣じみた鋭さで、鋼鉄の地面に難なく突き刺さっていく。

　半分地面に埋まった本の表紙。そこに描かれたとろけた表情の美男子が、無言で俺を見つめてくる。

　それに気を取られている暇ひまはない。第二波、三波が怒涛のごとく押し寄せる。

　雨あられと飛来するＢＬ本手裏剣を前に、俺たちは回避に徹する。

「ここはわたくしにお任せください！　属性玉エレメーラオーブ──偶像属性アイドル!!」

　イエローが属性玉変換機構エレメリーションで偶像属性アイドルを発動すると、四方八方を飛び交っていたＢＬ本手裏剣が磁石に集まる砂鉄のように軌道を変更。一直線に整列した。

「偶像属性アイドルは、広範囲の攻撃を一点に収束させることができます……自分の攻撃ではなく、相手の攻撃に使えば、こうして……!!」

　イエローは背中の陽電子砲を前面に展開して発射。二本の光線が

ＢＬ本手裏剣を焼き落としていった。まさに一いち網もう打だ尽じんだ。

「ピッグギルディの属性玉エレメーラオーブか！　さすがイエローじゃ、豚さんの能力と相性がいいぞ!!」

　ブラックの賛辞（？）を受けつつ、ついに飛来する全弾を撃墜し終えると、イエローは少年のように目を輝かせた。

「次々に襲おそい来るトラップ……！　わたくし、ちょっとわくわくしますわ！」

　みんなの手前ちょっとと付け加えたんだろうが、ありゃ大分わくわくしてるな。

「エンジェルギルディの奴やつ、どうしてこんなＢＬに特化した迎撃装置を」

　焼け落ちたＢＬ本の破片を見下ろし、俺は嘆息した。

「人間さらって星一個改造って、明らかにやり過ぎだもん。この先、組織から裏切り者認定された時を想定してるんじゃない？　大半のエレメリアンは男人格なんだから、こんなん出されたらどんな強い奴やつもひるむでしょ」

「なるほどなぁ。この要よう塞さい惑星は、アルティメギルから処刑人を差し向けられた時の備えでもあるんやね」

　かつて追われの身になったことのあるメガ・ネが、ブルーの推察に納得する。

　エンジェルギルディの男子愛属性ボーイズラブは、ほとんどのエレメリアンに対して効果的なカウンターになる。これは趣味と実益を兼ねた、一石二鳥の防御策なんだ。

「そして俺たちはそのテスター扱いってわけだ。上等だぜ、βベータテストで畳たたませてやる!!」

「これからどうする、レッド。手分けして偵察し、一番守りの薄いところから攻めるか？」

　立て続けに襲おそい来るトラップを懸念したのか、ブラックが表

情を固くした。

「こっちは司令塔が不在なんだ。色々考えてもしょうがない、シンプルに正面突破だっ!!」

　何より、時間が惜しいしな。多少の危険は覚悟で、最短距離でトゥアールの元へ向かおう。

「それに賛成！　あたし正面突破大好き！」

　今度はブルーが目を輝かせ、先陣を切る。さっきその先走りでＢＬ本が飛んできたけど、全く気にしていないのがいっそ清すが々すがしい。

　俺は横に並ぶイエロー、ブラック、メガ・ネと順に目配せし、後に続こうとした。

　あれ……変だな、ブルーは前を歩いてるはずなのに、横からもブルーがやってくるぞ。

「壁が迫ってくるのじゃ！」

　ブラックが神眼鏡ゴッドめがねのレンズを光らせてぎょっとする。前を歩いていたブルーも振り返り、事態を把は握あくした。

　テイルブルーの胴体が描かれた左右の壁が、俺たちを挟むように迫ってくるのだ。

「なんで壁にあたしの体の絵がプリントしてあんのよおあああああああああ!!」

　怒りの鉄拳が炸さく裂れつし、壁トラップはあっさり機能を停止した。

　そして自分のパンチで壁の胸が凹へこんだのを見て、さらにツインテールを逆立たせるブルー。

　迎撃されるのを見越した精神的トラップか……!!

「ブルーは沸点低いから煽あおってて楽しいじゃろうな、エンジェルギルディ……」

「ぐぬぬ……」

「気持ちはわかるけど、落ち着いていこう。ここはエンジェルギルディの手の内だ、冷静さを失ったらあっという間に術中に嵌はまるぞ」

　ブルーをなだめると、今度は俺が先頭に立って進むことにした。

『目標確認。ツインテールキリオトース、起動』

　しかし一〇メートルも進まないうちに、電子音声がトラップの発動を告げる。

　狭くなった通路の両壁に一条の光が繋つながれ、俺たちへ向かって放たれた。

「レーザーゾーンですわ!!」

　イエローが武装を構え、迎撃態勢を取る。

　今、なんて言った……ツインテールを、切り……？

「──ツインテールを切ろうとするんじゃねえええええええええええええええええええええええええええええええええええええええ!!」

　頭に血が上った俺は、ブレイザーブレイドを取り出した。そしてレーザーが俺たちに触れるよりも早く壁をメッタ斬ぎりにし、装置を完かん膚ぷ無きまでに破壊したのだった。

「わらわたちのリーダー、普段は一番普通なのに突然沸点おかしくなるからビビるわ」

　今回もやはり、ブラックがジト目で俺を見てくる。

　何という冷静さだ。成長したな、ブラック。

「駄目よレッド、冷静にならなきゃ」

「はい……」

　ドヤ顔のブルーに諭さとされ、俺は剣を仕舞った。

　トラップは咄とっ嗟さの判断力が生死を分ける。

戦闘力が高い敵と一対一で面と向かって戦うよりも、ある意味こっちの方が厄介だな。

◇

「……はぁ、はあ……。よくもまあ、こんなにトラップを思いつくもんだぜ……」

音波攻撃をしてくる巨大な音おん叉さを切り捨て、俺は長い息を吐いた。

これで、何十個目のトラップを突破しただろう。焦しよう燥そう感が募つのり始めた。

「いずれアルティメギル基地をブッ潰つぶす予行演習だと思えばいいじゃない」

疲れてはいるだろうが、ブルーは余裕の表情だ。

どうしてもあいつらの基地に乗り込むつもりなのか。

「アルティメギルの基地には、外敵用のトラップなど一つも仕掛けられておらんぞ。みんなどこか抜けてるからのう、自分で引っかかる奴やつが続出するわ」

その光景が目に浮かぶようだ……。

「皆さん、あれを！」

トラップごとに装そう甲こうをこつこつ脱衣パージし、フルブラストしたわけでもないのに脱げる装甲は全部脱ぎきったイエローが、通路の奥を指差した。

ロン毛の男、派手なスーツの男、全身アクセサリーだらけの男。まるでホストのような男たちが十数人整列し、俺たちの行く手を阻むようにして立っている。

「何じゃ、このチャラ男どもは⁉」

「属性力エレメーラで作られた人形みたいやね。けどなんで、人間の形してはるんやろ」

「まさかエンジェルギルディめ、ＢＬ好きのくせに普通の薄い本展開にしようと⁉」

　メガ・ネの分析を受け、ブラックがうぇっと気持ち悪そうにする。

「普通の〝うすいほん〟とは、どういったものなのでしょうか……？」

　イエローがきょとんとしている。俺や桜さくら川がわ先生で、ＢＬ本以外の同人誌は極力慧え理り那なの目に入らないようにしてたからな。

「なるわけないでしょそんな展開、一ページ目で全員ブン殴なぐって終わりよ」

　ブルーは心底下らないものを見るように、拳こぶしをバキバキと鳴らした。

　何の展開かは知らないが、あれはもう一ページどころか一コマで終わらせる気だ……。

「フッ……ここはわらわに任せよ！　セラフィックインフィニット‼」

　ブラックの神眼鏡ゴツドめがねから放たれた∞型の光輪が集束していく。立ちはだかるイケメンと同じ人数の、ビキニパンツ姿のおっさんに実体化した。

「ゆけ！　チャラ男を迎え撃つのじゃ、おっさんたちよ‼」

　ブラックの号令で、おっさんたちがイケメンたちに突進していく。

「んっ……くっ……」

「ぷふぅ～」

　悩ましげない吐と息いきを漏もらす、線の細いイケメンたち。

それにがっぷり四つで組み付く、筋肉モリモリのおっさんたち。

「はぁ……んんっ……」

「むぐぐ……ふほぅ……!!」

両陣営は一歩も譲らず、むしろ負けじと力を込め続け、密着の度合いを増していく。

実体を持った悪夢が、容よう赦しゃなく俺たちのまなこに飛び込んでくる。

助けてください。

マジで助けてください。

「おっさんさんたちが圧おされ始めていますわ!!」

ちょっとずれた敬称でブラックの操るおっさんたちを心配するイエロー。

「今日のわらわは気合いが違うぞ！　はぁ――――っ!!」

しかしブラックは窮地何するものぞと気合い一いつ閃せん、右手を突き出す。

それによりエネルギーが上乗せされたのか、おっさんたちがイケメンたちを押し倒し、プレスするように覆おおい被かぶさっていく。

発光し、対消滅していくおっさんとイケメン。

ひたすら目め眩まいに襲おそわれる恐るべき悪夢だったが、召喚獣（？）対決は、ブラックの勝利で幕を閉じた。

人間を模したトラップは、おそらくエンジェルギルディのアイディアではないだろう。

ブラックが幻覚でおっさんを操るように、人間だからこそ出てくる発想だ。

それに、ツインテールキリオトースというトラップのネーミングも、ずっと引っかかっていたのだ。

──トゥアールの仕事だろう。おそらくエンジェルギルディは自分との共犯関係を強固にするため、いくつかトゥアールにもアイディアを出させたのだろう。

エンジェルギルディに、今一度聞き質ただささなければならない。全てに叛はん逆ぎやくし、その先に何を手に入れるつもりなのか。何な故ぜここまで執しつ拗ように、トゥアールに執しゆう着ちやくするのかを。

「ブラックちゃん、中央ブロックに着いたで！　あれが……ビエルセントラルや!!」

天まで届く試験管を思わせるような、一切の装飾が施ほどこされていない巨塔。

あの地味な塔がエンジェルギルディの歪ゆがんだ科学の象徴なのだから、皮肉なものだ。

「よし、もうひと頑張りね！」

ブルーが入り口のドアを殴なぐってこじ開け、俺たちは一斉に塔の中へと踏み込む。

悪の居城といえば暗くじめっとした闇やみが続く印象があるが、ここは逆だった。

「目が痛くなるな……」

俺は思わず手の平で視界を覆おおった。

塔の内部は基盤や回路のような意匠で形成されており、そこかしこで光が点滅している。

まるで小さくなった身体からだで、コンピューターの中に入ったような気分だ。

「やっほー、テイルレッド！　遅かったじゃん、待ちくたびれたぞ～!!」

あとはエンジェルギルディが待つ最上階へ駆け上がるだけ──そう意気込んでいた俺に、無邪気な声がかけられた。

　おそらくはこの塔最強最悪のトラップ。

　神の一剣ゴー・デイア・ソード・元隊長、アポロギルディが、次の階へ続く階段をふさぐように立っていた。

「お前、何でこの世界に！　エンジェルギルディの件は、俺たちに任せるんじゃないのか!?」

　俺は先ほどブルーの話に出た、組織の追っ手としての役割を真っ先に想像した。

「僕はもうあいつなんてどうでもいいよ。首領様もほっとけって感じだしさ……でも、こんな絶好のバトルフィールドがあるなら、お前を待ち伏せしないわけにはいかないじゃん？」

　この世界でこんな強敵との戦闘を考えていなかったので、一気に緊張感が高まる。

　そうか、こいつ……俺にこの世界の座標を教えたのは、俺と気兼ねなく戦える場所に案内する狙ねらいもあったのか！

　それにもう一体、白いローブをまとった戦士が隣に立っているのも気にかかる。

　俺の視線に気づいたその戦士は、躊躇ためらいなく白ローブを放り捨て、正体を現した。

「よっ、初めましてだな、ツインテイルズ。俺はアルティメギルーのイケメン……ポセイドンギルディさ」

　確かに整った顔立ちをしていると思うが、それにしても自分で言うか。

　しかしその神こう々ごうしい外見は、言葉を重ねずとも強さを雄弁に語っている。

　半魚人……もとい、神性を得た水すい棲せい生物とでも表現すべきか。

　魚の鱗うろこや背びれのような装そう甲こうが、全身各所から禍まが々まがしく屹きつ立りつしている。

　海神がそのまま目の前にいるような、形容しがたい威圧感だ。

「へぇ……うん、なるほど、いいね……」

　ポセイドンギルディは遠えん慮りよのない視線で俺をじろじろと見回した後、勝手に何かを納得して深く頷うなずいた。

「よし、お前今から俺の恋人な。これ、決定事項だから」

　ピストルのように構えた指を俺に向けてくるポセイドンギルディ。ハートを撃ち抜く意思表示だろう、指を跳ね上げ「バン」と一言。

「お断りだ」

　しかし俺のハートは、その見えない銃弾を問答無用で弾はじき返した。

「えっ……なっ……あれ？　ウッソ、マジで……？　マ・ジ・で？」

　回答ボタン押し間違えてない？　みたいな口調で何度も聞き返してくるイケメン。

　エレメリアンはどいつもこいつも、プロポーズしたら相手に受け容いれてもらって当然みたいな考えなのがひどい。

「な、なかなか言うじゃん……恋人が気に食わないのか？　よし！　大サービスで本妻にしてやるよ、これならオッケーだろ？」

「こいつ気持ち悪いな……」

「キモッ……!?」

　俺が無意識に呟つぶやくと、限界まで裏返った声を上げてよろめくポセイドンギルディ。

「キモ……違う、キモくない……俺はイケメン……アルティメギルＮｏ．１のイケメン、イケメンイケメンイケメン……」

　俺たちは早く階段に向かいたくてイライラしてるのに、いちいち言動がねちっこい奴やつだ。

「――イケ、メン」

　ポセイドンギルディは額ひたいの汗を腕で拭ぬぐい、晴れやかな笑顔を浮かべる。

「素直じゃないな、認めさせてやるぜ？」

　そのまま俺の手首を掴つかみ、激しくイラッとするウインクを贈ってきた。

「教育的指導や――――――――――っ!!」

「ジアンッ!!」

　爆走機形態メガネストライカーのメガ・ネに背後から追突され、きりもみしながら吹っ飛ぶポセイドンギルディ。ホント、頼りになるおかんやで……。

「……えっ、なぁにジェラシー感じちゃった？　いいよおいで、子ロボちゃん。俺のものにしてやるぜ？」

　立ち上がる勢いの激しさでノーダメをアピールし、子猫ちゃんみたいなノリでメガ・ネに愛を囁ささやくポセイドンギルディ。

　苛いら立だちが頂点に達していたブルーは無造作にポセイドンギルディの背後へ歩いていき、右足を後ろに大きくしならせた。

　あっ。

「鬱うつ陶とうしいのよアホオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

「うぼあああああああああああイケメンの股こ間かんをサッカーボールキックしやがった!?」

　イケメンイケメンと呻うめき声を上げ、股間を押さえて地面を転がるポセイドンギルディ。

「神のエレメリアンの奴やつらみんなプライド高いから、股間蹴けり上げれば精神的ダメージ大きいみたいね。これからは積極的に股間蹴ってこうと思うんだけど、どうかな？」

　けろっとして恐ろし過ぎることをのたまうブルー。

　こんな提案をされて、俺が「おっし、どんどんやれ！」とサムズアップするような人間に見えるのだろうか。

「あははー、こいつ戦闘力はいい感じだけど、精神性がクソゴミなんだー。許してやってー」

　面倒そうに事態を見守っていたアポロギルディが、ようやく重い口を開く。

　神を名乗ってるエレメリアンの連中は、何で毎回毎回この幼女にフォローされてんだ。

「そんじゃーそろそろ戦やろーぜ、テイルレッド！」

　準備運動をするように肩を回すアポロギルディ。俺と一対一で戦う気満々だ。

「させるわけないでしょ──」

　文句を言おうとしたブルーを阻むように、ポセイドンギルディが起き上がった。

「待ちなよ。アッちゃんとテイルレッドの勝負タイマンを邪魔するってんなら、俺がお前らの相手になるぜ？　おとなしくエッちゃんの元に進むなら、俺も引き下がるけど……どうする？」

「アッちゃんがアポロギルディで、エッちゃんがエンジェルギルディ……？　わかりづら」

「あんたも、そのエンジェルギルディはんを守る気はない──っちゅうことか？」

　眉まゆを顰ひそめて駄目出しするブルーに続き、メガ・ネが念押しをする。

「俺はイケメンだから、女のコみんなの味方してやりてーけど……今回はアッちゃんの方に分があるかなーって思って。今日はただの顔イケメン見せだからさ、ガチで戦やる気はねーのよ」

　ポセイドンギルディは、俺と他のツインテイルズを分断するため

にここへ来たってことか。

「わかった……その勝負受けて立つぞ、アポロギルディ」

　アポロギルディと俺だけが戦うか、こいつら二体と戦って俺たち全員が消しよう耗もうするか。

　この先に一番の目的が控えている以上、考えるまでもないことだ。

「オッケー！　決断の早い女のコは好きだぜ～、テイルレッド！」

　二本指を顔の前でピッと切ると、転送ゲートの中へ消えていくポセイドンギルディ。

　そう言うあいつ自身も、レスポンスがめちゃくちゃ速いな……。

「ブルー、そういうことだ。こいつは俺が食い止める……みんなと一緒に先に行ってくれ」

「でも、一人でそいつを相手にするなんて……」

　やはり、ブルーたちはまだ迷っているようだ。

「こういう時いつも、俺を先に行かせてくれてただろ。今日は俺の番だ」

　不安げな表情をしていたブルーも、俺のその言葉で決心したようだ。

　ブルーがまず走り出し、イエロー、ブラック、メガ・ネも続いて階段へと向かう。

　アポロギルディは一切妨害しようともせず、ブルーたちを素通りさせた。

　こいつはこの塔を守護する気はなくて、ただ俺と戦いたいだけみたいだな。

　──だからこそ、激しい戦いになるだろうが。

◇

「よいのですか、ブルー……レッドを一人にして。アポロギルディは、これまでで最大級の戦闘力を誇るエレメリアンですのに」

　レッドの力は信頼しているが、それでもイエローの懸念は消えない。

　神の一剣ゴー・デイア・ソードの幹部級の力を嫌というほど知っているだけに、当然だ。

「アポロギルディは、強い奴やつと戦いたいだけのわかりやすい奴だもん。レッドはそういう敵との戦いにめっぽう強いし。それにもし最悪、エンジェルギルディの能力で変身解除されても……あたしやイエローまでならまだギリ、何とかなるわ。そーじは危険すぎる」

「ちゃんと考えて任せたんやね、ブルーちゃん」

　メガ・ネに言われ、ブルーは恥ずかしそうに続けた。

「そーじには、エンジェルギルディみたいに歪ゆがんだ奴とあまり関わって欲しくないのよ」

「過保護じゃのう……おかんか、貴様も」

「おかんとか、幼馴染おさななじみとか……曖あい昧まいな関係からは、卒業したいんだけどね」

　階段を登り切った先の部屋の中心では、一体のエレメリアンがフィギュアスケートの選手のような上体を大きく反らしたポーズで立っていた。

「まずはこの戦いを終わらせて、張り合いのあるライバルを取り返さなくちゃ……！」

　ブルーは、そのエレメリアン━ポセイドンギルディの存在は想定内だとばかりに、静かに睨にらみ付ける。ゲートは基地へではなく、わずか一階上のここへの転送に使ったらしい。

「よっ、数分ぶり、テイルブルー！　さっきはナイスキックだったぜ～！」

「ヒェッ……あいつ股こ間かん蹴けられてウキウキしとる……」

　股間キックを爽さわやかに評するポセイドンギルディに、ブラックは怖おぞ気け立った。

「いくら何でも簡単に退却しすぎだと思ってたわよ。案の定、待ち伏せしてたわね」

「ちゃんとお前らの顔見ておきたかっただけさ。そもそも俺、あんま戦い好きじゃねーし」

　臨戦態勢に入るブルーを軽いノリで制止するポセイドンギルディだが、一方でその口くち許もとには言葉とは裏腹に好戦的な微笑が浮かんでいた。

「お前らが全員俺にメロメロになったっつーんなら遊んでやってもいいけど……どうする？」

　今度はブルーが、その遠回りな挑発を受け流す。

「あいにくあたしたち全員、売約済みよ。あたしたちがあんたをお断りする立場だっての」

　嬉うれしそうに口笛を吹くポセイドンギルディ。

　しかし不意に背後を振り返ったかと思うと、股こ間かんを蹴けられてなお崩さなかった爽さわやかな表情を初めて歪ゆがませた。

「おーっと、どの道今日はお預けみたいだなあ……」

　階段を見ながら、妙な独り言を口走るポセイドンギルディ。

「エッちゃんの何が何でも生きたいって執念トコ、可か愛わいいと思って見過ごしてたけど……そんなんしちゃうか～。こりゃあ、首領サマも爆笑モンだわ」

　いや……その階段の先、次の階にある何かを察知しているようだった。

「……それじゃー、エッちゃんによろしくな。できればまた会おうぜ、子猫ちゃんたち」

　著しく低いテンションでそう言い残し、ポセイドンギルディはゲートの中に消えていった。

　その思わせぶりな態度の理由を、ブルーたちはすぐに知ることとなる。

　ポセイドンギルディが見ていた階段の奥から、白いローブをまとったエレメリアンたちが次々と下りてきたのだ。

「……神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士ですわ!!」

　そのほとんどはフードを下ろして貌かおが顕あらわになっているが……戦士たちは、ブツブツと何かを呟つぶやくだけで、胡う乱ろんとした雰囲気をまとっている。レッドが戦った、マーメイドギルディの洗脳を受けた神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士たちにそっくりだった。

「部隊の戦士を洗脳し、最後のトラップとして配置したというわけか……!!」

　全部で七体。横並びに揃そろった白ローブの戦士を睥へい睨げいし、ブラックが軽く舌打ちをする。

　一体だけフードをかぶったままの戦士を残し、六体の戦士がブルーたちの元へと歩を進め始めた。あの戦士がリーダー格だろうか。

「レッドの相手に比べたら大したことないわ。一気に突破するわよ、みんな!!」

　疑問は残るが、意思のない戦士など、まさしく無機質なトラップそのものだ。

　手間取るわけにはいかないとばかり、ブルーは進化装備エヴオルブアームズ・エターナルパッドを手にした。

　イエロー、ブラックも全力で挑む覚悟を決める。

「アブソリュートリング！」

「メガ・ネ、インフィニットコンバインじゃ!!」

　エターナルチェイン、アブソリュートチェイン、インフィニティチェイン。

　三人のツインテイルズは最強形態となり、神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士たちへと対たい峙じする――。

◇

　ブルーたちの姿が完全に見えなくなった後、俺はアポロギルディに最後の交渉を試みる。

「こっちの事情はご存じなんだろ。お前が純粋に俺との真剣勝負を望んでるなら、状況的に俺は万全とは言えないぞ」

　今俺に勝負を挑んでも、この先の戦いを考えて力を配分すると想像がつくはずだ。戦いを楽しみたいだけのこいつなら、もっと後先考えず全力でやれる時の方を望みそうなものだが。

「わかってるよー、僕だってエンジェルギルディがここまで先走るのはちょっと予想外だったんだ。だけどさ、今戦っておかないと……万が一お前がやられちゃったら困るじゃん？」

「そんな万が一ありえないから後で戦う、って言っても……信じてくれないか？」

「ただ強いだけのヤツと戦うってんならそれも信じられるけどさー。ああいうのに免疫ないだろ、お前らってー」

　アポロギルディは口調こそ無邪気だが、時々妙に達観したことを口走る。

　見た目は子供なのに、地獄を潜くぐり抜けてきたような凄すごみを感じるのだ。

「……問答をしている方が時間を食いそうだな」

俺はフォースリヴォンを叩たたき、ブレイザーブレイドを手にした。

「ははっ、話が早いや！　……それじゃ、いくぞ!!」

その威光はまさに、神代武器アーテイフアクト。

煌きらびやかな装飾のなされた短剣ダガーを、アポロギルディは両手に一本ずつ手にした。

散歩に出かけるように一歩、二歩と歩み――虚を突くような高速で、俺の眼前に急迫した。

「ッ……速い……!?」

一振りごとに、大気が燃え焦げてゆく。

炎の残像を宙に刻みながら、アポロギルディは神速の斬ざん撃げきを繰り出してくる。

しかも、一いち斬ざん一斬が実に重い。何とか受け止めているが、気を抜くとあっという間に力負けしそうだ。

「だったらこいつでどうだ……！　チェンジ、ライザーッ!!」

斬きり合いの間かん隙げきを縫ぬって後方に跳躍し、プログレスバレッターをフォースリヴォンに装着。

ライザーチェインに形態変化チエインカスタムした俺は、もう一本のブレイザーブレイドを握り締めた。

刃渡りがまるで違う二対四刀が、それぞれの炎を食はみながら交こう錯さくする。

「お前の速結びもなかなかのもんじゃん！　戦いの最中に髪の毛を結び直すなんて、普通は隙すきが怖くてできるもんじゃない！
よっぽどツインテールを信頼してんだなー!!」

なんだ、この昂こう揚よう感は……。

こいつは自分のことを、確かに幼女属性リトルガールだと言った。

しかし俺のツインテールは──佳よきライバルであるポニーテールを極めた唯ゆ乃のに対して得たものと同じような昂たかぶりを、こいつにも感じ始めている。

それはあのハデスギルディにも、一瞬感じたことだった。

ブレイドを大きく弾はじき上げられ、俺は我われに返った。

今は余計なことを考えている余裕はない。力比べはマシになったが、徐々にアポロギルディの剣速についていけなくなりつつある。

だったら、フォーラーチェインの高速で手数で押し切る！

「チェンジ……フォーラー!!」

「今度は下結びのツインテールかー。けどな、僕もそういうの得意だぜー？」

右は順手、左は逆手に構えたブレイザーブレイドツインで、円の動きでもって連続斬ざん撃げきを見舞う中──アポロギルディの身体からだが、炎で風船を膨ふくらませるように伸長した。

全身のパーツや装飾は全く変わらないままに、幼稚園児が高校生になるぐらいの劇的な体長変化を遂げるアポロギルディ。

「──イレギュラーレングス……!!」

それが変化後の姿の名前なのか。名乗り上げるように呟つぶやいた後、アポロギルディは猛烈な速度で俺に肉薄してきた。

俺の剣は全て一歩先をゆかれ、距離を取るために後退すれば、さらに背後に回り込まれる。

景色がドロドロに溶けて見えるほどの高速の中、じわじわと追いつめられていく。

ついにフォーラーチェインがスピード勝負で競り負け、俺は地面に膝ひざをついた。

「その大人の身体が、お前の真の姿か……身体が大きくなって、逆に速くなるのかよ!?」

　エンジェルギルディの妖よう艶えんな雰囲気とは別に、健康的な年とし頃ごろの女の子という印象だ。

　かと思えば、今度は風船が萎しぼむように元の小さな身体に戻ってしまった。

「この幼い姿が僕の最終闘体だ。スピード全振りしやすいから、一時的に昔の姿を使ってるってだけさ。状況に合わせて姿を変えるのは、お前たちツインテイルズだけじゃないぞ~!!」

　確かに、エレメリアンの形態変化チエインカスタムは強化ではなく進化だ。

　通常の姿か、最終闘体かのほぼ二択。しかも最終闘体はほとんどの場合、一度なってしまえばもう元の姿には戻れない不可逆の変身のはずだ。

　こいつのように、状況に応おうじて形態を使い分けるエレメリアンは初めてかもしれない。

「どんどんいっくぞー!!」

　俺がツインテールを結び直すよりも早く、アポロギルディはこちらへと突撃してきた。

「おおおーりゃあ！」

　アポロギルディは、短剣を無造作に宙に投げ捨てる。

　踏み込みで軸足を地面にめり込ませ、轟ごう然ぜんと回し蹴げりを放ってきた。

「くっ……!?」

　俺は咄とっ嗟さに左腕を上げ、右手で支ささえて顔面をガードする。

　それまでの短剣での斬撃に勝るとも劣らない鋭さで放たれた蹴しゅう撃げきはしかし、ハンマーで打ち据すえるかのような衝撃を俺の全身に叩たたき込んできた。

「ぐあぁっ！」

　俺はガードした体勢のまま吹き飛ばされる。そのままビエルセントラルの壁を突き抜けて、一直線に大地に激突した。

　それでも勢いが止まらずに身体からだで地面を抉えぐり、校庭に白線を引くかのような容た易やすさで何十メートルものラインが鋼鉄の大地に刻まれていく。

「……ぐうっ……重っ……てえ……！」

　ようやく停止した俺は、遥はるか離れたビエルセントラルを見み据すえた。外壁に空あいた大穴から、蹴けり抜いた脚を大きく上げた体勢のままのアポロギルディが見える。

　あんな小さな身体なのに、放つ攻撃の重さは重量級の幹部エレメリアン以上だ。

　ツインテールを中結びに戻す途中、左腕に鋭い痛みが走った。

「ッ……ぐ……」

　たまらずに呻うめく。これは……左腕の骨が折れたな。

「どーした、早く来いよ～！　待ちくたびれちゃうだろー！」

　アポロギルディが待ちきれずに飛来し、俺から少し離れて地面に降り立った。

　俺はすかさず構えるが、アポロギルディはその構えに僅わずかな不自然さを見て取ったらしい。

「なぁんだ、あんな挨あい拶さつ程度の蹴りで左腕イッちゃったのかー。さてはさっきの変身、攻撃力や速度と引き替えに紙装そう甲こうになるなー？」

　おまけに、一目でライザーチェインとフォーラーチェインの弱点を見抜いたか。

　ただの戦闘狂じゃない……一瞬の油断もならない奴やつだ。

「つまんないの。これじゃあもう勝負は──」

　鼻白むアポロギルディ目掛け、俺は炎をまとった左手でパンチを

繰り出した。

「おぉっ!?」

　傷めた左腕で攻撃してきたことが意外だったのか、ガードが間に合わず肩口に被弾するアポロギルディ。

「強がりかぁ？　別にわざと痛い思いすれば攻撃力が上がる属性でもないだろ、お前ー？」

「こんなもん、怪け我がのうちに入らないって言いたかっただけだ。たとえ両腕の骨が折れようと、まずは髪の毛を結ぶ。それが俺たちツインテールを愛する者だ!!」

　俺の気迫ツインテールに圧おされたのか、アポロギルディが息を呑のむ。

「お前すげーな……」

「俺がすごいんじゃない……ツインテールがすごいんだ」

　懐かしい痛みだ。

　ガキの頃ころに道場で愛あい香かと喧けん嘩かして、同じように腕の骨を折られたことがあった。

　あの時は、責任を感じた愛香が俺の風ふ呂ろやトイレにまでついてきて大変だったな……。

　俺の記憶には、いつも隣に愛香がいた。いつもツインテールを見せてくれた。

　俺は、孤独じゃなかった。

　何かある度たびに「こんなことがあったな」と思い出せるような温かい記憶が、ごまんとある。

　だからトゥアールにも、もっともっと思い出をあげたいんだ。

　痛い時、辛つらい時、悲しい時。こんなふうに思い出してそれらを吹き飛ばしてしまえるような、優しい記憶を。

「お前を倒すぞ、アポロギルディ。今の俺に、ここで足踏みをして

いる時間はない!!」

　痛みが稲妻となって巡る左腕を、胸の前で構える。

　光が左手首に集束し、俺のツインテール・ツインテイルブレスへと結晶した。

「ツインテイル！　オンッ!!」

　炎を爆裂させ輝く真の究極のツインテール、アルティメットチェイン。

　俺は最強変身チエインエヴオルブによって加積された背中のブレイザーセイバーを全展開し、アポロギルディ目掛けて射出する。

「飛べ！　セイバ――――ッ!!」

「待ってたぞ！　僕も本気で行くからなー!!」

　アポロギルディは心底嬉うれしそうに破は顔がんし、再びイレギュラーレングスに変身。ブレイザーセイバーを回避するどころか、次々に蹴けりつけ始めた。

「おりゃ――――――っ！」

　平坦な刃やいばの腹ではない。鋭く尖とがった切っ先を蹴り、弾はじき返しているのだ。

　まさかアルティメットチェインのブレイザーセイバーでも無傷なのかと焦あせったが、そうではない。アポロギルディの足には、ところどころにしっかりと炎の斬ざん痕こんが刻まれている。

「あはははは！　楽っのし～！　いいないいな、こんなに小さくて可か愛わいい奴やつが強いなんて、最高だっ!!」

　これほど戦いに取り憑つかれているこいつに、危機感を覚えないのは何な故ぜだ。

　俺がツインテールを熱くさせてきたこれまでの強敵たちのように、自分に近しいものを感じるのは何故だ。

　斬きり結ぶ剣に答えを求め、俺はテイルレガリアを召喚。

　究極双房剣テイルカリバーを完成させ、渾こん身しんの一いち斬ざんを振るった。

「お前と同じ小さな女の子好きな娘こが、この上に囚われている。過去がどうあれ、今はただの女の子だ。『心を奪うからこそ人に危害は加えない』……それが、お前らの信条じゃなかったのか!!」

「その娘こにとって、この世界にいることが本当に『危なくて害になる』ならな～」

　テイルカリバーを二本のダガーで受け止めながら、アポロギルディは鼻を鳴らした。

「エレメリアンってのは、変態だ。よーくご存じだろ～？」

「ああ、うんざりするほどな……!!」

「でも僕は、変態じゃなかった。だから強くなるしかなかったんだ」

　そう微ほほ笑えむアポロギルディに、俺は疎外感のような寂しさを見た。

　変態に限って「自分は変態じゃない」と言ったりするものだが、アポロギルディの言葉には言い訳がましさがない。

「だけどそれが今の俺の話と、何の関係がある!!」

「ちん○ん」

　アポロギルディはテイルカリバーを短剣で弾はじきながら、突然そんなことを言った。

　ぎょっとして身体からだが固まってしまう。

「これが僕の下ネタの限界さ。しょうもないよな、エレメリアンにはちんち○がついてないのに」

「……アポロギルディ……」

　こんなにも切なく、ち○ちんと口にするなんて……。

「僕だって仲間と楽しくわいわい騒いで生きてたかったよ！　でも

僕は下ネタが苦手で、面白い話もできなかったから……真ま面じ目めに仕事するしか取り柄がなかった!!」

　その光景が目に浮かぶようだ。

　アポロギルディは言ってしまえば、可か愛わいい。以前の姿だったというイレギュラーレングスだって、今まで見てきた女性型エレメリアンの中では、もっとも可か憐れんな外見をしている。

　そんな女の子が一生懸命話に交じろうと「ちんち○」と連呼しながら近づいてきたら――。

　妙に気の小さな一面のあるエレメリアンの奴やつらじゃ、戸惑うしかできなかっただろう。

「前に言っただろ……シンプルだからこそ、極めれば強いって。幼女可愛い――そんな当たり前の思いが僕を強くした。そしていつの間にか、最強部隊の隊長になってたんだ!!」

　それでこいつは……幼女のような姿に進化してしまったのか。

「エンジェルギルディが捕まえてきた科学者の女の子に、僕は自分と同じ孤独を感じた！　何があの子にとって幸せなのか、選ばせてあげるべきだと思うぞー!!」

　孤独――こいつもウルフギルディと同じく、トゥアールが孤独だと。

　本当は幸せではないと、そう言いたいのか。

「こんなもんか、究極のツインテール！　少なくともこの程度の力しかないんじゃ、仲間を助けに来るべきじゃなかったなー!!」

　俺はテイルカリバーを構えていた右手を下ろし、代わりに視線を刃やいばと変えてアポロギルディへと放った。

「おっぱい」

「へ？」

「……って、よく俺の友達が言ってるんだけどさ……」

　ぽかんとするアポロギルディに、俺は真顔で言葉を続けた。

「俺さ、正直下ネタとか、エロい話とか……苦手だったんだ」

「過去形かよー、なんだ、今はえろえろなのかー！」

　茶化しながら、天高くダガーを放り投げるアポロギルディ。

　一本のダガーが、シャッフルされたトランプのような動きで無数に分裂。切っ先をこちらへと向ける。

「テイルカリバー！　無限装填アンリミテツドモード!!」

　一斉に迫り来る刃やいばを、俺もまた無数に増加させた剣けん閃せんを放ち迎え撃った。

「いいや、今もまだあまり得意じゃない。……けど、苦手ではなくなった。楽しいんだ、周りでそういうこと言ってるのを聞くのが」

　アポロギルディの言うとおりかもしれない。何が幸せかなんて、本人にしかわからない。

　だけど……俺たちと過ごしたトゥアールの笑顔には、嘘うそはなかったはずだ。

　そして何より……俺が見たいんだ。みんなの笑顔を。

「俺たちは今！　またトゥアールの笑顔を見たいっていう、とびきりの欲望のために戦ってんだよ！　エンジェルギルディなんかに負けるはずがねえだろう!!」

「いい気迫だなー！　ならその欲望がどんだけ強いか、見せてもらおうじゃん!!」

　アポロギルディは不意を突くように、俺の腹に人差し指で触れた。

　刹せつ那な、身体からだが俺の意思とは関係無しに激しい炎を噴き上げる。

「ぐあっ……ああああああああああああ……!!」

　物質発火能力パイロキネシス……イフリートギルディを炎上させ

た、あの能力か！

　炎はいつまでも消える気配がない。まるで、俺の身体の内側から燃え上がるようだ……！

「人間相手には一度も使ったことがない技だ。お前は耐えられるか、テイルレッド!!」

　太陽神の炎は、地獄の業火よりなお苛か烈れつな神罰となって、人間を呑のみ込む。

　燃える……俺の身体が……細胞が……。全てが燃えていく……。

「……まあ、無理だよな。こんなの、人間に使っていいはずがない。究極のツインテールを消滅させてしまうなんて、首領様の命令に逆らっちったことになるのかなあ～……」

　アポロギルディは崩れゆく俺を見まいとしてか、踵きびすを返そうとした。

　しかし、すぐに俺を振り返り、驚きよう愕がくする。

「テイル、レッド!?　燃えてない……!?　いや、耐えているのか……!?」

　一呼吸ごとに炎が弱まり、ツインテールが輝きを増していく。

　俺は次第次第に、内から出いずる炎すらもツインテールに取り込んでいた。

「わざわざ着火してもらうまでもねえよ。俺はとっくの昔に、熱く燃え盛ってるからな……」

　単純な話だった。身体が燃えようが……細胞が燃えようが関係ない。何な故ぜなら──

「この装そう甲こうをまとったその日からずっと……！　俺のツインテールは──灼しやく熱ねつだ!!」

「嘘だろ、何だよそれ……ツインテールって一体、何なんだ!!」

　無邪気に飄ひよう々ひようと戦ってきたアポロギルディが、初め

て大きな動揺を見せた。

「これがツインテールだ！　受けてみろ、アポロギルディ!!」

　究極装填アルテイメツトモードで完全解放ブレイクレリーズし、黄金に染まったテイルカリバー。

　それをさらに、もう一段階完全解放ブレイクレリーズする。

　女神ソーラの祈りによって限界を突破した、真のテイルカリバーだ。

「テイル……カリバアアアアアアアアアア！　超越究極装填ハイパーアルテイメツトモードッッ!!」

　黄金の炎えん刃じんは虹にじ色のオーラをまとい、世界全てを照らす輝きを放つ。

「ゴッドブレイザ────────────────ッ!!」

「ッ……ぐうっ……ああああああああああああっ……!!」

　渾こん身しんの力を込めて振り抜いたテイルカリバーの炎は今、太陽すらも超越した。

　俺は力が抜けそうになるのを堪こらえ、テイルカリバーを杖に全身を支ささえる。

　やがて光が止やむと、小さな影がよろめきながら像を結んでいく。

　胸を押さえながら、アポロギルディは全身を放電させていた。

「これがハデスギルディの言ってた、神殺しのツインテールか……。僕の核の一つにも一撃届かせるなんて、さすがだな!!」

「神殺しなんて物騒な呼び方すんな。けどこれで、お前の心には届いたみたいだな」

「そうだな～、言うだけはあるよ。大した欲望の強さだ！」

　アポロギルディは十分に満足したのか、屈託のない笑顔を浮かべた。

「けどお前がやるべきことは、エンジェルギルディを倒すことじゃない。その限界突破したツインテールには、他に仕事があると思うぜ」

　俺を試していた……なんて考えるのは、厚意的すぎるだろう。こいつはあくまで、俺との戦いを楽しみたかっただけだ。

　それでもその笑顔には、背中を叩たたいて送り出してくるような快こころよさが感じられた。

「それじゃーまたなー！　ばいばーい!!」

　身を焦がし、骨を削るような死闘を演じておきながら、アポロギルディは次の日の遊ぶ約束でもするように無邪気に手を振って去って行った。

　やっと一息つくことができたが、休憩はあくまで一呼吸だけだ。

「せっかく辿たどりついたビエルセントラルが、あんなに遠くに……」

　もっとも、俺とアポロギルディの戦いの余波で、ビエルセントラルまでは真まっ直すぐに道が敷かれているんだ。すぐに戻れるだろう。

「今行くぞ、みんな！」

　トゥアールの笑顔のために戦う。

　アポロギルディに切った啖たん呵かを今一度心で噛かみしめ、ビエルセントラルへと飛ひ翔しようした。

◇

　レッドが死闘を繰り広げている一つ上の階でも、激しい戦闘が行われていた。

　洗脳済みとはいえ、相手は複数の神の一剣ゴー・デイア・ソード

の戦士。ブルーたちは苦戦を強しいられていた。

　余力を残して先に進みたいという焦あせりが、それに拍車をかける。

　速攻の連撃で三体撃破したまではよかったが、それが他の戦士たちを警戒させてしまった。静観を続けるリーダー格の一体を除き、残り三体との戦闘は長引いていた──。

「皆さん、こうなったら先にお進みください！　ここはわたくし一人で──」

　イエローは、パワー自慢と思しきごつい体つきの一体と戦っていた。ヴォルティックブラスターフォートレスを連射して弾幕を張り、仲間たちに階段へ走るよう促うながすが、それぞれの相手の戦士はそれだけは許さないとばかりに攻撃の勢いを増し、彼女たちの行く手を阻む。

「この洗脳戦士どもを一撃で数体倒したとか、無茶苦茶じゃなテイルフェニックスは！　まったく、なんで助けに来んのじゃ唯ゆ乃の！　トゥアールに世話になったじゃろうがーっ!!」

　口調は軽いが、ブラックが手にしたダークネスグレイブメビウスは目にも止まらぬ速度で振るわれ続けている。彼女は速度に長けた敵を一体引きつけ、自分の相手としていた。

「…………」

　何に反応したのか、一体だけ離れて不動を貫いていた戦士がブラックへと向き直った。

　それに気付き不思議に思いながらも、ブルーは目の前の敵へと集中する。上空から一体が振り下ろしてきた剣をウェイブランスエクシードで受け止める。さらにその間かん隙げきを縫ぬって横から拳こぶしを繰り出してきたブラックの相手へは、強引な体勢で蹴けりを見舞った。

「あんたら、それでいいの!?　属性は何なのよ！　好きなものは！　エンジェルギルディにいいように使われて、ムカつかないわけ!?」

　普段はエレメリアンの趣味嗜し好こうにうんざりしているブルー

が、珍しく熱を持った語調で戦士たちに訴えかけている。

　意志持たぬ魔獣ホロウエレメリアン。プログラムどおりに動くイビルツインテイルズ。

　そしてこの自我を奪われた洗脳戦士……。

　エンジェルギルディは、熱く信念を語り合い、切せつ磋さ琢たく磨まし合う仲間など求めてはいない。

　ただ従順に言うことを聞くだけの、「兵器」を欲しているのだ。

　瞬間。階下から凄すさまじい轟ごう音おんが響き、伝わってきた衝撃でこの階の床が軽く波打った。

〈レッドちゃん、とんでもない戦いしとるみたいやね……〉

　ブラックの胸部装そう甲こうとして頭部を合体させているメガ・ネが、不安げにこぼす。

「……あーもう、こんな戦い続けてたらかえって体力消しよう耗もうするわ！　みんな、フルパワーで一気に突破するわよ!!」

　仲間を鼓舞するブルー。敵へ憐れん憫びんを懐いだいている余裕は、今の自分たちにはないのだ。

　同時に跳躍したイエローとブラックを見たブルーは、目の前の戦士の足を槍やりで払い、イエローと戦っていた相手へとぶつけて体勢を崩させる。

「「シンフォニックスマッシュ――――――――――ッ!!」」

　イエローとブラックは、メガ・ネの装そう甲こうを合わせた超合身巨大砲スーパーユナイトウエポンのエネルギーを受け飛ひ翔しよう。ブルーが体勢を崩した二体へと、強烈な同時蹴げりを炸さく裂れつさせる。

　さらにブルーは、巨大な爪つめを振り下ろしてきた残りの一体を見み据すえ、全身から蒼光を放射した。エターナルチェインの全身七箇所の属性玉変換機構エレメリーションが分離し、左腕に結集した。

「属性玉完全解放ブレイクエレメリーズ!!」

　戦闘相手の能力をトレースする、エターナルチェインの秘技が発動する。

　ウェイブランスエクシードの穂先に、蒼あおい光を凝縮させた連刃の爪が形成された。

　それをカウンターで振り下ろし、飛びかかってきた戦士を斬裂するブルー。

　着地したイエローとブラック、そしてブルーが同時に踵きびすを返し、大爆発を背に背負う。

「あとは、そいつだけ……！」

　一体だけ離れ静観していたフードを下ろしていない戦士目掛け、ブルーは即座に突進した。

「□□□□□□!?」

　微動だにしない戦士に違和感を覚え、ブルーは突き出した槍を直前で止める。

　何な故ぜ、何も反応しないのか。洗脳戦士たちは皆、自我はないとはいえ戦闘本能は残っていた。攻撃を仕掛けられれば当然のように反撃をしてきた。

　この白ローブの戦士だけはまるで──倒せといわんばかりに棒立ちだ。

「…………」

　白ローブの戦士が背を向け、悠ゆう々ゆうと上階へ歩き去るのを見ても……ブルーは動けずにいた。

「……あいつ、何かヤバい……。みんな、気をつけて」

　ブルーの冷や汗が伝播したように、イエローとブラックも神妙に頷うなずく。

　戦闘力が高そう、などというわかりやすさはない。もっと本能に

訴えかけてくるような、体験したことのない脅きよう威いを、あの最後の一体からは感じる。

　三人は意を決し、階段へと駆け出す。

　最後の螺ら旋せん階段を登り切った先には、一ひと際きわ大きな扉が構えていた。

　右にツインテール属性。左に、おそらくは男子愛属性ボーイズラブだろう──二つのエンブレムが描かれたその鋼鉄の扉を、ブルーは躊ちゆう躇ちよなく蹴り飛ばした。

　肉厚一メートルはあろうかという鉄板がくの字にひしゃげ、部屋の中へと飛んでいく。

　扉の奥に広がる最後の一室は、球場並みの広大さだ。

　フラスコ、試験管などのクラシカルな実験器具が山ほど積まれたテーブル。

　無数のコンピューターが、モニターが配置された壁や天井。

　わざとらしいまでに「研究所」然とした室内の中心に、エンジェルギルディの姿はあった。

「ようこそ、ツインテイルズのみんな。ビエルプラネットは満喫していただけた？」

　彼女の隣には、先ほどの白ローブの戦士が身じろぎ一つせず立っている。

「つまんないアトラクションだったわね。作った奴やつのセンスが知れるってもんだわ」

　満まん身しん創そう痍いで辿たどり着いた最上階。それでもブルーは、痛快な笑みを浮かべて言い放つ。

「入場料無料の施設に無茶言わないでよぉ。でも、参考にさせていただくわ」

　自慢の要よう塞さいを一笑に付されても、エンジェルギルディは余裕を崩さない。

　髪は先の戦いのように、ツインテールに結ばれている。すでに臨戦態勢のようだ。

「トゥアールさんはどこです！　一緒に最上階にいると言ったではありませんか!!」

　イエローの問いには答えず、エンジェルギルディは緩慢に右手を挙げた。

　それを合図に、隣にいた白ローブの戦士は獣けものじみた獰猛さで跳躍。ブルーへと襲おそいかかる。

「このっ……!!」

　先ほどとは打って変わっての獰猛な動きに困惑しながらも、ブルーは踵かかと落としをカウンターで合わせ、白ローブの戦士を床に叩たたきつけた。

「□□□□□□!!」

　すぐに起き上がり、飛びすさる白ローブの戦士を見て……ブルーは、背せ筋すじを凍らせた。

　今の跳躍が……今の迎撃が、毎日のように繰り返した攻防だと気づいたからだ。

「みんな――――――っ!!」

　レッドの声に、ブルーははっと我われに返る。階段を上がってくるところだった。

　全身ボロボロになっているが、レッドも無事にアポロギルディを撃破したようだ。

　かくてツインテイルズは集結し、エンジェルギルディとの何度目かの対たい峙じを迎えた。

　おそらくは、これで最後となるであろう対峙を。

皆、エンジェルギルディの念入りな妨害工作で限界まで体力を消しよう耗もうしたが、気力はこれ以上ないほどに充じゆう溢いつしている。

ブルーたちと同じように最上階を一望した後、やはりレッドは同じ質問をエンジェルギルディへと投げかける。

「エンジェルギルディ！　トゥアールをどこへやった!!」

「もう……さっきからそればっかりねえ」

エンジェルギルディは、わざとらしく面倒そうに振る舞いながら……その実、おかしくてたまらないというふうに眼めを細めた。

「そこにいるじゃない」

エンジェルギルディが恭うやうやしく手で示した先には━白ローブの戦士がいる。

レッドが、ブルーが、イエローが、ブラックが。一様に言葉を失い、呆ぼう然ぜんと立ち尽くす。

「ギブアンドテイクを持ちかけたのよ。私の研究を手伝う代わりに、延命させてあげるって」

そしてエンジェルギルディは横に一歩動き、自分の背に隠れていた物体を見せた。

まるで雛が孵ふ化かした後の卵のように、何かが這はい出た穴が大きく開けられた、楕円型のカプセルを。

〈━どうして、ここへ来てしまったんですか〉

白ローブの戦士が、初めて口を開いた。

そのくぐもった声はあまりにも冷たく……あまりにも親しんだものだった。

戦士はついに白ローブを脱ぎ、投げ捨てたが……中から現れた身

体からだは、闇やみをそのまま凝縮したかのような底無しの黒だった。

　ただ一点。レッドたちが要よう塞さい突入前に見た、真っ白な仮面を除いて。

　小柄な全身には、鋭い黒のパーツが隆起している。

　まとった白衣の裾すそは漆しつ黒こくに染まり、悪魔の翼さながらにはためいている。

　ようやくトゥアールを助けられると闘志を燃やしていたレッドたちは今、かつてない絶望と直面した。

　目を見開いて戦慄わななくレッドたちへ、エンジェルギルディは最悪の事実を告げる。

「トゥアールちゃんはもう、あなたたちの司令官じゃない。私の仲間──エレメリアンよ」



第六章　Ｔｏ　Ｒｅｂｉｒｔｈ．

　トゥアールは……エレメリアンと人間の合成体のような異形へと変貌していた。

　その変わり果てた姿を見て、俺たちはへたり込んでしまいそうになる。

「どういうことだ……トゥアールにいったい何をした、エンジェルギルディッ!!」

　俺は今すぐにでも飛びかからんばかりの勢いで、エンジェルギルディに叫んだ。

「あなたたちができなかったことを、私がしてあげただけよ。元より私の合成エレメリアンの研究は、人間との戦いで傷ついた同胞を延命させる手段の一つだった。属性力エレメーラを用いた延命処置は、私も自分自身に使ってきたぐらい得意な技術なのよ」

「ふざけんじゃないわよ……何で延命のためにエレメリアンにされなきゃいけないのよ!!」

「エレメリアンの延命技術なのよ？　まずエレメリアンになってもらうのが当然じゃない」

　ブルーの詰問へ、エンジェルギルディは顔色一つ変えずに返す。

「生き物の活性体シルエットじゃない異端だけど、今のトゥアールちゃんは仮面エレメリアン……ペルソナギルディ、ってところかしら」

　そしてしたり顔で「ペルソナギルディ」と名付け、満足げに笑った。

「エレメリアンになって延命だと……!?　トゥアールは、そんなこと望んじゃいない!!」

　あれだけエレメリアンを憎んで、孤独に戦い続けてきたトゥアールを……よりにもよってエレメリアンにしちまうなんて……こんな

残酷なことがあってたまるか!!

「だから言っているでしょう……私はあなたたちよりもトゥアールちゃんを理解しているって。この娘は生きたいと願っているし、自分の口で私にそう言った……私はそれを叶かなえただけ」

　俺の批難を真顔で切って捨て、悪魔の信念を豪語するエンジェルギルディ。

　俺たちの誰だれもが想像すらできなかった事態に狼ろう狽ばいし、立ち竦すくむ中。

〈大丈夫や！　トゥアールはんはまだ、完全にエレメリアンになってへん！〉

　ブラックに合体しているメガ・ネが、檄げきを飛ばすように分析結果を伝えてきた。

〈属性力エレメーラのカタマリを身体からだにまとっとるだけ……ウチの着ぐるみと同じようなもんや!!〉

「よかった……！　つまり、エンジェルギルディを倒せば助けられるってことだな!!」

　安あん堵どする俺やブルーたちを見て、鼻白むエンジェルギルディ。

「よくないわよぉ。エレメリアン化の進行を止めたら、もうトゥアールちゃんに生きる術すべはないのよ？　綺き麗れい事を言うのはいいけど……あなたたち、一つの生命いのちに責任を持て──」

「──いいからトゥアールを返せ」

　俺はエンジェルギルディの演説を遮さえぎり、眉み間けんに稲妻を走らせた。

　こいつの持って回った口ぶりには、いい加減うんざりだ。

「わお、すごい殺気♪」

　エンジェルギルディを捨て置き、ペルソナギルディへと視線を送る。

ペルソナギルディ、だなんて認識したくはないが……あの姿をトゥアールだと認めることはそれ以上に、彼女への侮辱になってしまう。そう自分に言い聞かせた。

先ほどブルーに攻撃したのが見えたが、あれは「もう自分に関わるな」という拒絶だったのではないか。今は、また沈黙を守っている。

俺たちはトゥアールをずっと見てきた。俺たちがどれだけエレメリアンに心を許しても、トゥアールだけは一貫してエレメリアンに心を許そうとはしなかった。

エレメリアンに助けられた時も、トゥアールはその優しさゆえに苦悩し、心を痛めていた。

何があろうともエレメリアンを憎むことが、守れなかった故郷の世界への贖罪だと。

自分へ言い聞かせているかのようだった……。

彼女が生きるためにエレメリアンになる道を選ぶなど──絶対に考えられない。

エンジェルギルディに、どんな悪あく辣らつな脅迫をされたというのだ。

「たとえ綺き麗れい事と罵ののしられようと……トゥアールを人間に戻す。そして俺たちの世界で、俺たち全員で生命いのちを繋つなぐ方法を考える。お前の出る幕はない、エンジェルギルディ!!」

「ああそう。それだけボロボロの身体からだでも、インドア専の研究者が相手なら勝てると思っているわけね。ちょっとムキになっちゃおうかしら──」

言い終わると同時に、エンジェルギルディは全身から膨大な光を放出していた。

「みんな、俺の後ろに下がれ！　テイルカリバー、覚悟装填レゾリユードモード!!」

俺は咄とつ嗟さにテイルカリバーを盾たて型の防御形態に変形させ、迫り来る破壊波動から仲間たちを防護した。激しい衝撃が打ち

据すえられ、俺の身体を軋きしませせる。

　攻撃が止やむ頃ころには、最上階の天井と壁が木こっ端ぱ微み塵じんに吹き飛んでいた。

　部屋には大おお仰ぎような機械や実験装置がいくつも置いてあったが、それらも全て消し飛んで無くなっている。今や、部屋全体がくすんだ空に晒さらされている。

　ペルソナギルディは……バリアーのような力場を展開しており、無事だ。

「さすがは元引き籠こもりよ。唐突に強大な力を手にしたせいで、加減が全くわかっておらん」

「十分加減したつもりよ？　もっとも、ここからはどうなるかわからないけれど……!!」

　ブラックの批難を軽く受け流し、エンジェルギルディは手に巨大な杖を握った。

「さあ、出番よ……〝聳え立つ禁忌の象徴ブリユーナク〟」

　先端が十字で、柄え尻じりが槍やりのように研ぎ澄まされたその杖は、天使が人間を祝福するために掲げる神聖な儀仗を思わせた。

「有能な助手をいきなり失ったら、元も子もないわ。ペルソナギルディちゃんはそこでおとなしくしていて。私はちょっと本気になって、このコたちを追っ払ってあげるから──」

　エンジェルギルディが杖を俺たちに向けるや、先端から飛び出したのは黒い雷だった。

　天使の純白と相反するおぞましいまでの黒色が、枝分かれするように拡散する。

　俺たち四人は散開し、カリバーを、ランスを、ブラスターを、グレイブを──それぞれの武装を振るって雷を捌さばいていく。

　互いの攻撃が激突し発生した爆炎が、視界を覆おおい隠した一瞬。

炎を突き抜けてきた無数の細い綱が、俺の身体からだに巻き付いた。エンジェルギルディのツインテールの右の束が伸び、拘束具と化したのだ。

「レッド！」

ブルーたちには左の束が分かれて伸びていき、それを捌くので手一杯になっていた。

俺の全身を容よう赦しや無く締め付けてくる髪の毛。間近で見ると、一本一本が太く、光の線が無数に行き交っている。それは髪の毛というよりも、強きよう靭じんなケーブルだった。

手にしたテイルカリバーで戒いましめを断ち斬きろうとした瞬間、俺は本能に突き動かされるようにして腕を止めてしまった。

「ほら見てペルソナギルディちゃん。やっぱりテイルレッドちゃんは元仲間のあなたを助けることより、敵であろうとツインテールの方が大事なのよ！」

堕だ天てん使しは俺とペルソナギルディとを交互に見やりながら、せせら笑うように言い募つのる。

「──というより……ツインテールではないから、あなたは大事にされないのかしら？」

その許されざる戯ざれ言ごとに、俺が目を血走らせた瞬間。

さらに猛獣じみた眼光が俺の傍かたわらを疾はしり抜け、エンジェルギルディへと肉薄する。

「っく……!!」

エンジェルギルディは呻うめき声を上げ、火花を散らすツインテールを手で押さえる。ブルーのウェイブランスエクシードに頭部を一いつ閃せんされたのだ。

ツインテールは両断されなかったが、留とめ具が砕けて髪がはらりと垂れ落ちた。

「レッドは知らないだろうけど、あたしは戦ってる最中に盾たてにしたツインテールごと蹴けったりもしてるから。こういう手合いは

あたしたちに任せておいてよ」

　だ、誰だれのことだろう。比喩でなくツインテールを盾にするなんて、ツインテールを自在に扱えるロロリーぐらいしか知らないが……ブルーがあの子と喧けん嘩かするはずはないし。

「そのツインテールを盾にした奴やつにも言ったけど……勝つためには何でもやるのは別に当たり前のことだと思うし、好きにすればいい。ただその上で、一線を超えたらブッ飛ばすってだけ」

　イエローとブラックも、俺をかばうように前へと進み出る。

「エンジェルギルディの言葉に心を痛める必要はありませんわ、レッド。たとえツインテールにしても理解及ばない考えの方もいる……わたくしはそう納得いたしました」

「難しく考えるな。レッドはレッドのやり方でよいのじゃ。トゥアールを助けたいあまりツインテールを裏切ったりしたら、それこそトゥアールに顔向けできまい」

「……ありがとうみんな……俺は大丈夫だ」

　自分に言い聞かせるようにそう応こたえた。ツインテールを悪用するエレメリアンに動揺してしまっていることには弁解の余地も無いが……今の俺が最優先すべきは、トゥアールの奪還だ。

「絵に描いたような悪役ムーブご苦労なことじゃが……無理しておるのではないか？　一度ツインテール属性を捨てて、生命いのちを危険に晒さらしてまで力を得た貴様が、ようやく取り戻したツインテールをぞんざいに扱うのはな」

　今度はブラックが挑発めいた口調で詰問するが、

「どんなに好きなものでも、周りが熱くなりすぎているのを見ると……妙に冷めちゃうことがない？　私にとって、ツインテールがそれだったんだけど」

　エンジェルギルディは余裕の顔で受け流した。

「アルティメギルってね、ツインテールを愛する組織なのに肝心のツインテール属性を持つエレメリアンはあまりにも希少なのよ。だから、持っちゃうとプレッシャーが半端ないのよね。ツインテール

属性の戦士は強いはずだ、優秀で当然だ、って……」

　ブルーに髪留めを破壊された左だけでなく、今度は右の髪留めを自ら外し、ツインテールを完全に解ほどいてしまうエンジェルギルディ。

　それはやせ我慢のポーズなのか、それとも本人の弁の通り本心なのか。

「そのくせ、自分たちは毎日毎日楽しそうに馬ば鹿か騒ぎ……。その頃ころだったわ、私が首領様と同じ領域を目指して、自分のツインテール属性を捨て去る決心をしたのは」

　トゥアールと同じように自らのツインテール属性を捨て去った存在でありながら、その理由は真逆と言っていい。

「周りの戦士たちが妬ねたましくてね……彼らを脳内でカップリングすることが、ささやかな心の支ささえだったの。そのうち私の中で、元からあった男子愛属性ボーイズラブが確固たるものに結晶していたわ」

　腐ふ腐ふ腐ふ……と邪悪な含み笑いを浮かべるエンジェルギルディ。

「あなたの大好きなドラグギルディ君だって、頭の中でさんざん子猫にしてあげたわ!!」

　俺は、ドラグギルディがあの精せい悍かんな声で「にゃーん」と鳴いているのを想像する。

　……似合わないとは思うけど、この程度のことを何な故ぜそんな邪悪な顔で？　俺がショックを受けるはずがないだろうに……。

「そんな私に今さらツインテール属性が戻ったところで、『とっても使える手札が一つ増えた』程度の認識よ……だからこそ、私は誰だれよりも強い。愛するツインテールを、躊躇ためらいなく道具として運用できるのだから」

　アポロギルディは孤独を素直に認めていた。寂しかった。仲間に入りたかったと。

　だけどこいつは、自分が孤独だと認識することすら屈辱だったん

だ。

　俺の訝いぶかしげな顔を見て、エンジェルギルディは皮肉めいた苦笑を漏もらした。

「君みたいな強くて才能に溢あふれた人気者にはわからないか、こういう醜みにくい屈折した感情は」

　とどのつまりこいつは、誰だれかに八つ当たりがしたいだけかよ。

「俺だって聖人じゃないんだ、自分のツインテール属性のせいでしんどいとか辛つらいとか思ったことは一度や二度じゃないよ。……けどな、消えちまえなんて思ったことは一度もない」

　だって……それ以上に、ツインテールで溢あふれた世界が楽しいから。

「お前みたいなツインテールもいると知って、ショックなのは事実だけど……俺は変わらない。大好きなツインテールへの思いを、仲間と分かち合う。もちろん、トゥアールも一緒にな」

　エンジェルギルディはやれやれと肩を竦すくめると、その直後に俺の眼前に急襲。

　狂気の笑みを浮かべながら杖を振りかぶった。

「……君は十分聖人よ、レッドちゃん。だからこそ研究対象としてつまらないのよ──!!」

　テイルカリバーと〝聳え立つ禁忌の象徴ブリユーナク〟が激突し、火花を散らす。

　何が癪しやくに障さわったのか、珍しく感情的に攻撃をしてきているな。

　こいつは武器の扱いも素人しろうとだ、見切って捌さばくのも難しくはない。

「完全解放ブレイクレリーズ！　テイルカリバー究極装填アルテイメットモード!!」

　エンジェルギルディを杖ごと押し切って大きく体勢を崩した隙すきに、俺は残された力を全てテイルカリバーへと結集させた。

　しかし地面に手をついたまま杖の先をこちらに向け、エンジェルギルディはあり得ない言葉を口にした。

「──完全解放ブレイクレリーズ」

　手にした〝聳え立つ禁忌の象徴ブリユーナク〟の先端が拡張し、十字の先端がリングに囲まれる。

　全力を武器に乗せるための変形……完全解放ブレイクレリーズだ。

「エレメリアンが……完全解放ブレイクレリーズしただと⁉」

「言ったでしょう、私はテイルギアを取り込んだって……あなたたちにできて私にできないことは、もうないわ」

　仮に真ま似ね事程度はできたとしても、武器をろくに使いこなせていないこいつではハッタリ程度の技にしかならないはずだ。

　俺はにわかに湧いた動揺をかなぐり捨て、テイルカリバーを振り下ろした。

「ファイナルブレイザー─────────────ッ‼」

　俺とは対照的に、エンジェルギルディは無言で〝聳え立つ禁忌の象徴ブリユーナク〟から黒い光線を発射。

　ねじれ、渦うずを巻き、膨張した光線は、ついにファイナルブレイザーと同等の出力にまで成長。正面から激突し、激しい爆発を巻き起こした。

「うぐっ……！」

　衝撃波がしたたか身体からだを打ち、俺は苦く悶もんの声を上げる。

　身体から急速に力が抜け落ちていくのを感じ、懸命に最強変身チェインエヴォルブを維持し続けた。

「ひぇぇ、とんでもない威力。これのもう一段上があるなんてぞっとしないわね。私と戦う前に力を無駄遣いしてくれていて、ラッキー♪」

　同等のダメージを受けたはずのエンジェルギルディは、喜き悦えつに声を弾ませる有様だった。

　だがその激突の甲か斐いあって、エンジェルギルディは〝聳え立つ禁忌の象徴ブリユーナク〟を取り落としている。勝機を得たと神眼鏡ゴツドめがねを輝かせるブラック。

「一人で足りぬなら三人同時じゃ！　ゆくぞ!!」

　ブルーとイエローが同時に頷うなずき、一斉に飛び出す。

「「「完全解放ブレイクレリーズ！！！」」」

　ブルーは疾走しながら一直線に槍やりを突き出し、ブラックは猛然と矢を射出。イエローは上空からの蹴しゆう撃げきで強襲し、完かん璧ぺきな包囲網が完成した。

「エクストリームウェ――――――イブッ!!」

「インフィニットバニッシャ――――ッ!!」

「コズミックジャッジメント――――ッ!!」

　必殺の同時攻撃を前に唇くちびるを歪ゆがませるエンジェルギルディを見て、俺は言い知れぬ不安に襲おそわれた。

「――――そう来るのを待っていたわよ」

　瞬間、地面に落ちていた〝聳え立つ禁忌の象徴ブリユーナク〟が意思を持ったように屹きつ立りつ、先端から目が眩くらむほどの光を拡散放射した。

　ブルーたち三人それぞれの眼前に、極彩色のゲートが出現する。

　勢い余ってゲートに突っ込んだブルーは、イエローの斜め上に。イエローは蹴撃の体勢のまま、ブラックの背後に。ブラックの矢は、ブルーの真横に。

　エンジェルギルディの調略でまんまと転移されたブルーたちは、悲鳴を上げながらそれぞれの必殺技をその身に浴びていった。

「みんな――――――――――っ!!」

　絶叫する俺を尻しり目めに、エンジェルギルディは一仕事終えたとばかりに両手を払った。

「さあ、これでツインテイルズは一丁上がりってところかしら？」

　幹部級のエレメリアンには力を合わせて挑むことが多いし、イビルツインテイルズ戦はその極めつけだった。俺たちの連携は、完全に対策されていた。

　こいつはずっと、ツインテイルズを同士討ちさせる機会を窺うかがっていたんだ……!!

「これで、ようやくあなたたちとまともにお話できそうね……」

　エンジェルギルディは余裕たっぷりに微ほほ笑えみ、俺たち全員に視線を送る。力を使い果たした俺と、大打撃を受けて地面に倒れ伏したブルーたちに。

「単刀直入に言うわよ。――この辺で、手打ちにしない？」

　唐突に和平を切り出された衝撃で、俺たちは一様に言葉を失う。

「私、こんな戦いに裂さく労力も時間もないのよ……大きな目標があるから」

「……ここまでして叶かなえようとする目標って……いったい何なんだよ……」

　俺は覇は気きの無い声で聞き返す。

「私は全異世界を創つくり変えたいの。全ての元凶である、ツインテール属性を消すことでね」

「ツインテール属性を……消す……!?　そんなことをしたら、あなたは!!」

　よろめきながら絞り出したイエローの言葉を遮さえぎり、エン

ジェルギルディは続けた。

「今あるツインテール属性じゃないわ。この先、二度と世界にツインテール属性が生まれないようにするのが私の目標よ。それをここで、ペルソナギルディちゃんと一緒に研究するの」

　こいつ……ツインテール属性を持ったがあまり組織でつらい思いをしてきたと告白してきたが……ここまでぶっ飛んだ思考の持ち主だったのか。

　あまりにも現実を見ていない野望を聞き、俺は怒るよりもただ動揺してしまっている。

「ば、馬ば鹿かな……！　正気か、エンジェルギルディ！　貴様のその野望、曲解しようもなく……組織にとっての最大の罪じゃ……！　全エレメリアンを敵に回すことになるぞ……!!」

「あんた……自慢の妄想癖までおかしな方向に進化させたんじゃないの……!?」

「馬鹿なのはあなたたちよ。エレメリアンと人間、いつまで飽きもせず戦いを続けるつもり？　全てはツインテールが元凶でしょうに……それを、誰だれも何も変えようとはしない」

　ブラックやブルーに問い詰められ、エンジェルギルディは嘆息した。

「子供を産み、次代に願いを繋つなげるあなたたち人間と違って、私たちエレメリアンは自分で何かを成さなければ永遠にくだらない宿命に囚われ続ける。けれど力のない戦士では、変化を求めることすら叛はん逆ぎゃくになる。だから私は生命いのちを賭して力を手に入れた……全てを変えるために」

　エンジェルギルディが、これほど揺るぎない信念を持っていたとは……。

　確かに俺たちは、こいつを見くびっていたのかもしれない……が。

「……お前が自分の運命を変えようと足あ掻がいているのはよくわかった。けどそのために俺たちの愛するツインテールを滅ぼそうとするのは許さないし……何より!!」

　俺は膝ひざをつきかけた足を奮ふるい立たせ、エンジェルギルディへと猛たけりを上げる。

「そんなに全てを変えたきゃ、一人でやれ！　トゥアールを巻き込むんじゃねえ!!」

　思いを同じくするように、ブルー、イエロー、ブラックも立ち上がった。

「……私もよくわかったわ。あなたたちとわかり合うのは無理だって……。それじゃあ後は、ペルソナギルディちゃんにお任せしようかしら？」

　弱り切った俺たち四人を順繰りに見た後、エンジェルギルディはペルソナギルディへと試すような流し目を送った。まるで、人間と決別する覚悟を問うているかのように。

〈……エンジェルギルディの言うとおりです。私は死にたくない〉

　ペルソナギルディは仮面越しのくぐもった声で、淡々と語り始めた。

〈エレメリアンを滅ぼすという悲願を果たすためには、絶対に死ねない。そのためならエレメリアンと手を組むし、エレメリアンにだってなります。……これが私の辿たどり着いた結論です〉

　その告白は、「無理矢理さらわれた仲間を助ける」という目的に向かってこの要よう塞さいを踏破してきた俺たちを呆ぼう然ぜん自失とさせるには──十分すぎるほどに衝撃的なものだった。

　迫り来る死の恐ろしさは……俺も経験上、誰だれよりもわかってるつもりだった。

　けれど、俺たちが幼女だ何だと騒いでいる影で、君はそこまで思い詰めていたのか……。

〈私と戦ってください、皆さん〉

　ペルソナギルディは、全身から属性力エレメーラを立ち昇らせた。

　エレメリアンとしての戦い方を本能で察したように、その闘気に

は一片の淀よどみもない。

　悲壮な宣戦布告を前に、起き上がったばかりのブルーたちは再び足を震ふるわせている。

〈……できないのでしたら……エレメリアンとして、遠えん慮りょなくあなたたちからツインテール属性を奪います。ブレスも回収して、テイルギアをより効率のいい〝兵器〟として運用します〉

　属性力エレメーラ奪取のリングを手にし、俺たちの前に立ちはだかるペルソナギルディ。

「……トゥアール……そんな、嘘うそだ……嘘だろ……」

　一番の誇りであるテイルギアを、エンジェルギルディと同じく〝兵器〟と貶めるなんて。

　君の故郷を滅ぼした憎しみの象徴ですらあるだろうそのリングを、自ら手にするなんて。

　本当に……心までエレメリアンになってしまったというのか。

　俺は頭が真っ白になり、心臓の鼓動まで停とまったかのように立ち尽くす。

　視界の隅で満足そうに何度も頷うなずいているエンジェルギルディが、絶望を煽あおる。

〈……本当に甘いですね〉

　ペルソナギルディは、そんな俺の前でゆっくりと腕を振り上げた。そして──

〈──エンジェルギルディッ!!〉

　即座に反転し──エンジェルギルディへとリングを叩たたきつけた。

　その行動に、今度はエンジェルギルディも含めたその場の全員が唖あ然ぜんとすることとなった。

　……まさか。まさか……ペルソナギルディは…………このために

演技を!?

　だが属性力エレメーラ奪取のリングが身体からだを潜くぐり抜けても、エンジェルギルディに変化は見られない。初めはぽかんとしていたが……事態を呑のみ込むにつれ、堪こたえきれずに笑い声を上げ始めた。

「～～！　そういうことだったの!?　いっや～すごい演技力、まんまと騙だまされちゃった……。今のは本っ当にビックリしたわ。使ったのがそれじゃなきゃ、あなたの勝ちだったわね!!」

　リングを見ながら、他ひ人と事ごとのように感心するエンジェルギルディ。

「……そのリングね、人間にしか効果がないのよ……残念でした♪　アハハハ……!!」

〈………………そん、な……〉

　失意のあまり、手にしたリングを落としてしまうペルソナギルディ。

　そういえば、唯ゆ乃のが言ってた……属性力エレメーラ奪取のリングは、元はペガサスギルディの発明だが……制式採用されている現在のものを開発したのは、マーメイドギルディだと。

　トゥアールは、ペガサスギルディの遺のこしたデータだけを見て作戦を考えたんじゃ……。

「アハハ……いくら私だって……ねえ？　エレメリアンにまでなるのを見たら、あなたを信用するわよ！　そこまでして私を倒したかったなんて……アハハハハ……最高よぉ!!」

　この一撃……この一瞬に全てを懸けるためだけに、トゥアールはこんな姿になったのか。

　ここまで悲壮な決意で、エンジェルギルディへと一いつ矢し報むくいようとしていたなんて……!!

　そしてエンジェルギルディは、その全てが無駄だったと断じるように、ただ笑い続けた。

〈エレメリアンになって延命できるなんて、ハナから信じちゃいません！　だったら一番ムカつくエレメリアンを、復ふく讐しゅうの締めに地獄の道連れにしてやります!!〉

　ペルソナギルディは、身体からだごとぶつかるようにエンジェルギルディへと突進していく。

「声が震ふるえてるわよ、トゥアールちゃん」

　もはやペルソナギルディとすら呼ぶことなく──エンジェルギルディは緩慢に腕を薙ないだ。

　軽い衝撃波を叩たたきつけられ、ペルソナギルディがたたらを踏む。

「トゥアール!!」

　衝撃波の余波でペルソナギルディの仮面の左半分に亀裂が入り、破片が崩れ落ちる。

「強がらなくていいのよ。そんな仮面で素顔を隠したところで、あなたの心までは隠せないわ。復ふく讐しゅうに生きることでしか自我を保つことができなかった、弱い心は!!」

〈……弱、い……。そう、かもしれない……。私は復讐を誓っておきながら、仮面を被かぶらなければエレメリアンに向き合うこともできない、弱い人間です……〉

　砕けた仮面の中に覗のぞくトゥアールの瞳ひとみは……変わらぬ彼女の心そのままに、まだ人間のままだった。それが、無念に打ち震えている──。

「復讐心で得られる強さなんて、たかが知れてる。だから死んだのよ、結いわ翼ばね唯ゆ乃のちゃんも」

　世間話じみた気軽さで口走られたため、一瞬ではその言葉の意味を理解できなかった。

　何を。エンジェルギルディは今……何を言った？

〈あ、そ、そんな……そんな……!!〉

　子供のようにいやいやと首を振るペルソナギルディを見て、ようやくブルーが反応する。

「……唯乃、が……？　あんた、何言ってんのよ……あいつ、不死身なのよ!?」

「死・ん・だ、のよ。首領様と戦って返り討ちにされて……ね。私はこの目で見届けたわ」

「嘘うそじゃ……ゆ、唯乃が……し、死ん……だ……？」

「ブ……ブラック！」

　よろけて倒れそうになるブラックを、イエローが支ささえる。しかし彼女もまた、動揺を隠せていない。武装を脱衣パージして露あらわになった全身の肌が、蒼白になっていた。

〈どうして……言わないって約束したのに！　どうしてええええええええええええええええええ!!〉

「私に嘘ついたのはあなたの方が先だもの。これでおあいこでしょう？」

　もはや偽いつわりの自分を演じることすらできず、ペルソナギルディは崩れ落ちた。

「ああ、でもよかったわねトゥアールちゃん♪　あなたのテンパり具合の方が気になって、思ったほどショック受けてないみたいよ、ツインテイルズのみんな」

　あまりにも突然すぎて……現実感がなさ過ぎて、受け止め切れていないだけだ。

　けどこいつの言うとおり、俺たちは皆、ペルソナギルディの絶叫で全てを悟った。

　唯ゆ乃のの死を……俺たちに黙っている。そうやって脅迫されていたのか──。

「ッ……あいつが……唯乃が死ぬわけないだろう！　騙だまされるなトゥアール！」

　トゥアールだけでなくブラックたちに、何より自分自身に言い聞かせるよう、俺は叫んだ。

「俺は首領と戦った後の唯乃と、精神世界で逢あった……あいつは絶対に生きてる!!」

　正直、怖い。あれほど義理堅い唯乃が、事ここに至るまで療養という名目でずっと俺たちの前に姿を現さない理由は……本当は死んでいたから……と言われれば、納得しかけてしまう。

　けれど俺は、あの時唯乃と交わした約束があるから──希望を信じられるんだ！

「……そ、そうじゃ……そのとおりじゃ！　わ、わらわも、レッドを信じるっ!!」

　目め許もとに涙を湛たたえながらも、ブラックも続いた。彼女も怖いだろうに……それ以上に、トゥアールが抱かかえ続けてきた苦しみを理解したのだ。

「ちぇー。あっさりバラして正解だったわ……つまんない、レッドちゃんたちの反応」

　遊びが一つ失敗に終わったとばかり、口を尖とがらせるエンジェルギルディ。悲しみを懐いだく暇ひますらなく湧き上がる怒りを力と変え、俺たち四人が再び戦おうとした、その瞬間。

〈──あうっ……ぐ、ううううう……!!〉

　ペルソナギルディの全身が、粒子化を始めた。俺が見た腕だけの時とは、比較にならないほどの勢いだ！

「心が完全に折れてしまったのね、トゥアールちゃん。自分で自分の寿命を縮めるなんて……仕方がないわねえ。私もちょっと意地悪だったから……お詫わびに臨時ボーナスをあげるわ」

　エンジェルギルディは苦しみ喘あえぐペルソナギルディを見やり、自分の右手首に填はめていたテイルブレスオルターを何の躊ちゆう躇ちよもなく外してしまった。

　それに合わせ、粘菌のようにブレスに凝着していたツインテール属性の属性玉エレメーラオーブが奴やつの体内へと沈んでいく。困

惑する俺に、嬉き々きとして説明するエンジェルギルディ。

「ああ、大丈夫よ。テイルギアのシステムは完全に身体からだに取り込んでいるから……私にとってこれは、もうただのアクセサリーに過ぎないの」

　言葉通り、ブレスを外してもエンジェルギルディの外見に変化はない。トゥアールが造った時のままの、ぽっかりと穴が開いた灰色のブレスを、手の平の上で弄もてあそんでいる。

　エンジェルギルディはそのブレスを──突然、ペルソナギルディへ向かって投げつけた。

「っ……ああああああああああ!?」

　ブレスがペルソナギルディの胸に当たると、体内に吸い込まれるように沈み込んでいく。身体の粒子化は止まったが、今度は全身から禍まが々まがしいまでの黒い光が噴き出し始めた。

「何だ……何をしやがった!!」

「そのテイルブレスオルターには、私の科学の結晶を埋め込んでおいた……今度こそ、完かん膚ぷ無きまでにエレメリアンになれるわよ。演技なんてする必要もなく……ね」

　俺の叫びを一笑に伏し、満足げに薄ら笑うエンジェルギルディ。

〈あ、あああああああああああ……あああああああああ────っ!!〉

　産声と呼ぶには、あまりにも悲痛な咆ほう哮こうを上げるペルソナギルディ。

　トゥアールの理性が今、音を立てて砕けていくのを感じる。

　振り返ったペルソナギルディの仮面から覗のぞく目は──機械のランプのように、無機質で鋭い赤色に変貌していた。闘争を求め、妖あやしく燃え輝いていた。

　俺は何かを訴えかけるよりも先に、彼女の元へと走り出していた。

「あっと、レッドちゃんはとりあえず見学ね♪」

〝聳え立つ禁忌の象徴ブリユーナク〟を俺へと突きつけるエンジェルギルディ。

　その穂先から発射された黒い光球が、俺に命中すると同時に破裂。円柱型の結界となって、強固に拘束バインドした。

「お前、オーラピラーまで使えるのか……!!」

　身み動じろきが取れないまま、俺は歯は噛がみする。

　テイルギアの能力をとことん使って、完かん膚ぷ無きまでに冒ぼう涜とくするつもりだというのか。

〈アア……アアアアアアアアアアアアアアアアアア!!〉

　天をつんざくような叫びを迸ほとばしらせ、ペルソナギルディはブルーたちへと突進していく。

「よせ、トゥアールッ！　わらわたちのことがわからぬのか!?」

「目を覚ましてください……！　エンジェルギルディの呪じゆ縛ばくに負けてはなりません!!」

　ブラックとイエローは大振りの攻撃を避けながら懸命に呼びかけるが、ペルソナギルディは逆にどんどん属性力エレメーラを高め始めた。そして、両手から凄すさまじい勢いで光弾を発射していく。

　連射という言葉でさえ生温い。雨粒が横殴なぐりに降り注ぐかのような、弾数の暴力だった。

「きゃああああああああああああああっ!!」

「うわああああああああああああああっ!!」

　動揺のせいだろう、イエローとブラックは防御すらできずに被弾していく。

「あ、やっぱみんなショック受けてるでしょ？　テイルギアの出力が少し低下してる♪」

　仲間たちの健けな気げな強がりを笑われ、俺は奥歯が砕けかねない強さで噛みしめた。拘束バインドを破ろうともがくが、オーラピ

ラーはビクともしない。

「トゥアールッ！　いい加減にしなさいっ!!」

　ブルーは咆哮と共に、ペルソナギルディの手足を狙ねらってウェイブランスエクシードを突き出したが……直前で穂先を止めてしまった。

「あーらら、ブルーちゃんってばこういう時は冷酷な決断ができる子だと思ってたけど……見込み違いみたいね」

　戦えるわけがねえだろ……ブルーを何だと思ってんだ！

　仲間が……友達が！　エレメリアンになっちまったんだぞ!!

　光弾は爆撃めいて放たれ続け、ブルーたちの誰だれもが一太た刀ちすら繰り出すことができず、一方的に嬲なぶられ続ける。

「トゥアール！　俺だ……俺を狙ねらえ！　俺を撃て――――っ!!」

「……そうね、そろそろ一人ぐらいギアを剥はがそうと思ってたの……まずは、あなたを撃ってあげるわ、レッドちゃん」

　せめて攻撃目標を俺に変えさせようと叫ぶも……それに反応したのは、エンジェルギルディの方だった。心底愉快そうにしながら、手の平の上に光を収束させていった。

　まずい――〝腐滅の総攻めフ・ラガラツハ〟が来る!!

「拘束された状態で相手の必殺技を待つって、どんな気分？　今度は自分が体験したら？」

　無情に放たれた〝腐滅の総攻めフ・ラガラツハ〟が、唸うなりを上げて俺の元へと飛来する。

　為なす術すべのないまま、その光弾が直撃する寸前。

　――俺の眼前に、颯さつ爽そうと身を躍らせた者がいた。

「ぬぬぬ……おおおおおおおおおおおおおお!!」

　ドッジボールの剛速球を捕球するように、腕と身体からだ全体で〝腐滅の総攻めフ・ラガラツハ〟を受け止めたのは……スワンギル

ディだった。

「……え……スワンギルディ⁉　あんた、どうしてここに⁉」

　ペルソナギルディに防戦を強しいられたままのブルーは、目を白黒させる。

　イビルツインテイルズ戦とは全く逆の立場で、スワンギルディは闖ちん入にゆうしたのだ。

「なぁにスワンギルディ君。私にフラれた腹いせに、今度はツインテイルズに肩入れ？」

「付き合った覚えがないのにフラれる道理もない！　あなたのその過剰なまでの自意識、案外見習うべきなのかもしれぬが……許せぬものは許せませぬ‼」

　確かにテイルギアをまとっていないスワンギルディには、変身解除効果は無効だが……〝腐滅の総攻めフ・ラガラツハ〟には当然、単純な物理的破壊力も存在する。

　光球が霧む散さんする頃ころスワンギルディの全身にはヒビが入り、今にも倒れてしまいそうによろめいていた。

「あなたが一人でこの世界に来られるはずがない。さてはハデスギルディ君の差し金ね？」

　一人で納得したように頷うなずくエンジェルギルディ。

　スワンギルディはブラックに向き直ると、息も絶え絶えに言った。

「テイルブラック。あなたとの約束通り、しばしの間だけ部隊の侵攻は停とめてあります。見習いの隊長でも、そのぐらいはできます故ゆえ……‼」

「それだけで十分だったものを、無茶をしおって‼」

　ペルソナギルディの猛攻に耐えながら、ブラックはスワンギルディを労いたわる。

　俺たちの世界のエレメリアンの侵攻について、イースナはただ

「任せろ」と言っていたが……スワンギルディと連絡を取り合っていたのか。

「なるほど。自分の世界も省かえりみずにツインテイルズがガン首揃そろえてやって来たのが不思議だったけど……裏でスワンギルディ君と取り引きしてたってわけ。意外と食えないじゃない」

「取り引きではない。私はツインテイルズに借りを返しただけだ!!」

　おそらくは、マーメイドギルディの奇襲を受けた後にブラックに介抱された恩と……何より、エンジェルギルディ誕生の一翼を担ったことに対する罪悪感なのだろう。

「借りなら私も君にあったわね、スワンギルディ君。成功目前だったヴァルキリアギルディちゃんと私の一大計画を、最後の最後で君に邪魔された！　大きな大きな借りが！」

「それを言うならば！　私もあなたに、見上げきれぬほど巨大に積み上がった借りがある!!」

　スワンギルディはブルーたちを攻撃するペルソナギルディを目にし、慚ざん愧きに拳こぶしを震ふるわせる。

「人間をエレメリアンに改造するとは！　エンジェルギルディ……あなたは……いや、お前は完全に一線を超えた……もはや、エレメリアンですらない!!」

「このコは、人間に戻したら死ぬのよ？　あなたの方がよほどエレメリアンの禁きん忌きを侵しているじゃない、スワンギルディ君……人間の生命いのちまでは奪わないという禁忌を」

　エンジェルギルディの髪の毛が伸び、スワンギルディの身体からだをがんじがらめにする。

「ぬっ……おおおおおおおおおおお!!」

「あなたの成長速度は目を見張るものがある。時間さえあれば、歴戦の幹部たちに負けない戦士になれたでしょうに……あなたはいつだって、戦いに赴くには力が足りなすぎるのよ」

　髪の毛でスワンギルディを持ち上げ、勢いよく地面に叩たたきつ

ける。

　エンジェルギルディは癇かん癪しやくを起こしたかのように、何度も何度もそれを繰り返した。

「私は違うわ。絶対に負けない強さを得てから、自ら戦いを始めた。だから強いのよ」

「そうだ、私は弱い……！　だが、そんな私でも一つだけわかることがある！　ツインテイルズのツインテールは、美しいということだ！　正しく光輝いているからこそ、美しいのだ!!」

　地面に叩きつけられながら、なおもスワンギルディは俺たちへと声を張り上げた。

「……心に呼びかけろ……ツインテイルズ！　その少女はまだ、完全にエレメリアンにはなっていない！　絶望が彼女を異形と変えたのなら、希望が彼女を救えるはずだ!!」

「ずっるーい、私にはそんな情熱的な言葉、かけてくれなかったじゃな～い」

　よほど逆げき鱗りんに触れたのだろう。エンジェルギルディは言葉の陽気さとは裏腹に、常に貼り付けていた笑みを消し去った。

　そして、スワンギルディの頭上に極彩色の転送ゲートを生成していく。

　俺はなおも渾こん身しんの力をこめて拘束バインドを脱しようとするが……無情なまでに微動もしない。

「ぐああああああああああああ……!!」

　極彩色の空間に呑のみ込まれ、スワンギルディが消えていく。しかし最後まで、その双そう眸ぼうは俺たちへと注がれたままだった。

「よかったわねスワンギルディ君……あなたが私のお眼鏡めがねに適かなういいオトコじゃなきゃ、消滅させていたわよ」

　別世界へ放り飛ばすに留とどめたのか……。とどめを刺されかけていた自分を一度助けた戦士への、せめてもの情けか。

「スワンギルディ……馬ば鹿か野郎、お前……かっこつけやがって……!!」

俺は乾いた声で、ゲートの消えた虚空に呼びかける。

「エレメリアンなんかに教えられる、なんてね……」

そしてペルソナギルディの相手をしていたブルーも、同じ感謝をスワンギルディへと送っていた。

「トゥアー、ル……さん……」

「トゥアール……」

いつしかブルーを庇かばうように前に立って攻撃を受けていたイエローとブラックは、ついに力尽きて倒れてしまった。二人の思いを受け継ぐように……ブルーは歩を進め始める。

「そんなイケイケなあんた、初めて見たわね……トゥアール……」

肩に、足に……顔にさえ光弾が直撃し、吹き飛ばされても……その度たびに立ち上がって。

「ブルー……無茶だ……!!」

俺はブルーを制止するが、もはやブルーに周囲の声は届いていない。

ブルーはペルソナギルディの肩を掴つかみ、理性を失ったその紅眼を真まっ直すぐに見み据すえる。

「……この一年……あんたのこと、いったい何度ぶっ飛ばしたか、数え切れないわよ……」

ペルソナギルディは密着状態から強引に両腕を振り回し、ブルーへと零距離で光弾を浴びせかけていく。

「けどあんた、あたしに……ぐっ……！　全然やり返して……こなかったわよね……。たまには喧けん嘩かしようって、何度も言ったのにさ……」

装そう甲こうが火花を散らし、放電を始めても……ブルーは掴ん

だ肩を離さなかった。

「その分、今……返しなさいよ……。まだまだ、全然……足りないでしょ……」

〈あ、あああああ……！〉

　ペルソナギルディは苦く悶もんの声を上げながら、体当たりをしてブルーを引き剥はがす。

〈ッ……あ、あ……あ――――――――――っ!!〉

　そして渾こん身しんの力で巨大な光弾を放ち――致命的な一撃を与えた。

　まるでギアが爆発を起こしたように激しく放電させ、ブルーは両りよう膝ひざをついた。

「……それでさ。満足したら……みんなで一緒に帰ろ」

〈ああ、あ、あ…………〉

　それでも自分を見据えるブルーを前に、ペルソナギルディはとうとう、手に練り上げた追撃の光弾を消失させた。

「――帰って……一緒にチョコ、作ろうよ……」

　エターナルチェインから強化解除し、からっとした笑顔を浮かべて崩れ落ちるブルー。

〈あい、か……さ……〉

　ブルーではなく、愛あい香かの名前を……愛香の心が、トゥアールに届いたんだ!!

　しかし、それも一瞬。今度は、ペルソナギルディが苦しみに身をよじり始めた。

〈ああ、ああああああああああ……!!〉

　心が異物を拒絶するかのように、ペルソナギルディの胸がひと際きわ強い光を放っている。

仲間が……敵であるスワンギルディまでもが、身を挺してトゥアールを救おうとしてくれた。彼女を救うチャンスは──今しかない!!

左腕だけじゃなく、全身の骨がバラバラになったって構わない！　力を振り絞れ!!

魂たましいのツインテールを迸ほとばしらせるのに呼応するように、天てん啓けいのような音和が俺の脳を叩たたいた。

『────その少女は……トゥアールは、俺が認めた逸材なのだぞ。むざむざ死なせることは、この帝王が許さん!!』

──ティラノギルディ？

あいつの意志が……俺の持つ百合属性ガールズラブの属性玉エレメーラオーブを通じて今もなお、トゥアールを見守っているのか……!?

声の主を悟った瞬間……俺の身体からだに、僅わずかながら力が湧いてきた。

その力は、強固に総身を戒いましめていたオーラピラーを粉々に粉砕する。

『ゆけ、ソウジよ。お前もまた、ツインテールを信じているのだろう……!!』

俺は誰だれ知らず頷うなずくと、ペルソナギルディへと走りだした。

傍かたわらに、不器用な帝王の並走を感じながら。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」

不思議な感覚だった。周囲の全てがスローモーションに感じられる。

時間と時間の狭はざ間まに迷い込み、俺は真っ白な空間をひたすらに走っていた。

伸ばした手が、水に腕を潜らせるようにペルソナギルディの胸へ

と沈んでいく。

「っ……ああああああああああああ!!」

　雄叫びを上げながら胸のテイルブレスオルターを抜き去り、高々と頭上に掲げる。

　全身に光が凝縮して形成された異形のパーツが崩れ落ち──ペルソナギルディは、トゥアールへ……仮面ツインテールの姿へと戻っていった。

「……聞こえましたよ、ブルーの声……相変わらず野蛮な声ですね……」

　人の姿と尊厳を取り戻し、軽い口調で礼を言ったのも、一瞬。

　状況を把は握あくしたのか、仮面ツインテールは震ふるえる両手に視線を落とした。

「……ごめんなさい……ブルー……皆さん……私……皆さんを傷つけてしまった……!!」

　罪の意識に耐えかね、自分の身体からだを掻かき抱いだく。

「いいんだ、君が元に戻ってくれたんだから……もういいんだ」

　力が抜けてもたれかかりそうになりながら、俺は仮面ツインテールの肩に触れる。

　ブルーやイエロー、ブラックも、息も絶え絶えながら安あん堵どしたようにそれを見つめる。

　しかしこの場で唯一、それを気に食わなそうに見る者がいた。

「思い出した。テイルレッドちゃんってば、ティラノギルディ君からもそうやってツインテール属性をもぎ取っていったわね……そういうの、得意なの？」

　エンジェルギルディは、俺が握るテイルブレスオルターへと不穏な眼まな差ざしを送ってきた。

「貸したもんは返してもらう……人間なら当たり前のことだ。得意

も不得意もあるか……！」

「私にとっては当たり前じゃないのよ。私たちはエレメリアン……人間からは借りるのではなく、奪う存在なのだから」

「そうしてお前たちエレメリアンが人間から奪ったものを取り戻すのが、俺たちツインテイルズだ!!」

「つまり私たちは、どうあっても相あい容いれない存在って結論でいいわね」

　人間に戻ったトゥアールを見て、エンジェルギルディの身体から禍まが々まがしい瘴しよう気きが立ち昇る。

「……ねえ、どうして？　どうして私の言うことを聞いてくれないの、トゥアールちゃん。私はこんなにトゥアールちゃんのことが好きなのに……あなたの、一番の理解者なのに」

　世界そのものを凍いてつかせるような冷たい声を放つエンジェルギルディ。

「───どうして私からトゥアールちゃんを奪うのよ……テイルレッドちゃん」

　そしてその怒りは……俺へと転嫁された。それでいいさ。好きなだけ憎め……!!

「……本当……ですよ。私にできることは……もう、これしかなかったのに!!」

　仮面ツインテールは、俺の胸に両の拳こぶしを叩たたきつけてきた。

「自分の生命いのちすら救えない私でも、あの邪悪なツインテールを道連れにすることはできる……そうすればあなたたちが……私の自慢のヒーローが、また胸を張って世界を救ってくれると信じていた！　だから二度と戻れないことを承知で、エレメリアンにまでなったのに!!」

　そして、駄々をこねるようにして、何度も何度も叩いてきた。

「何をやっても否定され続けてきた……私はいつだって無力で……

役立たずで……あなたはそんな私に『大丈夫だ』と言って、当たり前のように奇跡を起こしてしまう！」

　残っていた仮面が、ひび割れ始めた。

　トゥアールが秘め隠していた心の裡うちを、曝さらけ出していくかのように。

「最期だけでも、あなたたちの役に立ちたかったのに！　レッド……あなたまで私のちっぽけな覚悟を否定して、また奇跡を起こしてしまった！　こんなの、ひどすぎます!!」

　そして一筋の涙を頬ほおに伝わせながら、声を震ふるわせた。

「幻滅したでしょう。私は昔から、ずっとこんな小者なんですよ……。コンプレックスの塊かたまりで、無理矢理テンション上げてるだけの、ただのガリ勉……ヒーローなんて器じゃなかった!!」

　ついに仮面は全て砕け、トゥアールの顔が顕あらわになる。

「──それでも……私、精一杯考えて、この決断をしたんです……!!」

　ずっと、ずっと胸に秘めていたであろう、本心とともに。

「幻滅なんてするもんか。こんな時だけど……トゥアールの本心が聞けて、嬉うれしいよ」

　俺はブルーやイエロー、ブラックに視線を送る。息も絶え絶えながら、彼女たちもかつての自分を見ているかのように笑っていた。ようやく言ってくれたと、心安らげながら。

　ああ……そうだ。俺も、ようやくわかった。

　トゥアールは、自分のことを『世界をわたる復ふく讐しゅう者』だと……出で逢あった頃ころからずっと、颯さつ爽そうと名乗り続けていた。

　だから君にとってその名は、第二の誇りなのだと思っていた。

　けど、違ったんだな……トゥアール。

　その名は君にとって、これからもエレメリアンと戦い続けるという矜持ではなく……自分の全てを否定するための十字架だったんだ。

　君は仮面で素顔ではなく、心を隠して戦場に駆けつけ続けていた。

　けれど今、その仮面は砕けた。君はもう……仮面ツインテールじゃない。

「トゥアール。君は……本当は復讐者なんかになりたかったんじゃない。君は──」

「うっ……ぐっ……!!」

　俺の言葉半ばに、トゥアールの身体からだは再び粒子化を始め、今にも消えそうに明滅しだした。

「何度も何度も忠告したのに……。今回ばかりは、レッドちゃんの奇跡とやらが余計なお世話だったみたいね。トゥアールちゃんは私の科学を拒絶した……もう、生きる術すべはない」

　エンジェルギルディの冷え切った言葉が、それに追い打ちをかける。

「けど、私をここまで怒らせたあなたは……ただ消えるのを待つなんて許さない。その前に全てのギアを破壊して、あなたのヒーローたちを消し去る。絶望にまみれて消滅してもらうわ」

　自分を裏切った代償に、トゥアールの全てを否定する。

　その先陣として選ばれたのは……俺だった。

　エンジェルギルディは先ほどの意趣返しのように、属性力エレメーラ奪取のリングを手にした。

「あ、駄目……やめて……レッドの……この人たちのツインテールを奪わないで!!」

　トゥアールは、すでに背景が透けるほど薄くなったその両腕で、俺を抱き締めてきた。

　そして、そんな自分の行動に驚いたかのように、はっと息を呑のむ。

　リングが投げ放たれた瞬間。

　着弾の瞬間、世界がまばゆい光に包まれ──俺はトゥアールを抱き締め返していた。

　それは、やっと真実に気づけた俺に与えられた、女神からのロスタイムだったのだろう。

　二人だけが世界から静かに切り離された、真っ白な時の狭はざ間まで。

　俺は──トゥアールの唇くちびるへと、自分の唇を触れ合わせた。



　テイルレッドの姿でしたのか、俺の身体からだでしたのか……どちらにも感じられる、甘く柔らかな感触だった。

「えっ……」

　何が起こったかわからないというふうに戸惑い、そっと指で唇に触れるトゥアール。

「キ、キスすれば、頑張れるって言ったから……したぞ」

「頑張れる、って……あ……」

　恥ずかしさのあまり、要領を得ない言い訳のようになってしまったが……ようやく、自分が言ったことだと思い出したのか、トゥアールは顔を綻ほころばせた。

「わ、笑わないでくれよ！　俺だって、勇気を振り絞ってしたんだ……」

「――――はい。わかってます」

　この真っ白な世界では、俺たち二人の赤面が、殊更に目立って思える。

　……しかも何か、さっき一緒に走った帝王が背後でじっと見ているような気配を感じるが……気づかなかったふりをしておこう。

「だからトゥアールも……勇気を振り絞ってくれないか。それを認めることは、今までの自分を否定するようで怖いだろうけど……」

　さっき……俺がトゥアールを庇かばおうとするよりも、トゥアールが俺を抱きしめる方が早かった。君はいつだってそうして、力のない身でみんなを守ろうと足あ掻がき続けてきた。

　それこそが、多くの絶望を経ても変わることのない、たった一つの真実。

　属性力エレメーラを失ってなお色褪せることのない、最後に残った希望だったんだ。

「自暴自棄にならないで、もう一度自分の心に語りかけてくれ。今は、俺もついてるから」

　それを聞いたトゥアールは、笑顔から一転。肩を震ふるわせ──

「違います、私はそんな崇高な人間じゃない……だって、私は逃げたんですから！」

　勢いよくかぶりを振りながら、叫んだ。

「故郷の世界を守れなかった後も、ツインテールの戦士を続けながら異世界を巡る選択だってあった！　総そう二じ様たちのように、自分自身の力で強くなって強敵と戦い続けることもできた！

　私はそれをせず……あなたたちだけに過酷な運命を押しつけた!!」

　そして、これまで秘めていた感情を全て曝さらけ出していく。

「それを選ばなかった時点で、私はもうヒーローなんかじゃない！　ツインテールであることは許されない！　自分の目的のために他人を利用する、醜みにくい復ふく讐しゅう者なんです!!」

　君は罪悪感もあって、自分を過小評価しているから……他人の失敗や弱いところは目に入らず、成功や強さだけを見てしまうんだ。俺たち普通の人間を神格化してしまうんだ。

「……利用する、なんて……言い方一つじゃないか。俺は、君のおかげでツインテールになれた……。ツインテールを守る戦士にもなれた。その喜びまで、君は否定するのか……！」

「それ、は──」

「ブレスが二つあったから、俺たちは仲間という名のツインテールを結ぶことができた！　髪の毛を一本一本丁寧に結ぶみたいに、今もその絆きずなは束ねられ続けている！　トゥアールは逃げたんじゃない！　俺たちに、果てなく繫つながる希望を託してくれたんだ!!」

　今度は俺が、あらん限りの声で叫ぶ番だった。

「誰だれが何と言おうと……俺にとってトゥアールは、憧あこがれ

のヒーローだ!!」

「□□□□□□!!」

　頑固な心が氷塊するのを象徴するかのように、周囲の白がぶれ始める。

「本当はもうわかっているはずだ。君は初めから、復讐がしたかったんじゃない」

「総二様……」

「ただ、ツインテールを守りたかったんだ──」

　俺たちは、正常な時間の流れへと引き戻される。そして──

　エンジェルギルディの投げ放ったリングが──芥け子し粒つぶと霧む散さんした。

　俺のテイルギアから、何色も絡みあった不思議な光が溢あふれ出ていたのだ。

「ッ……何!?　解析不能な力場が、トゥアールちゃんの身体からだを護まもっている……!?」

　俺たちを見て、狼ろう狽ばいするエンジェルギルディ。

　当然だろう。奴やつにとっては一瞬の間で、放ったリングが消え去っていたのだから。

　一体どれだけ多くの思いが、今のトゥアールを取り巻いているのだろう。

　ペガサスギルディやティラノギルディ……他にも彼女が関わってきたであろう、多くのエレメリアンたちと……女神ソーラ。

　そしてブルーやイエロー、ブラックの心の輝きも、トゥアールを護っている。

　敵も、味方も、女神様も……こんなに多くの絆きずなを繫つないだのは、他ならぬ君だ。

　君は託したテイルギアを通して、いくつものツインテールを結んできたんだ。

　そんな時君は、いつだって一つの信念を問いかけてきた。

　今度は俺が君に聞くよ、トゥアール──

「ツインテールは……好きか？」

　この質問が、全ての始まりだった。こう聞きながら、俺の手を取ったよな。

　ツインテールを巡る戦いへと俺たちを誘いざなう、覚悟を問う言葉だった。

　絶望の淵ふちに沈んだ俺を、起たち上がらせてくれた希望でもあった。

　だから俺は今、その時とは逆にトゥアールの手を取った。

「ッ────」

　嗚咽おえつを噛かみ殺すトゥアール。重ねた俺の手の甲に、温かい雫しずくが落ちる。

　顔を上げたトゥアールは──涙でくしゃくしゃに濡ぬれた顔で微ほほ笑えみを浮かべた。

「はい。大好きです」

　トゥアールの粒子化が──止まった。

　俺と同じだな、トゥアール。ちゃんと言えるじゃないか、君も。

　属性力エレメーラを、愛を失ってそれでもなお、好きだと。

　ツインテールが──好きだと。

「じゃあ、何も言わずに……この腕輪をつけてくれ」

俺はテイルブレスオルターを差し出した。

「……脈絡、ありませんよ？」

柔らかに苦笑するトゥアール。

俺は結婚指輪を填はめるような厳おごそかさで、トゥアールの右手首にブレスをつけた。

「〝俺が〟結ぶ──っていうのは、間違いだった……」

君が本心を自覚しないままに俺が無理矢理ツインテールを結ぼうとしても、上う手まくいかないのは当然だった。

けれど、原初の思いを取り戻した今なら……きっとあの日の君になれる。

俺はトゥアールの手を取ったまま、ありったけの思いを彼女に注ぎ込む。

俺だってこんなにツインテールが好きなんだぜ……そんな単純で、純粋な思いを。

「〝俺も〟結ぶ。俺と一緒にもう一度ツインテールを結ぼう、トゥアール!!」

「──はい、総二様レツド!!」

邪悪の呪じゆ縛ばくを断ち切ったテイルブレスオルターが、灰色から純白に染まっていく。

心に落ちた影を象徴するように開いていた穴に、ツインテール属性のエンブレムを宿した宝玉が埋め込まれる。その宝玉は──力を合わせて不足を補い合うように、二つのエンブレムが重なり合ったものだった。

エンジェルギルディが何か叫んでいるようだが……もう聞こえもしない。

同じ科学の道を邁まい進しんし、同じツインテールに翻ほん弄ろうされ。

　いくつも重なり合う背景を背負った二人は今、決定的に道を別った。

「このテイルブレスはもはや、疑似型オルターではありません――」

　ブレスを填はめた右腕を、胸の前に持ち上げるトゥアール。

「ツインテールという存在に新たな可能性をもたらす、変革のテイルブレス……テイルブレスレボリューション」

　何よりそれは、トゥアール自身に革新を与える奇跡のテイルブレス。

　奇跡は今起こったんじゃない。

　トゥアールが自分の無力さに泣いた日にそっと芽生え、育はぐくまれ……やっと孵ふ化かしたのだ。

「私たちが生み出した愛の結晶の力……見せてあげます」

　万感の思いとともに、トゥアールはその言葉を紡つむいだ。

「テイル――オン」

　雪が降っていた。

　地の果てまで続く岩と砂。その上に建こん立りゆうされた、機甲の砦とりで。

　無機質に支配されたこの世界には不釣り合いな、優しい雪が。

　無数の光が淡い粉雪となり、少女を祝福するように舞い落ちていた。

　あらゆる感情が綯ない交まぜになってこみ上げ、俺は胸を詰まらせる。

　その中でもっとも強く顕あらわれた思いが結晶し、自然と笑みを

形作った。

　トゥアール……。

　君のツインテールに、やっと逢あえた――――。



「――テイル、ギア……トゥアールが……テイルギア着てるよ!?」

　思わず自分のテイルギアを確認するブルー。それも無理はない。

　トゥアールは今一度、テイルギアをまとった。

　しかしその色は、彼女が幾戦を潜くぐり抜けた青ではない。眩まばゆいばかりの白だった。

　その光は周囲に拡散し、傷つき倒れたブルーたちを癒すように、優しく包み込んだ。

「それだけではありません……トゥアールさんが、ツインテールですわ!!」

「復活したのじゃ、トゥアールが！　わらわの憧あこがれた……あの戦士が……!!」

　静かに颯さつ爽そうとたなびくトゥアールのツインテールに、その場の全ての目が奪われる。

　結び位置は愛あい香かより少し後ろ。トゥアールのツインテールって、こんなふうだったんだ。

　俺は自分でも呆あきれるくらい、ごく普通の感想を思い浮かべていた。

　けど、不思議だ。

　ようやく巡り逢あったツインテールのはずなのに、ずっと前から一緒にいたような気さえしている。

　俺は右腕の赤いテイルブレスにそっと触れ、心地ここちよい矛む盾じゅんに身を任せた。

「こんな、馬ば鹿かなこと……ありえない！　一体何が起こったというの……!?」

　エンジェルギルディは、テイルギアをまとったトゥアールを見て愕がく然ぜんとする。

　先ほど俺たちへと向けていた、燃え立つ憎悪が嘘うそのようだ。

まばゆいツインテールの輝きを前に、未知の恐怖に怯おびえていた。

　あり得ないと断定する──それは科学者にとって、もっとも恥ずべき言葉だと。可能性を閉ざす愚かな行いだと。かつて、一人の科学者が言っていた。

「この世界でアルティメギルと戦い始めた頃ころ……ある人が言ってくれました」

　そしてトゥアールもまた、かつて聞いた誰だれかの言葉を思い返していた。

「ツインテールは、左右の髪を支ささえる頭があって初めてツインテールなのだと。私も、ツインテイルズの一員なのだと……」

　そうだ。俺たちというツインテールを結んでくれたのは、トゥアール……君だった。

「その言葉を聞いた時……私の中で、二度と生まれるはずのないツインテールへの思いが、仄ほのかに灯ともり始めたのかもしれません」

「ッ……それで？　奇跡が起こってテイルギアをまとうことができたから、なんだって言うの？　この私を相手に復ふく讐しゆうを続ける？　仮面ツインテールちゃん」

　今度はわざわざ仮面ツインテールと言い直して煽あおるあたり、エンジェルギルディの動揺も相当のもののようだな。

「いいえ……世界をわたる復讐者はその旅を終え、いずこかへと消えました」

　愚かな問いへの答えに、トゥアールは決然と名乗り上げた。

「私の名は──テイルホワイトです!!」

　その魂たましいに呼応するかのように、ホワイトのテイルギアが

産声を上げるように発光する。

　生まれたてのツインテールを優しく支ささえるように円を描くフォースリヴォン。

　凜と翻ひるがえる白衣の裾すそのように揺れる翼。それは、偽いつわりの天の使いを誅ちゆうする真なる天使の証あかし。

　その印象を強調するように、装そう甲こうも全体的に曲面が強調されている。

　それと……愛あい香かは怒るだろうが、トゥアールが誇り、常に突き出していた自慢の胸を存分に引き立てるべく、アンダースーツはやはり大きく胸元が開いている。

　白は、全てを失った無の象徴。

　これまでトゥアールがどんな時でも白衣を身につけていたのは、自分にはもう何もないと決めつけていたからなのかもしれない。

　けれどそれだけではない。白は、何色にも変わることができる可能性の象徴だ。

　最初アルフアのツインテイルズにして、最後オメガのツインテイルズ。

　それがテイルホワイト……トゥアールの思いが生み出した、奇跡の姿だ。

　ホワイトがギアの具合を確かめるように拳こぶしに視線を落とした瞬間。

「わかってないわねえ……!!」

　エンジェルギルディはホワイトの死角に回り込み、その脳天に〝聳え立つ禁忌の象徴ブリユーナク〟を振り下ろした。

「今さら現場復帰したって、もうあなたじゃ戦いについていけないのよ。昔のドラグギルディ君にさえ負けて泣きべそかいたあなたが、この私に勝てると思ってるの⁉」

　復活とはスタートへと還かえること。つまり、かつてと同じ力に

戻っただけだろうとでも思ったのだろう。そんなエンジェルギルディの認識の浅さは、ホワイトの手によってすぐに正されることとなる。

「んっ……ぐっ……これは……⁉」

　想定外の手て応ごたえに顔を顰しかめるエンジェルギルディ。

　ホワイトは、無造作に掲げた手で〝聳え立つ禁忌の象徴ブリユーナク〟を握り掴つかんでいた。

「わかっていないのはあなたです。私のテイルギアはすでに、レッドたちの最強形態と同等に完全解放ブレイクレリーズしています。このツインテールに漲みなぎる、溢あふれんばかりの力が見えませんか」

　そして涼しい表情のまま、溢れる力の理由わけを明らめる。

「いわばスペリオルチェイン──私のツインテールは、遥はるかなる高みへと辿たどり着きました‼」

　テイルホワイト・スペリオルチェイン。

　誕生と同時に一つ上の領域へとシフトした、トゥアールだけのテイルギアだ‼

「そうか……ツインテールの超回復だ！　そうだよな、ブルー‼」

「……え？　うん……え？　そうなの？」

　俺は、トゥアールが強化復活した理由を即座に看かん破ぱし、離れたブルーに同意を求める。

「ああ……運動で破損した筋肉が、より強く再生するのと同じ理屈だ。トゥアールのツインテールも、超回復によって現役時を上回るパワーで蘇よみがえったんだ‼」

　何な故ぜかブルーが白目で俺を見ているが、きっとホワイトの光に中あてられたんだろう。

「……そう、だったら私のやることは同じよ……面倒な戦いは避ける。気軽にあしらえるようになるまで、あなたにも弱ってもらうだ

けよ」

　力で押し切るのを諦あきらめたエンジェルギルディはすぐさま飛び退すさり、ホワイトから入念に距離を取る。そして空中にスクリーンを形成し、軽やかにタッチ操作をしていく。

　奇妙な駆動音が周囲に響き、エンジェルギルディの背後の床が車庫ほどの大きさに切り取られてせり上がってきた。

「この、メタルエレメリアンでね」

　せり上がった床の中から、黒一色のロボットがわらわらと溢あふれ出てくる。

　十や二十では利かず、あっという間に数百からのロボットが、ホワイトを取り囲んだ。

「同僚が誰だれも彼も騒がしい子ばかりだから、こういう研究も進めていたの。物言わぬ機械兵士……私のプログラムしたとおりに動く機械人形よ」

「前から言おうと思っていましたけど……あなたのデザイン、センスないですね」

　何とも遊びのない見た目のメタルエレメリアンへ、ホワイトが容よう赦しやのない駄目出しをする。

　それに立腹したわけではないだろうが、一体のメタルエレメリアンがホワイト目掛け走りだした。

　ホワイトはフォースリヴォンを優雅に撫なで擦さすり、右腕に専用武器を生成し始めた。

　俺と同じ剣だろうか……それともやはり、天使ならば杖か？

　実体化する数瞬でホワイトの武器を予想しわくわくしていた俺は、意表を突かれた。

「シャイニングアームド!!」

　ホワイトがそう叫び揭げたのは……手てつ甲こうだった。

　属性玉変換機構エレメリーションが一回り大きくなって独立したような、握り手のついた手甲型の武装だ。

「人にセンスのことを言えて？　科学者の細腕で、そんな原始的な武器が扱えるとでも？」

　意趣返しのように鼻で笑うエンジェルギルディ。

「そうそう、まだ誰にも言ってなかったことなんですけど……」

　だがその笑みは、すぐに凍り付くこととなった。

　嘲あざけったホワイトの細腕が音を突き破り、原始的な武器が化学の象徴たるロボットを過あやまたず捉えたのだから。

「────私も結構、蛮族ですよ？」

　ホワイトの鉄拳がメタルエレメリアンの腹部を貫いた瞬間。

　大気に巨大な波紋が起こり、その場にいる全ての者たちがその尋常ならざる威力を肌で感じた。

　天高く吹き飛びながら、ボディがひしゃげ、ねじれ……ついには激しく火花を散らし、メタルエレメリアンは天空に大輪の華を咲かせた。

　まるで、一人の戦士ツインテールの復活を告げる花火のように。

「な……」

　エンジェルギルディは、あらん限りの驚きよう愕がくで。

　そして俺たちはこれ以上ない笑顔で、その勇姿を双そう眸ぼうに焼き付けた。

　いつかの夢の中で、トゥアールの戦う姿を見た。

　ツインテールだけでなく、どんな武器を使っているかもぼやけて見えなかったのだが……あれは、素手の鉄拳だったのか……！

「たあああああああっ!!」

　襲おそいかかって来るのを待つまでもなく、ホワイトは機甲の荒

波へとその身を躍らせた。

　シャイニングアームドが閃ひらめく度たび、打ち上げ花火もかくやという爽快さで天高く飛ばされていくメタルエレメリアンたち。

　それを見るブルーの、あの嬉うれしそうな顔よ。鉄拳ってのがツボったんだろうな。

　たちまち十数体を螺ね子じくれに還かえしたホワイトは、刀についた血ち糊のりを振るい落とすように右腕で空を薙ないだ。

「徒と手しゆ空くう拳けんなら一度に対応できる数は知れているわ！　一斉に攻撃なさい!!」

　メタルエレメリアンに指示を送るエンジェルギルディ。

　あの数ではひとたまりもない……せめて少しの数減らしだけでも手伝おうと、俺はテイルカリバーを握り締める。

　だが、メタルエレメリアンたちの鋼鉄の爪つめがホワイトへ届くことはなかった。

　ホワイトは、ツインテールを翻ひるがえして軽やかに反転。舞い踊るツインテールに、その瞬間驚くべき変化が起こった。

　鮮やかな銀髪の輪郭が発光。まるでツインテールの一部分を交換するような滑らかさで、半ば程までの長さの赤いメッシュが差し込まれたのだ。

「ツインテールを……換装した!?」

　レイヤーのように銀髪に覆おおい被かぶさった赤色のメッシュを見て、俺は思わずそう叫んだ。

「ソードアームド!!」

　ホワイトがコールすると、シャイニングアームドは先端を左右にスライドさせ、赤色の光刃を形成した。

　いわゆる銃剣のように、武器の先端にさらに刃やいばが装着されたタイプの刀剣だ。

　四方から一斉に襲いかかってくるメタルエレメリアン。それを握り剣で回転ざまに斬きりつけ、一気に殲せん滅めつするホワイト。

　そうか……あれは手甲アームドであり、武装アームドでもあるのか。

　独りで戦い続けたトゥアールならではの汎用性、全局面対応可変武器だ。

　ただし……今は独りじゃないってことは、しっかり主張しておかないとな。

　俺は一体、二体と続けざまにメタルエレメリアンを斬きり裂さく。どちらからともなく背中を預けると、ホワイトは穏やかな声で言った。

「テイルレッド。あなたと、こうして一緒に戦うことを……ずっと夢見ていました」

「……そうか……」

　俺もだ、って言ったら……変な顔をされるかな。

　やばいよ。

　感動で、剣を握る手から力が抜けてしまいそうだ。

　トゥアールと、ツインテールを並べて立つ日が来るなんて。

　ツインテールを守るために、一緒に戦える日が来るなんて……!!

「うおおおおおおおおおおっ!!」

「やあああああああああああっ!!」

　俺はテイルカリバーを、トゥアールはシャイニングアームドを。

　互いの武装を一いつ閃せんし、メタルエレメリアンを真っ二つに斬り裂く。

「今までずっと、数え切れない空想を重ねていたんです。もし今でも私がツインテールだったら……レッドたちと一緒に、こんなふうに戦うんだろうな、って……」

　子供がクレヨンで画用紙に落書きするように、積み重ねた空想か。

　けれど、それを聞いても驚かないよ。

　君は最初から、そんな純粋な願いを託してテイルギアを創つくったんじゃないか。

　ツインテールへの空想テイルを編あみ込んだ、無限の可能性を秘めた装甲ギアとして――。

　さらに数体を斬裂。爆風でツインテールを揺らしながら、俺はトゥアールを見つめた。

「……できればその夢を、ずっと見させていてあげたいけど……」

　残念だが、終わりはすぐにやって来る。

「はい。いい夢を見ている時ほど、すぐに目が覚めるものですから」

　ハイになって麻痺していた消しよう耗もうが、俺の背中に一気にのし掛かってきた。

「っく……」

「後は任せてください、レッド……皆さん」

　へたりこんだままのブルーたちを労いたわると、その凛りんとした眼まな差ざしはエンジェルギルディへと向けられた。

「エンジェルギルディは、私が倒します」

　シャイニングアームドに手を触れ、回転させ、引き延ばし、とパズルを組み替えるように変形させていくホワイト。

「次は……スピアアームド!!」

　握り手のナックルガード部分から上長下短に穂先を伸ばした、槍やりの姿にフォルムを変える。

　それと同時にホワイトのツインテールには青のレイヤーが換装された。

伸縮自在の長槍が縦に並んだメタルエレメリアンを次々と貫通し、爆散させていく。

しかし、メタルエレメリアンも戦闘中に学習していくのだろう。

ホワイトの武装の間合いから離脱すると、両腕をマシンガンのように変形。

数十体の砲口が一斉に火を噴き、鉄の床を削り散らし始めた。

「――ガンアームド!!」

側転して弾丸の雨から身を躱かわしたホワイトは、翻ひるがえるツインテールへ黄色のレイヤーを換装。

シャイニングアームドを手持ちバズーカのサイズの銃砲へと変形させ、トリガーガードに指をかけて軽やかに回転させた。イエローが目をきらきらさせてそれを見ている。

銃形態のシャイニングアームドから解き放たれた光弾は、生命いのちを得たように自在に飛び回り、メタルエレメリアンたちへと直撃。鈍にび色いろに光る装そう甲こうを、ことごとく灼やき潰つぶしていく。

「汎用性なら、こっちも負けてないわよ！」

エンジェルギルディが手元のスクリーンで操作すると、数十体のメタルエレメリアンが両腕を背中に折り畳たたみ、隣同士で肩を合わせるようにしてジョイント。

それを繰り返し、見る見るうちに数十メートルはあろう巨大な一体に合体してしまった。

合体メタルエレメリアンが腕を振り下ろし、拳こぶしが轟ごう音おんと共に床にめり込む。

ホワイトはその腕に飛び移って走り出すと、黒のレイヤーをツインテールに換装した。

おお……ツインテールの色がカラフルに変わっていくの、見ていて楽しいぞ。

「サイズアームド――――――ッ！」

　大おお鎌がまの刃やいばを上下対称に二つ並べ、枝切り鋏のように変形させたシャイニングアームドで、合体メタルエレメリアンを脳天から一刀両断していくホワイト。

　着地し、背に爆風を受けながら、その得物をしげしげと見つめた。

「うーん、ちょっと使いづらそうですねこれは」

　別の形態に変形させようとしたところで、戦いを見守っていたブラックが注文をする。

「あっ……もうちょっと使って欲しいのじゃ～!!」

　やれやれ、と肩を竦すくめ、ホワイトはその形態のままメタルエレメリアンに突っ込んでいく。

　何だかんだといって、サイズアームドの使用時間が一番長かった。

　かつての〝ファン〟へはたっぷりサービス。ヒーローの矜きよう恃じだろう。

「――ベースアームド」

　再びベースの手てつ甲こう型にチェンジし、メタルエレメリアンを殴なぐり飛ばしていくホワイト。

　ずっと死の影に怯おびえる日々だった少女。生命の輝きを取り戻した今、これまでのフラストレーションを発散するかのように、ホワイトは戦場を駆け抜ける。

　一騎当千のツインテールを前に、数百のメタルエレメリアンはものの数分と経たたずに全滅した。

　爆炎が燻くすぶり、鉄屑がそこかしこに転がる中、静かに双そう眸ぼうを強こわ張ばらせるエンジェルギルディ。

「そう……あなたはどうしても私の欲望の前に立ち塞ふさがるというのね、トゥアールちゃん」

奥の手を全て失ったのだろう。もはや一片の笑みもなかった。

「はっきりさせておきたいんですけど……あなたに同族意識を持たれるのは不快ですから、やめてもらえます？　トゥアールちゃんの方が一億倍美少女です」

「気に入らないわね……あなたにそんなドヤ顔は似合わないわ、トゥアールちゃん」

「……!?」

怪け訝げんな表情で足元を見るホワイト。彼女の足首を、下半身が吹き飛んだメタルエレメリアンが掴つかんでいた。すかさず頭部を蹴けり潰つぶすホワイトだったが、その一瞬の隙すきこそエンジェルギルディが狙ねらっていたものだった。

「せっかく復活したところ悪いけど、また元のいじけ顔に逆戻りしてもらうわよ」

すでに手の平の上で練り上げていた光球を、ホワイト目掛けて放つエンジェルギルディ。

〝腐滅の総攻めフ・ラガラツハ〟が、ホワイトに直撃してしまった……!!

勝利を確信し、口くち許もとを存分に歪ゆがめるエンジェルギルディ。

ところがホワイトは、気に入らないと揶揄されたドヤ顔で以もつて、その笑いを消し去った。

「残念でした。トゥアールちゃんは、ドヤ顔が一番可か愛わいいんですよ？」

「自分で言う、普通!?」

エンジェルギルディは咄とつ嗟さに突っ込んでしまった後、はっと気づいた。

ホワイトのテイルギアが、解除されていないことに。

「変身解除されない……!?　いったいどうやって!?」

「ウイルスにはワクチンで対処するのが当然。私は現在進行でワクチンプログラムを生成して、テイルギアに走らせています。もはやあなたの攻撃は、私には通用しません」

　ウイルスプログラムの特性を持った攻撃を、ワクチンで防ぐ……科学者であるトゥアールならではの対処法だ。

「ありえないわ！　〝腐滅の総攻めフ・ラガラツハ〟はコードを瞬間的に可変増殖させる攻撃プログラム！　テイルギアにはそれに対応できるほどのリアルタイム演算能力はないはずよ!!」

　駄目押しとばかりにもう一発〝腐滅の総攻めフ・ラガラツハ〟を放つエンジェルギルディ。

　だがやはり、ホワイトには通用しない。テイルギアの表層でエネルギーが弾はじけ飛び、霧む散さんしていく。

「この程度でありえないと断じるなんて、科学力の底が知れますよ。エンジェルギルディ」

　エンジェルギルディの口ぶりからするに、奴やつはツインテイルズがワクチンプログラムを作って対抗してくることまで予測していたのだろう。対策は万全だったのだ。

　──ただし、ホワイトがさらにその上を行ってしまっただけで。

「攻撃を受けた瞬間、自分で暗算して対処すればいいだけの話です。ほんの八万パターン強のコード組み替えです。髪の毛の本数よりも少ない程度だから、余裕ですよ」

「コンマの猶ゆう予よで演算を……!?　人間がっ!?」

　エンジェルギルディが驚きよう愕がくするのも無理はない。

　光弾が直撃した一秒にも満たない一瞬で、数万通りのコードを組み合わせてワクチンを生成する。しかも、一度として同じプログラムは存在しないので、その都度計算し直して。

　これが、神の頭脳でなくてなんだというのだ。

　俺はあんなすごい女の子と、一年近く同じ教室で授業を受けていたのか……!?

「くううぅ……！」

　歯は噛がみ止まらぬエンジェルギルディの杖の剛打を、ホワイトは剣形態のシャイニングアームドで受け止める。二人は一歩も退ひかずに睨にらみ合った。

　エンジェルギルディは髪を伸ばして攻撃し、ホワイトはそれを難なくアームドで弾はじき返す。

　余裕で勝てる戦い以外を嫌ったエンジェルギルディが、今や自分からホワイトに立ち向かい、あらん限りの攻撃を仕掛けている。

　俺には奴やつが、「ずるい」と糾きゅう弾だんしているように感じられた。

「すっかり余裕じゃない、トゥアールちゃん。でもそれは、ほんの一瞬の輝きに惑わされているだけ。一度ツインテールの闇やみに負けた者は、二度と光を掴つかむことなんてできない!!」

「私も仲間たちに出で逢あうことができなければ……あなたのようになっていたかもしれません。一度はツインテールの闇に負け……それでも立ち上がった、強い仲間たちに」

　白と黒━まとった光の色だけではない。全てが対称的な二人だ。

　テイルホワイトとエンジェルギルディは、ツインテール属性を自ら手放すという出発点は同じながら、それぞれが辿たどり着いた場所は全くの正反対なのだ。

「たとえツインテールに戻ったとしても……しょせん、属性力エレメーラとは自分の欲望！　欲望こそが最大の力！　ツインテールにへこへこ頭を下げているあなたでは、ツインテールを屈くつ伏ぷくさせた私には勝てない！　勝っていいはずがない!!」

　エンジェルギルディは再び、自分の髪の毛をツインテールに結んだ。

〝腐滅の総攻めフ・ラガラツハ〟のエネルギーを両手にまとわせ、射出するのではなく直接叩たたき込まんと、ホワイトに拳こぶしを繰り出していく。

「他者のために輝かせる心……それを何と呼ぶか、あなたは知らな

いんですね。それは──」

　憐あわれむように言い捨て、アームドを振りかぶったホワイトは──

「───愛です!!」

　決定的な真実と一撃を、エンジェルギルディの身体からだへと叩き込んだ。

「うああああああああああああああああああっ……!!」

　エンジェルギルディは身体からだで床の鋼鉄を抉えぐり、吹き飛んでいく。

　それほど圧倒しているホワイトのツインテールが、僅わずかにぼやけてきたように見えるのは……気のせいか。

「戯ざれ言ごとをっ……！　愛とか、友情とか、絆きずなとか！　そんな見果てぬ夢に惑わされたから、エレメリアンは閉塞した！　心を喰らう精神生命体として行き詰まってしまったのよ!!」

　舞い上がった鉄屑の雨を総身に浴びながら、エンジェルギルディはなおも立ち上がる。

「私がアルティメギルを救う……私の科学で、エレメリアンを進化させる!!」

「あなたが救いたいのは組織じゃない……自分自身でしょう？」

　両者は白と黒、二つの輝きをまといながら激突。

　徐々に速度を上げながら、ぶつかり合うエネルギーの余波で二色の光が捻れ絡む。

　絶対に他者に弱みを見せまいと立ち振る舞ってきたエンジェルギルディが、今や全ての余裕をかなぐり捨て必死の形相で戦いを挑んでいる。

　ホワイトの信念に触れ、彼女もまた一人の戦士に立ち戻った──そう考えた俺は、どうやら甘かったようだ。

「────ッ」

　ホワイトが胸を押さえてよろめく。彼女のツインテールが震動するようにぶれている……それだけじゃない、テイルギアも所々悲鳴を上げるようにスパークし始めた！

「はははははははは！　思ったとおり！　どう考えても長時間耐えられるものじゃない急ごしらえですもの、本当なら力の消費を抑えて運用しなきゃいけないわよね⁉」

　そして我わが意を得たとばかりに大笑するエンジェルギルディ。

「熱くなったふりをして突っ込めばつき合ってくれると思ったわよ、元ヒーローさん‼」

　エンジェルギルディはホワイトの力を急速に消しよう耗もうさせるために、わざと激しい殴なぐり合いを挑んだんだ。自分の身をベットした以上、奴やつ自身にもかなりのリスクはあっただろうが……それだけ追いつめられているんだろう。

「私には無限の時間がある！　後はのんびり戦いを楽しみながら、あなたが弱くなっていくのを少しずつ観察させてもらうわ‼」

　放電する手の平をじっと見つめるホワイト。ブルーとイエロー、ブラックが焦あせって声をかけるが、俺はこの状況でも不思議とピンチに感じられなかった。

「このテイルギアの活動限界時間くらい、とっくに計算済みです。その上で、悔いなく暴れたかっただけです。私につき合ったのはあなたですよ、元科学者さん」

「……元……？」

　不可思議な言葉を警戒し、足を止めるエンジェルギルディ。

「──あと二二秒でそうなります」

　その計算カウントダウンの証明代わりに、ホワイトはシャイニングアームドを胸の前で構えた。

「完全解放ブレイクレリーズ‼」

　シャイニングアームドが、五形態全ての特徴を備えた最後の変形を遂げる。

　ホワイトのツインテールも、全ての力を取り込むように赤青黄黒の順にレイヤーを取り込んだ後、ベースの白銀色へと戻って一層の輝きを放った。

「オーラピラーッ!!」

　オーラピラーを今度はその身に受け、エンジェルギルディは光の円柱結界に拘束バインドされた。

「待ってトゥアールちゃん！　自分でもわかっているんでしょう！　生命いのちを取り戻したって、あなたのツインテールは完全じゃない！　私の力が必要なはずよ!!」

　拘束バインドされながらも、エンジェルギルディはホワイトの心へとつけ込もうと足あ掻がく。

「私とあなたの頭脳が合わされば、できないことはない！　そうだわ……私のツインテールを、あなたにあげる！　そうすればあなたのツインテールは、完かん璧ぺきなものになるわ!!」

「笑わせないでください」

　堕だ天てん使しが囁ささやきかけた、ツインテールへの誘いざない。

「──ツインテールの貴とうとさを忘れたあなたに、ツインテールを託す資格はありません」

　その甘言への、トゥアールの思考時間シークタイムは──絶無ゼロだった。

「スペリオル！　エクスプロード────────ッ!!」

　シャイニングアームドから迸ほとばしった白き聖光は大地を、天空を、全てを包み込んでいく。

　その只ただ中なかに在る邪悪──それのみを慈悲なく爆はぜさせんと。

　堕天使のシルエットが、光の中で徐々に崩れ落ちていく。

「私は絶対に滅びない！　私は、私はああ!!」

　世界をわたる復ふく讐しゆう者として、多くのエレメリアンたちを断罪してきた。

　心の輝きを奪い生き存ながらえる誇り高き怪人たちに、人間の矜きよう恃じをぶつけてきた。

　その戦士が最後にエレメリアンに手た向むけたのは、断罪ではなく拒絶だったのだ。

「──完全なる無へ還かえりなさい、エンジェルギルディ」

　多くのエレメリアンの心と生命を弄もてあそんだ科学者は、正しき科学者の手によってついに滅び去った──。

　蒼あおい、菱ひし形がたの光玉が静かに浮遊している。エンジェルギルディの属性玉エレメーラオーブだ。

　ツインテール属性の属性玉エレメーラオーブのみで、男子愛属性ボーイズラブのものはなかった。

　俺は空虚な思いとともに、その属性玉エレメーラオーブを回収する。いっそ砕き割ってやろうかとも思ったが……死した後の魂たましいさえ冒ぼう涜とくするのは、あいつと同じになってしまうと思ったからだ。

　そして俺は空を見上げながら、あらためて唯ゆ乃ののことを思った。

　お前がそう簡単に死ぬわけがない。俺は、信じてるからな。

「もう限界……。これ以上変身し続けたら気絶しそう」

「心配いりません。アポロギルディたちの気配も消えていますので、この世界にいるのは私たちだけです」

　手にした端末で周囲を分析し、ブルーの懸念を払ふつ拭しよくするホワイト。

　その言葉で緊張の糸が切れ、俺たちは次々に変身解除していった。

　それを見届けたホワイトの全身の輪郭が二重三重にぶれ、テイルギアが光の粒子となって消えていく。

　愛あい香か、慧え理り那な、イースナは、変身解除したトゥアールの元へと一斉に駆け寄る。

　彼女たちの笑顔が、次第に困惑へと変わっていった。

「トゥアール……」

　愛香の声が、狼ろう狽ばいに震ふるえる。

　テイルホワイトからトゥアールへと戻った瞬間。

　トゥアールのツインテールは、再び元の髪型に戻っていた。

　二つに分けられることを願うよう僅わずかに外に跳ねた、普通のロングヘアーに。

「どうして……ツインテールに戻ったのではありませんの!?　解ほどけてしまったのなら、今度はわたくしが結ぶのを手伝いますわ!!」

「まさか、変身してる時しか、戻らないの……!?　ならずっと……テイルホワイトでいよう？　私がお着替え、させれば……いつまでも、ツインテールでいられるよ……!!」

「ありがとう、慧理那さん、イースナ。けれど……テイルホワイトには、もうあと何度も変身はできないでしょう」

　鮮やかな銀髪を手の平で掬すくい、愛いとおしげに見つめるトゥアール。

　俺はトゥアールのそんな姿を見ても、自分でも驚くほど落ち着いていた。こうなるだろうという予感がしていたのだ。

　そしてきっと、トゥアール自身もそれを覚悟しているだろうと。

「これでいいんです。私は一度、ツインテールを手放したのですから。テイルホワイトは……ツインテールが私にくれたご褒ほう美びだったんです」

　トゥアールは復ふく讐しゆうの戦いを終え、前に歩き出した。

　大切なものを守るために戦うと誓った彼女が、もう一度だけ力を求めるその時は……俺たちの、最後の戦いに他ならないだろう。

「けど、私は諦あきらめたわけではありません。たとえ一瞬の夢でも……確かな希望を持てました。何年、何十年かかっても……ツインテール属性を取り戻す研究をします。必ずもう一度、自分の手でツインテールを結んでみせます」

　そしてトゥアールは、もっと大きな戦いに挑む決意をしたのだ。

　テイルホワイトは、ツインテールがくれた、小さな贈り物。

　その希望を胸に、人生を懸けてツインテールを取り戻すと。

「いつか、きっと訪れるその未来を信じて……もしかしたらその時、私はおばあちゃんになっているかもしれないけれど──」

　復ふく讐しゆうという終着の先には、新たな道が──夢が待っていた。

　その夢を、トゥアールは真まっ直すぐな瞳ひとみで紡つむぐ。

　俺たちが取り戻したかった宝物。取り戻すことのできた宝物。

　光り輝く、最高の笑顔で。

「──私のツインテールを見てくれますか、総そう二じ様」

聞かれるまでもなく、俺の答えは決まっている。

「ああ。もちろんさ。楽しみにしてるよ！」

今日は二人で一緒に結んだツインテールだけど……君なら、いつか自分一人で結べる。

絶対に夢を叶かなえることができる。

その時は、真っ先に俺に見せてくれよな。とびきりのツインテールを──。

「あんたねえっ……安請け合いして！　どういう意味かわかってるの!?」

愛あい香かが飛び上がるようにして腕を伸ばし、俺の首に絡めてきた。

「？　わかってるさ。もちろん愛香もそうだろ？　その時は見せ合おうぜ」

「～～～～～～～～～～～～！　あ、当たり前でしょ、馬ば鹿か！　絶対約束守りなさいよね!!」

愛香に肩を叩たたかれ、思わずつんのめる。

「総二さん、天然で……この器の大きさ、だもん……。エンジェルギルディの欲望じゃ……勝てないわけ、だよね……」

「でも、わたくしたちも負けていられませんわ。もっともっと素敵なツインテールになれるよう頑張りましょう!!」

イースナと慧え理り那なも燃えているようで、微ほほ笑えましい。

「慧理那さん、本当にありがとうございました！　イースナも、まあよくやりました!!」

「いえ……トゥアールさんが無事で何よりですわ!!」

「トゥアールさんこそ、まあ、よくやった……」

いつもどおりの笑顔を浮かべる慧理那。お姉さんぶるように胸を

張るイースナ。二人にそれぞれ笑顔を送ったトゥアールは、最後に愛香へと向き直った。

「あー、それと、そこの蛮族。一応、お世話になりました」

「一応って、あんたにどんだけボコられたと思ってんのよ」

　照れくさそうに鼻を鳴らす愛あい香か。

「……一度しか言いませんからね」

　トゥアールは、畏かしこまるように咳せき払いを一つ。

　そして、柔らかな微ほほ笑えみを浮かべて言った。

「ありがとう、愛香……あなたと友達になれて……本当によかった」

　過去から戻ってきた愛香に活かつを入れた時もそうだった。

　トゥアールが愛香を呼び捨てにするのは、飾らない本心を吐と露ろする時だ。

　愛香は感極まったように涙ぐみ、

「あたしも──」

　何かを言いかけたが……近づいてくる飛行音が、それをかき消した。

　空の彼方かなたが輝き、スタートゥアールが飛んできたのだ。

「おっ、母さんたちが来てくれたのか！」

　ありがたい。俺たち全員、来た道を歩いて戻るには疲れ切っているからな。

「……あたし、も……何でもない」

　愛香はタイミングを逸したのか、そのままそっぽを向いて口を噤んでしまった。

　その間に着陸したスタートゥアールのハッチが開き、母さんと桜

さくら川がわ先生が駆け下りてくる。

「見届けたわよ、トゥアールちゃん……本当に立派だったわ」

「終わったようだな、トゥアール。すごくいい顔をしているじゃないか」

「お義か母あ様、尊みことさん……ありがとうございます。みんなと一緒にこの世界へ迎えに来てくださって」

　いつものように茶化したことを言うでもなく、母さんはトゥアールをそっと抱き締めた。

「何の役にも立てないけど……私たちはいつだって、あなたたちに『おかえりなさい』って言ってあげたいもの。今日は本当にお疲れ様、トゥアールちゃん。……未み春はる賞よ！」

「…………嬉うれしいです、やっともらえました……」

　母さんの胸に顔を埋め、何度も頷うなずくトゥアール。

　役に立たないなんて……そんなわけないだろ、母さん。……それって、本当にありがたい役目なんだから。

「それじゃあみんな──帰ろうぜ、俺たちの世界に」

　永かったトゥアールの復ふく讐しゆうの旅は、ここに終わりを迎えたのだ。

　これからは、世界をわたる復讐者ではない。

「いつかツインテールになる者」として、力強く歩んでいくだろう。

　その夢を叶かなえる手伝いを──俺たちができればいいな。

エピローグ　Ｔｗｏ　Ｒｅｖｏｌｕｔｉｏｎ．

　日中のエンジェルギルディとの激闘が嘘うそのように、穏やかな静寂しじまに支配された夜。

　俺は自室のベッドで眠りに落ちるのを待ちながら、今一度ツインテールの在あり方を思う。

　今回の戦いを通して、ツインテールの光と影を見た気がしたからだ。

　同じツインテールを愛する者でありながら、マーメイドギルディは魔道に堕おちた。

　俺も仲間たちに支ささえられていなければ、今いま頃ごろは──

「こんにちは総そう二じ様、夜よ這ばいに来ました!!」

　ピザのデリバリーレベルの気軽さで、陽よう月げつ学園の制服姿の女の子が入室してきた。

　うん、予想はしてたんだ。俺が真ま面じ目めに何か考えてると、必ずこの声で中断されるから。

「トゥアール、さすがに今夜はゆっくり休んだ方がいいぞ……」

　というより、時計を見るともうすぐ朝だ。俺も二度寝せずに着替えた方が早いな。

　ベッドから下りようとした俺に、トゥアールは平手を突き出し「待って」のポーズをする。

「実はですね、あれからもう一度私の身体からだを検査してみたのですが！　生命いのちの危機は脱したものの、定期的にツインテール属性の強い男性の遺伝子を取り込───ん～よし、この設定めんどいからもういいです!!」

途中まで神妙な顔をしていたのに、飽きたのかドヤ顔に戻るトゥアール。

「一一か月もお待たせしました！　トゥアールちゃんは数年ぶりにテイルオンしたその日の夜に、総二様の総二様をテイルオンされる……最高のシチュエーションですねうおおおおお!!」

トゥアールは両手をパタパタと羽ばたかせ、鳥が飛び立つような華麗さで跳躍する。

あんなに激しい戦闘を繰り広げた日の夜に……タフだなあ。

そのまま放物線を描いてベッドの上の俺に落下して来たトゥアールは――

「全っ然変わってないじゃないのよあんたはあああああああああああああああああ!!」

「ぐああああああああああああああああああああああああオタガイサーマ!!」

器用なやられ台詞せりふで吹っ飛んだ。

俺の部屋の窓が開くや否いなや、トゥアールに飛び蹴げりを浴びせ、念のため空中でさらに踵かかと落としを食らわせて床に叩たたきつけたのは――やはり愛あい香かだ。

あんなに激しい戦闘を繰り広げた日の夜に……タフだなあ。

春にはまだ少し遠く、開けられた窓から吹き込む朝風は依然として身に染みる。

「あたしすっごいしんみりしてたのよ!?　頼むから今日は！　今日ぐらいは、大人しくしてなさいよあんたもおおおお!!」

「心だけしんみりして終わるからあなたは雑魚ざこヒロインなんですよ！　私なんて夜になったら下腹部もしんみりしてきたから、夜よ這ばいする以外の選択肢がありませんでした!!」

愛あい香かはふう、と軽く呼気を落とすと、

「オッケー。もう、安あん穏のんな夜は諦あきらめたわ」

「ぐおあああああああああああ全然しんみりしてない腕力ああああああああああああ!!」

　四肢を一度に極める高難易度の関節技をトゥアールに放った。

　お前、空中で二段蹴げりした時点ではまだ穏やかな夜に戻れると思ってたのか……!?

「でも、まぁ……あんたの宣言──ホントにかっこいいと思ったわよ、トゥアール」

　メジメジビキビキと、聞いているだけで白目になりそうな音が部屋中に響く中、愛香はどこか誇らしげに微ほほ笑えんだ。

「トゥアールには絶対に負けないわ。あたしはそーじが飽きたって言うまでず───っとツインテールでいるんだから。覚悟しなさいよ」

　そして、俺に向かって軽くウインクしてきた。

「じゃあ、愛香もおばあちゃんになるまでツインテール確定だな」

　俺もしっかりと頷うなずき返す。飽きるなんて、それこそ世界が滅んでもあり得ないからな。

「常人なら両手両脚が千ち切ぎれるような関節かけながら頬ほお染めてロマンチックな台詞せりふ口走るとか、この蛮族はサイコパスか何かですか……」

　愛香はトゥアールをぺいっと投げ捨てて立ち上がると、制服の襟えりを整える。

「……もう無理して痴ち女じよなんて演じなくていい。自然体のあんたでいればいいじゃない」

「確かに私は、少し無理して痴女ってました……今までは」

「今までは……？」

　ツインテールを傾かしげる愛香。

「私は二度生まれ変わったんです。一度目は、ツインテール属性を

失った日。そして二度目が今日！　今の私は新しいトゥアールちゃん！　その名も新トゥアールちゃんです!!」

　胸を張ってＶサインをするトゥアール。いや、二を意味しているのかも。

　嬉うれしさで余裕がないのだろうか。ネーミングがそのまんまだよ、トゥアール……。

「生まれ変わって真まっ新さらな心で動いた身体からだが、夜這いを選んだ！　これはもう、演じようが演じまいがトゥアールちゃんはこうなんです!!」

　いつぶりかに見るトゥアールの元気な姿が、俺の胸をぐっと締め付ける。

　愛香なんて、あれはちょっと泣きそうになってるな。何だかんだで涙もろいよな……気持ちはわかるぜ。

「ったく……何度生まれ変わっても直らないみたいね、あんたの馬ば鹿かは」

「愛あい香かさんは一度ぐらい生まれ変わったらどうですか！　ようやくゴリラから人間に進化できるかもしれませんよぎゃあああああああああああ!!」

　涙ぐんだことの照れ隠しのように、愛香は猛烈な勢いでトゥアールに飛びかかった。

「──とうとう、この日が来たのね……」

　はっとして部屋の出入り口を見ると、母さんが腕組みをしながら壁にもたれかかっていた。

　けれどいつものようなドヤ顔ではなく、慈愛に満ちた目で二人を見守っている。

　どんな時でもあっけらかんとした佇たたずまいの母さんも、今日ばかりはこみ上げる思いで普通のお母さんになってしまっているみたいだ。

「……この日、か。また来たのかもしれないな」

　俺は人知れず納得する。絡み合って転がる二人を見て胸に去来したのは、懐かしさだった。

　俺の部屋で愛香とトゥアールが騒いで、突然母さんが冷やかしに来て。

　それに巻き込まれる俺は、何だかすごく楽しくて……。

　今だけ、ツインテイルズの始まりの日に戻ったみたいだ。

　あの日から今日まで、ありがとう。

　そして……これからもよろしくな、トゥアール。



テイルギア設定資料 15

TAILWHITE SUPERIOR CHAIN

武器：シャイニングアームド
**　　　セイクリッドフラップ**
必殺技：スペリオルエクスプロード





愛を結んだ天使。

ツインテール属性の独自摘出はトゥアールの生命を著しく縮めたが、引き換えに通常の喪失と異なり長い時間をかけて希望も育んでいた。その心に総二の真の究極のツインテールの力を受け、真なる天使は誕生した。復活と同時にテイルギアは完全解放（ブレイクレリーズ）されて最強変身（チェインエヴォルブ）を遂げ、往年のテイルブルー時を遥かに超越している。ツインテールの換装システムを備えており、あらゆる戦局に対応可能。ただしトゥアール自身のツインテール属性は完全に再生していないため、髪型のツインテールを取り戻すのは変身時のみ。愛する少年と寄り添うその時にのみ、失ったツインテールを発現させる。後悔し、絶望し、悲しみを乗り越えた少女が最後に辿り着いた、まばゆい奇跡の姿である。

あとツインテールがき

　俺ツイを書き始めてから早数年。

　日曜朝のヒーローたちも何度も新しく変わった今、この作品でも一人のヒロインが新しい道を歩み始めました。

　ツインテールを扱っている作品のメインヒロインの一人でありながら唯一ツインテールではないトゥアールは、物語が始まった時からずっともう一人の主役でもあったのだと思います。

　一巻が出た頃ころは二巻が出せないかもと告げられていましたので、もし打ち切りになっていたらトゥアールはツインテールになれないまま物語が幕を閉じていたのですね……。

　こうしてまた一つの区切りを迎えることができて、本当に嬉うれしく思います。

　ここまで来れたのも、いつも応援してくださる読者の皆様のおかげです。あと少し、ツインテールの世界にお付き合いください。

　元気なトゥアールを書いている時が、俺ツイを創つくっていて一番楽しい時間の一つです。ページが許すならエピローグでもっともっと愛あい香かとじゃれ合わせてあげたかった。それはまた次の巻をお楽しみに！　あと一回ぐらいめちゃくちゃお馬ば鹿かな回やりたいなあ……。

　今回も、イラストの春日かすが様や担当の濱はま田だ様、完成と出版に携たずさわる全ての方、そしてあらためて読者の皆様に、感謝とツインテールを！

水沢　夢

Yume Mizusawa

北国在住のツインテール作家。「このキャラがいたからこそ俺ツイはこんなに続けさせてもらえたんだな」と思えるキャラの一人が、今回で一つの区切りを迎えます。感慨深く思うとともに、作品に関わる全ての方と、読者の皆様に感謝……って、あとがきで書くこと無くなりますね。右肩に爆弾を抱えました。（近況報告）

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。16

２０１８年10月26日　電子書籍版発行

著　者　水沢　夢

発行人　立川義剛

編集人　星野博規

編　集　濱田廣幸

発行所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

底　本　２０１８年10月23日　初版第１刷発行

　ISBN978-4-09-451754-5

※製品版の巻末についている『ガ報』の情報は底本発行日時点のものです。



季節はすっかり秋だけど…
ガガガは「飽きが来ない」シリーズ最新刊、目白押し!!
GAHO
ガ報
No.138
GAGAGA BUNKO OCTOBER 2018
少女たちの想いを綴る、珠玉の短編集!
日南、菊池さん、みみみ、優鈴——。あの日の彼女たちの想いを綴る、初の短編集が登場! 6巻と7巻の間をつなぐ、あの子の気持ちも……? 「友崎くん」の世界がさらに色づく第6.5巻、登場!
定価:本体611円+税
Lv.6.5
弱キャラ友崎くん
屋久ユウキ
フライ
GAGAGA
著者コメント
今回は短編集です。が、ここでしか語られない各ヒロインのコアの部分は、ほぼ本編みたいなとこあります。
裏面にも情報満載!
[弱キャラ友崎くん Lv.6.5]
著:屋久ユウキ イラスト:フライ


定価:本体593円+税
ダメ
NGな彼女は推せますか?2
Can you cheer up a NG IDOL2
海津ゆたか
前屋進
著者コメント
新作じゃ新作じゃ！ドルオタ趣味全開の新作じゃ！これもアイドル様と運営様のお陰じゃあ！こんな感じで書きました。
ダメな彼女と挑む、トップアイドルへの道！
「俺の理想のアイドルになってくれ!」
「え、NGですぅ…!」拓人が運命の出会いを果たした一花は、ダメで残念な地味っ子だった!?
最強ドルオタが冴えない彼女をプロデュースする、アイドル育成系ラブコメ開演☆
[NG(ダメ)な彼女(かのじょ)。は推(お)せますか?]
著:海津(かいづ)ゆたか イラスト:前屋(まえや) 進(すすむ)



真面目が売りの少年が、
生徒会長を目指す少女に
学園の悪事を
押しつけられる!?
少年が悪事を働き、
少女がそれをこらしめる。
支持率アップ間違いなし!
学園の規律を守るため、
正義のマッチポンプが
狼煙を上げる!
秩序の為に、
マッチポンプで
正義をつかめ!
定価:本体593円+税
黒川さんに悪役は似合わない
ハマカズシ
Illust. おっweee
Freedom or discipline
著者コメント
出会って3秒で即悪役! みたいな学園ラブコメです。楽しく書けたので、是非読んでみてください!
［黒川さんに悪役は似合わない］
著:ハマカズシ　イラスト:おっweee


「あなたはもうすぐ死ぬ」——
死の宣告を受けたトゥアール。
心を強く持つよう献身的に
彼女を支える仲間たち。
だが、その時は刻一刻と
近づいていた……。
運命に翻弄され続けた
少女の復讐の旅、ここに終着。
トゥアールの復讐の旅——
ここに終着。
定価: 本体611円 +税
俺、ツインテールになります。16
水沢夢 イラスト 春日歩
GAGAGA
著者コメント
また一つ、物語が大きな節目を迎えます。俺ツイの「もう一人の主役」の旅の終着を見届けてください!!
［俺(おれ)、ツインテールになります。16］
著:水沢(みずさわ) 夢(ゆめ) イラスト:春日(かすが) 歩(あゆむ)


少年は夜の街で
見てはいけないものを見て、
拉致されて、目が覚めると
喫茶店にいた。そこには殺し屋を
名乗る少女たちがいて？
少年はウェイターとして
働くことを条件に、
始末されるまでの時間を
稼ごうとするが……。
そこは、かわいい殺し屋たちが集う喫茶店。
定価:本体593円+税
前略、殺し屋カフェで働くことになりました。
竹内佑
ill.イセ川ヤスタカ
著者コメント
お久しぶりです。殺し屋と喫茶店という自分の好きなものを二つくっつけてみました。
［前略、殺し屋カフェで働くことになりました。］
著:竹内 佑 イラスト:イセ川ヤスタカ


学園ランキング一位の男と、
中国からの使者
定価:本体611円+税
ピンポンラバー
谷山走太
イラスト みつつばー
2
著者コメント
遂にランキング一位が登場。さらに中国卓球界のアイドルが来日。強大な壁に直面し、それでも前へ進もうとする少年少女の物語です。
学園ランキング
一位の男が
海外遠征から凱旋。
時を同じくして、
中国卓球界の新星「夢幻の天女」が来日する。
それは大いなる波乱の幕開けだった——。
さらなる強い奴らの登場で
物語は灼熱の領域へ!
[ピンポンラバー 2]
著:谷山走太(たにやまそうた) イラスト:みつつばー


廃園寸前のおんぼろ遊園地、
魔法少女ランド。
その再建を満咲に
頼み込まれたハルは、
魔法少女と悪魔の
ヒーローショーを
思いつく。散華に協力を
仰ぐのだが……？
マジカル☆夢追い
ラブコメ、第2巻！
悪魔的な美少女、
散華のヒミツ！
定価：本体593円＋税
著者コメント
黒髪の悪魔少女——
夜桜散華メイン回です！喫茶店、手料理、相合傘、遊園地。色んな散華が、この一冊に！
栗ノ原草介
イラスト：風の子
魔法少女さんだいめっ☆2
GAGAGA
［魔法少女さんだいめっ☆2］
著：栗ノ原草介　イラスト：風の子

『弱キャラ友崎くん Lv.6.5』発売記念企画!!

全国で展開 ゾクゾク!

弱キャラ友崎くん サポーターズ IN 書店さん

発売たちまち重版、2年連続で「このライトノベルがすごい!」TOP10入りを果たした本シリーズ! 全国書店さんのアツい応援のおかげで、たくさんの読者さんに手に取ってもらえています!! 今回は最新Lv.6.5巻の発売を記念して、『弱キャラ友崎くん』を盛り上げてくれている書店さんの中から数店舗をご紹介!! 応援メッセージもいただきました☆



▲友崎くん専用の特別販促台! 思わず手に取りたくなる展開だ!

「人生はクソゲー」なんて思っている貴方にこそお薦めしたい、元気をもらえる作品です!

——ブックスミスミオプシア 現王園さん



▶パネルひとつひとつにまで書店員さんのアツいコメント付き!!

今読むべき強キャラへの教科書! これは学校指定図書にすべきもの。強キャラになりたい。

——オリオン書房ノルテ店 西室さん



▶サイン色紙&TVCMの相乗効果でひときわ目が行く一角に!

まさに人生の攻略本! 明日から使えるテクニックに思わず唸りました!

——蔦屋書店熊本三年坂 橋本さん

さいたま市民必読書! これぞ王道の主人公成長物語!

——アニメイト大宮コミック館 森田さん



▲さすが「ご当地」の飾りつけ!! POPをフルに使った圧感の美陳列!!

友崎くんの成長と人間関係の変化に目が離せない! このままの調子でアニメ化して欲しいです!!

——書泉ブックタワー 榊原さん



▲高く積まれたシリーズ全巻と、本作の魅力が的確に伝わる、愛を感じる手書きPOP!!

全国書店さんでは引き続き「『弱キャラ友崎くん』店頭応援キャンペーン」を実施中!! 近くの書店さんも参加中かも!? チェックしてみてね! キャンペーン概要はガガガ文庫公式Twitter(@gagaga_bunko)やガガガ文庫編集部公式ブログ「編集部ログ」に掲載。11月上旬ごろに、参加してくださった全書店さんの発表も行う予定です。『弱キャラ友崎くんLv.6.5』とあわせてお楽しみに♪

イラスト:フライ

ここガ知りたい! ガガガ特捜部

よくぞご無事(?)で…。今月は先生方の猛者エピソード! この状況にはなりたくないわ…。

質問 先日、終電で帰宅中に猛烈な便意に襲われました。降りられずに我慢してたらマジで意識が遠のき、冗談抜きで死を覚悟しました。先生方の「死ぬかと思った」経験があったら教えてください。(う○こマン・福岡県・25歳)

●**動物コワイ……** 栗ノ原草介先生☞山登り中。岩かと思ったら、熊だった時。

氷桃甘雪先生☞海外のワニ園をぶらぶらしていたところ、柵(金網)がびしゃーんと倒れてワニがぞろぞろ出て来ました。

ハマカズシ先生☞山奥で野生のラスボス級のイノシシに遭遇したとき。マジで食われるかと思った。

●**理由が理由だけに……** 田尾典丈先生☞中学生の時にこっそりエッチな番組を見るためにビデオデッキの裏側を素手でいじってたら「バツン!」って音がして感電しました。数時間手が痺れてたけど理由が理由だけに親には言えませんでした。

●**どうやって生還したんですか……** 牧野圭祐先生☞山奥の温泉でアナフィラキシーショックになった(花粉+トマト説)。

本岡冬成先生☞自転車旅行中に山中でタイヤがパンクして町まで何十キロ以上の地点で猿の群れと見つめ合うことになったとき。

水沢 夢先生☞車の免許取って初めての冬に雪道ではブレーキが意味を為さないと「体感した」瞬間ですね。

質問募集! 郵便ハガキ、Twitterで先生方に訊いてみたいことを書いて送って下さい。あなたの質問を特捜部が徹底調査致します。

その他の先生方からの回答は、編集部ログ(GAGAGAWIRE)で見られます。

疑問質問なんでもござれ! ガガガくん通信!!!!

GAGAGA

Twitterやハガキでボクへの質問を大募集ダヨ!

Q:もういい年なのに、童顔なせいでいつも初対面の相手に舐められます。どうやったら舐められなくなるでしょうか。 (なすび・滋賀県・31歳)

A:わかるヨ〜!ガガガくんもこの顔のせいで毎号楽しく笑ってるみたいに見られるもんネ。11年も働いてると笑えねえ月もあるってノ。…さて、舐めてくるヤツはムカつくけど、わざわざ外見を変えるのもムリな話だよナ。むしろ、キミが切れ者になれば、初対面で相手を油断させるギャップになるハズ。つーことで、キミには『ボーパルバニー』をオススメするヨ! バニーガールを侮るなかレ!



江波光則
イラスト:中原

GAGAGA headline

ガガガ文庫作品は「本」を飛び出し原作とは異なる魅力を発信中!
このコーナーはガガガのメディアミックスニュースを毎月ご紹介!

コミックス 月とライカと吸血姫

待望のコミックス1巻11/14発売決定!

マンガアプリ&WEB「コミックDAYS」(講談社)にて好評連載中の「月とライカ」コミカライズの1巻発売日が決定!「このラノ2018」4位の快作を漫画でもお見逃しなく!



原作:牧野圭祐
キャラクター原案:かれい
漫画:掃除朋具

コミックス 最強職《竜騎士》から初級職《運び屋》になったのに、なぜか勇者達から頼られてます

コミックス2巻好評発売中!

早くもシリーズ累計15万部突破した運び屋譚のコミックス2巻が好評発売中!! 原作最新3巻は11月発売予定! 合わせて要チェック!



原作:あまうい白一
キャラクター原案:泉 彩
漫画:幸路

コミックス やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。

@comic単行本第12集が11月19日頃発売!

サンデーGXにて好評連載中の俺ガイルコミカライズ、@comicの新刊が来月発売! エピソードはクリスマスイベント編に突入。

原作:渡 航　キャラクター原案:ぽんかん⑧
漫画:伊緒直道

コミックス 弱キャラ友崎くん

コミックス2巻が好評発売中!

原作1巻後半の、疾走感あふれる展開をばっちり収録! 漫画だけでしか見られない、友崎の勇姿&成長をその目に焼き付けて!



原作:屋久ユウキ
キャラクター原案:フライ
漫画:千田衛人
(スクウェア・エニックス刊)

コミックス されど罪人は竜と踊る

最新第4集が10月19日に発売!

「サンデーうぇぶり」にて隔週土曜連載中のコミックス第4巻がついに登場!



原作:浅井ラボ
キャラクター原案:ざいん/宮城
漫画:ミトガワワタル

TVアニメ 七星のスバル

Blu-ray&DVD vol.2が10/29に発売!

アニメ「七星のスバル」Blu-ray&DVD vol.2も充実の初回生産限定特典が満載!



【Amazon.co.jp初回生産限定特典】❶キャラクターデザイン・総作画監督の山本由美子による描き下ろしジャケット❷第4話オーディオコメンタリー(高梨謙吾、大森日雅、鬼頭明里)❸ノンテロップエンディング❹碓氷咲月(CV:鬼頭明里)キャラクターソング❺オリジナルサウンドトラックCD(part2)❻原作者田尾典文による第4~6話解説コメント❼アニメ設定集(part2)

GAGAGA BUNKO & GAGAGA BOOKS LINE UP!

11月刊 11月20日ごろ発売!!

[出会ってひと突きで絶頂除霊!4]
著:赤城大空 イラスト:魔太郎
晴久と美咲に課せられた宗谷家の試練。……その試練の間は「セッ●スしないと出られない部屋」!? 二人の運命やいかに!

[友人キャラは大変ですか?6]
著:伊達 康 イラスト:紅緒
トッコと汐莉、キュウキと阿義斗。山積する問題の解決に、一郎は奔走する。そんななか、学園祭が幕を開け――?

[やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。⑬]
著:渡 航 イラスト:ぽんかん⑧
大人気シリーズが13巻、14巻にてついに完結。苦く切ない青春群像劇のラストをお見逃しなく!

ガガガブックス [最強職《竜騎士》から初級職《運び屋》になったのに、なぜか勇者達から頼られてます3]
著:あまうい白一 イラスト:泉 彩
最強の運び屋が昇竜の勢いで飛躍する、トランスポーターファンタジー、第三弾!!

12月刊 12月18日ごろ発売!!

[妹さえいればいい。11] ――著:平坂 読 イラスト:カントク

[妹さえいればいい。11(カードゲーム付き限定特装版)] ――著:平坂 読 イラスト:カントク

[ブラックオニキス(仮)] ―著:江波光則 イラスト:霜月えいと

[空飛ぶ卵の右舷砲2] ―著:喜多川 信 イラスト:こずみっく

[筐底のエルピス6(仮)] ―著:オキシタケヒコ イラスト:toi8

[ハル遠カラジ2] ――著:遍 柳一 イラスト:白味噌

[編集長殺し4] ―――著:川岸殴魚 イラスト:クロ

ガガガブックス [抗いのヒストリア] ――著:三丘 洋 イラスト:しゅがお

ガガガブックス [北海道の現役ハンターが異世界に放り込まれてみた] ―著:ジュピタースタジオ イラスト:夕薙

発売タイトル及び刊行予定は変更になることがあります。

書店員さんとガガガくん

GAGAGA ガガガくん

今月の書店さんはTwitterでも積極的な本の情報を発信しているそうダヨ!! そっちも要チェックダ!

今月の書店員さん



三洋堂書店西尾店　鈴木普千さん

住所:〒445-0063 愛知県西尾市今川町馬捨場31番地
電話番号:05-6353-8434
営業時間:10:00～24:00
定休日:なし
URL:https://www.sanyodo.co.jp/shops/102/

直筆サイン入りパネルや色紙など、ツイッターにて紹介しております。SANYODO_NISHIOで検索してみてください!

鈴木さんのオススメ本



『されど罪人(つみびと)は竜(りゅう)と踊(おど)る』

希望と絶望が入り乱れる中に、胸を掻き毟るようなやるせなさが叩き込まれてくる最高のラノベです!



▶サイン入りパネルやPOP、手作りパネルまで、ドドンと圧巻の飾りつけダ～!! 作品愛をひしひしと感じるヨ～!

編集後記

・ライトノベル大賞、ご応募ありがとうございました!!
これからガッツリ読みます。楽しみ(☆)
・今年の夏の発見は、「事故物件の近くに住んでいても意外に怖くない」ことでした!(湯)
・この一年"痩せて太って"を繰り返しているのでそろそろどちらかでキープしたい。(濱)
・人生っていろいろあるよね～。(岩)
・週休3日くらい欲しいなあ。(小)
・最近、炒飯作る動画ばっか見てます。いつかはなりたい炒飯マスター(田)
・風邪で声がガラガラに。このままこの声だったらどうしよう…(林)

編集部への質問もこちら!!

作家・イラストレーターへのファンレター、感想などは以下の宛先に、作者名を明記のうえ、お送りください。

〒101-8001 東京都千代田区一ツ橋2-3-1 小学館ガガガ文庫編集部○○○(作者名)宛